
小さな祈り

早稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな祈り

【Nコード】

N5946C

【作者名】

早稀

【あらすじ】

高校1年生の「俺」こと晃彦は、帰宅部、彼女なし、バイトあり、という平凡な日常を生きる小市民的少年。文化祭実行委員に半ば強制的にさせられたことから、彼の日常がひっそりと変わって行く。学校のスターにして別世界の住人・綾華さんや、中学生からの同級生なのに接点が無かった由紀とともに、仕事に、恋に、調子に乗ったり凹んだりの日々が始まる。

俺は高校に入るとすぐにバイトを始めた。

バイト先は親父のつてで知り合った、同じ高校のOBが勤める会社。

ガテン系の、肉体労働ね。土木作業つてやつ。

中学出たばっかの貧弱小僧でも、現場にはこまごました作業も多いから、手先が器用な俺は意外に重宝がられた。

作業員はけっこういいちゃんが多くて、若いっただけで重宝されてたかもしれない。道具の使い方とか現場の手順とか、いいちゃんたちに比べれば全然覚えるの早かったから。

まあ、夏休みになる頃にはかなり体も鍛えられてきたけどね。

バイトの目的はパソコン。

昔から憧れてたけれど、親は買ってくれない。

欲しけりゃ働いて買え、と中学生の俺にも本気で言っただけの親。実際、パソコン買う金なんかうちには無かったし、本気で欲しい物があつたら働いて買わないと、という覚悟は、ガキのころからあった。

入学早々、親父が、緊急工事で土日でも現場がある会社で、知り合いが人手を欲しがってるというネタを仕入れてきた。俺は迷わずその知り合いという人に連絡を入れてもらった。

バイトは体的にはかなりきつかったけれど、楽しかった。バイト先のOBさんにも可愛がられてたし。

クラス屈指の貧弱君だった俺だけれど、中3の頃から伸び始めた背に、バイトの肉体労働で筋肉が追いついて行く感じで、自分でもひよろかった体が少しずつがっしりしていくのがわかって、うれしくて筋トレまで始めたりした。

小児喘息だったから、それまで体を鍛えるとかいう発想がそもそも無かった。

肌が白くてひよろいから「幽霊」とか言われてた俺が、いつの間にか現場焼けに薄くても筋肉が付いた体になった夏休み近く、ついに念願のパソコン購入。

デスクトップの安いモデルだけど、すげーうれしかった。

親をひたすら口説いて光を導入させ、その親がPC禁止令出すぞって脅すほど、毎日ネットにふけてた。もちろんエロサイト巡回が多かったわけだが。

現場とPCの前とベッドの中で一日が終わるような微妙に寂しい夏休みを終えると、俺はガテン系のネットヲタクという、よくわからない物体になっていた。

俺がバイトしてたところ、じいちゃんも多いけれど、なにしろ田舎だから、ヤンキーも多かった。いわゆる不良、ね。元族の人も現役もいた。

OBの人、カケスさんも元はばりばりのヤンキーで、俺が入学した頃でもうちの高校じゃ有名な人だった。そんなにレベル高い学校じゃないけれど、周り見たら不良ばっかって程でもないから、カケスさんクラスのヤンキーはかなり珍しかったらしい。

この頃はもう2児のパパで、いい人だったから信じられなかったけれど。

うちの親父は別にヤンキーでもなんでもないけれど、カケスさんは前に親父と同じ会社に勤めていて、めちゃくちゃ世話になってたんだという。

確かに俺が中学生の頃も、よくうちに麻雀しにきてたから、仲は良かったんだろうけれどね。

で、カケスさんはなぜかうちの親父を尊敬していて、それもあって俺のことをかなり可愛がってくれてた。
それがなぜかうちの高校のヤンキーたちにも知られるようになっていて、

「カケスさんの義弟」

みたいな捉え方をされていたらしい。後で聞いてびびった。

そのおかげで、俺は喧嘩なんかしたこともないヘタレなのに、同級生の不良どころか、3年のヤンキーにまで親しまれるという、ちよつと恐ろしい状態になっていた。

高校生活での力関係って、中学生の頃より、外の力が影響する。んなことはわかっていたけれど、おとなしく隅っこでささやかに生きていたい俺としては、かなりストレスのかかる状況になった。目をつけられずにすむ利点はあるけれど、それ以上に、ヤンキーたちのやばめな日常につき合わされるのはきつい。

いきなり始まった喧嘩に付き合わされた時は本当に怖かった。
連中、俺が部外者だとか思ってたないし。

傍観しようとしていると、いきなり殴りかかってきたりする。

夏休み明けしばらくしてからだったと思うけれど、そういう喧嘩に巻き込まれて、何発か殴られたこともあった。顔一発、腹とか腕に何発か。

翌日熱出たけれど、母親が心配するのがうざかったから無理して学校行った。

そしたら、なんか周囲の見る目が変わってた。

ただのおとなしいやつじゃない、キレると怖いらしい、みたいな噂があった、と知ったのは怪我も治りかけたころ。小学生の頃からの連れが教えてくれたところによる。

なんでも、その喧嘩で俺が相手したやつが、わりと喧嘩の強さで知られていたらしい。

カケスさんに色々やりかたは教わっていたから、それに従って、でも目の前が真っ暗ってくらいぶっ飛んだ意識で死に物狂いで反撃してただけけど、実は喧嘩のことはよく覚えてなかった。

それだけ怖かったんだけど、相手は俺の前に一人相手してて、疲れてたところに俺の相手で、予想外の狂った攻撃に呆れたのか、それともカケスさんの「親父さんには内緒な」という指導がよかったのか、一応俺が勝ったって事になった。

生まれて初めて喧嘩した結果は、周囲にヤンキー認定されるという嬉しいオマケつき。

それでも俺がヤンキー街道をひた走らずに済んだのは、まずは俺がヘタレだったこと。

喧嘩なんか二度としたくないって思ったし、巻き込まれるのも勘弁。

それから、DQNカコイイ！　とか思ったことは一度も無かったってのもある。

あからさまに不良ですってかつこしてる同級生を呼び捨てで呼ぶのってかなり抵抗あるけれど、俺は普通に呼べた。だって、連中の方がそれでいいよって雰囲気になるんだから。

そのせいで連中のグループの人間みたいに見られることもあったけれど、でも決定的な違いがあった。

今、こうして文章書いてるけれど、これ。

文章書くことに抵抗感がなくて、それがひそかに自慢だった。

何か取り得があると、人間なかなか堕ちては行かないように。落ちこぼれの逃げ込む先というヤンキーの姿に、ああはなりたくないって思っていた。

今考えると嫌な奴だけれど、でもその考え方があったから、俺は

そこそこ勉強も頑張ったし、不良との付き合いも距離感を保っていた。

二学期も後半になると、夏休みデビューした奴が結局落ち着いてみたり、逆に弾けてみたり、夏の恋が終わって次の恋を探す奴が出てきたりして、色々人間模様が面白くなる。

俺はというと、喧嘩騒ぎ以来の不良デビュー説も「なんかやつば普通じゃん」と薄れはじめ、恋があるわけでもなく、地味で波風の立たない生活に少し物足りなさも感じつつ、でもそれが心地良かったりという毎日。

進学校じゃなかったから、校内行事がわりと多めなうちの高校。伝統的に校内行事には本気で取り組む空気があつて、梅雨前にあった体育祭も異様に盛り上がってた。

特に、名物なんていわれてる騎馬戦。毎年病院送りが出るという恐ろしい競技で、今年も一人骨折者が出ていた。

それでも学校側がプログラムから削除しないのは、なにしろ地元のOBたちがそれを楽しみにしていたから。OBの市会議員たちが腕組みしながら見物していれば、学校側だって簡単に中止できないらしい。さすが田舎。

二学期後半になると、今度は文化祭の準備で盛り上がってくる。

その盛り上がりも、帰宅部で委員会活動にも参加していない俺にはあまり関係がなくて、素通りできるはずだった。

そういう中に入っていけないのは寂しいけれど、だからといって自分から手を上げて入り込もうとする積極性も無かった。

「麻雀しねー？」

というヤンキーの誘いを受けたり断ったりという生ぬるい日常の中に埋没していたし、休みの日は相変わらずバイトをしていたから、平日くらいだったらしていたい、という矛盾したことばかり考えていた。

帰宅部の学生の平日なんて、だいたいそんなもんだと思うし。

そんな事もいつていられなくなってしまったのは、いよいよ本格的に文化祭準備が始まるうとしていた頃。

うちの学校では、クラスから一人、文化祭の実行委員というものを選んで、生徒会に差し出すのが決まりになっていた。クラス委員二人のうちの一人も同時に差し出されて、生徒会執行部の手足となって働かされる。

だいたい文化部員は部活にかかりきりで実行側に回るなんて不可能で、体育会系だってその時期は何かしら大会があったり、文化祭に独自の企画を持ち込んだりで忙しい。

生徒会だって部活持ちが多いから、どうしても手薄になる。

そこを、帰宅部の人数で埋めようというわけだ。

なんか嫌な予感はいっていたけれど、見事的中。

「どうせお前放課後とか暇だろ」

という担任の鶴の一声で、俺は文化祭実行委員という称号を頂戴するはめになった。

そりゃ暇だけれどさ。

文化祭実行委員の初会合は、雨の金曜日。

自転車通学の俺にはきつい天気で、多分帰りは日も落ちてしまつて、一層みじめさに拍車がかかるだろうなつて簡単に想像がつく。

場所は生徒会室じゃ手狭だということで第2会議室。特別教室や職員室が入っている校舎。

俺が入ると、もう席は半分くらい埋まっていて、黒板の前に並んだひな壇には、生徒会長を初めとする生徒会執行部幹部の面々。俺とは縁もゆかりも無かった人々。

まだ会議前ということで、私語が禁止されたりしているわけではないけれど、微妙な緊張感が流れていた。なんでだろう、と思ひながら、空いている席を探す。

みんなそれぞれに隣がいなさそうな席を選んで座つたようで、両隣が空いている席は無い。仕方なく、知っていそうな人を探すと、いた。会議室に並ぶ長い机の列、その後ろから3番目に、隣のクラスの子。

「渋谷さん、隣、いいかな」

声をかけられた方は、びっくりしたように顔を上げた。

「あ、ああ、晃彦くん」

俺は1年4組、渋谷由紀は3組。中学が一緒だった。

「……どうぞ」

同じクラスになったことはないけれど、口をきいたことがないわけでもない。体育祭の時は合同のチームだったし、共通の友達もいる。

「じゃ遠慮なく」

俺のことを名前で呼ぶのは、別に親しいからじゃない。うちの田舎には掃いて捨てるほどいる「佐藤」という苗字のおかげで、佐藤姓の人間は容赦なく名前で呼ばれる。この会議室の中にも何人か佐

藤がいるはず。

俺が座ると、渋谷さんは居心地悪そうにいすの上で身じろぎした。急に俺みたいなのが隣に座っちゃって、悪かったかな、と少し自己嫌悪に陥りかける。

そこで、部屋に流れる緊張感の正体がつかめた気がした。そうか、さほど親しくもない人間がごちゃごちゃ集まっているからか。

渋谷さんはあからさまに俺をうとましがすることはなかったけれど、それでも何となく強張っているような気配が伝わってくる。かといって、別の席を探しに行くのも、今さら難しい。

仕方無い。

今日一日くらいは、居心地の悪さに耐えよう。渋谷さんにはいい迷惑かもだけれど。

渋谷さんは、黒いまっすぐな髪を伸ばして、前髪は眉にかからないくらいのところまでそろえている。化粧つけもなく細い銀フレームのメガネをかけている姿は、どこを切っても地味という印象。あるいは、おとなしい優等生。

色が白くて顔立ちも整っているから、渋谷さんさえその気になれば、男子を手玉に取るくらいのは簡単でできそうだけれど、中学時代から今まで、彼女が男子とまともに喋っている姿を見た記憶が無い。

引っ込み思案、というやつか。

同じおとなしい系……とは最近周囲は見てくれなくなっただけで、自分ではおとなしい系だと信じている俺も、今までそういう渋谷さんに興味が湧かなかったわけじゃない。高校に入って、中学時代よりずっときれいになったような気もしていたし。

でも、なにしろ縁が無かった。さすがに、ちよっと口がきけたくらいで「こいつ俺に気があるんじゃないかねーの」とか「実は運命の（ry」とか考えられるほどめでたい性格でもない。

机の上に並べてあるプリントの類をぺらぺらとめくりながら、何となく黙っていると、それが気まずかったのか、渋谷さんが口を開

いた。

「……晃彦くんも、押し付けられたんですか？」

よほどつまらなさそうな態度に見えたのか、そんな事をいう。俺はちよっとびっくりした。渋谷さんから話しかけてくるとは思っていなかったから。

「うん。そういうってことは、渋谷さんも？」

行儀悪くズボンのポケットに突っ込んでいた左手を出して、座り直しながら聞くと、渋谷さんは髪を揺らしながらこくりとうなずいた。

「帰宅部だから放課後は暇だろうってさ。いい迷惑だ」

「そうですか」

「渋谷さんも帰宅部だった」

「はい」

そう、敬語が彼女の癖だった。

「まあ、どうせ言われたことやってりやいいんだろつから、適当にサボって気楽にやろうかなって思ってるけどさ」

「はい」

自分から話を振った割りに、受け答えは短い。その上声も小さい。そもそも俺を見てない。

隣に座られてうつとうしいのかな、ならシカトしてくれてた方が気楽なんだけどな、なんて思ったり。

俺が黙ったら、渋谷さんも口を閉じた。

二人してプリントを見ながらじつと時間が過ぎるのを待っている。なんだか気が重い。

定刻になった頃、会議室はほぼ満員。人数分の席しか準備してないらしい。

俺の右隣は渋谷さん、通路を挟んで左隣は空席。

そろそろかな、という感じで、ひな壇の生徒会長たちが動きかけ

たとき、その左隣の席に遅刻寸前のタイミングで人が現れた。

何となくそちに視線を移す。

うつむき加減で動いた視線の先に、まず短いスカートの下に伸びる白くて細い足が飛び込んできた。

ちよつと驚きながら、目は上へ。

指定の制服では絶対にならないグレーのポロシャツ、その上にノースリーブのパーカーを羽織ったその姿は、俺とは別世界の人種。ギャル系。プレスが光る手首と指輪が、住む世界の違いを見せつけている。

人をじろじろ見る趣味はないから、俺はそこで視線を外した。

それに、それが誰だか、顔を見なくてもわかった。校内では有名な人だ。

2年の永野綾華さん。

美形で、派手で、社会人の彼氏もちで、友人関係も華麗で、度々教師と衝突しつつ、それでも成績だけは落とさないから学校側もあり強くいえない、という無敵な人。

ここまで世界が違うと、たとえば俺みたいな一般大衆の男子は、憧れの感情すら持たない。異次元の人。遠くから鑑賞することはあっても、同じ空気を吸っている人間という実感は持てない。

当然、口を聞いた事もなければ、そもそも声を聞いた記憶が無い。だいたい、見なくても、ろくに知らないはずの俺ですら雰囲気でわかってしまうこの存在感。

スターとかカリスマとかいうのって、こういう人のことをいうんだろうな。

生徒会長を初めとする面々、あまり気合が入っていない感じ。

文化祭が、事実上最後の仕事になる今期の執行部のはずだけれど、学校行事が盛んなのに、生徒会は活気が足りないというのが俺の実感。

生徒会の顧問をしているわが担任も、いつだったか嘆いていた。

「自分たちの生徒会なのに、どうしてこうやる気がないかねえ」

んなこと1年の俺たちにいわれても、とその時は思った。生徒会役員を出していない1年生じゃ、がんばりようがない。

文化祭の仕事はプリントの中にあるチェックシートやタイムテーブルで把握できるから、この会合はここに来た時点で終わっているようなもの。だから説明をしている執行部の面々をぼんやり見ているもつまらない。

むしろ、この人たちのやる気の無さと、それでも運営できている生徒会について考える方が面白かった。

そんな事でも考えていないと、隣にいる渋谷さんが、やっぱり俺なんか横にいたら居心地悪いだろうなあ、とか、逆隣にいる永野先輩はやっぱ俺の事なんか虫けらくらいにしか見えてないんだろうなあ、とか、鬱になることしか頭に浮かんでこない。

まず、この会議の無駄さ。

なにしろ、配付したプリントを執行部の面々が順に読み上げていくだけ。特別なコメントが入るわけでもなく、声も小さくて後ろにいるとよく聞こえない。

集まっている人数は、一学年8クラス、全学年で24クラスからクラス委員二人のうちどちらかと文化祭実行委員一人の二人ずつ、計48人プラス執行部10人ほど、といたいところだけれど、うちのクラスはクラス委員二人がどちらも手が離せなかったというところで俺だけ出席、そういうクラスがいくつかあって、でも総勢50人くらい。

これだけの人数を集めておいて、なんでこんな会議なんだろう。誰かが意見をいうわけでもなく、時々ひそひそと私語が目立つくらいで、異様な盛り下がりをみせる場内。

最後列に近い席から見回すと、誰もが、自分が文化祭を背負って行くんだという覚悟を担った背中じゃない。どう見てもお客様。

バイト先で、たとえばカケスさんたちが見せてくれる、自分が仕

事をするんだという責任感を漂わせた背中とは、比べものにならない。そりや社会人と高校生を比べちゃいかんだろうにしても。

俺もやる気なんかかけらもない。それにしたって、中心になるべき執行部まであの覇気の無さってのは、やばいんじゃないだろうか。

なんて思っていたら、両隣で同時にため息がもれた。右の渋谷さんはひっそりと、左の永野先輩はわざとらしいほど大きく。

大きいため息に引っ張られて、左に注意を向けてみると、永野先輩は、貧乏揺すりこそしないものの、この退屈な会議に明らかにいらだっている。

まさか爆発はしないだろうけど、ちと怖い。同じ机で並んでいる逆隣の人、ご愁傷様。通路を挟んでいる、この偶然に感謝。

それから右に注意を向けてみると、渋谷さんは頬杖についてタイムテーブルのプリントに落書きをしている。何を書いているのかと目だけを動かしてのぞいてみると、視力2.0の俺の目に、やけに上手いアンパンマン。その隣に食パンマンがあるということは、そっちを先に描いていたということか。

落書きに選ぶ題材が微妙なら、描く順番も微妙、しかもあの尋常じゃない技術。

なんて恐ろしい子……！

退屈この上ない会議が終わると、俺はなんとなく渋谷さんと一緒にになった。

なんとなくつてのはちと違うか。

渋谷さんと俺は、文化祭実行委員の仕事の割り振りで、同じ仕事の担当になった。各クラスで開かれる企画物の管理担当。

責任者は二人いる副会長のうちのひとりで、伝統的に一人は三年生から、一人は二年生から選ばれる副会長のうち、二年生の先輩。その人を中心に話を進めて行くんだけど、今日は顔見せだけだった。全体会議が長すぎたからだろう。

正直、授業をまともに6限食らった後であの会議はしんどかった。この上、担当者会議までやるなんて言い出したら、たぶん全員怒るか無言で帰っていたと思う。

席が隣で仕事も一緒になったから、その流れで俺は渋谷さんと一緒に歩いていった。

校内は部活上がりの生徒たちがうろろしていたりして、それほど寂しい様子でもなかった。俺たちは肩を並べるようにして、だからと自分たちの教室に向かって歩いていった。なにしろクラスが隣だから、向かう方向は一緒。

「クラスの企画を管理するっていったってさ、企画を審査するのは執行部だし、予算管理は会計係だし、別にやることないじゃんなあ」
ちんたら歩きながら、プリントを眺めていて会議中に思ったことをいってみる。

渋谷さんは、真ん中より少し後ろ、という身長順だから、それほど小柄とはいえないけれど、うつむき加減で歩くから実際より小さく見える。

「雑用係、でしょうか」

小さく首をかしげながらいう。

「ありそう」

たぶん、そういうことなのだろう。

各クラスへの資材の貸し出しやその管理は、基本的にはクラスが自分たちでやることにはなっている。でも、その書類を作ったり、チェックしたりする人間は必要。そういう意味での管理だったら別に構わないけれど、たぶん、それだけじゃ終わらないだろう。

「どうせ自分らで管理するなんて約束、どこも守らないだろうし。結局俺らが全部やった方が早い、みたいな感じになりそう」

だとすると、書類作りはさっさと済ませてしまわないと、後で必要になってから、なんて考えていたら追いつかなくなりそうだ。

「各クラスの企画が出そう前に書類作って、使い方の簡単なマニュアルも作っちゃって配付して、ついでに自分たち用のチェックリストも作ろうか」

俺は、考えている事をそのまま口に出しながら歩いた。俺がしゃべっていないと、渋谷さんはきつと一言も喋らないから。

気まずいからな、そういうの。

「資材のリストは去年のがあるけど、数とかチェックしなきゃいけないし、そのあたりもちっちゃつと終わらせないと、後が怖そうだね」

もうすぐそこに渋谷さんの教室。その奥が俺の教室。

「新規購入分の予算配分なんかはどうなってるんだろう。購買分は会計と相談なのかなあ。確認しとかないと」

渋谷さんの教室の扉がすぐ横に来た。

もうこれで今日はお別れだと思ったから、俺はここでようやく渋谷さんを見て、「そんじゃ今日はお疲れ」とでもあいさつして行ってしまうおうと思った。

渋谷さんは、顔を上げていた。俺を見ていた。整ってはいるけれど表情に乏しそうな顔が、微妙に変わっていた。

「そんじゃ……どうかした？」

思わず俺がアセると、渋谷さんはさつと視線を外してうつむいた。

「……うっん、すごいなあ、と思って」

「なにが？」

何かすごいことをしてしまっただろうか。とりあえず自覚は無し。

「仕事、できる人なんだなあって」

「始まってもないのに、んなのわかんないだろ」

「うっん、始める前からそうやって仕事の先が読めるの、すごいと思います」

渋谷さんは聞き取りににくい限界の小声でいう。

「ああ」

そういうことか、と俺は納得した。

「バイト先でさ、こうやって仕事の先の先を考えてる人がいるんだよ」

親父の友達でバイト先の社員、カケスさんのことを考える。

土木工事の監督さんは「段取り8割」だ、とカケスさんはよくいう。事前の段取りがきちんとしてできれば、仕事は8割方成功したようなものなんだって。

「後で苦労するのが嫌なら、とかいう問題じゃなくてさ、大人が仕事やってて、段取りが上手いかわなくて失敗したら、自分以外の他人に迷惑がかかるだろ。金だつてばかばか出て行くし、土木工事なんかだと下手すりゃ死人が出る」

だから、仕事に責任を持つ人間は、始まる前にきちんと手順を考えて、準備して、問題が起こってもわたわたしなくて済むようにしてないといけない。

カケスさんはたかが高校生の俺に、そんな事をよく話してくれる。まあ、ちよつとうざい話なのも事実だけれど。

二人で廊下の端に並んで立ったまま、俺たちは話を続けている。

「……でも、自分で選んだ仕事じゃないですよ、ね、実行委員も、クルスの管理担当も」

渋谷さんは、プリントを挟んだルーズリーフを抱くようにして持ち、まだうつむいたまま話している。

「なのになんと仕事のこと考えてる」

「うーん」

それってすごいことだったのか、と、ちょっと俺は感心した。
それが当然だと思っていたから。

というとかっこつけているみたいだな。

「確かにそうだけども、実行委員だつて断ろうと思えば断れたんだし。それをしなかったんだから、やることはやらないとなあ」

それに、と俺は付け加えた。たぶん、これが一番本音に近い。

「誰かにいわれて動くだけなの、俺嫌いなんだよね。バイトで大人に囲まれて仕事してるとき、学校で高校生ごときに使われるの、なんかむかつくんだわ」

そついうと、渋谷さんはびっくりしたように俺を見た。

「……そついう物の見方もあるんですね」

不思議な感想を漏らすと、渋谷さんはまたうつむいて、

「バイトしてるの、すごいですよね」

とつぶやいた。

「すごいかねえ」

単にしがらみなんかもできちゃって、やめにくくなってるだけなんだが。

休日の俺は勤労少年なわけ。

会社が暇な時はバイトの俺なんかいてもかえって邪魔だから、呼ばれもしないで休みになる。でも秋になると工事関係は忙しいようで、土日祝日は入れるだけ入って欲しい、と頼まれていた。

体的にはかなりきつかったけれど、慣れっつてのは怖いもので、毎週末にぼろ雑巾になっても、次の週末には「さあ、ここからが今週の本番だ」みたいな気合が入るようになっていた。

その分、学校がおろそかになりがちで、月曜日なんかは本気でサボろうかと何度も思った。

サボらず遅刻寸前でもどうにか通っていたのは、親や教師に何か言われるのが嫌という小心さからで、学業が学生の本分だとか考えていたわけじゃない。

まあ、自転車で10分もこげば着いてしまうところに学校があれば、それほど通学に苦労なんかない。

それはともかく、文化祭の会議があつた翌日の土曜日、天気も回復して残暑の名残のように蒸し暑い感じになったその日、俺はとなりの街にいた。

現場は片側2車線の国道。その横にある小さな道、側道というらしいけど、その側道と国道の歩道との間にある細くて掘ったままの水路を、コンクリート製の水路に直す工事。

生い茂ったやけに背が高い雑草をかき分けながら、高さを測ったり幅を測ったりしていたのは夏休みのこと。今では水路はすっかりコンクリート製に変わり、今日はそこに蓋をかける仕事だった。

監督はカケスさん。俺は完全にカケスさんチームの一員で、朝7時半過ぎに会社に着くと、何もいわれなくても機材を現場車に積み込んで、後部座席の荷物に埋もれるようになりながら乗り込むのが当たり前になっている。

社員の人や作業員のじいさんたちに、

「お前、進路の心配だけはねーな」

とかいわれる始末。

一応進学したいんですけど、ぼく。

「冗談抜きに、お前、卒業したらうち来いよ」

社長の息子さんは会社で営業をしていて、つい最近そういわれたりもしている。

「工業高校じゃないから資格取れないっすよ」

と答えたら、

「んなもん少し勉強すりゃ誰でも取れるから」

と返された。

土木業界はどこも厳しいはずんだけど、使える人間はやっぱり確保しておきたい、特に若手で使えるような人間は減ってきているから、今のうちにつば付けときたい、というのが息子さんの考えらしい。

カケスさんがそういつていた。

「ジュニアのいうこと、真に受けるなよ」

とカケスさんはいう。

「お前、大学行きたいんだろ？」

「ええ、まあ、行ければ」

「行つとけつて。俺みたいな頭悪い奴じゃどうにもなんないけど、お前頭いいんだからさ。親父さんだつてお前が大学入つたらすげえ喜ぶぜ」

「はあ……」

カケスさんはもともと地元じゃ有名な不良だった（当時はバリヤンといったらしい）けれど、今じゃ俺のことをこんな風に考えてくれる、真面目ないい兄貴みたいな人。

「勉強の邪魔になるんなら、こんなバイトすぐ辞めちまっていいんだからな。まず自分のこと考えるよ。お前人がいいから、頼まれると断れねえから心配なんだよな」

昼前、俺は自動的に仕事から外される。

使いつ走りをするためだ。

現場が車でも使わないと買物もできない場所だったら別だけれど、今日はすぐ近くにコンビニもある。そうになると俺の順番。

お茶やら弁当やら雑誌やらの注文を取って、お金を預かって、メモをポケットに入れて歩き出す。

コンビニに入ると、外の蒸し暑さが嘘のように涼しい。もう10月にも入ろうって時期にこれだけ暑いと、コンビニの涼しさがあらためて天国に感じられる。

かごを持ってさっさとメモに書かれたものを集めてしまうと、自分のお昼を選ぶ。

から揚げ弁当とトンかつ弁当のどっちにしようか迷っているとふと、となりでサンドイッチを手を取った背の高い女性と目が合った。

あ、と思った。

私服で、帽子をかぶっていたから、とっさにはわからなかった。でも顔を見てわかった。

永野先輩だった。うちの学校の有名人、高嶺の花の象徴、そしてちと怖い人。

ピンクのチェックのウェスタンシャツと黒いキャミソール、ミニのデニムスカートにスウェードのブーツという格好。細いネックレスを重ねがけしていて、胸元できらきら光っている。

「あ」

と、先輩も俺の顔を見て声を上げた。

じつは、会議のあと、渋谷さんと肩を並べて教室に戻る前、永野先輩とは言葉を交わしていた。

実行委員のそれぞれの担当が決まって、俺と渋谷さんはクラス企画の管理担当になった。

その同じ担当に、永野先輩もついていたんだ。それは偶然というわけでもなく、要は、永野先輩が2年の4組で俺も4組、クラスごとに仕事を割り振った結果、そういうことになった。

クラス企画担当は1年と2年の3組4組の実行委員。

永野先輩か、もう一人の2年生が担当のリーダーにならなきゃいけないけれど、どっちも渋った。当然だけれど。

「わたしはやだから」

あからさまに不機嫌に宣言した永野先輩は、いつそ潔い。

もう一人の2年生は男子で、永野先輩とは明らかにそりが合わない感じ。俺以上の小心者という印象で、正面切って永野先輩に何かいえる雰囲気じゃなかった。

もちろん俺も渋谷さんも永野先輩に何かいえるはずもなく、「適当にやってよ。手が必要なら手伝うくらいはするけどさ」

とのたまう永野先輩のことを、黙って聞いているしかなかった。

といって、しょぼんとしている先輩も渋谷さんも、このままの状態だとかわいそうな気がする。仕事始めの前からこんな有様じゃ、俺も気分が良くない。

なんとなく、仕事モードになってしまった俺は、あまり深く考えずに口を開いていた。

「リーダーがどうかはともかく、手分けしてやりましょうよ。誰かが犠牲になって仕事抱え込むんじゃ、寝覚めが悪いし」

俺がそういうと、永野先輩は少し意地悪そうな顔になった。

「じゃああんたがリーダーやんなよ。寝覚め良くなるよ？」

かちん、ときた。

俺は小心者だけど、人に苦勞押し付けて平然としていられるような下衆に笑顔をくれてやれるほどの間抜けでもない。

あんだ、という呼ばれ方もむつときた。

「こき使いますよ。わざわざ指名するくらいだから、従ってもらえるんでしょ？」

今考えると、よくまあいえたもんだけれど、その時は一瞬で頭が熱くなっていた。

永野先輩は驚いたような顔をした後、落ち着けよ、とでもいわんばかりに笑った。

「オツケー、従うよ。じゃリーダーはあんたって事で」

「構いませんよ。先輩もそれでいいですか」

と、俺は萎縮しきっている男子の先輩に聞いた。先輩は小さくなつたまま、うなずいた。渋谷さんは無表情なまま、俺と永野先輩とを見比べているようだった。

「とりあえず仕事がどんなもんだか全然わかってないんで、今指示出せていわれても困ります。だから今日は解散ということでもいいですか」

俺は一刻も早く永野先輩から離れたくなっていたから、とつとと終わらせることにした。

「さんせー」

永野先輩は能天気な声を出して右手を上げた。

なんか上手く乗せられてしまったような気もするけれど、やる気が無い人の相手はむかつくばかりだし、この後渋谷さんと一緒になつていたときに話した、「学校で高校生ごときに使われるの、なんかむかつくんのだわ」という気持ちもあったから、リーダーになったこと自体はどうでも良かった。

「それじゃ解散しましょう。次のミーティングとかは、後で連絡しますんで」

「よろしくー」

永野先輩はどこまでものんきそうな顔をしていた。

気まずい、と思ったのは俺だけじゃないはずだ。

でも、意外に永野先輩は大人だったらしい。

「あれ、どしたの、そのかつこ」

気さくに声をかけてきた。

たぶん、何もしていない休日なら、俺は声も出せずにおろおろしていただろう。そんなに外向的な性格じゃないし、ただでさえ美人の前では上がってしまうのが男の哀しいさが。まして、昨日のこともある。

でも、この日は仕事で、さんざん声を出している。冗談を飛ばしながら仕事をするのがカケス組のモットーだから、俺も頭がそういうモードに切り替わっている。つまり、会話して当然という気分になっていた。

「どんな風に見えます？」

下は作業ズボン、上は長袖の作業用シャツ、という姿は、どう見たって土木作業員だろう。

「ガテン系の奴隷労働者？」

すごい表現を使ってきた。

「奴隷……まあ、そんなもんです」

合ってなくはない。使いつ走りのガテン系アルバイト君だし。

「バイトかなんか？」

「バイトです。すぐそこに現場があって」

「ああ、もしかしてその道の下のところ？　水路の工事してるよね」

「当たり前です。よくわかりましたね」

「だってうち近所だし」

永野先輩がノーメイクだということに、この時気付いた。

ギャル系だから化粧が濃くて、すっぴんじゃ顔わかんないだろうな、なんて思っていたけれど、意外に昨日とあまり変わらない。だとすると、ごく薄いメイクであれだけ目立っているということか。

いや待て、順番が逆だ。ノーメイクでこんなにきれいな顔してるってのは、相当すごいんじゃないだろうか。

とか何とか考えつつ、へえ、この辺なんですか、と生ぬるい返事をする。

「まだ暑いのに大変だねえ。もしかして夏の間とかずっとここで働いてたり？」

「そうでもないです。あちこちの現場行ってたし」

「そうなんだ。もしかしたら知らずに通り過ぎてたかもなあ、なんて思ってたんだけど」

「そんなに近いんですか」

「だからすぐそこだってば」

昨日とは違うプレスがかかった腕を上げて、永野先輩が外を指差した。その指が長くて、きれいだった。

不思議な感じだった。

つい昨日までは、話す事はおろか正面に立つことすらありえなかった永野先輩が、こうして俺と話している。

というより、永野先輩みたいなタイプと話すなんてことが人生においてありうるなんて考えたこともない俺が、妙に落ち着いて、ごく普通に話している。

「梅雨のときとか台風のとときとか、あの辺ってすぐに水浸しになってたんだよね。工事で水路ができれば、少しはましになるかな」

「なると思いますよ。水路と川との合流も付け替えで改善されたし、水路の掃除だけちゃんとやってくれば、簡単にはあふれませんよ」
「へえ、それ助かるわ」

ここまで話したところで、俺たちは立ち話を中断した。

店が混んできていた。

そりゃそうだ、お昼時なんだし。

弁当なんか置いてあるところで立ち話していた俺たちは、どうみてもでかい障害物。先輩はたぶん170近い身長だし、俺も180近い。二人とも細身だけれど、ピザ（体格のよろしい方々のこと）じゃないから邪魔にならないってことはないわな。

「とりあえずレジ済ませようか」

「そうつすね」

永野先輩と俺は同時に苦笑した。

その後先輩と話すことはなく、俺は使いつ走りの任務を無事完了。近くにある木陰でから揚げ弁当を食べ、土木工事の現場では欠かすことが出来ないお昼寝の時間に突入。

弁当のごみを片付け、さてごろりとしようかな、というところで、カケス組で顔なじみになった作業員に声をかけられた。

「晃彦、お前、なんかいいことあったのか？」

「はい？」

「妙に機嫌よさそうな顔してるからよ」

「別に、特には無いっすけど」

大あり、だったんだろうな。

美人の先輩と親しく話す、というシチュエーション自体が俺にとっちゃすごい幸運だったけれど、それは大きな問題じゃない。

気が合わなさそうで、顔を合わせる機会がこれからもあるだろうと思うと、ずーんと気分が沈んで行くような感じがしていた永野先輩と、ああしてごく自然に話せたのが嬉しかったんだ。

なにか、頭の上にぶら下がっていた石が取り除かれて、いつ落ちて来るか気が気じゃないという状態から解放されたような、ほっとした気分も混じっていた。

生徒会で管理している文化祭用の備品チェックは、思っていた以上に大変だった。

「なあ、これ終わんないじゃね？」

生徒会室横の倉庫代わりに使われている部屋の中に、永野先輩の
だるそうな声が響く。

去年の担当が残したチェックリストはいい加減で、どれが残っていてどれが捨てられてしまっているのか、わかりやしなかった。おかげで一から数えなおし。

「終わらせるんですよ、綾華さん」

なんていつてはみたけれど、いつてる俺自身がうんざりしてるんだから。

永野先輩の場合、こうしてちゃんと作業に参加しているだけで立派なものかもしれない。どう見たって、素直に作業に出てくるようなタマには思えないし。

そうそう、永野先輩を「永野先輩」とは呼べなくなってしまっている。

理由は簡単。

『あのさあ、永野先輩とか呼ばれるとさあ、なんかむかつくんだよねー』

という理不尽な怒りをぶつけられ、俺と渋谷さんは、強制的に先輩を「綾華さん」と呼ばされていた。あまり永野という姓の響きがお好みではないらしい。

で、ついでというか、渋谷さんは先輩から「由紀」と呼ばれるようになった。自分が名前で呼ばれるんだから、他の人間も名前で呼ばれるべきだ、という理屈らしい。

渋谷さん、なんて俺が呼ぶと、『なに同級生にさん付けしてんの？ 気でもあるわけ』とかいわれる。理不尽だ。

もつと理不尽なのは俺の呼ばれ方。

「先輩とか呼ぶなっていつてんだろー、アキちゃん」
晃彦だからアキ。

いや、わかるんだけどさ、なにもそんな女みたいな呼び方しなくてもさあ。受け顔のひよる系ならともかく、そこそこ体格もいいガテン系捕まえて、アキちゃんって。

ちなみにもう一人の2年生、ここまで名前すら出てこなかったかわいそうなあの人は、担当から外れている。

原因はやっぱり綾華さん。

初めての担当のミーティングが開かれたときのこと。

備品チェックで三人が悲鳴を上げる、二日前のことだ。

リーダー役が俺になって、事前に生徒会の会計や副会長から指示を受けたり、わからない部分を聞いたりして準備して、担当の3人を招集した。

ミーティング場所に借りた化学室には、意外にも綾華さんが最初に来ていた。

「早いですね」

思いつき意外そうな声をしてしまったからか、綾華さんはむつとした顔をしていた。

「なんか勘違いしてるみたいだけどさあ、別に私はやる気がないわけじゃないんだよ」

資料を机におきながら、俺はまだ意外そうな顔を崩せなかった。

「そうなんですか？　なんかこの前、私はやんないとか何とかいつてましたけど」

なにげにずけずけものをいう奴だ、俺も。綾華さんはそのことは怒らなかった。

「あれは、先にああいっておけば、私がリーダーになったときに指示を出しやすいだろうなって思ったんだよ」

「へ？」

今度こそ、俺は意外に思っているとした取りようが無い声を出した。

「だって2年は私とあの変な奴しかいないしさあ、あんなのにリーダーになられたら仕事する気無くなるじゃない。なら私になるしかないけど、先にああやってガツンといっておけばさ、私だってやりたくてやってるんじゃないんだから、あんたたちもしっかりやってよねっていえるじゃない」

「……策士だったんですね、案外」

タイプの、学校行事なんて鼻くそ以下にしか思っていないさそうな人なんだけれど、決してそうでは無いらしいということを知った。「でもさ、あんたがやるっていったでしょ。ちよつとやばいかなって思ったんだけど」

綾華さんはふつと笑いながら続ける。

「すぐに話を切り上げて解散したじゃない。あれで見直したんだよ
ね」

「はあ」

よくわからない。

「変な下級生にリーダーになられたらなおさらやる気失せるけどさ、ああやってちゃんと状況見てさ、やること無いなら解散しようってきちんと判断下せる奴だったら、問題無いやって思ったんだよ」
褒められているらしい。

まさかあなたの顔をあれ以上見ていたく無かったから解散したんです、とはいえないから、

「そりゃ光栄です」

とごまかすことにした。

それにしても、これは一体誰なんだろう。

綾華さんの噂を聞くと、行事の担当をまじめに務めるようなイメージは、どうしたって浮かんできやしない。

渋谷さん改め由紀ならともかく。

美形で、派手で、社会人の彼氏もちで、友人関係も華麗で、度々教師と衝突しつつ、それでも成績だけは落とさないから学校側もあり強くいえない、という無敵な人……。

人間って、直接話したりしてみないとわかんないもんだなあ、と思わされた。

それはまあ措くとして、だ。

このミーティング、俺のすぐ後に渋谷さん改め由紀も来たから、残る一人の到着待ちになった。

気位が高くて庶民なんかとは話もしないんじゃないかと思っていた（俺が勝手にね）綾華さんは、地味、の一言で片付けられがちな渋谷さん改め……しつこいか、由紀とも、ごく当たり前のように言葉を交わした。

これまた意外だったのは、由紀もごく普通に綾華さんと話していたこと。

俺と話す時はせいぜい単語が3つも続くかどうかだったのに、綾華さんとだと、おとなしい印象の範囲内だけど、けっこう楽しそうに話している。

なにかしたか、俺。

いじけるぞ。

二人の会話に加わるのもなんか気が引けた、というより、女同士の会話に入れるほど女慣れしてもいなければ、度胸も無いヘタレ君は、昼休みに生徒会の副会長や会計から仕入れた情報を書きなぐったメモをまとめ始めた。

何かあるとすぐ仕事に逃げ込むのが男の悪い癖だ、とかいうセリフを思い出した。

俺は疲れたサラリーマンか。

一人で突っ込みながら仕事をしていると、時間はあっという間に過ぎていく。

気がつくとも30分以上経っていたらしい。

いつの間にか化学室は静かになっていた。

メモをまとめ終わって顔を上げると、綾華さんと由紀が俺を見た。「……？」

なんでしよう、と首をかしげると、二人とも一緒に首をかしげた。やばい、かわいい、などと思っていると、綾華さんが口を開く。

「あいつサボりっぱいしさあ、おなか減ってきたし、早く帰りたいわけ。そろそろミーティング始めない？」

ああ、そういえば来てないな、もう一人の先輩。初日からばっくれか。いい度胸だな。

「そうですね。んじゃ、始めましょうか」

俺がいうと、二人とも姿勢を正した。

由紀はきちんと座り直し、俺の向かい側の席で背を伸ばす。メガネの奥の目が、きりつとしていた。

綾華さんは足を組んだまま腕だけをほどいて、左腕を机において斜めに座っている。この人にしてみれば姿勢が正されている方なのだろう。そう思い込むことにする。

ミーティング自体は1時間もかからなかった。やるべきことはまとめていたし、手順はもう考えてあった。後はそれを実際にどうやって行くかの相談で、生徒会作成のプリントや俺がまとめたメモに書き込みしながら、3人で淡々と進めていった。

楽しかった。

なにがといって、女子二人、タイプは違うけど間違いなく美形の

女子二人を相手に回して、1時間も一緒に仕事ができたら、誰だつて楽しいだろう。

ああ、楽しいさ。

もう人生にこんな機会は訪れないかもしれない、とすら思ったさ。相変わらず由紀は俺と目を合わせないし、綾華さんは高嶺の花だし、二人とどうなりたいと思うわけじゃないけれど、女の子たちと、同じ目的に向かって仕事をするというのは、人間関係がこじれたりしていなければ、男にとっちゃ楽しいことに決まっている。

仕事始めは備品チェック、それは明日にまわすことにして、この日は帰ることにした。時間的に出来ないことはなかったけれど、ガテン系の俺の体力やらなにやらで判断すべきじゃないわけで。

んで、帰ろうとしたわけだけれど、俺は今日のこととこれからの計画を報告しに、生徒会室に行かなきゃいけない。

一人で行こうとしたら、「んな寂しいこというなよ、最後まで付き合うつて」と強引に綾華さんが付いてきた。

由紀もなんとなく流れで、という顔で付いてくる。実際、彼女の場合は綾華さんに乗せられているだけっぽい。

これはあまり嬉しい事態じゃなかった。なぜか。食欲の分野の下心が見え見えだから。

俺がバイトしていることはばれている。家が多少貧乏でも、俺自身は高校生にしちゃ小金もちだつてことは二人とも知っている。そして綾華さんはおながが減っている。

絶対、たかる気にいる。

それくらいはわかる、俺だつて。

でなきゃわざわざ付いてくるなんていうもんか、あの人が。

そして生徒会室に向かう途中で事件は起きた。

ミーティング後。生徒会室に向かう途中。

「ラーメンが私を呼んでるんだよね」

とかなんとかいいながら、はきつぶした上履きのかかとをぺたぺた床に当てて歩く綾華さんが、不意に立ち止まった。

つられて一年生二人も立ち止まる。綾華さんは厳しい目で斜め前方を見ていた。俺も由紀もその方向を見る。

視線の先に、もう一人の仲間、であるはずの先輩がいた。

こちらには気付いていなかった。情報処理技術研究同好会、通称パソコン同好会の遊び場と化している、情報処理教室の入り口近くで、その会員らしき誰かと話しこんでいた。

確かあの先輩も帰宅部だけれど、友達が同好会の一員なんだろう。俺は、その姿を見ても特に感想は無かった。ああ、サボってこんなところにいたのか、と、ぼんやりとそう思っただけ。

さっきまで楽しく仕事が出来ていたから、正直あの先輩のことなんかどうでも良かった。来ないなら来ないでいいや、空気壊されたくないし、とか考えていた俺は、リーダー失格かもしれない。

一方で、綾華さんはそういうのは許せないらしい。

いきなりつかつかと歩き出すと、まっすぐ先輩のところに向かった。思わず由紀と顔を見合わせると、俺たちもすぐに後を追った。

綾華さんの姿に気付いた先輩は、ぎょっとした顔をして一步引いていた。綾華さんはそのすぐ目の前までいくと、近くの壁にどんと右腕を打ち付けて、それに寄りかかるようにしながら低い声でいった。

「おとなしく帰ってるかと思えば、まだ学校にいたのかよ。度胸いいなあ、あんた」

こういう場面でぎゃあぎゃあ騒ぎ立てるタイプの女なら、俺も知っている。でも、低い声ですごむ女は初めて見た。怖い。

当然、傍観している俺より、当の本人のほうが何百倍も怖いわけ。

「あつ……」

一声うめくと、あとは何もいえずに硬直している。

綾華さんは今にも先輩を蹴っ飛ばしそうな殺気を発しつつ、片足をぶらぶらさせている。

「連絡は聞いてたよな、今日、ミーティングがあるって」

「……」

先輩は答えもせずに硬直。

聞いているのは間違いない。だって、昼休みに、俺が直接伝えただから。あの時点で、来ないかもしれない、という予感があった。視線を合わせようとしなかったから。

同情の余地は無い気もするけれど、衆人環視の中で綾華さんが先輩をたこ殴りにしそうな風景を放置するのも、面白いけれどやばい気がする。でも、この人を止められる度胸が俺にあるだろうか。

あるわけないじゃん。

まして由紀にそんな事ができるはずもなく、俺と並んで綾華さんの背後に立ちながら、おろおろとすらでえずに不動の姿勢で見つめていた。

綾華さんはしばらく無言で先輩にプレッシャーをかけ続けていた。ウェーブがかかった髪がじゃまで、斜め後ろからじゃ顔は見えなかったけれど、肩から立ち昇る殺気は隠しようもない。

その内、先輩が、耐え切れなくなったとでもいうように後ずさりし始めた。同じタイミングで、綾華さんがいう。

「あんた、もう顔見せるな。その顔見ると吐き気がしそうだ」

ぐいつと腕を伸ばし、壁から離れ、くるっと回転する。

「さ、とつとと仕事終わらせなよ、アキちゃん。ラーメンが私たちを待っているよ」

顔に殺気は無かった。至極機嫌よさそうに微笑んですらいる。本気でこの人に恐怖感を抱いたのは、むしろこの瞬間だったかも

しない。

というわけで先輩は担当から外れ、俺はラーメンをおごらされた。
「みつそみつそー」

店に入る前から味噌ラーメンの名を歌のように口にしながら、綾華さんは上機嫌だった。

一緒に歩く下級生二人は、なんともいいがたい気分についていく。高校に入ってから、どう見ても不良だよという野郎どもとラーメン屋に入ったことは何度もある。でも、女子と放課後に何かを食べにいくというシチュエーションとも無縁なら、よりによって駅前でもかなり親父臭さ満載の店に入ろうというのも初めてだった。

聞けば、この店は綾華さんの親父さんの知り合いがやっている店なのだそうだ。

「綾ちゃんが生徒会ねえ」

カウンターの奥で、タオルを頭に巻いた中年のおじさんが感心したように声を上げていた。

「生徒会じゃないって、文化祭の実行委員」

「似たようなもんだろ」

「全然違うし」

時間がまだ早いからか、店内はそんなに混んでなくて、うちの学校の生徒は俺たちだけだった。あと一時間もして、体育部が切り上げてくる時間帯になれば、それなりに入ってくるだろう。

席は、カウンターの右に綾華さん、真ん中に由紀、左に俺という配置。綾華さんが店主やパートだというおばさんとはかり話しているから、俺と由紀は仕方なく二人で会話することになる。

ネタは色々あるんだろうけれど、あえて綾華さんのことを話するのは二人とも避けた。わざわざ、隣にいるのに地雷に触れる必要もない。

「メガネ、外しても大丈夫なの？」

と俺が聞いたのは、席についてすぐ、由紀がメガネを外してしま
っていたから。

「はい」

と、由紀はうなずくだけ。まっすぐ伸びた髪が揺れるのはきれい
だったけれど、会話が続かないったりやありやしない。もっと、こ
う、キャッチボールしようよ。

「全然見えなくなったりするわけじゃないんだね」

「はい」

「そんなに悪いわけじゃないんだ」

「はい」

このやろつ。

「じゃ、別に四六時中かけてる必要も無かったりする？」

「……視力的には」

ようやく食いつくポイントが見えてきた。

「というと、もしかしてそれ以外の理由でメガネかけてたり？」

そこまでいって、俺は急に後悔した。ああ、余計なことだったな
と。

由紀が俺のことを敬遠しているらしいことは、充分承知している。
これからいやでも仕事で一緒になるんだから、しつこく聞いたりし
て険悪になる必要なんか無いじゃんか。

由紀が黙り込んでしまっんじゃないかと思ったけれど、意外にも
由紀はストレートに答えてきた。

「安心するんです」

「……安心、ですか」

「素の自分を出すみたいで、人前でメガネ外すのが得意じゃないん
です」

その言葉を出したときの由紀の顔が真摯で、俺は思わず言葉の意
味を深読みしすぎるところだった。

じゃあ、素の自分を見せてくれてるってこと？

でも、ラーメン屋でメガネを外す理由なんて、ひとつふたつしか

ない。曇るし、汚れるからだ。うちの親父もメガネで、ラーメン屋に入ったらすぐ外してしまうからよく知っている。

「……そっか、色々大変だな」

答えを濁して、俺は由紀に話しかけるのをやめた。これ以上話すのがちよつと苦痛になっていた。由紀のせいというより、自己嫌悪に近い感情のせいだ。

そんな俺の心中を知ってか知らずか、今度は珍しく由紀から話しかけてきた。

「晃彦くんは、そういうの必要ないですよね」

「そういうのって……素を隠す道具、みたいの？」

「はい」

相変わらずの視線外し状態で、目の前のカウンターを見つめながら由紀がうなずいている。

「うーん」

どういう意味だろう。そんなに素で勝負してるつもりはないけれど。それなりにかっこついたり虚勢張ったりして生きているのは、そこらへん歩いてる男子高校生と一緒にだと思う。

「そもそもメガネが必要じゃないしなあ、目だけは昔からいいからごまかすつもりは無くてもそう取られるような答え方をしてしまった。」

「そついうことじゃありません」

と、初めて由紀が、会話の主導権を握ってきた。

ちよつと感動したけど、すぐ慌てさせられることになる。

「晃彦くん、高校に入ってから、怖い人とかとも普通に話してるし、綾華さんとも普通に話してるし、すごいなあって思っていました」

おいおい。

「すごいって……怖い人だったってさ、別に犯罪集団じゃないんだし、綾華さんと話すのだって都合上仕方なく……」

仕方なく話してるだけだ、というとした時。

「呼んだかい」

ぬつと綾華さんが由紀越しに顔を出す。まじでびっくり。

「うわあ」

「うわあって心外だなあ。人のこと話してその態度はどうなんだろうか、ねえ、渋谷くん」

表情が少ない由紀が珍しく驚いた顔をしていて、その由紀を至近距離から見つめて綾華さんがいう。

「仕方なく話されてたのか、私は。なるほど。そうか」

嫌みったらしく綾華さんがいう。顔は思いつきりS系。なまじきれいな顔をしているだけに、意地の悪い顔をしているとすぐみあがりそうになる。さっきの一件もあるし。

でも、こつちも高校入って以来、さんざんおつかない人たちとつき合わされてきた経緯がある。さっきの先輩みたいに本当にすみあがってしまうのは愚策、下の下。

「話は最後まで聞きましょうよ」

と切り返し、俺は口が動くままに軌道修正を行う。

「都合上仕方なく話してて、でも意外に話せる人だって事がわかったから、今じゃけっこう楽しくやれてる、そうつなげようとしてたんですよ」

口からでまかせ、ともいう。

「ほー」

綾華さんは頬杖をしながら疑わしげにこちらを見ているけれど、負けちゃいかん。でまかせも、押し通せば真実になりうるのだよ。

「だから、すぐくもなんともないよ。たまたま状況がそうなったっただけでさ。由紀だってさ、綾華さんと普通に喋れてるじゃんか」

「そうね。最初はぎこちなかったけど、今じゃ普通に話せてるね」綾華さんも乗ってきてくれた。たぶん、何の話かはわかってないけれど。

由紀は、両脇の二人に見つめられるような感じになってしまい、ピンと背を伸ばしたままうつむくという器用な姿勢になっていた。

「それは……綾華さんが素敵だから……」

「ほへ」

由紀の意外なセリフに綾華さんが間抜けな声を出した。頬杖がずれて、がくんとなっている。

店内の暑さが原因ではないと思われる赤さになった由紀の顔。

「……綾華さん、憧れだったから……いっぱい話せるのが嬉しくて……」

ちょっと待つてください。

汚い店内がいきなり百合の舞台ですか。

「あ、ああ、ありがとう」

あの綾華さんがうろたえている。快拳だ。史上空前の快拳だ。

綾華さんと一緒に仕事をしている、というだけで、嫉妬されたりする。

男ならまだわかる。でも、嫉視の大半は女子から来るのが理解できん。

「何であんな地味なのと」

「あいつごときが綾華さんと一緒にいて相手してもらえるなんておかしい」

「綾華さんと同じ仕事について、ちょっと調子こいてんじゃないの」
口ではいわないにしても、目がはつきりそういつている。主に派手系の女子。

「綾華さんにはセレブな彼氏がいるんだからな、変な夢見てんじゃないぞ」

ラーメンをおごらされた翌日の朝、今まで口を聞いた事もないような、顔しか知らない同級生女子に面と向かっていわれたときは驚いた。

てか、引いた。

「同じ空気吸ってんのが生意気なんだよ、調子くれてんじゃねーぞ」
明らかに、ラーメン屋にいったことが周囲にばれていて、そのことで批難されてるんだけども。

「由紀の存在って完全にシカトされてるよな」

友達と朝の一件を話しているうちに、綾華ファンの女子の視界には、まるで由紀が入らないことに気付いた。

「あいつ影薄いしな」

と、友達もいう。

「よく見りゃきれいな顔してるし、男子人気もあるんだけど」
「そうなん？」

俺が聞き返すと、友達はうさんくさそうな顔をしている。

「あるに決まってるんだろ。素で聞き返してんじゃねーよ、女に興味ねーにしてもよ」

「別に無くはないぞ」

「知ってるか？ お前、一時ゲイ疑惑が持ち上がったんだぞ」

「……知ってるよ」

あまりに男子とだけつるみ、女子との接点がないままに過ごしてきたしまった俺には、すっかりガテン系の体格に育ってしまったこともあって、マッチョナルシスト疑惑やゲイ疑惑がささやかれていた。

まあ、それもちょっと前のことで、ひたすら地味に生きたいと願っている俺の存在なんて、クラスの中でだってそう重いものじゃなかったから、噂話の寿命もごく短かった。喜んでいいのか、凹むべきなのか。

「まあ、目立たないにしても、注目してる男子は多いよな」

「ふーん」

そんなものか。まあ、かわいいなあ、とは思っけれど。

「でも、ああいう女の」

と、友達は視線を俺から外さずに親指をある方角に向ける。馬鹿笑いしながら下品に机の上に座り込んでいたりする女子の一群。

「視界には入らないだろ。自分たちのはるか下に生息してる低級な生物くらいにしか思ってるねーよ。おれたちも含めてな」

そりゃいくらなんでも自虐過ぎやしないかい、と思っただれど、口にはしない。低級、高級はともかく、別の世界に生きている人間だっということには賛成だったから。

で、さらにその翌日に、三人でほこりをかぶりながら、文化祭用の備品チェックを行ったわけだ。

「なあ、これ終わらないじゃね？」

という綾華さんの苦情を聞きながら。

チェックが終わり、片付け直し、作業が終わったのが午後八時過ぎ。

「ありえねー……」

綾華さん、完全にへばっている。体力は無いらしい。もう減らず口も叩けません、という顔で、生徒会室の長い机の上に寝転んでいる。

由紀の方も、手を洗って生徒会室に戻ってきたときには、表情が完全に失われていた。本気で疲れると、顔の筋肉まで疲れ果てるものだ。

倉庫代わりの部屋の鍵を閉め、生徒会室に戻って備品リストを完成させた俺が顔を上げると、机の上に仰向けになっている綾華さんも、椅子に座り込んで身じろぎもしない由紀も、頼りなげな蛍光灯の明かりの下で、疲労という字を全身にまとったようなどんよりとした雰囲気の中に沈みこんでいた。

綾華さんの脚線美をそれとなく眺めながら、なんかエロイなあ、などと不埒なことを考えていた俺は、そんな自分の視線に気付かれるのは死んでも阻止しなければ、という観念に背を押され、声を出した。

「さあ、帰りましょう。今日も一日お疲れ様でした」

由紀が顔を上げる。意識が戻ってきた、という顔で目を二、三度しばたかせ、無表情なまま俺を見る。

綾華さんは無言のままだるそうに体を起こし、髪をかき上げた。半分寝ていたようで、目が淀んでいる。

「……ああ、お疲れ」

声まで淀んでいる。

意外すぎることに、この人がよく働いた。愚痴をこぼしつつ、八つ当たりしつつ、見た目からして明らかに体力の無い由紀の分まで働いた。

体力の点では二人とは比較にならない俺も、自分ではよく働いた

つもりだけれど、体力の無さを考えれば、綾華さんも、そして生真面目が服を着て歩いているような由紀も、きっと俺以上に働いていた。

「今日もラーメンいきます?」

疲れてはいるにしても、二人ほど体力が無いわけでもなく、バイトで重労働を当たり前にしていれば備品チェックなんて大した作業でもないわけで、俺はわりと平気だった。

だから何気なく自分の空腹を基準にそういつてみたんだけど、見事にふられてしまった。

「……吐くぞこのヤロウ」

「わたしも今日はちよつと……」

疲れすぎて食欲なんかかけらも出ないらしい。

「じゃあ、まっすぐ帰りますか。そろそろ鍵閉めないと、職員室も閉まっちゃうそうだし」

生徒会室の鍵は職員管理だから、そろそろ返さないと苦情が出る。文化祭間近になればともかく、今の時期から遅くなってもいい顔はされない。

「いいよ、今日はもうここで寝てくから」

綾華さん、また寝転びやがった。

「んなわけにや行かんでしょうが。帰りますよ」

付き合っていると調子に乗る、という気配がびんびんに伝わってきたから、俺は冷めた口調で返しながら立ち上がった。

由紀が、だるそうに立ち上がった。

「大丈夫? 帰れる?」

ふらふらしているから俺が尋ねると、かばんを持った由紀は、珍しくメガネの奥で微笑んだ。

「大丈夫、心配いりません」

どう見ても大丈夫という顔じゃないけれど、まあ、この子も家は近い。自転車で10分の俺よりさらに近い。電話すりゃすっ飛んでくる家族もいる。

「なんなら親呼んどきなよ。余計なお世話だけど」

なぜ知っているかというところ、この前のラーメン屋の時、帰りが遅い娘を心配して携帯に電話をかけてきた由紀の親父さんが、俺たちが食べ終わって店を出た頃に、近所だというのに車をかつ飛ばして駆けつけたからだ。

完璧な良家の子女モードの綾華さんが、華麗なほどのご挨拶で親父さんに事情説明してくれたおかげで、親父さん、すごく安心していった。

その後ろで俺が嘔き出しそうなのを必死でこらえていたことは内緒。ついでに、由紀が帰った後、思いつき右太もを蹴つ飛ばされて悶絶したのも内緒。実はそのあざが今もくつきり残っているのはまじで内緒。

「大丈夫です。ちゃんと歩いて帰れますから」

そついいながら、由紀は扉を開ける。俺もそれに続きながら、顔だけ振り向いていう。

「ほら、帰りますよ。本気で泊まる気なら、鍵閉めちゃいますから、先にトイレだけでも済ませといたほうがいいですよ」

結構ひどいことを、しれつといっている。

「ちよつとー」

綾華さん、完全にむくれた顔でのそのそと起き上がる。

「扱いひどくない？ 由紀とのその差はなんなわけ？」

「手や脚が出てくる人と、そうでない人の違いでしょ。この前のあれ、痛かったなあ」

「あれはアキちゃんが悪かったんでしょーが」

だるそうに机から下りると、綾華さんは髪を揺らしながら首をひねらせ、いかにも肩がこつていますという顔をした。

「まあ、ともかく、今日はお疲れ様でした。助かりました。ありがとうございます」

あまり長くこの人と舌戦が出来るほど上等な人間でもないという自覚くらいはあるので、俺は軽く頭を下げて、あいさつした。

綾華さんはかばんを持って、胸元をきわどく開けた姿で扉に向か
つてきながら、そんな俺を見てつぶやいた。

「別にあんたのためにやったわけじゃないし」

そりゃそうだ。

「あんたは平気そうね。あたしたち散々こき使つといて」

憎まれ口。疲れているからか、ニヤニヤしている顔もあまり明る
くない。

「以後、こき使わないように善処します」

「すげーやな感じなんだけど、政治家みたいで」

「そりゃ失礼、とりあえず出ましようよ」

綾華さんを誘導するように扉を出て、さつさと生徒会室を閉めて
しまう。

「じゃ、俺はこれ返してから帰りますね。お疲れ様でした」

鍵を振って、俺はさつさと歩き出す。

この時の俺の気持ち。

なんとなく、二人から早く離れたかった。

いつまでも一緒にいたい、とか、どっちかといい雰囲気になれた
ら、とかいう感じは一切無かった。

実のところ。

女慣れもしていなければ、まして相手が無敵な美人の綾華さんに、
密やかな人気の美少女の由紀と来れば、俺が相手できるのも仕事が
あるうち。

用事が無くなったら、正直、一緒にいるのはすげープレッシャー。
自意識過剰なだけなんだろうし、失礼なのかもしれないけれど、
とにかく、その場から離れたかった。

そう、俺は逃げ出した。

へたれでチキンな自分を守るために。

だから。

職員室で生徒会室周辺の部屋の鍵束を返し、使用簿に名前を書き込んで、先生といくつか言葉を交わし、「まっすぐ帰れよ」といわれ、解放され、生徒昇降口で靴を履き替え、外に出た時。

俺を待っていたらしき人影に声をかけられて、俺は本気で驚いた。
「うおおおおい」

現実にこういう場面でこういう声を出すやつがいるとは思ってもしなかったけれど、いるんだな、ここに。

「うわあっ」

叫ばれた方も驚いていた。

もう照明も消されてしまった昇降口外の暗がり、背の高い女子がひとり立っていた。

「なんなんだよ、びびんだろっ」

綾華さんだった。

「びびったのはこっちですよ、んなところからいきなり声かけられたら」

「こない女に声かけられてびびるって、ありえねーよ、失礼きわまりねーだろ」

「暗闇からいきなり声かかってびびんない方がおかしいですって」

「ちっ、このびびりのへたれめ」

「俺はびびりでへたれですよ」

「うわ、さらっと認めやがった、根性無いな」

「世間のすみっこで静かに暮らしていくのが夢の、ちっちゃい男っすよ、俺は」

「どこがちっちゃいんだっての、ガテン系のくせに」

ちよっと喋っているうちにどちらも落ち着いてきて、毒舌の吐き合いになってきた。

つい最近まで、想像もしなかった。まさか、この人と言い合いができるようになるなんて。

「どうしたんですか、さっきまで小指で押しただけでぶっ倒れそうだった人が」

「こき使われて疲労困憊のかわいそうな美少女を、誰かが送りたいなあって思ってるんじゃないかと思って」

「へえ、そんな奇特な奴がこの学校にいるんですかねえ」

「いないの？」

ありえないことに、綾華さんが俺を見上げるようにして首をかしている。

恐ろしく可愛い。

この中途半端な暗さの中で、この人の周囲だけ淡く輝いている錯覚すら起きる。

でも、そこは自他共に認めるへたれ。

「いるんですか？」

鸚鵡返しは失礼極まりないけれど、からかわれているのにその気になってしまふよりよほどまし、という打算が、一瞬で頭をよぎっていた。

綾華さんは少しの間黙って俺を見た後、ふっと笑った。

「なるほど、なかなかいい逃げっぷりだわ」

へたれを自称するだけあるね、と、綾華さんは続けながら歩き出した。なんとなく、俺も半歩遅れてついていく。

「送る送らないはどうでもいいんだけどさ」

綾華さんの足取りはそれほど軽くない。

「明日の予定、聞いてなかったから」

「ああ、そういえば」

「あたしも色々忙しくってね。予定立たないと困るんだわ」

声が非常に冷たい気がするわけですが。

「明日は仕事は無いです。会計と話して、新規購入の件まとめるだけなんで」

「あたしは用無しか」

「一人いりや充分ですし。出ます？」

「冗談でしょ、んなめんどい事」

重なりにすたすたと歩いて行く。

「てかさ」

綾華さんがポケットを探った。

「いちいち会わないと連絡取れないんじゃないよな」

取り出したのは携帯。じゃらじゃらストラップをつけているイメ

ージがあつたけれど、組紐のアンティークなストラップが一本、ぶら下がっているだけだった。

「番号とメアドちょうだい」

綾華さんが立ち止まる。俺も立ち止まる。

暗がりでも表情はわかる。綾華さん、今日一番の不機嫌顔だった。慌てて携帯を引つ張り出して、赤外線モードにする。

送信し終わり、お互いの携帯が番号を認識しあうと、綾華さんはボタンと携帯を閉じ、また歩き出した。

「……あんた、チャリ通でしょ。さつさと帰んなよ」

「まあ、ここまで来たから、駅までは送ろうかと」

「いいよ、彼氏呼んでるから」

綾華さんの声がどこまでも冷たい。そのセリフに、俺もちよっと腹が立った。

「……じゃあ、送ってもらおうなんて期待する意味ないですよ」

「だから、送る送らないはどうでもいいっていったら」

彼氏、といえば、噂の社会人の彼氏という奴だろう。セレブな彼氏、とかいってたやつもいたな。

「そうですか」

俺なんか足元にも及ばない、この人にふさわしい男なんだろう。

別に顔を見てやろうという気も起きなかったから、俺はからだの向きを変えた。

「遅くまでつき合わせてすいませんでした。この先は出来るだけ負担がかからないようにしますから、今日のところは勘弁して下さい。それじゃ」

向かって左手にある自転車置き場へ歩き出した俺の背中、綾華さんの声がした。

「ああ、もう、そういうんじゃないってさあ」

イライラした声。といつても、自分に対するイライラだってことくらいは、いくら俺でもすぐにわかった。

「あんたたちと仕事するの、嫌だとかじゃないんだよ」

俺は立ち止まった。振り向かなかったのは、なんとなく、綾華さんに顔を見られるのが嫌だったから。なぜかはわからない。

「あんたくらい、あたしにまともに向き合ってくる後輩なんていなかったし、由紀もくそマジメなくせに懂れてるとかいつてくれちゃうし」

ほとんど、衝撃的といって良かった。俺にとっては、綾華さんみたいなスターが、いくら流れと一緒に仕事をする事になってしまったにしても、俺なんかの存在を受け入れるなんてことは、ありえないことだった。

「一緒に仕事してさ、一緒に疲れきってさ、くだらない話してさ、そういうのって今まで無かったから、結構楽しいんだよ」

さすがに俺は振り向いた。綾華さんは街灯の光を受けて、茶色い髪をきらきらと輝かせていた。表情は無表情に近いけれど、今までになく真摯だった。少なくとも俺にはそう見えた。

「あたしも性格歪んでるから、むかつかせたんなら謝る。でも、喧嘩別れみたくなくて帰るの、嫌なんだ。次に話にくいじゃんか」

絶句していた俺は、衝撃を受け止め損ねてくらくらししていたけれど、何とか持ち直した。

「……俺も」

頭が止まりかけていて、俺は気の利いたことなんか口にする余裕がない。だから、出たのは素の言葉。

「綾華さんと仕事するの楽しいです。話してて楽しいです。喧嘩別れは嫌です」

綾華さんのほほが、ふっと柔らかくなった。

「じゃあ、おんなじだ。喧嘩別れはやめとこうな」

「はい」

多分、俺のほほも柔らかくなっていただろう。

何となく無言のまま、二人で見つめあっていた。

といつても、なにしろ中途半端に暗いから、しかもお互いの距離があるから、情熱的な見つめあいにはならない。

そのうち、綾華さんが動いた。

「引き止めて悪かったね。なんか仕事が入ったら、すぐ教えてね」

「わかりました。こちらこそ遅くまですいませんでした」

「いいっこなしでしょ、それ。リーダーはアキちゃんでも、あたしたちってチームなんだからさ」

綾華さんは手をひらひらさせながら、校門の外へと歩き出した。

「苦労も成果も、分け合うのがチームってもんじゃない？」

その言葉が嬉しくなって、俺は綾華さんの背中に向かっていった。

「その言葉が聞けただけでも、この仕事引き受けて良かったです」

綾華さんは振り返らず、相変わらず手だけひらひらさせていた。

「まあがんばろーぜー」

帰りの自転車をこぐ足が異常に軽かったのは、きっと気のせいじゃない。

朝から降り出した雨は、昼休みになっても上がらずに、小さな粒が根気よく地面を濡らし続けていた。

昼休みに体育館で汗まみれになってバスケットをする、というような青春の風景とは縁が無い俺は、文化祭の準備が本格的に始まる前に訪れる最大の障害、中間テストの勉強なんて物をしていた。

うちにいるとまず勉強なんぞしないから、せめて学校にいる間にどうにかしようという、ささやかな足掻きだ。

ガリ勉に見られるのがいやで絶対学校では勉強しない、というような根性も無いし、俺がバイトで週末を潰していることは教室の誰もが知っているらしいから、むしろ同情の目で見られたりする。

「休み時間で出来る勉強なんてたかが知れてるんだから、諦めろよ」「うつせー」

うつかり赤点なんぞ取ってしまうと、バイトの許可が下りなくなってしまうから、これでも必死なわけだ。

国語系の学科は得意だし、詰め込みの記憶でどうにかなる科目は一夜漬けの山掛けでどうにかするにしても、数学や英語は多少積み重ねないと危ない。

弁当をかき込んだあと、4時間目の数学のノートをまとめ、例題を解こうと無い頭を必死で絞っていると、声がかかった。

「晃彦、客だぞ」

視線を上げると友達が立っていて、教室後ろの扉を指していた。そのまま顔ごと目をずらすと、長い黒髪とメガネで似顔絵が描けそうな女子がいて、俺の方をじっと見ていた。

由紀だ。

友達は冷やかすでもなく、すぐに離れていった。たぶん、由紀が生徒会支給のファイルを持っていたからだ。

同じ待ち姿でも、相手が綾華さんなら大騒ぎになるんだろうな、

などと思いながら、俺は愛しい数学の問題を泣く泣く捨てて、立ち上がった。

俺が近付いてくると、由紀は扉から離れていった。ついでこい、ということか。

廊下の隅、階段近くの窓際に立った由紀は、改めて近くに立った俺を見た。

見た、といつても、視線は合わせてくれない。相変わらず。じゃあどこを見ているかというのと、たぶん俺のブレザーの上ボタンあたり。

まあ、体の向きすら俺から離していた頃と比べれば、ここ何日かですいぶん距離は縮まったものだ。そう思わないと哀しくなる。

「どうかした？ 仕事で間違いでもあったっけ？」

できるだけ柔らかく話しかけてみる。妹あたりが聞いたら「おい、きしょっ」とでもいつて逃げ出すような声だ。こういうのを猫なで声っていうのかもしれない。

由紀は無言のまま首を振った。切りそろえた前髪まで揺れているから、結構強い否定だ。

「あんま強く振るとメガネ飛ぶぞ」

思わず憎まれ口が出てしまった。あ、しまった、と俺が思う間もなく、由紀は「そんなわけじゃないじゃない」という目で一瞬俺と視線を合わせ、すぐにまたうつむいた。

やりにくい嬢ちゃんだぜ、まったく。

「今日は特に由紀に振る仕事は無いよ。会計の所に顔出して、新しい備品の購入枠とか打ち合わせるだけだから」

どうせ由紀の用事なんて限られているわけで、先回りしてしまうことにした。

俺がいうと、由紀はうつむいたまま小さくうなずき、それから意を決したように顔を上げた。

いつもは俺と話していても表情がない由紀が、ちょっと固い顔つきで俺を見上げる。

「その打ち合わせ、わたしも同席していいですか？」

「え……うん、まあ、それはいいけど」

面食らってしまった。

由紀が自分の意志を伝えてきたのが初めてだったから。そもそも俺の目を見て話してきたのが初めてだったから。

「どうしてまた」

俺が尋ねると、由紀はまたうつむいてしまった。「よく見るときれいな顔をしている」といわれる由紀の顔を正面から観察するいい機会だったのに、面食らって動揺しているうちにまた顔が見えなくなってしまった。

由紀はちよつと言いよどむ気配を見せてから、かろうじて聞こえる声でぼそぼそ話し始めた。

「わたしも仕事したいんです。いわれる仕事じゃなくて、自分でする仕事。晃彦くんみたいにはできないけど、せつかく任せてもらった仕事だし、一人でどんどん進めていける晃彦くんに感心してるだけじゃなくて、わたしからも仕事に取り組みたいなって思ってる」

今までの由紀のセリフ全部合わせても足りないんじゃないかってくらいの長ゼリフを口にし終えると、由紀はファイルを抱きしめるようにして大きくひとつ息をした。

「へえ、そりやすごいね」

俺は間抜けな返事をした。わざわざこんなつまらない仕事を、買ってまでしようという人間がいるとは思わなかったし、由紀がそれを言い出すのはさらに意外だった。しかも、こんな長ゼリフで。

どうにも棒読みに感じられたのは、準備したセリフを一気に語りきったからだろうか、と気付いたのは、その日の授業も終わり、会計担当の生徒会役員と話をした、その後だった。

だからこの時の俺は何も気付いていない。

「一緒に行くのは構わないよ。二人の方がメモし忘れとか少なくて済むだろうし」

うん、と由紀はうなずいている。

「放課後、在庫の表とかまとめたら生徒会室行くからさ、またうちの教室来てよ」

うん、ともうひとつ由紀がうなずく。

「表のコピーは渡すから、メモ係してて。途中で職員室よってコピーしてもらってから行こうか」

さにらうなずく由紀。視線も合わないし、俺に見えるのは由紀のつむじ。もう喋る気はないらしい。

「んじゃあ、そういうことでよろしく」

というと、それが切り上げのサインだと思ったのか、由紀は最後のうなずきを返すと、つつつと二歩後ろに下がって、くるつと踵を返し、てくてくと歩き出してしまった。

俺は置いてけぼり。

去って行く由紀の背中小さくて、どこか急ぎ足だった。

会つのも嫌なら来なきゃいいのに、と、俺はやけにひがみつぽくそれを見送っていた。

生徒会役員の中でも、決して花形とはいえない地味な役職が会計。会計自身の中でもその存在は地味らしく、せつかく人が約束を取り付けて、資料まとめて訪ねてやったのに、すっぱかされそうになった。約束をほぼ完璧に忘れ去っていたらしい。

「悪い悪い」

3年生だから受験生でもあり、中間テストを控えてもいるから、色々忙しいのだろう。にしても、忘れられれば、こっちとしちゃ腹も立つ。

いつまでたっても来ない会計に内心いらしていた俺に気付いて、たまたま生徒会室に来ていた副会長が携帯で連絡を取ってくれるまで、会計の先輩は自習室として開放している空き教室にいたらしい。

「お、きれいにまとめたねえ。仕事が速くて助かるよ、他のところはまだろくに動いてもいないからね」

「まあ、暇っすからね」

せいぜいきつくならないように、穏やかに答えつつも。顔だつてにこやか。

「君ら二人でやったの？」

先輩は、俺のとなりにひっそりと座っている由紀と見比べるようにしていった。

ええ、と答えかけて、先輩がいつているのは資料まとめのことじやなくて、在庫チェックのことだと気付いて、いい直した。

「いや、綾……永野先輩も一緒でしたよ」

「へえ、永野が、ねえ」

先輩が目を丸くした。よほど意外だったのか。そりゃそうだろうな。

「先代生徒会が管理いい加減だったからね、大変だっただろう」

「そりゃもう」

「いつか片付けなきゃって会長なんかとも話してたんだけどさ、なかなか暇がなくてね」

やる気が、だろ、と思ったけれど、もちろんいわない。

「とりあえず、クラスごとの申請が来たら新規購入分の配分決めて行くけど、予算枠がある程度決まってるからさ、その中でうまく切り盛りしてってくれるかな」

「枠内でさばっていくって事ですね？」

「足りなくなったらいつて、とかいいたいところだけだね。この前、テニス部が全国行っちゃったおかげで予備費が無くなっちゃってるんだ」

「ってことは、後出しであれこれ準備してっていわれたとしても、その時点で予算使い切ってたらずこでアウト、と」

「そゆこと」

めんどくさそうな話だ。

俺たちの仕事は、生徒会としてクラスごとの出し物用に準備している備品を貸し出したり、管理すること。

貸し出すためには、何が必要なのかを申請してもらわないといけないけれど、どうせぎりぎりになって「あれがない」「これがない」と始まるに決まっている。

プロとしてやっていて、直前になって「機材がない」「材料がない」などとほざいていたら、叱られるどころか首が危くなる。バイト先の人々を見ていれば、段取りが大事だってことがいやでもわかる。

でも高校生にそこまで望めないだろう。別に大人ぶったり偉そうに考えたりしているんじゃない、俺もカケスさんたちの下でバイトなんかしてなきゃ、段取りの「だ」の字も理解出来て無かっただろうって思うからだ。

「じゃあ早めにクラス担当に取りまとめしてもらって、あとは上手くケチってやって行くしかないですかね」

「やって行くしかないだろうね」

「今あるもので何とか工夫してやってもらうのが原則ってことで」
「そうなるだろうなあ」

「その工夫も、一緒に考えるんですかね」

「思いつくんならそれもやってあげないとだな」

「備品に関係してることは俺らで独自に判断していいんですか？」
「というと？」

「たとえば板だったら切ったり貼ったりペイントしたり、ここまで
は自由に使ってもいいかな、とか」

「ああ、任せるよ。一応報告だけはしといて」

「というと……最終的なリストの更新と、あと必要な報告書が始
末書の提出ってところで手を打ってもらえますか？」

「それだけでもらえれば完璧。お金つかう場面できっちり領収書
上げてもらって、ついでに収支報告もつけてもらえればいうこと無
しだね」

「出金簿みたいなので、出来てるのあります？」

「ある。生徒会のPCに入ってるから、後でプリントアウトして渡
しとく。領収書とか入れる袋も準備しとく」

会計の先輩が、やる気のない生徒会の一員とは信じられないくら
い話せる人で、ちよつとびっくりした。

後で聞いた話だと、この先輩、実家が町工場を営んでいるらし
い。商売している姿をずっと身近に見てきたから、生徒会程度の仕
事なら、苦も無くこなせるという。

この間、由紀はというと、一言も喋ることなく、俺たちのぼんぼ
ん進んで行く会話をひたすらメモっていた。一字一句逃さず、とい
うわけに行かないのは当然だけれど、かなり上手く要点をまとめて
いる。成績はいい奴だけど、なるほど、ノート取るのも上手いんだ
ろうな、と思わせる。

先輩も由紀も、それぞれ頼れる仕事仲間になりそうだった。
思っていた以上に話がスムーズに運んだから、俺もかなり嬉しか

つたらしく、テンションが上がっているのが自覚できた。

この時点で、会う約束を思いっきり忘れられていたことなんか、頭から消えてしまっている。

「テストが終わればさ、会長やらその他の連中も、だんだんその気になっていくと思うんだ。僕達みたいな立場の役目はさ、あいつらが本気で仕事始めるまでに、舞台を整えておくことだと思うんだよな」

先輩がいう。

「誰かがきつちり段取りしておかないと、上手くいかないだろう？でもそれが出来るやつって、高校生じゃ限られるだろうしさ」

俺が感じていたことをそのまま言葉にしてくれたから、この言葉も嬉しかった。

「僕は人を引っ張って行くような力はないし、主役になれるタイプじゃないから。脇役としてしっかり主役になれる連中を支えてね、結果として楽しい文化祭になれば、それが最高って思うんだ」

線の細い先輩は、そういつて笑った。

高校生とは思えないほど、肩の力が抜けた大人の微笑だった。

話が終わって、別れ際、先輩が俺に言葉をかけてくれた。

「佐藤君、文化祭が終わったら生徒会改選があるけどさ、僕たちの後を継いでみなよ。君みたいなのがいないと、来期の生徒会が心配でしょうがないんだ」

たぶん、ものすごい褒め言葉なんだろうと思う。

気分良く打ち合わせが終わって、生徒会室を出たのが5時過ぎくらい。

「お疲れ」

一緒に生徒会室を出た俺と由紀は、並んで歩き始めた。となりの

クラス同士だから、帰るにしても、書き取ってもらったメモをまとめるにしても、どのみち途中までは一緒になる。

「メモまとめるの、今日じゃなくていいから。中間テスト終わったらずく使えるようにしといてもらえればいいし」

指示、らしき物を口にしたけれど、反応は無い。

というか、多分うなずいたんだろうけれど、わざわざゆっくり歩いているのに一歩遅れてついてくるから、振り返らないと見えやしない。

嫌われているという確信はないけれど、好かれてはいないんだろ
うなあ、というのはわかる気がした。

もてたこともなければ、いい男って自信があるわけでもなく、ゲイ疑惑がさやかれた実績があるくらい女に縁がない生活を送っている俺としては、こういう空気、一気にテンション下がる。

何となく黙ってしまい、そのまま、となりあつた教室が見えるところまで来た。

つい5分前からは考えられないくらいのローテンションになった俺は、もう帰る気満々でいた。

帰宅部の俺に、文化祭の仕事以外に学校に用事なんか無かったし、居残って勉強する気分じゃなくなっている。どうせうちに帰ったって、飯食ってPCいじって、風呂入って寝るだけなんだけれど、この空気に耐えているより100倍まし。

それじゃメモだけよろしく、今日もお疲れでした、なんていおうと口を開きかけた時、由紀の方が先に声を出した。

「晃彦くん」

びっくりした。

「はひ」

思わず立ち止まって直立不動。あほか。

由紀はいつものようにうつむいていて、しばらく何かいいたそうにファイルを両手でいじくりまわしていた。

そのうち、いいたいことがまとまったのか、それとも迷いを吹っ

切ったのか、ファイルを抱くようにして手を胸の前で組んだ。

あれ、なんか違う。

俺は違和感に襲われた。

嫌われていると思っていた。好かれちゃいないだろうな、と思い込んでいた。

目の前にいる由紀は、そういう感じにはとても見えない。

錯覚だろ、と俺の中のへたれな自分が防衛線を張ろうとした時、観測弾が由紀から放たれた。

「今日……前からいわなきゃってずっと思ってたんですけど……聞いたって気持ちに変わりました」

相手との距離を測るため、砲戦では観測用の発砲を行う。目標との距離を実際に砲弾を撃つことで測り、正確に射角などを修正してから、一斉に砲撃を開始する。その一斉砲撃を「斉射」という。

などという軍事用語が頭を駆け巡った。

たぶん、珍しくくらいに俺の勘は冴え渡っていて、由紀の雰囲気と正確に捉えていたんだと思う。

それを認めてしまう前に、由紀からの斉射が俺を撃った。

「……わたし、晃彦くんが好きです」

巨大な徹甲弾が、大気を切り裂いて俺を粉々に撃ち碎いてくれた。

相変わらず視線は合わない。

うつむいている由紀の黒髪は、沈んで行く陽の光と蛍光灯の双方に染め上げられて、しつとりと紅くつやめいている。

徹甲弾の直撃を受けた俺は、生まれて初めての直撃弾の威力の前に呆然としていた。

……何をいつてるんだこの子は。

それこそありえないだろ、俺が好きとか。

なんか勘違いしちゃってるんじゃないのか？ ほら、会計と仕事の話してるところ見てるうちに、催眠状態みたくなって、ちよつと付き合いが出来た同級生が素敵に見えちゃったー、とか。

いや、俺が素敵に見えること自体おかしいだろ。メガネの度が合っていないんじゃないのか？

てか、頭大丈夫か？ とりあえず正気取り戻しとけ？

いやいや、実はドツキリか罰ゲームとか。由紀がそういうのに乗るかどうかは別としてだな、ふつーに考えたらそれだよな。

動揺しまくって、でも動けないでいる俺。じつとうつむいたままファイルの前で手を組んでいる由紀。

開いている廊下の窓から、野球部のバットの音やサッカー部の怒鳴り声、近くの工場の機械の音が、まとまりもなく入ってくる。

廊下に二人で突っ立っている、試験期間直前の部活を上がったきた同級生たちが横を通り過ぎて行く。俺たちの事なんか眼にも入れちゃいなかったけれど、その話し声がすぐ近くを通り過ぎていつて、やっと金縛りが解けた。

「と」

口がからからに渴いていて、上手く言葉にならない。

うめくような俺の声に、ぴくつと由紀が肩を震わせる。

まるで俺がいじめているみたいじゃないか、怯えてるようにしか

見えないぞ。

「とりあえずさ、ここで話もなんだかし、学校出ようよ」
どうにか言葉を絞り出す。

とにかく、間が欲しかったんだ。自分を取り戻す間が。

このままじゃ帰ってしまふ。

いつもの別れが積み重なるだけで、一步も前に進めない。
友達になることすら出来ずに、このまま距離を置かれて過ごすのはつらいだけ。

自分で作っている壁を壊して、気持ちを伝えなきゃ、何も変わらない。
何も始まらない。

早くしないと誰かにさらわれてしまふ。

そういうことらしい、どうも。

田舎のこと。外に出たって、近くにカフェがあるわけでも、ファーストフードが軒を連ねているわけでもなく、二人でお茶でも飲みながら話ができる場所なんて限られている。

その限られた場所に向かう道すがら、できるだけゆっくり歩いている俺の横で、由紀がぼそぼそという。

聞こえるぎりぎりの小声だから、聞き逃さないように前かがみになりながら、由紀の声を耳で拾いつつ歩く。

「さらわれちゃうんだ、俺」

目的地、とつさに二人で話せる場所として思い浮かんだ場所は、学校から歩いて10分ほどのところにある、国道沿いのファミレス、のとなりにある喫茶店。

ファミレスの方はうちの生徒もよく出入りしているけれど、ファミレスが建つずっと前からそのとなりにある喫茶店は、昔ながらのたたずまいということもあって、あまり高校生は出入りしない。よく潰れないな、と思うくらい、客も多くはない。

その喫茶店が見えてきたあたりで、俺は苦笑しながらいった。笑うしかない、という感じ。

「カラスみたいにスーッと飛んできてスーッとさらっちゃうわけ？」
笑いに紛らわそうと、下手くそな冗談を飛ばしたつもりだったけれど、由紀はうつむいたまま軽くうなずいた。

「どんなカラスだよ、物好きもいいところだな」

心底そう思う。俺なんかさらってってどうするんだっての。バイト代狙いならまだ理解できるけれどさ。

由紀は俺の右隣を歩いていて、さらに右斜め前に視線を落とすしながら答えた。

「晃彦くん、人気ありますよ？」

「初耳だな、それ」

芸がない答えだけれど、事実初耳だったから仕方ない。

「高校入ってから、晃彦くん、変わりましたから」

「変わったか？ まあ、バイトはじめて、体格は良くなったと思うけど」

「そういうんじゃないです」

なぜか、由紀の口調が怒っている。

理不尽だ。

「ずるいです、はぐらかそうとしてる」

あげく、批難される俺。

「まあ、苦情やご批判は店内で承りますんで、どうぞ」

喫茶店の扉を開け、先に由紀を通す。

扉を開けたとたんに、コーヒーの香りに包まれて、ちょっと幸せな気分になった。

俺はしょせんガキで、コーヒーの味なんかわかりやしないけれど、

家ではよくブラックコーヒーを飲んでいる口で、入れたてのコーヒーの芳香はちよつと他に代えがたいとも思っている。

これで少しは落ち着けた気がする。

「俺はブレンドで。由紀は？」

座るなり注文する。とりあえずコーヒーがあれば良くて、種類なんか選ぶ気になれなかった。

後で思えば、かなりテンパっていたんだろう。

由紀は、テーブル席の俺の向かい側に座って、おずおずとメニューに手を伸ばし、うつむき加減にじつと見つめていた。

喫茶店なんか慣れてないんだろう。

俺だって慣れちゃいけないけれど、相手が自分以上に場慣れしていない雰囲気だったから、これも落ちつける要素になった。

動転しっぱなしだった俺の神経が、少しずつだけ鎮まっていた。

「……えっと……ウインナーコーヒー」

今時の高校生はそんなもん知らんぞ、という名前を口にされても驚きはしなかった。

「……って、ウインナーが乗ってたりはしないよね」

というべたなボケが出てきたのにはさすがに驚いたが。

ちなみに、濃いコーヒーにホイップを乗せたものことで、ウインナーはかけらも入ってません、念のため。

メガネを取った由紀のまつげの長さに、俺はちょっと感動していた。

この前、由紀はいつていた。

『素の自分を出すみたいで、人前でメガネ外するのが得意じゃないの』つまり、ここでメガネを外したのは、素の自分を出したいという意味表示なんだろうか。

由紀が滅多に俺を見たりしないから、こっちは観察し放題だったりする。

髪が黒いからなおさら引き立つのか、由紀の肌は白い。

地味目の女子は自分を手入れするという発想が根底から欠けていたりして、よく見なくてもうつすらヒゲのごとき産毛に口元が覆われていたり、見事に男を萎え萎えにしてくれたりするけれど、そんな事もない。

化粧の気配はまるで無い。リップくらいはつけているようだけれど、色が付いているわけでもない。中学二年の我が妹のほうがよほど人工物まみれになっている。

眉にわずかにかかるくらいの前髪はふわっとそろえられていて、あまり強くない二重の瞳と調和が取れている。

全体的につくりが細かい。繊細っていうのか。たとえば綾華さんのように、華麗なほどに整っているという感じじゃなく、小動物的というか、かわいらしいというか。

それなのに決して由紀がかわいい系の女に見えないのは、それを武器にしているとはとうてい思えない無愛想さのせいだろうな。

あるいは、無表情さ。硬質な雰囲気があるんだな。秀才型独特の。なんて見ていたら、由紀が居心地悪そうにもぞもぞと動きながら、ちらっと俺を見た。

俺がじろじろ見ている、その視線がうつとうしかったのか。

目を外しつつ、そういえば、と俺は思っていた。

さっき思い出したメガネを外すのがどうという話、あのすぐあと、由紀はラーメン屋の店内を百合の舞台に変える離れ業を演じていた。あれ？

由紀って別に百合ってわけじゃないのか？

いや、本当に由紀が百合だなんて思ってたわけじゃないけれど。でもそうだったら面白いなあ、なんて無責任に考えてもいたわけ。などと思つたら俺が考えていると、今度は視線を外したまま微妙な顔でぼんやりし始めた俺が気になったようで、由紀がじつと俺の喉元辺りを見つめている。

大した進化だ。さっきまではせいぜいブレザーの上のボタンだったんだから。

「……あの」

またしても聞こえる限界スレスレの音量で、由紀が口を開く。

「……さっきの、忘れてくれていいですから」

「……はい？」

今度は何をいい出す気だろう、この子は。

由紀の白い肌が紅潮しているのがわかる。ついでにいうと、長いまつげが大半を占めているうつむき気味の目は、間違いなくあと少しで水浸しになる気配だった。

「好きとか、迷惑だつてわかってます。ただ、伝えないと絶対後悔するって思つて、勢いでいっちゃっただけですから」

声が震えていた。

まるで俺がいじめているみたいじゃないか。

そう思つた俺は、急に殴られたような衝撃でめまいすら感じていた。

みたいじゃねーだろ。この状況、完全に俺が由紀をいじめる絵だつて。

決死の思いで（多分）告白して、はぐらかされて、なれない場所に連れ込まれたあげくに延々黙られてしまつていれば、そりゃ泣き

たくなるだろう。

「ちよつと待つて」

俺は、意識して抑えた声を出した。一呼吸置いて、続ける。

「正直にいうよ。俺さ、由紀に嫌われてるんじゃないかって思ってたから、由紀を意識するとか、したこと無かったんだよな」

すらすらとは、いえていない。由紀の細すぎるほど細い肩が、かすかに震えているのが見える。

「だから、好きとかいわれて、ちよつとわけわかんなくなつて、今も多分理解できてない。だから」

だから、の後が続かなくなった、そのタイミングで、二人のテーブルにコーヒーが運ばれてきた。

俺は一旦話をやめ、由紀は店員に軽く一礼すると、また深くうつむいていた。

コーヒーの湯気を唇に当て、用心深く小さく一口する。苦味とわずかな酸味、すつとするような刺激が、熱さに紛れて舌をくすぐる。

自分が何をどこまで話したかを考え、何が良かったのかを考えてから、再開する。

「……ちよつと時間くれよ。そんなには待たせないから」

おそらく、テーブルの下で、由紀の手はぎゅっと握られているんだろう。ピンと伸びた肘が強張っている。

言葉が自由に出てこない。何をいつても由紀を泣かせそうで、怖くて、半開きの口をパクパクさせて次の言葉を出そうとするんだけど、声なんか出てきやしない。

そのうち、由紀が、ふつと体の力を抜いた。

全身から出ていた張り詰めた雰囲気、ちよつとだけ和らぐ。

下を向いていた由紀が、ゆっくり顔を上げた。

泣きそうな瞳は変わらないけれど、表情は柔らかい微笑みになっていた。赤っぱい目をまつげで少し隠して、口もとをほころばせている。

相当でかい口径の精密射撃が俺の胸を撃ちぬいた。

「ずっと見てきましたけど……晃彦くんがこんなに困ってる場所、初めて見ました」

ずっと？ 文化祭の仕事が始まって一週間たってないんだぞ？

そう思ったのが思いっきり顔に出たのか、由紀の笑顔が大きくなる。

「気付きませんでした？ わたし、中学のときから見てましたよ？
好きだよーって念送ったり」

「そ、それはうそだ」
思わず否定してしまった。だって、いくらなんでもそんなに見られていたら気付くだろう。

男なんていつもこいつも自意識過剰で、俺なんかその日本代表はれるくらいかもしれない。そんな俺が女の子に好意の目で見られて、調子に乗らないはずがない。

由紀は、信じがたいことに、吹き出していた。

「あはっ」

由紀が声を出して笑うところなんて、それこそ中学時代から見たことがない。小さい学校だったから、同級生の顔なんて一週間で学年全部覚えてしまうほどで、由紀が友達と話しているところや、行事でみんなと頑張っている姿なんかも見てきた。うつすら記憶もある。

でも、困ったような微笑か、穏やかな微笑つてのがせいぜい。

笑うんだな、こいつも。

「うん、うそ」

だれだこいつは。

「晃彦くん、生真面目君ですよ、珍しいくらい。わたしにからかわれちゃうんですから」

「お前……いきなり本性出てきたな」

「だって、晃彦くんの困り顔がすごかったから」

「人のせいだよ」

「はい、晃彦さんのせいです。こんなに緊張してるのも、こんなに笑ってるのも」

笑ってるくせに、声が震えていた。ほんの少しだけど、それくらいわかる。

かわいい、と、腹の底から思った。

胸がつまった。

何かがかみ上げてくる気がした。

「中学の頃も、でも、いいなあって思ってたんですよ。それ以上じゃなかったけど」

気が付くと、由紀は俺と目を合わせていた。その瞳から、俺は逃げられなくなっていた。

「ここに入ってから、どんどん意識していったんです。だって、晃彦くん、ずるいくら成長して行くんだもん」

「……ずるいつて」

「ずるいですよ。置いてきぼりにされてる気がして、うらやましくって、気が付いたら好きになってました。いつも目で追ってた」

「全然気付かなかったけど」

「だって気付かれないようにしてましたし。絶対視線合わせなかったし」

「なんだよそれ」

「怖かったんです。気付かれたら、きつと気味悪がられるって」

由紀の声は大きくない。いきなりよく喋るようになったけれど、由紀は由紀だった。

「でも、たまたま実行委員で一緒になれて、最初の会議でとなりに座れた時、すごくすごく嬉しくって、緊張しまくっちゃって、帰ってから思ったんです」

いつの間にか由紀は身を乗り出すようにしていた。さして大きくもないテーブルを挟んで、ちょっと手を伸ばせばほに触れられるくらいの距離。

息遣いすら感じ取れる距離。

「置いてきぼりになんかされてちゃダメだって。追いつきたいって思った。隣にいたいって、そばにいたいって」

ささやきに近い声が、俺の耳を占領した。他の音は何も聞こえなかった。

「それがダメでも、自分から追いついていかなきゃって思いました。だから、いwanaきやいけなかつたんです」

「……がんばったんだな」

俺がやつとのことでそう返すと、由紀は首をかすかに振った。

「がんばってないです。いwanaきやって思ってるうちは何もいえませんでしたもん」

店に入った時に出てきたお冷の中で、氷が音を立てた。由紀の目が一瞬伏せられて、また俺の目に向けられる。今まで見たことがない、強い瞳。

「でも今日は違いました。いいたって、思っただんです。どうしてもいいなくなっただんです」

また、泣き出しそうな目になっていた。

気が付いたら、俺は右手を由紀のほほから耳の下あたりにすべらせていた。

由紀の目が大きく開かれて、わずかな間、全身に力が入って、それから肩から順に力が抜けて、目が閉じられた。

一粒だけ、涙がこぼれた。

「休み？」

綾華さんは、取り巻きに囲まれながら足を組んで座り、さながら女王様だった。

うさんくさそうな視線に囲まれながら、俺はなんでこんなところにいるのかという内心のボヤキを隠し、うなずいた。

「熱出しちゃったそうです」

昼休みの二年の教室の中で、綾華さんは五人の女子を従えて、サンドイッチや菓子パンを並べ、おしゃべりの最中だった。

昼休みが始まると、パンを詰め込んですぐに二年の教室に向かった。

一年にとつて二年の教室に行くというだけでなかなかのプレッシャーなわけで、しかも訪ねる相手が綾華さんときているから、タイミングなんて考えていたらダメ。食べ終わって勢いで立ち上がった、そのまま突撃。

「ふーん、病欠ならしよーがないか」

由紀のことだ。

昨日、あれからしばらくして俺たちは別れた。なにしろあそこの家は心配性だから、いつまでも一緒にはいられない。

時間をくれ、といってあるから、なにも結論は出ていないけれど、別れるときには由紀らしいおとなしい笑顔を見せていた。

で、今朝、顔を見に隣のクラスに行ったら、病欠が判明。

「んじゃ、今日は仕事無しなわけね」

「そういうことです」

「メールくれりゃそれで済むじゃんか」

「ごもつとも。でもできなかったんです。」

「携帯、忘れてきちゃって」

「だめじゃん」

まったくです。

たぶん、由紀からも連絡が携帯に入っているだろう。こういつ日に限って忘れるってのは、どういうことなんだろう。

「でも、会計と話はしたんでしょ？」

「しました。まだまとめてませんけど」

「早くまとめなよ。各クラス担当に渡す資料、早く作らなきゃいけないでしょ」

「そうなんですけど、メモってたの、由紀なんで」

「ああ、そうなんだ。由紀の復活待ちかあ」

「すいません、コピーしてもらっとけば良かったんですけど」

「それは仕方ないでしょ。週明けにやれば、まだ間に合うだろうし」
ここで別の声がわりこむ。

「すげー、綾華、マジで仕事してんだ」

「うそくせーとか思ってたけど」

口々に、まわりのお姉さま方が騒ぎ始めた。

「うっせーよ、あたしは仕事はマジメだったの」

綾華さんは照れるでもなく、むしろ堂々といい放った。行事の仕事なんかマジメにやってらんねー、とかいい出しそうな人だと、俺も前は思っていたけれど、今はこの人がどれだけ自分の責任に対して真面目かはわかってる。

「彼が噂の子なんでしょ？」

と、一人のお姉さまが俺を見ていうと、今度は俺に照準が。

「あー、綾華と仕事一緒になったら、一年の女からぼこられたっていう」

誰が、いつ、ぼこられたと。

「まじで？　可愛いそー」

「ねー、こんなにかわいいのにさー」

かわいいですと。何をどう見たらそーなるんだ。

「今度いじめられたらお姉さんたちが守ってあげるからね」

「そーそー、いつでもおいでー」

「は、はあ」

完全に遊ばれているのがわかる。わかっていても、五人の先輩に口々にいわれて、まともな神経を維持できるほど強くない。精神的にはどん引き。

「きれいな顔してんじゃんね」

「思ったー、焼けてるからワイルドっぽいけど、顔はきれいだよなー」

「これで小っちゃかったら女装とかさせてー」

「それいい、絶対かわいいよー」

「えー、ちよつとー、マジ好みなんだけどー」

「あんた彼氏いんでしょうが」

「あんなんでもいいから、この子連れて歩きたいよー」

「うつわ、ガチ浮気発言だよ、引くわ」

「美形は世界の宝だよ？ 大切に保護しなきゃだよ？ 誰も保護しないんなら自分が保護するって、むしろ偉くね？」

「その理屈、おかしいし」

勘弁してください、この空気……近所の還暦迎えたおばちゃんたちくらいにしか「かわいい」だの「美形」だのいわれたためしがないんです。妹には「頑張つて強く生きていつてね」とかいわれてるんです。

俺が心の底からどん引きしている様子を見て、さつきから黙って見ている綾華さんは、くすくすと笑っている。

「ねーねー、携帯教えてよー」

「さつき忘れたっていつてたじゃんか、なに聞いてんだよ」

「えー、持つてなくても、自分のは覚えてるでしょ、ふつつ」

「覚えてる？」

一斉に全員の目が俺の顔に集中する。

俺の早期警戒警報装置が、いち早く激震の気配を察知した。直下型地震の前兆を捉えた。

まずい。

地震のたとえばが適当でないなら、これは凄まじい地雷原だ。内戦直後のカンボジアなんか目じゃないぞ。一步でも間違えたら吹き飛ばされる。

教えちゃダメだ。この人たち全員に教えたら、俺は無意味なメールの嵐に巻き込まれ、溺れ死ぬに決まっている。

「……いやあ、買ったばっかで……番号もメアドも覚えてないんです。ごめんなさい」

うそ、とはいいきれない。買ったばかりなのは事実。ただし、機種変更なので番号もメアドも変わってないし、どちらもばっちり覚えてる。

「えー」

「覚えとけよー」

ブーイングの嵐。

ここでぐずぐずしていたら、メモに走り書きした番号なんぞ渡されかねないから、俺はすぐさま撤退することにした。

「それじゃ綾華さん、俺はこれで。月曜に仕事進められそうなら、また連絡します」

ぺこりと大きく一礼して、周囲の声をぶった切って、俺はそそくさと立ち去ろうとした。

「うん、わかった」

綾華さんは鷹揚にうなずくと、ごく当たり前のように、自然に立ち上がった。俺の不自然なお辞儀とは正反対の、そこで立つことが脚本どおりとでもいうかのような、恐ろしく自然な動作。

「それからさ、各クラスに渡す書類なだけど」

と、綾華さんは仕事の話を続けながら、歩き出そうと……いや、逃げ出そうとしていた俺に歩調を合わせ、進み始めた。それがあまりにもこちらのリズムと一致していたから、俺はむしろ綾華さんのペースに引つ張られるように歩き始めた。

「要は、クラスごとの企画をとっと出してもらって、必要な資材があればそのリストを作りたいわけよね」

「ええ、そういうことです」

「企画の管理までやるんだっけ？」

「ええ、むしろ本来はそっちがメインですし」

「じゃあさ、期限つけてさ、遅れたらペナルティがあるって書き込んでけば？」

「それは考えました。ついでに、教務主任あたりと掛け合ってみて、もし大丈夫なら、全校一斉に帰り前にでも時間とってもらって、クラス企画のホームルームをやってもらおうかと」

「おお、すごいこと考えるね、あんた」

「生徒会長とか、生徒会担当の先生とかとも話してからですけど」

「その場には行きたいな、なんか面白そう」

綾華さんがわずかに前を歩くままに、俺たちは二年の校舎の外れまで来ていた。右手に生物室、左手に化学室、正面に物理室が並ぶ通称「理系三角地帯」。

綾華さんは勝手に化学室の扉を開けた。鍵はかかってなくて、中には誰もいなかった。

「ここ、昼休みは開放してるんだよね。試験勉強用に。誰も使っていないか、弁当部屋になっちゃってるけど」

「はあ」

なんだろう、なんでこんな部屋に来たんだろう、なんかまずい発言があったかなあ、などと考えながら、俺が生ぬるい返事をするのがからと背もたれ無しの椅子を引っ張り出しながら、綾華さんが俺を見た。

「ごくろーさん。あいつらに囲まれて、怖かったんじゃない？」

そういつて、にやりと笑う。

「あ」

と、俺は声を上げて、そのまま頭を下げた。

「ありがとうございました、ほんと、助かりました」

助けてくれたんだ。きっと、あまりにも俺が情けない顔をしていたから。

「うん、素直でよろしい」

綾華さんは、相変わらず規格外な姿で、でもそれがとても似合っていて、恐ろしく綺麗だった。その姿で椅子にぺたりと座り、両足の間に手を置いて座面をつかんでいる。

笑顔に曇りがなくて、陰もなくて、さっきのにやりという顔から、すごく澄んだ笑顔になっていた。

この顔か、と俺は思った。この顔で、この人は女子の心すらつかむ校内のスターになったんだ。

「あたしね、アキちゃんのこと知ってたよ」

と、綾華さんは突然話を切り替える。

「どっかで聞いた名前だなあ、とは思ってたんだけどさ」

「まあ、この辺じゃありふれてますけどね」

と俺が答えたのは、佐藤姓だけでークラスは作れるほど校内に佐藤が多いから。綾華さんは足を組みながら首を振る。

「そういうんじゃない。アキちゃんってさ、掛巢さんの秘蔵っ子とかいわれてない？」

「ああ……そっち筋ですか」

「そう、そっち筋」

恐るべし、カケスさんの伝説。未だに校内に影響力を残すか。娘の誕生日が近いからって、その話で三十分は引っ張るというマイホームパパのくせに。

「ヤローどもの噂になってたの思い出したんだ。普段はどう見てもおとなしいマジメ君のくせに、喧嘩は恐ろしく強いって」

「それは大いなる誤解ですよ、勘違い。事實は結構しょぼいですよ」
「強いかどうかはどうでもいいのよ、この場合。大事なのは、二年三年のやんちゃどもが、アキちゃんに一目置いてるらしいってこと。たいしたもんじゃなか」

「一目、ねえ」

そうなんだろうか。麻雀に呼ばれたり集会らしきものに誘われたりすることはあるけれど、たいていは明らかに人数集めの網に引っかかっただけっぽいんだが。

「その噂があつたから、あの子達もアキちゃんに興味ありありだったんだよ」

「そうなんですか？ 綾華さんと仲良くするなって同級生女子にばこられたって噂らしいですけど」

「それもあるけどさ」

綾華さんは悪びれずにうなずいた。

「そうそう、それってどうなの？　ほんとに同級生の女子になにかされたわけ？」

聞かれたから、俺は自分が何をいわれたか、どんな目で見られているかを説明した。

綾華さんはくつきりとした二重の目で俺を見つめながら、笑み崩れる一歩手前、という顔をしている。

「へえ、大変だねえ」

「その大変さの何割かは綾華さんのおかげなわけですが」

「あたしはそんなの知らないもーん」

ぷいっと横を向いた綾華さんは、明らかに笑いをこらえている。そして顔を正面に戻して、臆面もなくいった。

「学園のアイドルと二人きりで話したりできるんだよ？　その程度、

安いもんじゃない？」

「自分でいいですか、それ」

思わず失笑してしまった。

「誰もいつてくんないから自分でいつてみた」

綾華さんも笑っている。

「確かにすごい人気ですけど。同性にあそこまで好かれるってのは、もう才能ですよね」

「やっぱりー？　あたしって天才っぽいんだよねー、困っちゃうなー」

大げさに身振りをしている。もう、明らかに突っ込んでくれオーラが漂っている。

同級生なら盛大にスルーして逆ツツコミを待つところだけど、そこまでこの先輩と距離が近付いていると自惚れるほど、俺は自信たっぷり生きてない……

「調子の乗り方はいたって普通でつまんないっすね」

……などと考えつつ、こういうこき下ろしを口にしてしまうあた

りが、俺の悪いところだろうか。

「えー」

綾華さん、一気にふくれつつらになる。

「その突っ込み、冷たくない？ アキちゃんってあたしのこと嫌いなんじゃないの？」

「とんでもない」

わざとらしく肩をすくめて、俺はせいぜいわざとらしく聞こえるように続けた。

「本当に嫌いな人に冷たいツツコミするなんて無粋なことはしませんよ。愛情と敬意あればこそ、冷たい突っ込みも出来るんです。親愛の情ですよ」

「ちよーうそくせー」

綾華さんはふくれつつらのまま抗議している。その顔が、無表情でいると大人びた美貌なのに、異様にかわいい。

「アキちゃんってこの前のラーメン屋とかでも思ったけど、ごまかすの上手すぎだよな」

「ごまかしの人生歩んでますから」

「すげーむかつくんすけど」

「むかつかせてるんです、もちろん」

「うわっ、やな奴っ」

二人ともニヤニヤ笑っている。変な空間。

「ところでアキちゃん」

と、綾華さんはニヤニヤしたままいう。

「彼女とかいないの？」

「なんですかいきなり」

「聞いているのはこっち。お姉さんの質問に答えなさい」

「いないですよ。いるように見えないでしょう」

「うん、見えない」

失礼な。

「というもだね、君。どうだろう、さっきのお姉さま方のどれか、

紹介したげようじゃないか」

「は？」

素で聞き返してしまった。

「あんなだけどね、いい子ばっかだよ。ちょうど彼氏いないのばっかだし、かわいがつてもらえるぞ」

「はあ」

思いつきり不審がつている声になってしまった。

「そう警戒するなつて。何も企んでないから」

「企んでる人が正直に企んでますつていうわきやないと思うんですが」

「いかんねえ、もっと人を信じないと。人生つまらなくなるぞ」

「その顔でいわれても説得力ないです、綾華さん」

綾華さんの顔は、どう見ても底から企みがちらちら目をのぞかせている。

「ああ、ひどいわ、あたしを少しも信頼してくれていないのね」

今度は悲劇のヒロインですか。

「綾華、シヨックで立ち直れないわ。悲観したあまり、眠れないままに夜の街をさ迷い歩いたあげく、うっかり深夜のファミレスでパフェなんか食べちゃったりしそうだわ」

「ただの夜更かしでしょ、それ。つか、ニキビ出るからやめた方がいいつすよ」

「そのドライアイスのようなツツコミが快感に変わったりしたら、あたし人間やめたほうがいいかもね」

「よくそういう大げさな言葉がぼんぼんと出てきますね」

半ば本気で感心していると、綾華さんも半ば感心したような声を出した。

「あんたもどこまでもクールでドライだよ。ここまであたし相手に萎縮しない後輩つて初めてだわ、まじで」

「恐れ入ります」

萎縮しないつてんじゃないだろ、これは、と心の中でつぶやく。

かわいげがないだけだな、あるいは好かれる気が無いか。

そりゃ好かれた方がいいに決まってるけれど、なにしろ素敵な彼氏持ちの上級生相手に、好かれようと努力してビクビクするなんて無駄もいいところだ。

どうせ俺ごときがこの人の友達やそれ以上に昇格する可能性なんかないんだから、仕事仲間にいるうちは、せいぜい地で勝負するしかない。かつこつける気も、必要以上の気を使う気もない、というのが正直なところ。

これだけの美人を相手にしようというのだから、そのくらいの気でないと、心のバランスが取れない。

男は、美人を前にすると喋るのもつらくなってしまう生き物なのだ。女だって、いい男の前に立つたら、言葉を出すことすら難しくなるだろう？

「こりゃあの子らの手に負えるガキじゃないわ。しばらく付き合つて、あたしがみつちりとお姉さまとかかわり方つてのを調教してからじゃないと」

「調教つて……仕事はマジメにやりましょうね？」

「マジメにやるよ？ もうマジメつてのはあたしのためにある言葉だつてとこ、見せてあげるわ」

「何に対してマジメかは別として、ですか」

「いい所ついてくるねー、さすがに」

「勘弁してくださいよ、ただでさえ同級生たくさん敵に回してるのに」

「気にすんな、ここに味方がいるだろ」

「なにかしら陥れようとしている、実に頼りがいのある仲間がいますね」

「悪意にとつちやいかんよ、君」

「よくそれで人の事を『政治家みたいでむかつく』とかいえますよね、感心しますよ」

「対抗してるだけだもーん」

なんだか、心の底から楽しんでいるように見えて、こつちまでわくわくしてくる。

気が合うつてのは、こういう人との関わりの事をいうんだろっか。ここでチャイムがなって、舌戦終了。

「あら、残念。もうちよつとバカ話したかったんだけどな」

「こつちは疲労困憊ですよ」

最後の憎まれ口を叩くと、綾華さんは鮮やかに切り返してきた。

「うそつけ、めっちゃめっちゃ楽しかったくせに」

凶星だったから、とっさに何もいえなかった。綾華さんは、花が咲くような笑顔を見せた。

「やっぱアキちゃんといると飽きないわ」

「……オヤジギャグ、じゃないですよ、まさか」

今度は綾華さんが黙る番だった。

ラストにそんなつまらんギャグを平気でいうとは。

なかなか深い人だ。

土曜日はバイト。

雨の中、カッパを着てひたすら肉体労働に励んだおかげで、恐ろしい量の汗をかいだ。雨に濡れてるんだか汗に濡れてるんだか、比喩じゃなくわからないくらいに濡れた。

家に帰ったところにはへろへろにくたびれた皮袋と化していて、とりあえずシャワーだけは浴びたあと、スポーツドリンクを一気にリットル飲み干すと、晩飯も食わずに寝入ってしまった。

起きると日曜日の早朝五時。起きるのが早いというより、寝たのが早すぎた。

あれだけ寝る前に飲んだのに、起きるとひどく喉が乾いていた。あえて冷蔵庫には入れないでいるスポーツドリンクを飲む。

家族は全員寝ている。両親は子供に比べれば早起きだけれど、いくらなんでも日曜日に五時起きする趣味はない。妹はほっとけば昼過ぎまで寝ているし。

夕飯を食べていないことを思い出して、とりあえず何か食べようと台所を探っていると、冷凍した味噌にぎりを発見。解凍して食べる。さほど美味しいものじゃないけど、海原雄山を目指しているわけじゃないからオーケー。

それから一度自分の部屋に戻ると、携帯がちかちかと光っているのを見つけた。

開いてみると、メールが二件来ていた。

由紀からだった。

時間は最初が土曜日の夕方七時ごろ。二件目が九時頃。

『熱は下がりました。心配かけちゃってごめんなさい。知恵熱だった父に笑われました。本当に熱だけが出て、風邪の症状も何もありませんでした。今、木曜日に書いたメモをまとめています。月曜日には渡せると思います』

一件目、絵文字ひとつ入っていないメール。女子高生の気配すら感じられない、由紀らしいといえば由紀らしいメールで、むしろ微笑ましいね。

これに気付かなかったってことは、俺が寝たのはその前ということか。

二件目を開くと、ちよつと雰囲気違っていた。

『木曜日のこと、やっぱり忘れてください』

というタイトルに、俺は思わず眉を寄せた。またなに言い出しやがる。

『メールを送るのも迷惑なことだっただけです。だから返信はいりません。ごめんなさい。晃彦さんの優しさに甘えて、調子に乗ってました。友達でいいなんてぜいたくもいいません。夢を見させてもらっただけで嬉しかったです。ありがとうございました』

なに一人で暴走してんだ、こいつ。

由紀が考えた軌跡が、鈍い俺でもわかる気がする。つまり、一件目で返信が来なかったから、それを待っているうちにどんどん悪い方向に考えてしまつて、挙句の果てに大暴走。

七時に寝てしまっているなんて想像できるはずもないから、仕方が無いのかもしれないけれど、いくらなんでもそんな自己完結はひどいだろ。

俺も悪いこととはいえ、ちよつと腹が立った。

すぐにメールを打つ。

『おはよう。こんな時間にごめん。バイトで疲れて速攻寝ちゃつてメールに気付かなかつた。ってか、暴走しすぎだし。迷惑だなんて誰がいった？ わけわかんないこと書いてないで、このメールに気が付いたらコンマ五秒で電話しろ。携帯、力の限り握り締めて待つてるから、早くしないと壊れてつながらなくなるかもだぞ』

えらく上から物をいっている気がしたけれど、このくらい書かないと連絡して来ない気がした。

そして、わずかに怯えてもいた。

このまま由紀とのが終わってしまったら、俺はどうなるんだろう。

いつくるかわからない由紀からのメールを待つ間、俺は外に出た。うちの中でうろろろしていると、起きた後の家族から安眠妨害の説教をくらうことになる。

秋の雨は上がっていて、空はうす曇というところ。日の出直前の明るんできた空は朝焼けもなく、どこか重い。なのに空気は澄んだ感じがする。

近所をぶらぶら歩きながら、つらつらと由紀のことを考えていた。告白されてしまった。

人生初。

相手が由紀。

悪い気はしないよな、やっぱ。というより、やばいくらい嬉しい。大したことない自分が、突然すごい男になった気がする。

人に好きになってもらうてことが、どれだけ嬉しいことか、どれだけ心を強くしてくれるか、今までわかったつもりでいたけれど、実感してみると次元が違う。想像なんかじゃ追いつかない。

どこを好きになつてくれたんだか知らないけれど、由紀みたいな物好きも世の中にはいて、俺なんかのことを考えてあさつての方向に突っ走っていたりする。

由紀にもいったとおり、今まで由紀を恋愛の対象として見たことなんかあるはずも無かった。そもそも接点が無かったし、接点が出来てからは嫌われていると思っていたし。

あの態度から、由紀の俺への想いを見抜けというほうが無理。

呼吸するように女を愛するやつならともかく、女とは縁がない暮らしを続けてきた俺に、そのハードルは高すぎるって。

俺は由紀をどう思っているんだろう。

かわいい、と思う。

よく見るときれい、なんてのは失礼な話で、顔さえ上げていれば、誰だって由紀が美形だったのはわかる。いつもうつむいているのは、多分すぐくもつたない。

好きといわれるまで意識しようとしたこともないし、視線すら合わせてもらったことがなければ、この子のことを好きになっちゃいけないって無意識に敬遠してきた部分も、きっとあるんだろうと思う。

自分が傷つきたくないから。

じゃあ、嫌われてないどころか、好きといわれてしまった今、由紀のことをどう思っているか。

木曜の夜、俺は興奮してただけで、自分の心の中なんか見る余裕もなくって、由紀と別れてから寝付くまで、付き合ったらどうしよう、とか、このまま結婚なんかしちゃったりなんかして、とか、そんな風に突っ走ってる自分が急にみじめに思えたり、要するにパニックだった。

金曜の夜は、熱を出して学校を休んだ由紀からメールも来ていなかったことにちよつとショックを受けたり、携帯忘れてたくせに期待する方も馬鹿だよなと凹んだり、このまま月曜日まで何の連絡もなかったら、やっぱりドツキリの可能性が高かったりするのかなと悩んだり、やっぱり混乱していた。

土曜日は……それどこじゃなかった。

そして今日。

暴走している由紀のメールを見て、俺は怯えを感じた。

失いたくない、と思っている自分がいる。そのことに気付いた。いつの間にか家からだいぶん離れた公園まで来ていた。時間は十分ほど経っていた。

やべ、帰るのめんどいじゃんか、と思いつつ、来た道を引き返し始める。再び歩き出しながら、また考える。

ぐちゃぐちゃ考えずに、今、俺は、何を感じているか。

会いたい。

話したい。

触れたい。

抱きしめてみたい。

由紀の想いを確かめたい。

あの声が聞きたい。

泣きたいのか笑いたいのかわからない、俺を見るときあの目が見たい。

由紀が心から幸せだって笑ってるところが見てみたい。

俺はいつの間にか立ち止まっていた。

こんなにも、俺はあの子を欲しがっている。

俺なんかそばにいて、由紀がそれで幸せに思ってくれるなら、俺にとつてそれ以上幸せなことつて無い。

由紀が俺を思ってくれればくれるほど、俺は高められる気がする。ここであいつが「やっぱりごめんなさい」とかいつてきたら、俺は立ち直れない自信がある。みつともないけれど、認めちまおう。少なくともすぐに立ち上がってみせる強さは、俺には無い。

虚勢張ったつてしょうがないじゃないか、実際、二通目のメールで断られかけて腹を立てていたのは、認めたくないっていう、恐怖の裏返しでしかなかったんだろうし。

人を好きになるつて、こういう感覚なのか。自分の全存在が、相手のほんのわずかな言動でもものすごい勢いで揺さぶられたり、高められたり、どん底に突き落とされたり。

いや、まあ、あのメールはほんのわずかどころか、いきなりバンカーバスターぶちかまされるようなもんだけどさ。

それはともかく、だ。

心を持つていかれた、と、立ち止まったまま、俺は思っていた。

由紀の時間差攻撃。

三日も経つて、俺は由紀への恋を自覚させられた。

由紀に触れたときの、あの一粒の涙で、俺の心はとっくに由紀に

根こそぎ持っていかれてしまったんだ。

俺が相当怒っていると思ったらしい。

『ごめ……なさい……』

聞き取れないほど小さな声で、由紀は電話越しにいきなり謝っていた。

「あやまらなくていいよ、おどかしちゃってごめんな」

家に着く前、だから七時にはまだまだ遠い時間にかかってきた電話は、そうして始まった。

「今起きたところ？」

『……はい、メール見て、びっくりして、すぐかけました』

電話の向こうでは正座してるんじゃないかなろうか。想像力のたくましい方ではないと思うんだが、ありありとその光景が目の前に浮かぶ気がした。

「早起きだね。いつも休みの日でもこんなに早いのか？」

『今朝はちよつと早く起きなきゃいけない……いつもはこんなに早くはないです』

「そうなんだ。俺もありえないくらい早く起きちゃって。ありえないくらい早く寝たからだけど」

『……ごめんなさい』

「何で謝るんだよ」

失笑してしまった。

笑い声が伝わって、少し向こうの気配も柔らかくなった気がする。

『なんとなく、です』

「敬語もなんとなく？」

『はい』

だだでさえ声が小さい方なのに、携帯を通すと外の雑音が逆の耳から入ってくるから、かなり聞き取りにくい。この「はい」という返事も、ぎりぎりで耳が捉えた音。

この調子で会話していたら、聞き取るだけで疲れ果ててしまうから、俺はさっさと本題に入ることにした。もっと大きな声で、と要求するのは、もう少し由紀が俺に慣れてからでもいい気がする。

「じゃあ、かけてもらってる電話で長く話してもなんだから、用件に入るね」

わずかにゆるみかけた由紀の雰囲気、携帯越しにも固くなったのがわかる。

「あんまり緊張しないで聞いてね、怒ってるわけじゃないんだから」
「……はい」

「その前に、脚、崩そうか。正座してるんでしょ」

ちよつとカマをかけてみると、由紀が息を呑んだのがわかった。

「どうしてわかったんですか？ 近くにいますか？」

「まさか。自分ちのすぐ前だよ。なんとなくそんな気がただけ」

由紀が自分の部屋でおどと窓の外をうかがっている様子が目に見えるようで、俺はまた失笑してしまう。

「意外にわかりやすい子だね、謎めいた美少女ってことになってるはずなんだけど」

「……からかわないで下さい、用件ってなんですか」

ちよつと怒ったらしい。それもかわいい。

なんて考えていると本気で怒らせそうなので、慌てて軌道修正した。

「用件っていうか、昨日のメール、見てびっくりしたからさ。俺が思ったこと、早く伝えておこうと思って」

「……はい」

由紀の声がさらに細くなる。

「とりあえず誤解しないで欲しいのはさ。俺、由紀からメールが来たら嬉しいよ。迷惑なんて思わないよ。あんま自虐暴走しないでよ」

「……迷惑じゃないんですか？ ちよつと仕事と一緒にあったくらいで告白してくる気持ち悪い女ですよ？」

「気持ち悪いって思ってたなら、あの日その場で断ってるよ」

『……』

由紀、沈黙。ごくわずかに息遣いが伝わってくるけれど、気のせいかもしれない。携帯のノイズかもしれない。

「由紀がすごい勇氣出して、告白してくれてさ、すごく嬉しかったんだよ。誰かに好きになってももらえるなんて、考えたことも無かったから。その相手が由紀みたいな子でよかった」

なんかクサイこといいはじめたぞ、俺。

「だからさ、勝手に終わらせるなよ。俺、まだ答えもいってないじゃないか。友達にもならなくていい、みたいな寂しい事いうなよ。そりゃ、俺は由紀に嫌われてるもんだと思ってたから、今までは距離あり過ぎたかもしれないけどさ、好きっていつてもらえて、すごく嬉しかったんだ、本当に」

いつているうちにマジになってきた。字面だとすらすらいつているように見えるかもだけれど、口調はそれほど流暢じゃなかったはず。

「この先は」

と、俺は一息入れてから、いった。

「直接会ってからいいんだ。だから……今日、会えないかな」
やつのことで、俺は喉から言葉を絞り出した。

なにげに緊張していたらしい。携帯を持つ手が震えかかっている、口が渴いている。

少し沈黙。

携帯の向こうで、由紀が息を詰めている。

それから、押し殺したような息が漏れて、泣きそうな声がそれに続いた。

『……ごめんなさい』

視界が暗転したような気がした。

俺、振られている瞬間か？

頭が一気に沸騰しそうになる。朝の低血圧はどこかに吹き飛び、全身が熱くなっている。

続く由紀の言葉は、俺の乏しい想像力を超えていた。

『……今日は会えないんです……すぐく会いたいけど……これから出かけるの、親戚の結婚式があつて、家族みんなで出席しなきゃいけないくて』

「あ……ああ、そう、なんだ、そりゃ無理だよな、ごめん」

『……ごめんなさい、先にいっておけばよかったんですけど』

由紀の声が本当に涙声になりかけていた。

「祝い事じゃしょうがないよ、目一杯お祝いしてきてよ」

へららへらと笑いつつ、俺は血がスーッと下がって行くのを感じていた。ほっとしたような、裏切られたような、なんか混乱した不思議な気分。

で、うちに帰って、起きていた親父に「何してきたの」と問われ、「人生勉強」と答えて不可解な顔をされつつ、俺はリビングの椅子にへたりこんだ。

もう一日分の精気を使い果たしたような気がしていた。
すげー空回り。あほみてー。

気が抜けて、体の力も抜けて、だらつとしていた。
だから、不意打ちのバイブで心臓が本気でどうにかなるくらい驚いた。

着信あり。

あわててポケットから携帯を出して、画面を見る。

『永野綾華』

は？

考える余裕もなく、キーを押して耳に当てる。

「はい、佐藤です」

『あれ？ あんたなんで起きてんの？』

朝っぱらからけんか売ってるのか、この人は。

なにをやってるんでしょか、わたくしは。

昼下がりの街を、なぜか他人の荷物を持って歩いている自分だった。

下北沢の決して広くない道を、人の波をぬうようにして歩いたり、狭い店内であちこち引っかかりながら移動したり、二時間もうろろしていると、日頃そんなことは絶対にしない人間だけに、その疲労度は学校に行っている平日の比じゃ無い。

そもそも買い物にわざわざ都内に出てくるって発想が無いもんな。しかも下北沢。

「なに疲れてんの？ まだ一日は始まったばかりじゃん」
能天気な声を出して俺の背中をバシバシ叩いている人がいる。

「あなたは俺をうんざりさせる名人ですね」

「はあ？ こんな美少女とデートできるのに、うんざりとかいつちやえるわけ？」

「いくらでもいいですよ、俺は」
綾華さんに決まっている。

ため息混じり、というよりため息九割の声で俺がいうと、久々の買い物だという綾華さんは、ため息の成分ゼロの声で応じる。

「あーあー、聞こえないーい」

実に楽しそうだ、俺をいじめているときのこの人は。

どうしてこの人と歩いているのか。

元凶はもちろん、早朝の電話。

『あれ？ あんたなんで起きてんの？』

「……じゃあ寝ますから、ごきげんよう」

『こらこらこらこら、せつかくかけてんのに、いきなり切るんじゃない』

「あのですね、綾華さん、たまたま起きてましたけどね、寝てて運悪くあなたの電話だと気付いたとして」

『うん』

「出なかったら明日からのいじめが倍増するわけですよね？」

『人聞きがわるいなあ、いじめてないよ、かわいがってあげてるんじゃないか』

「あ、すっげーニヤニヤしてるのが見えるっ」

『なんだよ、見てんのかよ、どこいんだてめっ』

「お約束のボケ、ありがとうございます」

『いえいえ、どういたしまして。ってか、突っ込んでからいえよ、そっいうの』

朝からどうしてこうハイテンションなんだ、この人は。

って、俺もか。

なんとなく似たような流れをついさっきも体験したような気がしつつも、会話を続ける。

「で、わざわざかわいげのない後輩に、こんな朝もはよから何のこ用でしょうか」

『んー、べつに用はないんだけどさー。アキちゃんがきつとあたしの声を聞きたがっているだろうと……』

ぶち。

五秒後に再度着信。

『こら！ 切るな！』

「普通バイトがない休日なら完全に寝てる時間なんです。最低限のマナーでしょう。綾華さんはその辺に落ちてるバカな女子高生じゃないんだから、そのくらいわかるでしょう」

実際、けっこう頭に來ていた。

ギャグ交じりに会話に付き合っても、それはそれで良かったんだけど、綾華さんの俺に対する我がままっぷりがどんどん加速

していて、その声音が一瞬で俺の怒りに火をつけてしまった。

俺の声が異様に冷たかったのか、綾華さんともあるう人が、言葉をつまらせた。

『……ご……ごめん、悪かったよ』

なんとなくこつちまではつが悪くなる。いきなり素直に謝るなよ。

「こちらこそ、生意気いつてすいませんでした」

『うーん……両成敗つてことで』

「はい、いつてこいで」

『チャラね』

すぐに声が明るくなる。

由紀の後にこの人と話していると、その切り替えの速さと明るさに、救われる様な気持ちができる。

「で、朝から暇つぶしのお電話ですか？」

『ううん、暇つぶしはこれから』

「はい？」

『今日ね、買い物行く約束してたんだけどさ、相手の都合で昨日の夜に消えちゃったのね』

「俺に付き合え、と」

『うん。話が早くて助かるわ』

「んじゃ素早く却下で」

『えー、ちよつとは考えよーよー』

「たまの完全オフなんですからね、ひたすらだらだら過ごしたいわけですよ」

『いかんよ、若いもんがそんな怠惰なことでは』

「どこのオジサンですか。綾華さんなら声かけりゃなんぼでも買い物友達なんて捕まるでしょうに」

『ところがそうでもないのよ。みんな彼氏持ちでさ』

「それこそ彼氏さんに行ったらいいじゃないですか」

『その彼氏に約束破られたの』

「……彼氏の代わりに俺つてのはどうなんでしょう」

『あたしは気にしないよ?』

「俺は気にしますよ。たぶん彼氏さんも」

『あー、それは大丈夫。あたしがいわなきゃいいだけの話だし』

「いやだから俺が……」

『うん、知ったこっちゃないし』

この女。

「つていうか、彼氏いないつていつてた人がいたじゃないですか、金曜日に話しにいった時」

『いたっけ?』

「そこそこ、都合よくすつとぼけないように」

『気のせいだよ。アキちゃん、その年でもう記憶障害?』

「どこまでもすつとぼける気ですね」

『行くところまで行くよ、今朝のあたしは』

「勝手に行っちゃって下さって結構ですけどね、お見送りはしますから」

『どうしてそう可愛げが無いかねえ、きみは』

「生まれつきです」

正直、バカ話が楽しくなってきた。あんなに別世界の人間だと思つて敬遠していたのが嘘の様に。

『でね、下北沢に行くからね、往復の運賃くらいは準備しといてね』

「人の話、聞いてます?」

『フルユニクロでもおかんファッションでもいいから、一応隠すものは隠してきてよ』

「本当に聞く気がないんですね」

『でもリュックはやめてよね、あれすげー迷惑だから』

「あーもー本当に聞く気ねーよこの人」

『あんま早いと店空いてないけど、これから出る準備したり、着いてからちよつとお茶してたらすぐお昼近くになっちゃうでしょ』

「ハイハイソウデスネー」

『つてことだからよろしく。準備できたらメールしてね。多分駅集

合に思うけど』

「拒否権無しですか」

『まさかそんなものが存在するとも?』

「……かけらでも思っていた俺が馬鹿でしたよ」

『やーいやーいばーかばーか』

「それじゃまた月曜、お仕事で会いましょう」

『あーあー、待った待った、ごめんってば、一緒に行こうよー、楽しいよー?』

リズムよくぽんぽんと進む会話のテンポと、電話の向こうでくると変わる声の表情の豊かさに、俺は思わず笑ってしまった。

笑った時点で俺の負け。

『あ、笑ったね?』

「はい、笑いました」

『負けは認める?』

「はいはい、認めますよ」

『じゃあ準備とメールよろしくね?』

「わかりました。適当に隠すもの隠して行きますよ」

『多少は気合入れてきなよ? この超美少女と一緒に歩くっての忘れんなよ?』

「自分でそこまでいえる性格の持ち主と歩くってことは忘れられませんね」

『うーん、これがまた客観的事実ってやつだからなー』

「そこまでいえりゃ、もう大したもんですよ。呆れてものもいえない」

『んじゃ黙って集合場所おいで。その大した女とデートできる超絶素晴らしい権利を君に与えてあげよう』

「へーへー、ありがたく承りましょう」

『ぜんっぜんありがたくなさそうだね』

「とんでもない、この上ない名誉に体が震える思いですよ」

『よろしい。お昼割り勘にする気でいたけど、全額あんたのおごり

にしてあげる』

「……聞き捨てならないセリフが聞こえたわけですが」

『まーまー、とにかく準備しなさいって。んじゃあたしも準備すつから。よろしくねーん』

そして今に至るわけ。

荷物持ちにくたびれ果てた俺が、ようやく座り込むのを許可されたのは、さらに電車で移動した新宿のカラオケ屋。

なんでカラオケ屋ごときのために新宿まで来なきゃいけないのか、理解に苦しむのだけれど、いわれるがままについてきたのは俺。文句をいうのは遅すぎた。

「渋谷つていまいち好きじゃないんだよねー」

路線を選ぶ時に綾華さんがいつていたこと。そういう問題じゃない気がするんですよ、俺は。

「よっしゃ、歌うぞ」

と、入る前からやる気満々の綾華さんは、いい加減疲れ果てた腕をさすりながらへたり込んでいる俺の事なんか眼中にない様子で、さつさと曲を選ぶとさつさと歌い始めた。

選曲がすごかった。

『歌舞伎町の女王』

椎名林檎の名曲。だけどさ。新宿だからこれってのはあまりに安直じゃなかるうか。

「セミの声を聞くたびに」

から始まるメロディ。

多分上手いんだろうなあ、とは思っていた。

こういう場合の上手さは、音程を外さないこと。さらに、歌手のクセを完全にコピーすること。カラオケレベルの上手さってそういう事でしょ？

でも、ちよつとこれは想像を超えていた。

綾華さん、いきなり歌い出しから自分の世界を展開してきた。

喉や口で音程をあやつる、上手いけど素人くさいカラオケ名人の歌い方じゃなかった。吐き出す空気の量や圧力で音程をあやつって、声量と音程のバランスで聞かせる、迫力のある歌い方。

腹式呼吸までできているらしく、喉を絞って声を出す素人の歌い方とはかけ離れた歌い方だった。

ちよつと待て、なんなんだこの人は。

綾華さんの普段の声は潤いのある落ち着いたアルトというところで、ちよつと大人びた色気がある、なんて表現してもいいと思う。

それが、歌い始めた綾華さんの声は、明らかに今まで聴いたことがあるどんな声とも違っていて、上手いとか下手だとか、そういうレベルじゃ無かった。

圧倒された。一曲目から。

「今夜からはこの街で 娘のあたしが女王」

最後のファルセットまできっちり歌い上げて、綾華さんは静かにマイクを下ろした。

「す…… 上げっす」

素直に拍手していた。

「あらー？ やっぱりー？ あたしって天才っぽくってさー」

わざとらしく胸を張ってみせる綾華さんは明らかに突っ込み待ちだったけれど、そんな照れ隠しに付き合う気が無くなるくらい、この人の歌はすごかった。

「いや、マジで天才かも」

本物のアーティストが目の前で歌ったら、もつと感動するんだろうか。それとも、この人はそういう人々と同レベルにあったりするんじゃないだろうか。なんという無敵超人。

俺が非常に素直に褒め称える拍手をしたせいか、綾華さんは急に態度を小さくした。

「あ、ああ、あのさ、素で褒めないでくんないかな、すごい恥ずかしいんだけど」

困ったような顔で笑いながら、俺からちよつと離れた所に小さくなつて座った。

「いや、だって、俺、カラオケでこんなに感動したの初めてですよ」「だからいうなつてば」

綾華さん、タッチパネルのリモコンを俺の方に突き出す。顔を思いつきり下げているけれど、多分赤くなっている。

「とっとと選んで歌いやがれ」

「えー、歌いにくいですよ、あんな聞かせられた後じゃ」

「ばか、カラオケなんて乗りと勢いでしようが」

「俺なんかが歌うより、綾華さんが歌ってるの聞いているほうがいいですって」

「いいから選べっての。命令だぞ、お姉さまの」

ぐりぐりと体にまで押し付けてくるから、仕方なく選曲を始める。といっても、歌えるレパートリーなんて限られているし、あんなの聞かされた後にまともな曲なんか選べるはずがないでしょう。

乗りと勢い、という綾華さんの言葉に従ってみることにした。

『リンダリンダ』

もちろん、ヒットした当時の事なんか知らないけれど、ちよっと前に映画になったのを見て、友達なんかともよく暴れながら歌ったりする曲。

ちんまり歌ってもつままない曲だし、綾華さんもイントロからのりのりだったから、思いつきりがなつて歌ってみた。

「ドブネズミみたいに 美しくなりたい」

の辺りで怒鳴っても仕方ないけれど、

「リンダリンダ」

の連呼が始まれば、後は勢い任せになるのみ。上手く歌おうって曲じゃない。

歌い終わったら疲れきってへたってしまうくらいにぶちかますのが正解。

そのとおりに歌いきって、軽い喉の痛みを感じながらシートにどさつと座り込むと、綾華さんが大はしゃぎで手を叩いている。

「なんだあ、歌えるんじゃないかあ」

「綾華さんと比んで下さいよ、空しくなるから」

「なにいつてんのよ、かつこよかったよ」

綾華さんのテンションがいつも以上に高い。

俺ががなっている間に素早く二曲ばかり入れていたようで、すぐに次の曲のイントロが始まっていたから、それ以上は褒め殺しにはならなかったけれど、この人に歌を褒められて嬉しくならないやつは多分いない。

俺も単純に嬉しくなつて、綾華さんの強力な歌声に包まれながら次の曲を探するという、ちょっと体験できない幸運を味わっていた。

この日の綾華さんは、当然ながら私服。

ファッションってなに？ 食えるの？ という人生を送っている俺にはよくわからないけれど、ブーツカットのジーンズにベージュのライダースジャケットなんて着ているから、背が高くてただでさえかっこいい系の人が、なおさらかっこよくなっている。

一緒に歩くのが嫌になるくらいに。

ジャケットの中はライnstonsが並んだ黒いチビ衿のポロシャツで、ちよつとかがんだりすると背中が見えてどきつとする。

何回か、ジーンズの後ろから下着が見えていたけれど、まあ、あれはそういうものなんだろう。見せてもいいですよ、と自己主張するように、なにやらロゴが並んでいた。

それでも思わず見入ってしまい、あわてて視線をそらす辺りが、俺も気の小さいムツツリだな、と自己嫌悪に陥らせてくれる。

そのジーンズに包まれた長い脚を組んで、ヒールが高い黒いパンプスを見せて座っていると、どうしてこの人がおとなしく高校生なんかやっていられるのかと疑問にすら思う。

それに比べて俺なんて。

同じジーンズでも俺のは某メーカーのありきたりのストレートジーンズ、上に着ているのはかろうじてユニクロではないものの、郊外によくある量販店で買ったウエスタンシャツ。妹の見たてつてのが情けない。中はただのTシャツ。

それにニューバランスのスニーカーだからね。本当にこの人と歩いて良かったのかね。犯罪じゃないんかね。

本来なら視線すら合わせることも許されない、カーストの最上層と最下層の人間が一緒に過ごしている、という気がして、今日は荷物持ちをしながら、ずいぶんとひがみつぽくなったりもした。

だいたい彼氏がいる人相手に、のこのこ誘われてついてくる辺りがどうしようもない。なにやってんだ俺は。

そもそも、由紀のことはどうする気なんだ。

告白されて、会いたいだのこんなにも好きだのと考えておきながら、同じ日にこうしてはるか最上層カーストにおわすお方と席をともにし、あまつさえその美声を拝聴する機会に恵まれているこの状況。

嬉しい反面、楽しい反面。

心がちよつと黒いものに冒されていくのを、俺はカラオケのリモコンをいじりながら、ひどく浮ついた気持ちで眺めていた。

そして、やけに長い一日は、まだ終わってはいない。

帰りが問題なんだ、という事に気付いたのが、カラオケもそろそろお開きというタイミング。

あと10分で2時間分が終わり、というところで、「天城越え」を熱唱する綾華さんを置いてトイレに立った。

カラオケボックスの狭いトイレで小さい方を済ませ、手を洗う。その水の冷たさが不意に頭を刺激したようで、帰りのことが頭をよぎった。

あ。

もしかして、地元で綾華さんと一緒の姿を見られるのって、致命的にやばくないか？

ただでさえ、相手は綾華さんだ。うちの高校のアイドルで、彼氏持ちで、家は地元の名士。

俺がその辺うろろしていたところで誰も気にもしないだろうけれど、綾華さんが彼氏以外の男とうろろしていたら、目立つことこの上ない。

それに気付いた瞬間、水の冷たさもあってか、俺は寒気が勢いよく背中を駆け上がって行くのを感じた。

由紀。

狭い田舎のこと、絶対耳に入るはず。

今日は親戚の結婚式でいないにしても、あんな電話をしておいて、その日の内に綾華さんとデートしている男の話が耳に入ったら。

「好きっていつてもらえてすごく嬉しかった」

「この先は、直接会ってからいいんだ」

よくいうわ、このあほんだら！

激しく自分ツッコミしてから、俺はトイレの中で頭を抱えた。

何やってんだ俺は。ついつい綾華さんのペースにはまって誘い出

されて、めちやめちや楽しんで。帰りのことも気付かずにのんきにカラオケなんぞ歌ってからに。

別にやましいことはしていない、つもりだけれど、そういいきつてしまうにはあまりに節操がないこの状況。

これだから童貞君は！

ひとしきり悶絶したあと、俺は落ち着こうと深呼吸した。

とたんに、トイレのそれなりの異臭に襲われて、ぶはっとかき込む。

あわてて廊下に飛び出して、たまたま通りかかったお姉さま方にじろじろ見られて、それで多少は血が上った頭がすっきりとした。とりあえず戻らないと。時間は待ってくれない。

俺が部屋に戻ろうとすると、ちょうど綾華さんが出てくる場所だった。

「どんだけこもってんだよ、便秘くんか？」

二人分（ほとんど綾華さんの買い物袋だけれど）の荷物をどうにか持ち出そうとしたらしい綾華さんが、ぶーぶーと文句をいう。

「追加料金払うんなら置いて帰ってもいいんだけどね」

ああ、それも手が、などというものなら殴られかねない空気だったから、大急ぎで駆け寄り、荷物を持つ。

「すみませんすみません」

平謝りした俺が荷物を持つと、それ以上追求するつもりも無かったよつで、綾華さんは元気に拳を宙に突き出した。

「さあ、まだちょっと歌い足りないけど、それなりに楽しかったし、次は腹ごしらえだ！」

「はい！？」

素で返してしまった。

「はいってなによ」

綾華さん、拳を突き出したまま俺を細くした目で見ている。

時間は確か現在6時近く。明日は学校。ここは新宿。電車で地元まで乗り換え含めて約1時間。

「えーっと、帰るんじゃない？」

「あたしに空腹のまま帰れと？」

「やばい。食事そのものに疑問を持ったと思われる、空腹の苛立ちをたたきつけられそうだ。」

「……しょ、食事はいいんですけど、次は、とかおっしゃるってことは、食事後もまだラウンドが控えてるってことで？」

「嫌なの？」

「目が細いんです。射るような視線なんです。怖いんです。」

「いや……ただ、学生の本分は明日から再開される学校にまずは通うことではないかと思考する次第なわけでございます」

「まだ時間余裕でしょ。日付が変わる前に帰れば全然大丈夫じゃない」

「ちょっと待った」

「反射的に手を上げてさえざる。」

「その考え方おかしいから」

「えー、なんでよー」

いきなり口を尖らせて可愛らしい声に切り替わっている。いやいや、だまされんぞ。

「普通のマジメな高校生の発想に、午前様じゃなきゃオーケーとか無いでしょ」

「いつの時代の高校生だよ」

「時代関係無いですって。ちなみにうちにや門限って物もあるんですぜ、お嬢さん」

「まじで？ おかしくない？」

「おかしくないからっ」

「まずい。この人はズレてる。いや、世間的には俺がズレているのかもしれないけれど、高校生が日付が変わるまで遊び回っていて怒られもしないような家庭環境に、俺は育ってない。」

「そりゃ、社会人とかならそれでもいいんでしょうけれど、俺には無理です」

無意識に、俺は地雷を踏んでいたのかもしれない。

綾華さんには社会人の彼氏がいて、そういう人と付き合ったりしていれば、午前様になることだってあるんだろう。そうでなくても遊んでいる印象が強い人だから、うちみたいなくそマジメな家庭からは想像もできないような自由さで外出しているのかもしれない。

そんなふうな思い込みが、俺にこのセリフをいわせていた。

綾華さんは俺のセリフに一瞬目を細めると、真顔になって5秒ほど反応しなかった。

何かやばいこといったのか、と俺が冷や汗混じりに思い始めたころ、綾華さんは憑き物が落ちたような透明な顔になって、微笑んだ。

「……そうだね、そうなんだよね」

「……」

どう返していいものかわからない俺が立ち尽くしていると、綾華さんの澄み切った笑顔が恐ろしくきれいに見えて、胸を鷲掴みにされたような気がした。

「いやあ、アキちゃんといると新しい発見があっていいねえ」

「……なんすか、それ」

「いいのいいの、こつちの話。それはそれとしてだ」

綾華さんは自己完結して歩き出す。

「今日はおとなしく帰るにしてもさ、おなか空いたまま電車乗るの嫌だし、なんか食べて行こうよ。それもNG？」

声が明るかったから、俺はとりあえずそれに乗っかることにした。何がなんだかわからなかったけれど、綾華さんが機嫌を損ねていなければ、それでいい気がした。

「全然オツケーっす。お昼は割り勘だったし、ここも割り勘の約束だから、晩飯くらいはおごりますよ」

「おーっ、さすが勤劳少年、ここもおごりますよ、とかいわない少市民っぷりがすてき」

「まっすぐ帰ります?」

「ごちになりまあああす」

綾華さん、スキップしてる。リアルでスキップなんて見たの、何年ぶりだろう。

「もしかして、由紀となんかあった？」

いきなり核心を突かれて、口に入れたばかりの広島風お好み焼きを盛大に吹きそうになった。

綾華さんに入った、靖国通りからちよつと南に入った雑居ビルにあるお好み焼きやさんで、俺はさりげないつもりで「帰りはどうします？　一緒に駅前なんか歩いてたら、ちよつとまずそうな気もしないではないんですけど」と話していた。

ちよつと考えていた綾華さんが次に発したセリフが、冒頭のセリフ。綾華さん、あなたにはいつから読心機能が追加されたんですか。

俺は口に入っている物を守るのが精一杯で、涙目になりながらどうにか強引に飲み込み、それから咳き込んだ。

綾華さんが対面の席で呆れている。

「大丈夫？」

大丈夫です、と答えかけて、見事にむせる。げっほげっほと何度もせきをしていると、綾華さんが水を入れたグラスを目の前に差し出してくれた。

ありがたいけれど、まだ早い。

ありがとう、の意味で手を軽く上げながら、大きく息を吸って一度息を止め、思い切りせきをした。

そこでやつと落ち着いて、綾華さんが置いてくれた水を手に取り、慎重に口をつけた。

「今度こそ大丈夫？」

「大丈夫です、ありがとうございました」

「そんだけむせたら、さっきの質問の答えはいらないよ」

「ばればれですかね」

「ばればれですわね」

綾華さんがにっと笑った。

「そっか、由紀は勇気を出したか」

洒落かな、と一瞬思ったが、そのつもりはないようで、次のセリフでまた綾華さんは驚かせてくれた。

「意外に早かったわね」

「へ？」

意外に？

「告られたんでしょ？ 由紀に」

と聞かれて、思わず素直にうなずいてしまうと、綾華さんはかえってつまらなさそうな表情になった。

「文化祭が終わる頃に言い出すのかなあ、とか思ってたけどさ、こんなに早い時期に告るとは。案外手が早い子だったのね」

「……って、知ってたんですか」

「なにを」

「その、由紀が、俺のこと」

「ばればれでしょーが。てか、あんた、気付いて無かったとか？」

綾華さんが由紀の様子から俺を好きになっていたことを見抜いたのは、俺にとつては驚きだったけれど、綾華さんに見れば、俺が由紀の気持ちに気付いていなかった事の方が驚きだったらしい。

「まじで？ うそでしょ？」

「いやあ、まったく」

「あたしだましても得しないよ？」

「いや、だましてないし」

「そのにぶさって犯罪的だよねえ、すごいわ、いや、ほんと」

素で驚いているらしい様子がむかつくわけですが。

「気付くわけじゃないんですか、あんなに避けられてたんだし」

「ありや避けてたんじゃなくて、好きすぎて直視できなかったんですよ」

綾華さんの表現はストレートすぎてなかなかうなずけない。好きすぎて直視できないとか、そういうのってありえるんだろうか。いや、そんなようなことは由紀にいわれたけれど。

「だって、俺なんかをそういう目で見る人間がいるって事自体、ありえないと思うし……」

「にぶいつていうかさ、気付いてないんだね、あんたは」

綾華さんは感心したように、頬杖をつきながら俺を見ている。

「気付いてない、というと」

恐る恐る、という感じで聞いてみると、綾華さんはちよつと首をかしげるようにしてから、頬杖を外した。

「あんた、自分で思ってるよりずっといい男よ。ちよつと自覚しかないよ、まわりの女泣かすだけだよ」

「んなこといわれても」

綾華さんの声に冗談の気配なんか全然無くて、それが俺をかえって困惑させた。

「俺、今まで女の子にもてたこともないし、そもそも女の子と口きくことだつて滅多にないくらいで」

「関係ないでしょ、そんなの。それはあんたの周りの女に見る目がないのか、あんたがあまりに鈍くて気付いてないだけなのか、どっちにしろ、あたしの目がよっぽど腐ってなきゃ、あんたはいい男よ」

そんなこと断言されても、ねえ。

俺があたふたと困っているだけで、ろくに反応できなかったのが苛立たしかったのか、綾華さんは続けた。

「ちよつと褒められたくらいで動揺してんじゃないよ、しょーもない」

「す、すいません。てか、褒めてたんですね」

「けなしちゃいないでしょ」

「いや、褒めごろしかなあ、と」

「褒めごろしてどうすんのよ、おごつてくれるっていつてる相手を。それ以上何か求めて欲しいの？」

「いやいやいやいや」

慌てた振りをする。

つい最近まで、もてた経験も無ければ、バレンタインに妹と母親

以外からチョコをもらった経験もない、哀しい青春を送ってきた男に、何を言い出すのだろう。俺はこの期に及んでも綾華さんの意図を探り出そうとか考えていた。

そんな俺に向かって、綾華さんとはどめを刺すような言葉を叩き付けてきた。

「あたしだって、あんたのこと好きだよ」

俺はこの言葉で完全停止した。

頭がフリーズした、とかいう問題じゃない。身動きが出来なくなってしまうていた。

めまいがしそうなほど一気に血が頭に上り詰めて、視界が狭まる。綾華さんの胸元に固定した視線が動かせない。目なんか見た日には、多分、即死する。

そっという俺の様子を見て、自分の言葉が与えた衝撃を冷静に計っていたらしい綾華さんは、平然とした口調で俺の解凍にかかる。

「まあ、あたしは彼氏がいるし、あんたになびくことは無いにしてもさ。でも、嫌いなやつなら近づく気にもならないし、好きでもないやつと一日遊んでられるほど忍耐強くもないわけ」

かろうじてうなずく俺を見ながら、綾華さんは続ける。

「友達として好きとか、男として好きとか、そっいうのって境界線曖昧だとあたしは思ってるのね。タイミング次第で変わるものなんだろうし、男女で友情が成立するかとか、あほかって思っちゃう人だから」

この話はどこに行くのか、とはらはらしながら聞く。

「そんなの、女同士の友情だって不変じゃないってのに、今の時点で成立してる友情が永遠に続くと思う方が馬鹿だろうって話で」

それは納得できる気がする。

「だから、あんたのことを好きって思ってるこの感情がどう変わって行くかはあたしにもわかんない。でもね、とりあえず今はね、弟分としてかわいがってるのが楽しくてしょうがないのね」

弟分として、という言葉に、俺は正直ほっとしていた。

「あたしがそういう後輩作ったのって初めてなのね。告って来る後輩は掃いて捨てるほどいるけどさ」

「まあ、そうでしょうね」

思い当たる節はありすぎるほどある。

「そういう子達じゃなく、あんたみたいな失礼極まりない小僧をかわいがってるあたり、あんた自身にそれなりに魅力がなきゃ無理な話よ」

「……そうなんですか」

「まだ懐疑的かね、この子は」

綾華さんがついに苦笑した。

「だって」と、俺はつい拗ねた声を出した。

「今の今まで、俺はモテない人生の裏街道を全力で突っ走ってたんですよ。いきなりそんなこといわれたって、はいそうですかと納得できるわけないでしょう」

「納得しろよ、あたしが素でいつてるんだから」

「無理です、いきなりは」

かたくなな俺の姿勢が笑えるらしく、綾華さんは苦笑というより、にやにやという笑いになってきた。

「で、そのもてないくんは、由紀の告白にどう答えたのかな？」

「……想像はついてるんじゃないですか？」

あえてカマをかけると、綾華さんはあっさりと口を割った。

「保留中、そんなとこかな」

「正解、です」

この人はほんとにどこまで洞察力があるのだろうか。俺が目丸くしていると、綾華さんはニヤニヤ笑いをまた苦笑の形に変えた。

「だってあたしと遊びに来てる時点でそう考えるのが自然でしょうが。オツケーしてりや来るわけないし、断ってたら人と遊ぶどころじゃない顔してるだろうし」

見事に見透かされているらしい。

「どうすんの？」

口元に微笑を浮かべたまま、優しい目をした綾華さんはポンと質問を落としてくる。ついこっちが拾ってしまうタイミングで。

俺は素直に答えていた。

「受けます」

それ以上の説明は、この人にはいらないうろ。

綾華さんにはっこりと笑った。

「おめでとう」

綾華さんはさすがだった。

「一緒に帰ったらいろいろな誤解されそうだしね。どうせアキちゃんもそれが気になって仕方ないんでしょ？」

そういうと、綾華さんは新宿から地元までの乗換駅で、一本遅らせて帰るからといって手を振った。

「俺が遅らせますって」

「妙な気を使うなよ、いいから行けって」

額を小突かれてしまった。俺が微妙な顔をして見送っていると、綾華さんはホーム横のトイレに姿を消していった。

「……ありがとうございます」

その背中に向かって、俺は深く深くお辞儀をした。そうしなくなる、綾華さんの背中だった。

そうして、俺の長い一日は、ようやく終わりを迎えつつあった。この時は、そう思っていた。

立ったまま電車に揺られ、一人になって、ようやく俺の神経は落ち着きを取り戻していった。

なんだかんだいって綾華さんと一緒の時には、常に昂ぶっていたんだろう。急に疲れがどつと出てきた。

体力的なものじゃない。もっと、脳の奥から湧き出てくるような疲れ。

綾華さんにお礼のメールを打つ。なんて書けばいいのか悩んでいるうちに時間は過ぎて行く。

ようやく打ちおわり、送信しつつ、ふう、と大きくため息をつく。と、地元の駅に着く。

駅前のロータリーをつつきり、最初の交差点で曲がり、家への道をたどり始めた時、携帯が鳴った。

綾華さんだろうか、と思って携帯を開くと、由紀からの電話だっ

た。

どきんと胸が動く。

携帯の画面の中に浮かび上がる「渋谷由紀」の字体をちょっと眺めてから、キーを押し、左耳に押し当てる。時計は9時過ぎを表示していた。

「はい、佐藤です」

ちよつと硬い声になっていたかもしれない。

『渋谷です』

聞こえるぎりぎりの声で、由紀が名乗っている。携帯を持つ左手の親指が、サイドキーを数度押して、音量を限界まで上げていた。

「こんばんは。お疲れ様」

まばらに通る車やバイクの音にかき消されない程度にははつきりした声で、俺は携帯の向こうにいる由紀に話しかけた。

『こんばんは、お疲れ様です』

オウム返しに小さい声が聞こえてくる。

『こんな時間にごめんなさい。もう寝てましたか？』

「まだ。ていうか、外にいるし。聞こえるでしょ、車の音とか」

『あ、はい』

「どうだった、結婚式。楽しめた？」

『特に楽しくは……親戚が多いから、挨拶してるうちに終わっちゃった感じでした』

「そっか。花嫁さんはきれいだった？」

『ええ、きれいでした。写真もありますから、もしよろしければご覧下さい』

硬いなあ、この子は。いまどき、電話口でこんな敬語使える高校生っているのかね。

ていうか、他の家の花嫁にまで興味はないわけで。

「楽しみにしとく」

と、適当に答えておいて、俺は口調もそのままに話を切り替える。
「で、どうしたの？ 声でも聞きたくなった？」

冗談に聞こえる程度には声に笑いを含めたつもり。由紀はその笑いには反応して来なかった。

『それもあります。でも、そうじゃないです』

「うん」

何がいいたいのか、なんとなくわかる気はしている。

今朝の電話の続きだろう。

『せっかく晃彦くんに誘ってもらえたのに、断ったのが気になって

……』

「気にしないでいいのに。先約があっただからそっち優先でしょ」

『それはそうですけど……』

「気にしないで。俺も今日はそれなりに忙しかったし」

『そうだったんです、か』

「久しぶりに休日にネットにつながらない一日だったよ」

『そうですか』

「結婚式ってやっぱ制服で出るの？ 振袖着てたりとかはしないんでしょう？」

多分、由紀には俺がかなり意地悪に思えているんだろうと思う。

本題に入りかけて、逸らしている。

『あの……』

恐る恐る、という感じで由紀が話を切ってくる。

「うん」

俺はこの時、少し後ろめたさがあった。だって、由紀のことをほったらかしにするみたいに、俺は綾華さんと一日デートしていたわけ。

由紀の細い声が、まるで俺を責めているように聞こえていた。そんなわけはないのに。

『……』

電話の向こうから、由紀がためらっているような息遣いが聞こえてきた、気がした。

『……』

どうした。がんばれ。俺は無言のままメールを送った。綾華さんの完璧超人っぷりをまざまざと見せつけられた一日の後だからか、変に余裕があったのかもしれない。

あるいは、罪悪感のような物が、どこか他人事のように思わせていたのかもしれない。

由紀はそんな俺のことをどう感じていたんだろう。それとも、俺の内心を伺う余裕なんか無かっただろうか。

この電話をかけるのにも、相当勇気が必要だっただろう。でも、かけてしまったものは、なんとか言葉を出さないといけない。

やっと、由紀は呼吸を整えた。

『……迷惑かもしれないし、失礼だとも思っんですけれど……今から、会えませんか』

「え」

これはちよつと意外だった。

「大丈夫なの？」

なぜなら、由紀の家が厳格で、こんな時間に外出できるとは思えなかったから。

『ごめんなさい、やっぱり迷惑ですよ、非常識でした、ごめんなさい』

「いや、そうじゃなくてさ」

由紀がいつものように暴走しかけたから、俺はあわてた。

「俺はいいんだよ、どうせ外にいるんだし。由紀の方が大丈夫なのかなって」

『それは大丈夫です。父も母も疲れて早く床に入りましたし、他の家族もそれぞれ部屋に入りましたから』

「そうなんだ。でも、ばれたら大変でしょ？」

『やっぱり迷惑ですか？ 迷惑ですよ。ごめんなさい、私がおかしいんです』

「いや、だからね」

この子は。

「大丈夫ならいいんだよ。でも無理はしちゃだめだよ、夜遅いのは確かなんだから」

『無理なんかじゃないです。いつまでも子供じゃないんですから』

「でも女の子だからさ。いくら田舎だっていったって、危ないものは危ないわけで」

『あの、会えないならそれでいいんです、私が勝手に期待して勝手に盛り上がってるだけだから、晃彦くんに迷惑かけたくないし、わがままだってわかってるから』

「こら」

ちよつと大きく声を出すと、スピーカー越しにも由紀が身を固くしたのがわかった。

「そのすぐ暴走するのを何とかしなさい。可愛過ぎるから」

『……え』

我ながら恥ずかしいことをいい始めているのがわかるけれど、今さら止まらない。

「会えないとはいってないし、きみのわがままだとも思っていないよ。俺だって会いたいし。声だって、電話越しじゃ物足りないし」

由紀の息遣いが伝わってくる。押し殺してはいるけれど、わずかにもれてくる息の音の間隔は狭い。

「ちようど外にいるんだし、会いに行くよ。ちよつと時間はかかるけど、待ってて」

『そ……そんな、私が行きます』

「何度もいわせないでね。いくら田舎でも女の子一人歩かせるわけにはいかないの。まして由紀みたいなかawaii子に來させるとかありえないから」

普段の俺なら絶対に口にしない「かawaii」という言葉がほいほい出てくる。

勢いつて怖いね。

「出来るだけ早く行く。近くになったらこっちから電話入れるから。待ってて」

『……はい』

由紀の短い返事に、涙の成分が混じっている気がしたのは、たぶん勘違いじゃなかったと思うんだ。

こうして、俺の長い長い一日は、何度目かの仕切り直しを迎えた。

深いワイン色のワンピースの上に白いカーディガンを羽織った姿が、コンビニの強い照明に浮かび上がっている。長い黒髪が濡れたように光っているけれど、まさか風呂上りじゃないだろうな。

背を伸ばして、あごを引いて、両肘を抱くようにして立っているその姿は、もとが華奢だからはかなげではあっても、電話の声のように弱々しい感じはしない。

俺が歩いている方向はちょうど死角らしく、すぐ近くに行くまで、由紀は気付かなかった。

ちよつと大きな声を出せば届く距離になって、由紀が俺に気付いてくれた。ちようど、声をかけようかと手を上げかけたときだったから、そのまま手を上げた。

「お待たせ」

「あ……ごめんなさい」

「いきなりごめんなさいなんだ」

思わず笑ってしまった。

「だって、急に呼びつけたりしたから」

由紀は視線を合わせず、急におどおどして落ち着きなく俺の胸の高さで視線をさまよわせている。頭も揺れるから、メガネのフレームが照明を反射してきらきら光っている。

かわいらしさを出そうとしているのなら、ここで上目遣いのひとつも炸裂させるんだろうけれど、由紀の場合は本当におどおどしてしまっているらしい。

「その件はさっきの電話で解決したと思ってたけど」

という俺と、目を合わせるところか、後ずさるうとしている。本当にこの子は俺のことが好きなんだろうか。

「うん……じゃあ、ありがとう」

落ち着き先を探して肩からかけたトートバッグにかかっていた両

手を離し、からだの前に重ねて丁寧にお辞儀した。

「それならいいよ」

もう、笑うしかなくなっていた俺がいうと、由紀は頭を上げながらやつと俺の顔を見た。俺はやつと由紀の顔が拝めた。

風呂上り、ではないらしい。髪はきちんと乾いている。ほとんどの女子が羨望の眼差しを向けること間違い無しのまつすぐな髪が、風も無い夜の空気に触れてしっとり輝いていた。

学校ではたいてい後ろで束ねているから、下ろしているのが新鮮だった。中学生の頃には何度か見た記憶もあったけれど、高校に入ってから見た記憶が無い。

白い顔は、実のところ、よく見えていない。目が悪いからじゃない、逆光だったから。由紀がコンビニを背にして立っていたから、暗い住宅街を背中にいる俺には、目がまだ明るさになれていないせいもあって、表情まではよく見えていない。その分由紀には俺の顔がよく見えただろう。

もっとも、由紀はすぐに顔を伏せてしまっていたけれど。

「移動とかご挨拶とかで疲れてるだろ。どこか、座れるところに行かない？」

まぶしくて目を細めながらいうと、由紀が小さくうなずいた。

「じゃあ飲み物買っていいこうよ」

俺がコンビニに入ると、由紀は一步遅れてついて来た。ペットボトルが置いてある一画に来て選んでいる時も、俺の視界に入っていない。冷蔵庫の扉を閉めてレジに向かうと振り返ると、さつと違う扉を開けてペットボトルを取り出し、やっぱり俺の後ろについた。本当に、本当にこの子は俺のことが好きなんだろうか。不安になってきたんですけれど。

なんか以前より強力に警戒されてないか、という疑惑が大きくなっていく中、俺はせいぜいゆっくりと歩きながら、コンビニのすぐ後ろにある公園へ歩いていった。

由紀の家からは歩いて3分。学校からだ歩いて10分かな

い場所にある。小さな公園だけれど、滑り台と砂場と鉄棒があつて、北側に一本大きな桜の木がある。そのすぐ近くにベンチが設置されている。

「寒くない？ 大丈夫？」

と、座つた直後に由紀に尋ねる。ちょうど隣に座りかけていた由紀は、ふるふると首を横に振つた。俺がベンチのほぼ真ん中に座つたのに、由紀は一番端にちょこんと腰掛けて、結界でも張るかのように、俺との間にトートバッグを置いている。

泣くぞこのやろつ。

「で、さ」

と、俺はちよつと間を置いてから口を開く。視線はまっすぐ前。隣に座る由紀の姿はほとんど見えない。

何をどう喋ればいいんだろつ、と、ここに来るまでは色々と考えていた。

でも、こうして由紀と一緒に座っていると、考えていたのが馬鹿馬鹿しく感じる自分がいた。

告白してきておいて、前よりよそよそしくなるってどうなんだよ、という怒りにも似た感情がある一方で、でも自分が相手を好きな気持ちか相手にとって迷惑だったらどうしよう、と考えすぎたあげくそうなってしまうているのだとしたら、それって相当かわいひやな、などと考えている自分もいる。

考えてきたセリフなんか捨てちまえ。今のこの気持ちをつづけて、あとは由紀に任せればいいじゃんか。

「きみが俺とのこと、どうしたいかは、よくわかんないけど」

視界の端に、由紀がピクンとからだを固くした様子が入ってくるけど、放置。

「だって、なんか今日はやたら壁を作られている気もするし、正直、こうして今会つてるのも、実はきみにとっては重荷だったりするのかなあ、とか考えたりもするし」

由紀が慌てたように俺を見て首を振っているのが目の端に見えた

けど、まだそっちは向かない。いいたいことというのが先。

「でも、俺も、まあ、恋愛経験とかあるわけじゃないし、自分が告白した立場だったら、相手が回答して来てくれないのにどう振舞えばいいのかとか、多分思いつかないだろうからさ」

持っていたペットボトルを由紀とは反対側、右側に置く。

「だから気持ちは伝えとく。俺、由紀が好きだよ」
さりり。

こんなに簡単に出ていいもんなのかな、と思うくらいさりりと出た、好き、という言葉。

それから、俺はやつと由紀を見た。

由紀は、ベンチに浅く腰かけて、ピンと上半身を伸ばしている。手は脚の上にそろえてぎゅっと握られていて、斜めに向けた体から俺をまっすぐに見つめていた。

メガネの奥の瞳が丸くなっていて、コンタクトなら間違いなく外れている。いつもはきゅっと閉じられている唇は半開きになっていて、要するに、由紀は、呆然としていた。

「……と、いつでも信じられないか」

そんなに驚かれるとは思っていなかったから、こっちまで驚いた。俺が付け足すようにいうと、由紀は口をパクパクさせた。

「？」

首をかしげる。何がしたいのかまではわからないけれど、少なくとも酸素が足りなくてパクパクしているわけじゃないことくらいはわかるから、由紀の言葉を促そうとした。

そうしたら、由紀まで首をかしげた。

「いや、そうじゃなくて」

思わず突っ込んでしまった。

それで呪縛がとかれたのか、あるいは喉の奥にあった形の無い障害物が取れたのか、由紀はひとつ大きく頭を振ると、自分が置いたトートバッグを邪魔とばかりに膝の上に乗せ変え、乗り出すようにしてきた。

「し、信じて、信じていいですか？」

言葉面にすると勢いよくいつているように見えるかもしれないけれど、実際は可聴範囲スレスレの細い声で、乗り出すようにいつてもひどく控えめ。

ついでにいうと、大きく首を振ったときにメガネがずれている。それを直す気になれないくらい、由紀は俺に集中していた。

一途な目って、こういう目のことをいうんだろうな、と俺は思った。うす暗い街灯の光しか届かないベンチの上で、由紀の瞳の底から光が湧き出しているように見えた。

後から考えれば、緊張と集中が高まりきっていた由紀の瞳孔が最高に開いていたってことなんだろうけれど、もちろんそこまで考える余裕はこの時の俺には無い。

「信じてくれなきゃ……」

妙に、由紀のメガネのズレが気になった。

いいながら、多分俺はにやけていただろう。好意的に見れば優しい微笑み、悪意に取ればだらしない顔。

右手が自然に伸びていた。

じつと俺を見ている由紀の顔の横から、そっと手を近付けて、メガネのつるに触れる。

「……この距離が縮まんないよ」

するつとメガネが定位置に戻る。

「俺も好きでいていい？」

ゆつくりと手を戻しながらいう。

由紀が、視線を俺の目から外さずに両手を上げて、離れようとする俺の右手に触れた。そのまま壊れ物を包み込むようにする。

「……」

無言で右手を外し、メガネを取ってトートバッグの中に落とし、左手で俺の手を導いて、頬に当てた。

再び両手が俺の手を包み、手のひらに由紀の頬の体温としっかりとした肌の感覚が伝わってくる。

頬に当てた手をいつくしむようにして、由紀がささやいた。

「……ありがとう」

閉じた由紀の目から涙がこぼれる。

「なんか泣かせてばかりだね、おれ」

喫茶店でのことを思い出して俺がいう。

由紀が目を閉じたまま、ふっと笑う。

「泣いてばかりです」

こっちの胸が音をたててしまいそうなほど、幸せそうな顔だった。もう、遠慮も何も無かった。

気がついたら、俺は由紀を抱きしめていた。

といつても、こんなに繊細な生き物をどう扱っていいかわかっていないから、恐る恐るという表現ぴったりの、肩を引き寄せて両腕で包む程度のもの。

由紀は両手を俺の胸につけて、額を首筋に押し当てるようにしていた。

腕の中の細い肩も、胸元に感じる息も、いつの間にか当たっている膝も、どれも俺の全身をしびれさせる凶器だった。

右手で髪をなでる。

「……もう、変に距離取ったりしないでね。寂しいから」

本音が自然に出た。

胸で、由紀がうなずいた。伝わってくる息遣いで、苦笑しているのがわかった。

「でも、難しいかもしれません。晃彦くんの前に出るとどうしても緊張しちゃうから」

ささやきが、甘く耳と心をくすぐる。

「そうなの？」

「はい」

「どうして」

「……」

少しの沈黙の後、由紀は顔を上げた。

至近距離で視線がぶつかる。

「どうしようもなく好きだからです」

そういつて目を閉じた由紀の顔を、いつまでも眺めるような馬鹿な真似は、さすがにしなかった。

2秒後、俺は生まれて初めて、キスをした。

月曜日。

俺は少々呆然としていた。

何がつて、お姉さま方登場。

朝、登校して、由紀と顔を合わせて、あまりのこっ恥ずかしさに二人とも黙りこくるという展開を経験して、授業を受けて、昼休み生れて初めて彼女を持つて、これからバラ色の人生を味わうはずの俺は、なぜか由紀を迎えに行くより先に、綾華さんご紹介のお姉さま方に囲まれていた。

「あきちゃんを守りに来たよー」

「はい？」

意外すぎる第一声に思わず聞き返すと、総勢4名のお姉さま方は、周囲の同級生が興味津々で聞き耳を立てる中、それを気にもしないで笑顔を見せた。

「ほら、綾華のおかげで女にぼられちゃったっていうじゃない？」

「哀れな下級生をわざわざ助けに来るとか、あたしたち超優しくない？」

「せっかくだからお昼くらい付き合いなさいよ、この前は携帯の番号も聞けなかったし」

「まさか断るとかそんな冷たい子じゃないよね、あきちゃん」

今まで俺が関わり合いになることもなかった派手な上級生たちに囲まれ、俺は動揺しまくった。そりゃそうでしょう。免疫なんか無いし。

「は、はあ」

俺は、皆様には失礼ながらドン引き。

でもそんな気配なんか、お姉さま方には何の障害にもならないよ
うで。

「ほらー、行くよー」

「え、どちらに」

「中庭。さつさと弁当持つてついてくるの」

お姉さま方は極めて強引。こっちの都合なんぞ考える余地すらないらしい。

断る理屈も思い浮かばず、助けを求めるかのように視線を泳がせた俺は、視界の端に最も見てはいけないうるものを見てしまった気がして、思わず目を閉じた。

一呼吸置いて目を開け、その方向を見る。

視線の先に、由紀がいた。扉のすぐ近くからこちらをそっとのぞきこんでいる。

その顔、無表情。

血の気が引いたような、いつも以上に白い顔をして、メガネの奥の瞳も色を感じさせない。氷のような気配。凍てつく波動。

背筋にぞつと寒気が走る。これは間違いなくやばい。事情は分かなくても、由紀は秒速30万キロメートルの速さで俺から身を引いていくに違いない。

「ちよつと待った」

思わず俺は叫んでいた。

俺を注視していた周りが驚く。

近くにいたお姉さま方はもっと驚く。

そして由紀は。

ぱつと背を向け、走り出していた。

「待てつてのに！」

俺はお姉さま方を無視して走り出した。障害物が多すぎる教室の中を強引に突破して、一気に廊下まで出ると、由紀の姿を目で追うより先に全力で走りだす。

探さないで正解だったかもしれない。ギリギリのタイミングで由紀は考えにくい方角に曲がっていた。自分でもない、特に親しい友達がいるとも聞いていない教室の中に入っていた。

俺はそれはきつとフェイクで、俺が行き過ぎたらそそくさと出ていくつもりに違いないと瞬時に踏んだ。

だから、俺はわざと行き過ぎて、別の扉からその教室に入った。

由紀は俺が走り抜けていくのを窓から確認しようとしていたらしく、違う角度から俺が現れたことに気づくのが遅れた。

俺の方がわずかに発見が早い。その早さが勝敗を分けた。

黙ったまま由紀を捕まえようとした俺に気づいて、由紀はあわてて逃げだそうとしたけれど、いくらなんでも運動や反射の分野で、俺が帰宅部の由紀に負けるはずがない。俺は背を向けようとする由紀の右腕をつかみ、逆の手で肩を押さえた。

由紀は必死で声をこらえながら、それでも俺から逃げ出そうとする。

「逃げることないだろ、ちょっと落ち着こうよ」

できるだけ優しい声を出したつもりだ。ついでにつかんでいた腕や肩も即座に離し、どうしても低い由紀の視線の高さに、思い切り腰を落として俺の視線の高さを合わせた。

妹との長い付き合いの中で学んだことだ。視線が高いとそれだけで相手は威圧されるように感じて反発する。話を聞いてもらいたいなら、目の高さを合わせるのは必須。

「迎えに行こうと思うたら囲まれちゃったけど、大丈夫、あの人は大丈夫だから。な？」

息が切れそうになるのを強引に押しとどめて、俺は自分の限界に挑戦するくらいの努力で、小さくて柔らかい声を絞り出した。

実際にそう出せていたかどうかは分からない。全然知らないこのクラスでも、変な注目を浴びてしまっているけれど、それも気にしていられるような場合じゃない。

とにかく一秒でも早く由紀の心を開かせておかないと、多分また

心を開いてくれるのに恐ろしく膨大な時間と労力が必要になる。そんな気がして、俺の危機感を乱打してくる。

由紀はメガネをかけた顔をうつむけたまま、しばらくじっとしていた。

一瞬でも全力疾走した後に、じつと腰を落とした姿勢になるのは、じつはかなり辛かったりする。俺がその姿勢に早くも耐えられなくなってきたあたりで、由紀は静かに顔を上げた。

俺とわずかに目が合う。

そしてすぐに下げられたけれど、それはうつむいたというより、いつもの由紀らしい、長い時間目を合わせたがらない癖が出ただけだったようだ。

「……ごめんなさい……」

「なんで謝るんだよ。由紀は悪くないよ」

思わず俺は伸びあがり、伸びあがりながらいった。

「さ、ご飯にしよう。一緒にいてくれるんでしょ？」

何事もなかったように聞こえるように、俺は気楽な感じでいう。

由紀は小さくうなずいてくれた。

……助かった。

弁当を取りに教室に戻ると、当然ながら注目的になった。野次馬の視線はまあいいんだけど、いや、あんまり良くないけれどもまあいいとして、まだいたお姉さま方の視線が痛い。

「あれえ、あたしたちって今完全にしかとされちゃった？」

「おかしいねえ、守ってあげようとしてわざわざ来てあげたのに」

「なんか私たち以外の女を追いかけて行っちゃったよこの子」

「ちよつと許されなくね？」

口々にいう、その視線が完全に面白がっている。

「察してくださいよ」

俺はもうどうでもよくなってきた、間違いない苦笑以外には見え

ないだろう顔をしながらいった。

「彼女いないんじゃないっけ？」

一人がそういうから、面倒くさくなった俺は、素直になってしま
うことにした。

「いませんでした、昨日までは」

「今日からはいるんだ」

「ええ、おかげさまで」

野次馬たちがどよめく。

ええい、散れ。散ってしまえ。

そんな俺の心の声が聞こえるはずもなく、野次馬たちはたちまち
ひそひそと噂話を始める。彼女いない歴イコール年齢だった俺が、
いきなり派手なお姉さまに囲まれるわ、彼女います宣言するわだか
ら、そりや噂にもなるわな。

お姉さま方は、俺があまりに素直に認めたから、からかう気にな
らなかつたらしい。

「そりや残念」

「なんだー、できちゃったのかー」

「フリーだと思ったから優しくしてやったのに、裏切られちゃった
わね」

「まあしゃあない、妬くな妬くな」

口々にいいながら、意外にも俺に絡むことなく教室から出て行こ
うとした。

「まあ」

と一人が俺を見ながらいう。

「その彼女に振られたらいつでもおいで。お姉さまがじっくり慰め
てあげるから」

恐らく、綾華さんと知り合う前の俺がこんな会話の相手にされた
ら、舞い上がって身動き一つできなくなっていたと思う。

でも、俺も綾華さんと知り合い、色々珍しい経験をして、さらに
由紀といういろあつて、短い間でもそれなりに成長なんかしちゃっ

てたりしたのかもしれない。

「そうならないようにします。ありがとうございます」
すつとそんな言葉が出た。

お姉さま方は、そういう俺の様子に、何かを感じたらしい。

「がんばってねー」

「泣かすんじゃないぞ」

「ここまでしといて泣かしたらリンチっしょ」

「天に代わってあたしらがたたき殺すっての」

何やら恐ろしいセリフを吐きながら、それでも笑顔で去っていった。

そして俺は。

野次馬たちの質問攻めにあう前に、とっとその場を逃げ出すことにした。

お姉さま方の一件があり、あわてて弁当を持って由紀と待ち合わせていた校庭近くの芝生に行くと、由紀は小さな弁当箱をひざの上に載せて、ちょこんと座って待っていた。

今着いたばかりのはずなのに、今まで何時間も健気に待っていて、まじまじとした雰囲気を感じるっていうのは、由紀がそういう空気を身にまとっているのか、それとも俺が負い目のようなものを感じているからなのか、謎。

俺が着くと、由紀はわずかに笑顔を見せ、それからうつむいた。まだお姉さま方の件をひきずっているのか、単に照れているだけなのか。俺にはまだそれがわかるほど由紀との経験がない。

「ごめん、待たせたね。俺も腹減った、さっさと食べちゃおう」
肩と肩が触れ合うくらいに近付いて座ると、由紀の体がぴくんと揺れたのがわかる。

本当にこの子は俺のことが好きなんだよね？　大丈夫だよな？
自信持っていていいんだよね？

俺の内心の葛藤に由紀が気付くはずもなく、気付かれたらそれはそれで怖いんだけど、由紀は明らかに緊張した様子で弁当を開けている。

ここでいきなり自分の不安を説明しだすのもなんなので、俺は仕方なしに弁当を開けた。

「…………ごめんなさい」
箸を出して京水菜のおひたしから手をつけようとしていた俺に、由紀がいきなり謝った。

今度は何でしょう。
思いつきり不安になりながら俺が由紀を見ると、至近距離でうつむいていた由紀が、ぼそぼそと喋る。

「…………本当は晃彦くんのお弁当も作ってきたかったんですけど、昨

日の夜はもう下ごしらえもできなかったし、今朝はちょっと寝過ぎちゃって……」

由紀は肩を震わせている。

「べ、別にそれは……俺が頼んでたならともかく、謝ることじゃないでしょ」

なぜそこで震える。泣いてたりとかしてたら手に負えないんですけど。

俺はひどく動揺していたんだけど、それが伝わったかどうか。

由紀が顔を上げた。

「昨夜、すごくうれしかったから……何かしたかったです、でもできなくて悔しくて」

珍しく俺の目をまっすぐ見てそうだった由紀の顔は、泣いているような、微笑んでいるような、微妙な顔だった。

俺のせいっちゃ俺のせいだけれど、でも俺のせいじゃないらしいことがわかったから、俺はほっとした。

「ああ、そういう……その気持ちだけでもうれしいよ」

思わず由紀の頭をなでていた。しまった、と思ったのは、髪に手が触れてから。つい、機嫌が微妙な位置にあるときの妹や従姉妹をあやす場合の癖が出てしまった。

一度触れてから手を引つ込めたらなおさら傷つくかと思った俺は、反射的に引つ込めようとした手を強引にそのままにし、なで続けることにした。

「そんな風に考えてくれてたのに、いきなりあのお姉さま方の光景見りゃそりゃ逃げ出したくなるのはわかるけど」

と、思わずなでてしまったのをフォローしようとして、俺は自分から派手に地雷原に踏み込んでいった。もちろん気付いたのは口にした後。

馬鹿か俺はああああああなぜ蒸し返すううううううううううううううう、と内心絶叫しつつも、突っ込んでしまった以上、地雷原から抜け出すにはひとつしか手がないこともわかっていた。そ

う、方向だけは間違わず、突き抜けていくしかない。

どうせ、いずれ触れなければならなかった話題。タイミング的にどうかとは思うが、こうなってしまうえば今行くしかない。

「あの人たちは綾華さんの友達だよ。彼女がいない俺を面白がってからかっていただけ。由紀のこと説明したらあっさり引き下がってくれた。だから大丈夫。綾華さんが友達にしてくるくらいなんだから、わかるだろ？」

じつと身を固くして頭をなでられている由紀の顔は、俺からは見えない。でも、多分嫌がられていないことだけは何となくわかる。頭をなでられていて、ひたすら身を縮めていたら十中八九嫌がっている。でも、身を締めつつも、こちらの手の動きにあわせて頭が前後に揺れるようなら大丈夫。それが妹や従姉妹との経験上学んだこと。

「由紀はもつと自信持っていないよ」

といいつつ、俺は手を止めた。ちょうど由紀の首の辺りに手を当てている。

由紀がゆっくり顔を上げ、俺を見る。ほほが上気しているのがわかる。耳も赤い。色が白いから、血が透けていて、赤くなるとすぐにわかる。

「生まれて初めて俺が好きになった相手なんだから。大丈夫。由紀しか見てないよ」

後から考えると、よくまあそんな恥ずかしいセリフを平気な顔していったもんだけれど、どうも必死になるとどことなくさい言葉でも平気でいってしまう面の皮の厚さが俺にはあるらしい。

いわれた方の由紀は、メガネ越しにも目が潤んでいるのがわかった。もともと潤んでいたのか、たった今潤んだのかはわからないけれど、それがものすごく愛しく思えたのは確か。

「……」

由紀はしばらく何かいいたそうにしていたけれど、何もいわないまま、つい、と視線を切った。

そして、そのまま俺にもたれかかった。

おっと、これはお許しが出来たってことか？ 胸に由紀の重さばかり、髪からおそらくはコンディショナーと由紀自身の香りが混じったものが鼻にかかり、俺は陶然とした。こいつぁいいね。

ひざに弁当が乗っている状況で抱きしめるわけにも行かず、俺はさっきまで由紀の頭をなでていた手で、肩を抱くようにした。由紀は肩をきゅっとすばめるようにして、俺にくっついていてる。

「……ありがとう、すごくうれしいです」

「そりゃ良かった」

「もっと好きになっちゃいますけど、いいんですか？」

「というと？」

「私、もしかしたら怖い女かもしれませんよ？ 他の女の子と話してるだけで刃物持ち出しちゃうとか」

「スプラッターな恋愛できそうだね、それ」

「他の女の子と一緒にのところ見ただけで、脅迫状書いちゃったりとか」

「血染めの文字とかだったらホラーだねえ」

「ストーリーになっちゃうかもしれません。毎日じーっと部屋の外から監視しちやつたり」

「由紀の場合はたぶん門限に引つかかって無理なんじゃないだろうか」

「まじめに分析して突っ込まないでくださいよ」

「おお、空気読んでなかった、ネタかこれ」

多分初めて彼女とぽんぽん言葉の交換が出来ていた。それが嬉しかったから、間違いなくこの瞬間の俺はにやけている。

由紀も、肩からいつの間にか力が抜けて、さっきとは違う震えが肩から伝わってきた。由紀は、笑っていた。

「私、実際、すごくめんどくさい女だと思います。自分でもわかってます」

笑いを納めた彼女がいう。肩に力は入っていない。俺は黙って聞く。

「みんなみたいに、明るく話なんかできません。さっきの先輩たちみたいに楽しくなんかできません。すぐ逃げちゃうし、調子に乗っちゃうし、『晃彦くんに気を使わせて何様なの私』って思うけど、結局同じようなことしちゃうし」

俺は何もいわないまま、肩を抱く力を一瞬だけ強めた。聞いているよ、といううなずきのつもり。

「自信なんか持てないです。地味だけが特徴の女なんて、晃彦くんには似合わないと思うし。でも」

由紀は、肩を抱く俺の手に自分の手を重ねた。

「晃彦くん、いつも私を褒めてくれるし、勇気もくれるから……」

由紀は一呼吸入れ、続けた。

「ちよつとだけ、自惚れてみます。晃彦くんの彼女なんだって。晃彦くんを選んでもらえたのは私なんだぞって」

「そうして」

嬉しくなつて、俺は由紀の頭、頭頂部より少し下がった耳の上辺りにキスをした。

「あ」

由紀が首をすくめる。

「ずるいよ、自分だけ」

と意外な抗議をしてくるから、抱いていた肩を離して一度体を起こし、逆の手であごに触れながら由紀の目を見た。

由紀はわずかに抵抗しそうになったものの、ひざの上に弁当箱に邪魔された拳句、自分がたった今「うぬぼれます」宣言したの思い出したようで、おとなしく目を閉じた。

安心して、キスをした。

ごく短いキスだった。

もう終わり？ という気配を感じつつも体を離れたのは、俺の方。気付いてしまったからだ。唇が触れた瞬間に。

今は昼休み。

場所は校庭近くの芝生の上。

朝晩は多少寒い時期になっているとはいえ、昼間はむしろ過ごしやすい季節。

そりゃあ昼飯時にもなれば、人はたくさんいるわけですよ。

その中の何人が俺たちの存在を目に入れているかなんか知ったことじゃないけれど、どう見てもこの光景はバカッフル全開。今の今までこんなシチュエーションに自分が置かれるなんて考えたこともない童貞君としては、この状況、気付いてしまえば恥ずかしいことこの上ない。

俺の雰囲気ではつと周囲の状況に気付いたらしく、完全に二人の世界、忘我の境地にいた俺たちは、いきなり現実世界に引き戻されることになった。

「こ、怖いね、周りが見えなくなるのって」

と俺がいえば、

「ごめんなさい、完全に忘れてた……」

と由紀が謝る。

何しろ恋愛経験が乏しい二人なので、これから先どれだけ恥をかくか、今から空恐ろしい気がする。

とりあえず今は、弁当を食べてしまうことに集中することにした。

という状況を、この人はじかに見ていたというから驚きだ。

「いやあ、人の目も気にせずいちゃいちゃし始めたと思ったら、いきなり我に返って弁当食べだすんだもん、初々しすぎてもう、おばちゃんは見てらんなかったわよう」

放課後に文化祭実行委員として集まったはずの綾華さんに、二人はげらげらと大笑いされてしまった。

「録画しとくんだった！ しまった！ せっかく携帯のメモリーカ

ード買い換えたばつかなのに！ 綾華一生の不覚っ！」

「渡辺謙さんですかあなたは」

「お、独眼流正宗のネタを見抜くとは通だねえ」

「むしろ今の突っ込みでその反応が返ってくるあなたの年齢が聞きたい」

「17よ？　ぴっちぴちの17歳よ？　せぶんちーんよ？」

「あーほんとにおばさんだよこの人」

「ちよつとー、由紀、こいつ生意気すぎるんだけどさあ、どうにかなんないの？」

「わ、私ですか」

「あんたでしょー、旦那の教育は奥さんの責任よ？」

「お、お、おく、」

「まだ結婚してないんすけどね、つーか付き合いはいじめて1日で教育の責任でどんだけシビアなんすか」

「女の甲斐性よ、男なんて付き合い始めた瞬間からその女に隷属するものなの。わかる？」

「その通りだとは思いますが、わざわざ由紀をいじるためだけにその表現選んでません？」

「あら、わかるう？」

「目が語ってますぜおばはん」

「だってえ、由紀ちゃんってば、恋が実ったらおっそろしく可愛くなっちゃってるんだもん、いじらにや損でしょ」

「か、かわ、かわいく」

「落ち着け由紀、つーかこの人の表現にいちいち振り回されるな、この人が喜ぶだけだ」

よりによってこの人に目撃されるとは。

基本的には幸せなんだけれど、なんだか納得行かない気もする俺だった。

文化祭実行委員の仕事の方は、ここに来て軌道に乗り始めた。

一番大きかったのは、生徒指導主任の教師が俺たちの側についてたこと。

「ここまで入念に準備したり計画持ち込んできた奴は久しぶりだ」

俺が別の交渉ごとで生徒会にかけあいに行っている間、生徒指導主任にかけあいに行ってくれたのは綾華さんだった。あたしの方が教師には顔利くでしょ、という理由だ。

そして、行った先でそんな風に褒められて、

「しかもその相手がお前ときたら嬉しくてねえ」

と涙ぐまれたらしい。ちなみに生徒指導主任はこの前孫が生まれただばかりの新米おばあちゃん、成績はいいが素行がよろしくない綾華さんとは色々あったらしい。

「やったのはあたしじゃないよ」

と綾華さんがいうと、

「聞いているよ、1年生と組んでやってるんだって？ こういうのはチームプレイなんだ、誰かががんばってるだけじゃうまく動かない。お前もやるべきことをやっているからチームが動いているんだろう」といわれ、さらにチームプレイのことだけで8分間ほどお話が続いたらしい。

戻ってきたときには、今まで見た最大級の疲労困憊ぶりだった。

「もーあいつのところには行かん」

自分で行くといっておきながら、とは思ったけれど、俺も由紀も何もいわない。すっかり生徒指導主任をたらしこんで、こちらの計画以上の収穫を得てくれた功労者なのだから。

まず、俺たちが管理することになっていた資材関係の貸出申請は、来週中に提出された分のみの受付にされるよう、生徒指導主任が請け合ってくれた。つまり、文化祭開催間際になつての駆け込み申請

は認めないということ、それだけこっちの資材管理や購入に伴う予算管理が楽になる。

これは生徒会の権限で決められることのようにいて、意外にそうでもないらしい。綾華さんがいうには「教師に泣きついてねじ込んでくる馬鹿が出るに決まってる」それで、生徒指導主任にこれを認めさせるということは、そういう「馬鹿とそれにだまされるもつと馬鹿な教師」の出現を防げるらしい。

とはいっても、ぎりぎりまでがんばったところで「どうしても足りない！」となるところも出てくるだろう。それを救うための予備予算も、全体の予算の概算を綾華さんに持たせたのが良かったのか、「この枠内なら学校の予備費から出すよ」とお墨付きをもらった。しかも、あえて吹っかけた概算要求そのままの金額で。

「ただし生徒会の会計には話を通しなさいよ」

と注が付いたそうだが、そこは大丈夫。なぜなら、その話を通すべく、俺は綾華さんに生徒指導主任を任せ、生徒会会計に直談判しに行ったのだから。

なぜか俺のことを気に入ってくれている生徒会会計氏は、俺たちの計画案を見ながら、「予備費が学校側から出れば助かるなあ」と簡単に承認してくれた。

「でも、生徒会費以外の資金が入れば、当然監査の対象になりますけれど」

一応、マイナスポイントもいってみると、先輩はごく気軽に答えた。

「企業の外部監査じゃあるまいし、出納さえしっかりしてれば問題ないよ」

それに、と付け加える。

「僕が指摘する前から、監査の対象になることまでわかってる奴が管理するんだ。何か問題があるのかい？」

やっぱりこの人は面白い、と思わせるに充分な、余裕のありすぎる先輩だった。

そして、生徒指導主任がこの件を請け合ったことによって、自動

的に各クラスに、資材関係の申し込みやそれに先立つ出し物の計画案提出を急ぐよう、教師側から一斉に通知が出されることになった。正式にそうなったわけじゃないけれど、自分が担任しているクラスが万が一遅れでもしたら、生徒指導主任という校長・副校長に次ぐ実力者が認めた期限を破ることになる。非常にまずいわけだ、教師の立場的に。

「どこからこのアイデアを思いついた？ 僕はむしろそこに興味がある」

会計の先輩は真顔で聞いてきた。生徒会費以外の財源を導入するアイデアも、期限を守らせるために生徒指導主任を引き込もうというアイデアも、これまでの生徒会には無かった発想だった。

「まだ交渉に行ってるだけで、成功してませんけれども」

そう、この話をしている時点ではまだ成功してない。でも、先輩には成功しようがすまいが関係ない。アイデアの源を知りたがった。

「3人です。3人で話してて、そういう話で盛り上がって」

「あの永野もか」

「永野もか、というより、あの人がメインですよ。最初校長のところに乗り込むとか無茶いつてましたけれど」

「そりゃ無茶だな。事なかれ主義が服着て歩いてるような爺さんだ。生徒指導主任に目をつけたのは見事だと思うぞ」

「ですかね」

「最良の人選だろう。それも永野が？」

「そうです。俺たちは生徒会担当しか頭に無かったんですけれど、綾華さんが自分で行くからこいつがいいとかいって」

「あいつがねえ」

先輩は遠い目になった。上級生でもある先輩には、色々と綾華さんについての事件の記憶やまことしやかな噂話の記憶が積み重なっていて、感慨深いらしい。

「生徒会なんてのは、本気でやる奴が損をするようにできているん

だ。悲しいことに。でも、成果を出せば、それが人に認められなくても楽しかったって自己完結できる奴にとっては、いい遊び場になると思う」

自分がそうだから、とはいわなかったけれど、この先輩、どこまで大人なのか。俺たちの渾身のアイデアを容易に理解した上で認める度量といい、物事の捉え方の深さといい、とても高校生とは思えない。

それをいうと、先輩は苦笑していた。

「いずれお前も同じことをいわれることになりそうだな、苦勞人くん」

苦勞人呼ばわれされた俺だけれど、仕事は実に楽しかった。

なにしろ、できたばかりのかわいい彼女と、できる経緯をしつかり見届けた上に祝福してくれる美人の先輩と、3人でわいわい仕事ができる。これで楽しくない男がいるわけがない。

が。

好事魔多し。

俺には幸運より、凶事の方がお似合いらしい。

人々の中に埋没して、個性らしい個性も無く、目立たず大人しくさえ生きていればいい、底辺を這いずり回るべき存在の俺が、いちよまえに彼女なんぞ作ってバカッブルを楽しんでしまった罰が下ったのかもしれない。

まず起きたのは、事故。

資材申請が早くも行われ、教室内を区切るパーテーションとして使う大きなベニヤ板が貸し出されることになった。

そのクラスの担当と俺が、生徒会室の隣にある資材置き場からベニヤ板を運び出し、さらにそれを支える足になる金属板を取り出そ

うとしているときに、事故は起こった。

まだ資材置き場には物があふれていて、これを数えるのに俺たち3人は死ぬ思いをしたわけだけれど、それらのうち必要なものだけを取り出そうとするとちよつと無理がある。

「あれを出してここをこう移動すれば出せるんじゃない？」

などとパズルゲームのような資材出しが必要になる。

それをやっているうちに、誰が置いたかはわからないけれど、明らかに資材出しの動線上に、ペンキが入った小さな缶が置かれた。

看板用のベニヤ板を一時的に出すべく、俺とクラス担当とが一緒に板を持ち上げ、移動を開始したとき、不運なクラス担当はそのペンキの缶に脚をとられた。

転ばないように踏ん張った彼は、看板の板に思いっきり体重をかけてしまった。その片一方を持っていた俺に、当然ながら思いっきり加重がかかる。

クラス担当の「うおおおっ」という声は聞こえていたけれど、何が起こったかまではわからないから、突然かかってきた妙な加重に、俺は耐え切れなかった。そのまま後ろに倒れこみそうになる。

そのままじゃ怪我をする、と判断したのか、俺の体は何も考えずにその板を投げ飛ばすようにして離れていた。気が付いた時には俺は尻餅をついていた。

そこまではまあ良かったんだけど、悪かったのは、看板用のその板から俺の支えが消えたことで、クラス担当が派手にこけたことだった。

その動きのおかげで看板用の板が飛び、資材置き場の扉の窓ガラスを割ってしまった。

そのガラスが、俺のすぐ頭上。

ガラス片が飛び散り、大きな衝撃音と共に近くにいた女子の悲鳴が響き渡った。

「そんな叫ばんでも……」

と思つた俺だけれど、その叫び声はべつに大きな音に驚いたから

じゃないということに気付くまで、少々時間がかかった。

「佐藤、お前、大丈夫かよ」

「ええ、まあ、お尻は痛いっすけど」

「いや、そうじゃなくて」

「？」

本当にわかっていなかったのだけれど、次の瞬間、なぜそんなことをいわれるのか理解できた。

落ちていたガラス片で手など切らないように気をつけながら立ち上がった俺は、いきなり目に何かが入ってきてびっくりした。思わず何かが入った右目を閉じ、下を向いて目に手を当て、そして開いている左目に写った光景を見て、すべてを悟った。

血痕があった。それもきわめて新鮮な。

さらにいえば、そいつは増えていた。ぼたぼたと、俺の頭から落ちていたんだ。

「あー……なるほど、こりゃあ大丈夫には見えないわなあ」

本人はこういうとき意外に冷静だ。周りの方が大騒ぎしていた。

「頭は大げさに血が出るだけだから、大丈夫ですよ」

と俺がいったところで、誰も聞いちゃいない。

「保健室！ 保健室！」

「タンカ！ タンカ！」

「救急車！ 救急車！」

「先生呼べ！ 先生呼べ！」

なぜああいうとき、人は短い言葉を2回繰り返すのだろう。不思議である。

「いや、そんな大げさな……自分で保健室行くから大丈夫ですって」

「いやあああああ」

「怪我してない奴が叫ぶんじゃないよ、うるさいなあ」

たぶん雰囲気吞まれて叫ばずにいられなかったらしい女子に思わず突っ込んだりもしたけれど、本当にこの場面、落ち着いているのが俺だけだった。

これ以上パニックになられても損するのは俺だけなので……理不尽だが……俺はその場にいる全員を見捨てて、とつとと保健室に向かうことにした。後片付けなんぞ知るか、血痕なんぞ誰かが拭いかけ。

というタイミングで現れたのが、まさに絶妙なタイミングで現れてくれたのが、我が愛する姫君だった。

血だらけでずんずん歩いてくる俺の姿を、ちょうど別の仕事が終わって手伝いに来たらしい由紀が見つけた。

最初はメガネの奥の目と口をまん丸にして、次に出そうになった悲鳴をとっさにこらえ、それから駆け寄って抱きつこうとした。

俺は目で止めた。今抱きつかれたら、由紀の制服まで血だらけになる。

後の由紀がいうには「狩の後の肉食獣みたいな目で、近付いたら殺されると思」ったんだそうだ。目に血が入った後だったから、たぶんまともに開いてない目で無理やり由紀を見ていたからだと思う。「私もあの時は泣きそうになってましたけど、あの目を見たらそれを通り越してひきつけを起こしそうになりました」

と付け加えてくれて、聞いていた綾華さんが腹痛を起こすほど大笑いしてくれていたけれど、まあ、それは大したことじゃない。本当の事件はその後に起こった。

田舎の学校だから、怖いお兄さんなんて掃いて捨てて燃やしてもまだ出てくるほどいる。校内だけじゃない。学校の外に出れば、女子を狙っているのかただの暇つぶしなのか、車でその辺りを徘徊している怖いお兄さん方の姿は、それほど珍しい光景ってわけでもない。

俺の場合、なぜかそういう筋かそれに近い先輩方と付き合いがあったり、そういう筋の先輩方が畏敬する方に可愛がられていたり、本人の意思に関係なくそういう方々と顔見知りなケースが多かったりした。

バイト先でお世話になっているカケスさんは、現役の不良たちにとつては伝説的な存在で、やくざの世界に進んでいればあるいは大立者になっていたかもしれない。今じゃただの子煩悩パパだけれど、その人に可愛がられているというだけで、俺はだいぶこの学校で生きやすかった。自分からは何もせず、単に親父の知り合いという縁だけでそんな風になってしまっている俺は、相当運がいいんだろう。

でも、別に俺がそういう社会での有名人かということそんなことは無いわけで、同じ学校の先輩方の一部に「まあそんな奴もいる」という程度に覚えてもらっているという話。

頭に大げさな包帯を巻かれてしまった俺は、帰るのも気が重かった。たぶん、大騒ぎされるに違いない。

過保護な親ではないけれど、さすがに帰ってきた息子が包帯巻きで帰ってきたら、人並みには驚くだろう。

あの後は大変だった。

学校側に見れば、遊んでいたというならともかく、校内で生

徒会の職務で動いている中での負傷だから、下手したら管理責任を問われる事態。俺が保健室にのこのこ歩いていったら、たまたま通りかかった教師がこつちがびっくりするくらい大騒ぎしてくれた。

まずは病院へ、という話になったけれど、自分でももう血が止まりかけているのがわかっていたから、傷は大したことがないだろうと高をくくっていた。保健教諭がすぐに傷の具合を見たけれど、さすがに場慣れしているだけあって、少しも騒がず、「なめときや治る。自分じゃなめられんだろうから彼女にでもなめてもらっとけ」という、高校生にいうには少しきわどすぎる冗談を飛ばしていた。

それでも大事をとってということ、教師側のたつての願いで、俺の頭にはおおげさな包帯が巻かれてしまった。

「傷は大したことはないけれども、傷口が開くと出血が大きくなる。後始末も大変だし、化膿しないように注意も必要だ」

ということ、俺には傷口がふさがるまでの洗髪禁止令と、運動禁止令が下されてしまった。

運動禁止って。

既に通学が充分な運動だと思うんですよ。丘の上にある学校目指して自転車こぐってこと自体が。

「なんとかしろ。傷がきれいにふさがればともかく、変に化膿なんかしてみる。異臭はするわ痛みはひどいわ、もつといえはその辺りから毛が生えなくなるぞ」

それは大問題だ。怪我したのは右側頭部、思いつきり髪の中。別に目立つ場所じゃないけれど、自然に生えなくなるまでは生えていてもらわんと。

まあ、自分の不注意もあつての怪我なので文句はいえない。

「しばらく自転車以外で考えてみます」

自転車以外というと、歩くかバスか。ただ、田舎のこと。家からバス停が遠い上に本数が少ない。

電車、と都会人なら考えるんだろうけれど、残念ながらうちの高校と、家から近い駅の鉄道路線とは、接点がない。

車で送り迎えしてもらおう当ても無いし。うちは両親共働きで、残念ながら兄や姉もいない。

「本数少ないバスに頼るしかないか」

保健室から出た俺がため息をつくとき、治療中ずっと保健室の隅にいた由紀が、俺の背中にくつついてきた。

いや、くつつくというほど大胆なことはしていない。

俺の制服のすそをつまんで、軽く引つ張っていた。その距離が非常に近いというだけ。

「すごい心配しました」

「ごめん、不注意だったわ」

「怪我のこともあるんだけど……」

「？」

よくよく理由を聞いてみたら、怪我をした直後、俺にすさまじい形相で睨まれた時のことをいつているらしい。

いや、睨んだつもりは無いんだって。あれはそういう目になっちゃっただけであって。

そういう俺の思いは百も承知のようで。

「事情はわかってても、あの目が怖かったのは事実ですから」

と由紀は譲らない。怒っているというより、かまってほしいだけにも見える。

そこでふと気付く。ああ、由紀はもう帰る時間か。

怪我をした時点で時間は5時を回っていた。保健室でこたごたとして、既に時計は6時を回っている。由紀はつい最近熱を出して寝込んだ前科があるから、家族が、特に父親がひどく心配していた。

門限は基本7時。

「早く帰らないと、その目より怖い人が待ってるんじゃないの？」

俺は何も考えずに、ただ頭に浮かんできたことをそのまま口にした。

とたんに、制服を強く引つ張られた。ぐいっと上半身が後ろに傾く。

「私は早く帰ってことですか？」

声が平板。あ、怒ってる。

「そういう意味じゃないよ」

できるだけ気楽そうにいう。フォローは限りなく早く、そして相手の先回りをしてこそ。

「これから長く付き合っていくためには、周りから認められないとさ。まずは由紀んちで一番怖そうな人からも信頼してもらえないようにしないと」

さも思慮深く聞こえる発言だけれど、もちろん今考えて出てきたセリフ。

もつとも、うそじゃない。いつてから、「その通りだな」と自分でも納得できた。

「ずっと一緒にいたいなら、最初が肝心でしょ？」

いいつつ、由紀の手を握る。由紀は、手を握られた瞬間に体をぴくんと震わせ、それからうつむいて、俺が握る手をきゅっと握り返してきた。

「ずるいよ……」

「へ？」

突然何を言い出すのか、俺が首をかしげると、由紀はうつむいたまま俺の胸元辺りを見て、ぼそっとつぶやいた。

「そんなこといわれたら、帰りたくないなんてわがまま、いえなくなっちゃいます」

なにをかわいらしいことをっ！　ずるいのはどっちですかと問いたい。

送るといったら、逆に怒られた。

結局今日は親父が迎えに来るまでの間、学校で待つことになったんだけど、その間は暇だから途中くらいまで由紀を送ろうとした

ら、

「けが人は今日くらい大人しくしてなさい」
と怒られてしまった。

その怒り方が妙にかわいらしかったので、もうちょっと怒らせてみたかったんだけど、多分それをいっただらしく口をきいてくれなくなりそうだったから、諦めた。

で、待つてたわけだ。親父を。

携帯で話した時の親父の反応は、さすがに俺の親だった。

「頭は大げさに血が出るからな。噴き出してるんでもなければ心配いらんよ」

俺と同じようなことをいつている。さらに続けて出たセリフが止めを刺した。

「母さんが見たら大騒ぎするだろうな。覚悟はしておけ」

親父も、俺の想像が見せた風景が同じように見えていたらしい。

「仕事が終わって迎えに行けるのは8時過ぎになる。それまで待つていられるか」

「書類仕事がいくらでもあるし、やってるうちにそのくらいになっちゃうと思うよ」

「学校はまだ閉まらないのか」

「受験組の自習室が9時までやってるからね」

「わかった、待つていろ」

実際に書類仕事をやっていると、時間が経つのは早かった。

何枚かリストや申請書の処理をしているうちに時間が過ぎ、いつの間にか8時を回っていた。

今日は綾華さんはいない。生徒指導主任との談判が意外なほど体力を消耗させたようで、「今日帰ってもいい？」と珍しい申し出があった。「もうやめるー」「むりー」とはいつても、「もう帰るー」とはなかなかいわない人なのだ。

何しろ大功労者なので速やかにお帰しした。

ただ、書類仕事に限っていえば、いない方がはかどるのも確か。

こんなものは黙々と一人でやるに限る。綾華さんがいると漫才が始まってちつとも前に進まない。

それでも8時を過ぎるとさすがに疲れてきたので、俺は片付けて帰り支度をしてしまうことにした。

親父が来るまでどれだけかかるかわからないけれど、なんとなく外にしていることにした。深い理由は無くて、この日はすっきりと晴れた日だったから、外に出て風に当たっていても気持ちいいかな、なと思っただけ。

昇降口から外に出ると、朝晩がすっかり涼しくなった10月中旬、乾燥した風は適度に体温を奪っていった、気持ち良かった。

ただ、時間が経つてくると、傷がじんじん痛んでくるのには参った。傷が熱を持ち始めたようで、鼓動にあわせてずきずきと痛む。一人で顔をしかめつつ、俺はぶらぶらと学校の敷地の周辺を歩くことにした。

「おい」

と声をかけられたとき、俺は正面門から100メートルほど離れたところにある石碑を見ていた。

静かだけど重い車のエンジンノイズに紛れた呼びかけに、俺が振り返ると、目の前には、俺が10年バイトした金額を全部つぎ込んで買えないと思われる高級車と、左ハンドルであるがゆえに声をかけやすいところに座っているドライバーのお兄さん。

少なくとも見覚えのある人ではなかったから、俺を呼んだのは人違いじゃないかと思ってまわりを見たけれど、残念なことに、この近辺にはそもそも人間が俺くらいいいしかなかった。

「お前だよ」

ドライバー氏は苛立つようにいった。

「俺、ですか」

間の抜けた声だっただろう。自分でも思ったくらいだから、相手

にはずいぶん気が抜けた声に聞こえただろう。

「お前、佐藤晃彦か」

自分の名前を聞いた瞬間、俺はさすがに身の危険を感じた。普通、悪意でもなければ、わざわざ人の名前を確認してはこないものだろう。

違います、とすつとぼけようとも思っただけで、それは即座に断念した。

助手席に、知った顔がいた。

忘れもしない。

綾華さんと知り合ったばかりのとき、いきなり朝っぱらから人の目の前で指を突き立て、調子に乗るなといい放ったあの女。

こりゃ面倒な目に遭いそうだと、いくら鈍い俺でも、勘付かざるを得なかった。

この時、俺は明らかに機嫌が悪かった。

一日で色々仕事をこなして疲れていたし、何より、傷が痛む。徐々にいらいらしてきていた、というのがこの時の俺。

「少し顔を借りるぞ」

と左ハンドルの車の運転席から、ややすごむような口調でいわれたけれど、普段の俺ならびびってすぐに従っていたと思う。

けれど、この時ばかりはそうはならなかった。

疲れて頭が働かなかったせいもあって、俺は鈍く返答しただけだった。

「はい？」

その返事が出たのにはもつと理由がある。

まずひとつ目。相手が、体格的には俺より線が細そうに見えたこと。男は常に、無意識のうちに相手の肉体的強健さを測って自分と比較する生き物なのだ。

ふたつ目。男の態度がどう考えても俺に敵意むき出しだったこと。敵意を向けてくる相手に友好的になつてやらなきゃいけないような規則も法もないし、俺は絶対平和主義者でもない。

三つ目。綾華さんとの仲を勝手に疑って人を潰そうとした馬鹿女が隣にいたこと。そしてその女が意地悪そうな笑みを浮かべていたこと。

「何とぼけてんだ、ふざけんじゃねえぞ」

年齢は20代半ばというところか。大学生というにはちょっと世間ずれした感じがする。高校一年の小僧に喧嘩を売れる程度には若いらしい。

「はあ」

俺はさすがに痛む頭の傷を気にしつつ、気の抜けた返事を繰り返す。

それがますます相手の怒気を誘ったようで、運転席のドアが開いた。降りてくる気らしい。

「ちよつとー、やり過ぎないように気をつけてよー」

車の中から瘤に障る声がした。降りてくる男のやる気満々な姿といい、物騒この上ない。普段の俺ならびびって身動きが取れなくなっていただろうと思う。

確かに身動きはとらなかったけれど、理由は違う。

けが人の癖に、奇跡的なことに、この時の俺は迎え撃つ気満々だったんだ。

「答えによっちゃただじゃすまさない。覚悟して答えろよ」

男は俺を下から突き上げるような目で睨みつけた。身長は175センチくらいだろうか。俺より少し低いくらい。体格は俺とどっこいという感じに見える。立ってみると筋肉質な体つきが目立つ。

「はあ」

俺にはまともに答える気もなかったから、いい加減に声を出した。

「お前、永野綾華とはどういう関係だ」

意外な名前、とは思わなかった。

助手席に乗って余裕かましている馬鹿女は、綾華さんならみでしか記憶に残っていないから、むしろその名前が出てきて当然という気がしていた。

「はあ？」

たぶん相手を刺激するだろうな、とはわかっていても、いらいらが募っていたから、そういう返事になる。

「答えろ」

相手はすごんだ。ちよつと肩を揺らせば触れそうなくらいに近付いている。脅し合い、虚勢の張り合いに慣れた人種の動作だと思った。

「どういって、先輩と後輩ですけれど」

「それにしちゃあ随分なれなくしてるそうじゃねえか」

「そう見えますかね」

「とぼけてんじゃねえ、綾華とお前が日曜に会ってるのを見た奴がいるんだよ」

あ、と思った。

やっぱり、見られていたんだ。

あの時は由紀のことしか頭に浮かばなかったけれど、それ以外にも気にすべき人がいたらしい。

この思考が顔に出たのか、男は低い声でいった。

「心当たり、あるみたいじゃねえか」

「まさかとは思っけれど」

と、俺はその男の言葉にかぶせるように大きな声を出した。

土木の現場で鍛えた……というか鍛えないと引っぱたかれるから鍛えた声は、重機の轟音にかき消されない程度には大きくないという意味がない。車のアイドリング音程度じゃ俺の声は少しも覆えなかった。

男の姿勢がややぐらつく。半歩、後ろに下がった。

「あんた、綾華さんの彼氏じゃないよな」

そうでないことを祈る、くらいの感じでいつてみたんだけど、

男は俺の言葉に、ぐっと一度息を飲んだ後、

「綾華を名前で呼ぶんじゃねえ」

とすごんできた。

俺はいい加減頭に血が上っていたから、明らかに自分より強そうな相手でもない限り、中途半端な脅しはかえっていらいらに火を注ぐだけだった。

「なんで名前も知らないような奴に」

俺はついつとあごを上げて、思い切り相手を見下した。同時に一歩踏み出す。

「んなこといわれなきゃならないんだ？」

男は異常に強気な俺の態度に、気圧されたらしい。思わず二歩引いた。

どう考えても素行が悪い先輩方や、不良と呼ばれることに何の違

和感も持たない人々と付き合っていると、いやでもこういうときの対処法を知ることになる。頭に血が上っていても、その知識は出てきた。

「ふざけるな！」

本気で相手を脅すときは低い声で。喧嘩を売るときはでかい声で。今出せる最大限の怒鳴り声が俺の口から出た。

男はまさかそんな展開になるなんて想像もしていなかったらしく、思わずさらに後ずさり、自分の車に寄りかかる姿勢になった。

ここで追い込むのはセオリーだ。余裕を与えてしまえば、相手を立ち直らせてしまう。

「綾華さんは、俺が好きな女のこととで悩んでいたのを察してくれただけだ。やましいことなんか何もない」

一歩、さらに一歩と相手に詰め寄る。目は相手の目から絶対に外さない。

相手の顔が、さっきまでの怒りの形相から、戸惑い、恐れ表情に変わりつつある。

俺はさらに畳みかけた。頭に上った血が勢いを加速させる。

「だいたい、それが人に物を聞く態度かよ」

ついに距離はゼロに近くなった。のけぞるように車に寄りかかっている男に、のしかかるように視線を下ろす。

「くだらない女乗せていきがってる割に礼儀を知らない奴だな。土方なめてると怪我じゃすまないってこと、知らないわけじゃないだろうが」

「その辺にしといてやれ」

ポン、と肩に手がかかったのはその瞬間だった。

苛立ちが最高潮に達していた俺が、睨みつけるようにしてそっちを向くと、その先によく知っている顔があった。

「か、カケスさん」

カケスさんが、そこにいた。バイト先の社員であり、親父の友人であり、俺の喧嘩の師匠。いや、習ったつもりはないけれども。

「お前がたくましくなったのは嬉しいがな、何も学校の横で喧嘩することはないだろう。場所を考えるんだな」

視界の中に親父の姿もある。

「あんたも喧嘩を売るなら相手を見てからにするんだな」

なにやら陰気な顔をしたカケスさんは、俺の肩越しに相手を見た。相手は、カケスさんのことを知っているらしい。

「掛巢さん、なんであなたが」

「ん？」

カケスさんは目を細めるようにして相手を見た後、俺を押しつけるようにした。

俺はもう毒気を抜かれてしまっていたし、そもそもカケスさん相手に怒りの発作を持続できるほど我も強くない。押されるままに横に移動した。

「なんだ？ 知り合いか？ 俺は知らんぞ？」

高校時代、あまりの凶暴さから近隣の不良たちを恐怖のどん底に叩き落したという、伝説の不良だ。カケスさんが知らなくても、相手が知っているということは充分ありえた。

現役時代から10年、多少横に広がったおかげで、たぶん迫力は以前にも増している。現場で一緒に働いているとただの気のいい兄さんだけれど、本気になったらどれだけ恐ろしい人か、不良上がりが多い同業者から数々の伝説を聞かされている身としては、むしろ迫られている相手に同情すら感じる。

「どうした？」

親父が、苦笑しながら近付いてきた。

「なんかよくわかんない。いきなり脅された」

「俺にはどう見てもお前が脅しているようにしか思えなかったがな」
「流れるにそうなったただだよ」

「まあ、お前から誰かを脅す度胸は無いか」

「その通りです」

俺も苦笑した。苛立ちは、きれいさっぱり消えていた。

「晃彦は俺の弟分だぞ？ 大恩人の息子さんだぞ？ 晃彦にいいがかりつけるとか、俺に喧嘩売ってるようなもんだぞ？」

すべて疑問系で迫るカケスさん。横顔がにやけているように見えるけれど、目も声もぜんぜん笑ってない。

怖すぎです。いやもうマジでちびりますって。

「何でカケスさんと一緒なの」

「あいつ以外は奥さんの実家にいるんだってさ。向こうの家の誰かが誕生日らしいんだけどな、女だけで宴会するから来るなとか何とかいわれたらしい」

「ああ、それで……」

陰気な顔をしていた理由がわかった。愛娘にまで「パパは来ないで」とか何とかいわれてしよげていたに違いない。娘関係以外で陰気になることなんかまず考えられない人だ。

「恐ろしく暗い声で仕事の電話してくるから、理由聞いてみたらかわいそうになつてな。一人で飲みに行ってもつまらんだろうからうちに呼んだ」

「今日は泊まり？」

「に、なるだろうな」

こんな親父のどこがいいのか、中肉中背でのほほんとしている顔つきしか記憶に残らないようなわが父を見つつ、カケスさんは親父のどこにああも惚れてるんだろう、と不思議な気分になった。

『なんか、ごめん』

電話がかかってきたのは、親父が運転する車でカケスさんと共に帰宅した1時間くらい後のこと。

「どうしたんすか」

柄にもなく暗い声の主は綾華さん。電話といっても、パソコンの無料メッセンジャーサービス。ヘッドレストマイクを使って話すんだけど、両耳から音が聞こえるから、息遣いなんかが意外と生々しい。

『馬鹿が馬鹿なこととして迷惑かけたようで』

綾華さんの口調は完全にため息交じりだった。

「迷惑ってほどじゃないですけどね」

むしろカケスさんに脅し上げられて、最後の方は哀れを誘った。

あの後、カケスさんはもう2分ほど相手をいじめていた。

大した時間じゃないように思ったら、それは大間違いというものです。あの人の視線を独占する2分間の長さったらあなた。

身動きもできない状態でうわごとのように「ごめんなさい」を連発する彼に、助け舟を出したのは親父だ。

「掛巢、もういいだろう。それ以上やると自殺しかねんぞ」

親父の口調も大概気楽なものだったけれど、カケスさんも大概だった。

「してもらっても構いませんがね」

へっへっと笑い声交じりに応え、その間も相手から目を離さない。

「阿呆、お前のせいならともかく、この場合うちの息子も関係者になっちまうだろうが」

親父がいうと、カケスさんは盲点を突かれたとでもいいかげな顔になった。

「ああ、なるほど。そりゃいかな」

そこでやっとカケスさんの体が彼から離れる。

一瞬、息をついた彼は、直後に今日一番の気を付けをすることになった。カケスさんがずっと顔を近付けたからだ。

「……もう一度晃彦に絡むようなことがあれば、どうなるかはわかるよな？」

わざとらしく、ありきたりな脅し文句を口にするカケスさん。脅すときはわかりやすい表現に限る、というのもカケス理論。

さらにカケスさんは入念だった。事情なんかこれっぽっちも話していないのに、大体の背景は見た瞬間にわかったらしい。

彼から体を離すと、運転席の扉を開け、そのまま乗り込んだ。

びつくりしたのは中の女だろう。ただでさえ、すぐ近くで自分を連れていた男が脅し上げられ、恐怖を味わっていたというのに、その恐怖の対象が自分のごくごく近くまで来てしまったのだから。俺なら2秒で漏らすね。

「さてお嬢。お前、何者だ」

ぎし、と車が揺れる。運転席にかかったカケスさんの荷重が、サスペンションを沈ませた。

「あ、あたしはかんけいな」

「関係ないとかほざいたらひねり潰すから、それなりの覚悟で答えるよ？」

鬼だ。この人は鬼だ。

当然ながら、女は何も答えられなくなった。カケスさんがどんな人か知らなくても、単純に、この人に凄まじければ怖い。まして小柄とっていい少女だ。

「どうせ外の男を焚きつけたか何かしたんだろうが、晃彦に何かいいたいことでもあるのか？」

女は恐怖に顔をゆがめたまま、ふるふると首を横に振った。

「なら、そんなにびびるこたあない。今日は大人しく帰れ。そして二度と晃彦にかかわるな」

カケスさんの警告、というより嫌がらせは堂に入っている。なら、という前にタバコを取り出し、ゆっくりとしゃべりつつライターを出し、火をつけた。そしていい終わると大きくタバコの煙を吸い込み、女に向かって盛大に吐き出した。

「わかるな？」

せきこむこともできず、女は首を今度は前後に振った。泣きそうな顔になっている。

「いい子だ」

カケスさんは大きな手で彼女の頭をぐりぐりとなでまわしてから、悠々と運転席を降りた。

「わりいな、車内禁煙だったか？」

などと、立つのがやつとという風情の男に声をかけ、それから俺たちのところに戻ってきた。

「お待たせです」

「悪かったね、收拾役なんぞさせてしまつて」

親父がいうと、カケスさんはタバコの煙を天に吐き出してから答える。

「構いませんよ。今日の晩飯代にしたって安いもんです」

そついうとにやつと笑った。

ちなみに、帰ると、母親の反応は、心配されたほど大げさじゃなかった。

包帯を巻いて帰ってきた俺の姿に面食らつてはいたけれど、親父がごく当たり前のことのように怪我の説明をすると、大して反応もせず、「髪が洗えなくても体は洗えるんでしょ？ 早くお風呂入っちゃいなさい」と命じ、台所に入っていた。

カケスさんもいるし、夕飯作りが忙しくて、俺のことに構ってい

る余裕が無かったのかもしれない。あるいは、傷のじんじんとした痛みを無視して俺がへらへら笑っていたのも良かったのかもしれない。

『それ、一応あたしの彼氏ってことになってる奴だわ。ほんと、迷惑かけてごめん』

「やっぱりそうでしたか」

『やっぱりって、あの馬鹿そういつてなかったの』

「いや、名乗らせようかと思ったたらカケスさんが来ちゃったんで、それどころじゃなくなっちゃったんですよ」

『もうね……あの馬鹿、死んじゃえばいいのに』

「物騒ですね」

綾華さんの口調があまりらに真面目な慨嘆だったから、おれはちよつとばかりびびった。

『なんかおびえたような顔してうちに来るから、何かと思えばあきちゃん脅しに行って返り討ちに遭ったとか……ありえねーだろ』

よほど腹が立っておいでのご様子で、吐き捨てるようにおっしやった。

「今もいるんですか？」

『追い返したわよ、たった今』

「ああ、じゃあ帰したところで電話してきたと」

『そういうこと。ほんとごめんね』

「謝らないでくださいよ、逆にこっちはいらん脅しまでかけちゃってるわけだし」

『あんなの、脅す程度ならいくらでもやっちゃってよ』

「いやいやいや」

何でこんなに物騒なんだ、と思う反面、少しも彼氏をかばおうとしないことにちよつとばかり不自然さを感じないでもない。

「いいんですか？ 彼氏、結構精神的にもきつかったと思いますけ

ど」

『いくらでも苦しめばいいよ、あんなのは』

綾華さんは盛大に突き放して見せた。

『しかも他の女、車に乗せてたんでしょ？』

『そこまで自分でいいましたか』

『吐かせたのよ』

カケスさんに脅された上に、自分の彼女にまで責められたわけか。ちよつと本気で同情したくなってきた。

『そいつがあたしとあきちゃんが日曜遊びに行ったこと、ちくつたんだってさ』

『ははあ』

なるほど、そういうことか。

『そいつが何であたしの彼氏の連絡先知ってるのかが不思議だけど、まあそれはまた後で問い詰めるとしてだ』

『はい』

『またあれが行くような事があつたら、本気で潰していいから』

『あれって彼氏さんですか』

『そう。もう人間扱いする必要ないからね』

ひどいいわれようだ。

『それから、その女』

綾華さんの声がさらに棘を増した。

『誰だか知らないけど、ただで済むとは思わないでほしいわね』

電話越しにきいているからなおさらなのか、耳元に響く綾華さんの声が恐ろしい。

『あたしと仲良くしてるのが気に入らないとかほざいて、あきちゃんのこと勝手におどしておいて、あたしの彼氏ってことになってる奴の助手席に乗るとかありえないだろ』

『ありえませんかあ』

『絶対追い込むから。絶対追い込む』

二回いった。この人は本気だ。

「ほどほどにしといて下さいね。そういう奴はたぶん平気で周りも巻き込むから、関わってもろくなことになりませんよ」

『あきちゃんは何しなくないの?』

「別に何しなくは……」

『いきなり脅されるとかわけわかんないでしょ? 悔しいでしょ』

「悔しくはありませんよ。途中からこっちが脅す側になっちゃったし」

『でも迷惑だったよね、本当にごめん』

綾華さんがまた謝った。なんか、こっちの方が申し訳なくなってきた。

「謝らないで下さい。俺より、彼氏さんの方を気にして下さいよ。精神的なダメージ、でかかったと思いますよ」

俺がそついうと、綾華さんはいきなり爆弾を放り投げてきた。

『……いいよ、あんなの。もう別れるし』

「ちよつと待つて下さいよ、短気起こさないで」

『短気じゃないよ、しばらく前からそのつもりでいたし』

「はい?」

思わず聞き返すと、綾華さんはふつと笑った。

『ちようどいいわ。あの馬鹿切る決心が付いた』

この人はまた何をいい出すんだろうか。

ちようどそのタイミングだった。

俺の携帯が鳴り出した。

パソコンを置いてあるデスクの上にマナーモードのままで転がっている携帯が、ぶぶぶ、と音を立てている。

サブ液晶画面を見ると、由紀だった。

俺は迷った。この場合、どっちを優先させるべきか。怪我の心配からかけてきているだろう彼女か、爆弾発言を始めてしまった先輩か。

その迷いは、ごく短い時間しか続かなかった。バイブの音が、綾華さんにも伝わっていたからだ。

『携帯鳴ってるでしょ。出なよ』

「ああ、まあ……」

『早く出なつて。今日はここまでにしとこ』

そういうと、綾華さんは逃げ出すようにして、あっという間に通話を切ってしまった。

切られてしまった方は、とりあえずヘッドレストマイクを外し、携帯の通話ボタンを押した。

「はい」

『あ、晃彦くん……まだ起きてましたか？』

「うん、まだ大丈夫だよ」

『遅くにごめんなさい。怪我は痛みますか？』

「多少はね」

パソコンの画面を見ると、綾華さんはサインアウトしていた。

翌日、学校では様々に噂が飛び交っていてびっくりした。

聞く話聞く話が全部違う説になっていて、たとえば、俺の怪我は綾華さんの彼氏との喧嘩でできたものだとか、俺がカケスさんを使つて綾華さんの彼氏に追い込みをかけたとか、気に入らない女子を潰すためにやくざを雇ったとか、まあひどいいわれようだ。

「お前、あの噂本当か？」

「あの噂ってどの噂だよ」

途中からうんざりしてきて、俺はまともに相手をするのをやめていた。

俺が資材移動中の事故で怪我をした、という情報を得た連中の中には、陰謀説を採る者すらいた。

「お前、綾華さんの取り巻きに暗殺されかったんだって？」
話もここまで行けばいつそ面白い。

「怪我はただの事故」

という正しい情報を聞くと、むしろつまらなさそうにしているのが微妙に腹立たしい。

拳句の果てに、職員室にまで呼び出された。昼休みのことだ。

「佐藤、噂はどこまで事実なんだ」

担任に訊かれて、俺はうんざりにうんざりをかけた顔で答えた。

「怪我は事故、それ以外の噂話はほぼ事実無根ですよ」

綾華さんの彼氏との一件はもちろん伏せておく。

「一年のある女子が、お前に脅されたといって騒いでいるそうだが」
あの馬鹿女め。

「どの女子が知りませんけれど、ただでさえ怪我で頭が痛いのに、人を脅したりするわけないですよ」

思いつきりしらばつくれると、担任はうなずいていた。

「まあ、お前が人を脅すとか、ありえないわな」

こういうときに日頃の素行が物をいう。

俺は確かに不良呼ばわりされる人々と多少付き合いはあるし、喧嘩騒ぎに巻き込まれたこともあるけれど、全部受身。自分から問題行動を起こしたこともなければ、そもそも目立つこともしてこなかった。

バイトもきちんと届けを出してしているし、勤労少年ぶりは教師も知っている。といって、バイトのせいで成績が維持できませんでした、というほど成績も悪くはない。いや、別に良くはないけれども。

さらに、最近の文化祭実行委員の活動で、生徒指導主任からも高く評価を受けている身。

ついでにいえば、生徒会担当のうちの担任は、生徒会会計の先輩から俺の評価を聞いているらしい。あの先輩はなぜか俺を高く評価してくれているから、それも好材料になる。

一方で騒いでいる女は明らかに素行が悪いらしい。そりゃ想像は付くけれどね。

「だが、火の無いところに煙は立たずだ。今日のところはお前のいうところを信用するが、あまり妙な噂が立たんように身を慎め」「そうします」

もちろんそうするつもり。

俺はビッグになってやるつもりもなければ、人にいえない野望があるわけでもない。小市民として細々と生きていけるならそれに越したことはないわけで。

職員室から帰ってくるころには、噂もひと段落していた。

俺が怪我をした場面を見ていた人たちの証言が伝わったかららしい。

それに、担任があっさり俺を解放したところからも、どうも大した事件性はないらしいと判断されたらしかった。

ワイドショーと同じで、事件性がないとなれば一気に興味を失って追跡しなくなるのが、物見高い連中の噂話。俺が、例の脅しネタ

やカケスさんのことを黙っていたから、脅された本人たち以外に目撃者もいなかったらしいあの事件は、見事なほどに二ユースバリユ―を失った。

由紀のこともあるかもしれない。

休み時間になると、心配顔で由紀が俺のクラスに現れる。

由紀と俺が付き合いだしたことはあつさりと知られるようになっていて、せつかく付き合いだしたらいきなり彼氏が^{ってほくでもないけれど}大怪我をするわ、しかも彼氏が無責任な噂のネタに（実は事實はもっとひどかったりもするわけだが）されるわ、悲劇のヒロイン的立場に祭り上げられてしまった。

その由紀の前であまり物騒な噂話もできず、この地味な印象の割りによく見るとびっくりするほどの美少女でもある悲劇のヒロインの前では、そもそも俺にまつわる噂が駆け巡っていること自体が遠い出来事のようになっていた。

意外なくらい、勝手に周囲が由紀を守ろうとしていた。

そうさせてしまう雰囲気、由紀にはあるのかもしれない。今までその威力を発揮する機会がなかっただけで。

ただ、一番気になる話が、そのままになっている。

綾華さんの「別れる」という爆弾の一件だ。

この状況下で俺から綾華さんのところにいけるわけがない。綾華さんも俺のところには来なかったし、メールも何も来なかった。

気にしたところで、人の恋愛に口出しする気もなければ、出せるほど恋愛経験豊富なわけでも、人生の達人なわけでもない。気にするだけ無駄。

そんなことはわかってはいるけれど、昨夜のことがあっても無関係を決め込んでいられるほど大人でもない。気になるものは気になるでしょ、この場合。

「痛む？」

「はへ？」

由紀の心配そうな声に、間の抜けた返事をしたのは、放課後。自分の教室で、宿題をやっつけていた。

今日は文化祭の活動はなし。まだ各クラスや団体の企画はろくに上がってきていないし、書類関係は昨日でほぼやっつけてしまっている。

宿題は明日提出のもの。世界史のレポートが2本。うちに帰ると確実にやる気を失うから、多少居残ってでも学校でやってしまった方がはかどる。

「宿題が手に付かないみたいでしたから」

「ああ……痛みはないよ。ただ、痛み止め飲んでるから、ちょっとぼーっとはするかも」

薬を飲んでいるのは事実だけれど、もちろんそれだけでぼーっとしていたわけじゃない。

「無理しないで帰った方が良くないですか？」

自分が痛むような顔をして、由紀は俺の顔をおずおずと見ている。視線はなかなか合わないけれど、照れて視線を外すより、心配で顔色を伺おうとする気持ちの方が勝るらしい。

ちきしょう、かわいいなあ。

「大丈夫。どうせ帰ったってこれやんなきゃいけないんだし、一緒にだよ」

「無理はしないで下さいね」

そういうと、由紀は視線を落とした。俺がぼーっとしている間も由紀はレポートを書き進めていて、どうも俺の分までまとめようとしているらしい。

「いいよ、そんなにしなくなっただけ」

「私ができることなんてこのくらいですから、やらせてください」宿題を肩代わりして俺の負担を減らす、と決意しているらしい。

うーん、世界史もレポート書きも得意分野だから、むしろ俺のが

コーチ役じゃね？ なども思っただけけど、由紀の決意に免じて、ここは黙っていることにする。頭がうまく働かないのも確かだし。しばらくして、俺が自分なりに1本のレポートの内容を煮詰め、レポート用紙に向かおうとしたころ、由紀がポツリとつぶやいた。「……晃彦君、噂話、聞いちゃった……」

俺はシャープペンを走らせていた右手を止めて、顔を上げる。

由紀が、思い詰めたように、顔を赤くして思い切りうつむいた状態になっていた。

「どんな？」

何を聞いたかわからなければ反応のしようもないので、まずは訊いてみる。

「……晃彦君が綾華さんの彼氏さんと、綾華さんを奪い合って殴りあっただって」

「あれ、そんな噂に変化したんだ。面白いね」

そうか、その流れの噂話が届いたわけだ、少なくとも由紀のクラスには。

「殴り合ってないよ。昨日は誰とも」

由紀が本気で噂を信じているとは思わないけれど、綾華さんからみて妙な噂になれば、絶対気にするだろう。俺と綾華さんの漫才を日々直接聞いていただけに。

「帰り道で説明するよ」

と、俺は小声で告げた。こんな誰が見ているかわからない状態で、あの話はしたくない。でも、由紀には話しておきたい。

由紀は小さくうなずいた。

それから、肩をすくめるようにして小さくなり、ぺこりと頭を下げた。

「ごめんなさい」

ごくごく小さな声。今度は何でしょう。

俺が黙って見ていると、由紀は顔を上げないまま、聞こえるぎりぎりの声でポツリと付け加えた。

「晃彦君のこと、疑ったみたいでしたね。最悪な女ですね」

「自虐に走らないでよ。聞いている方がつらくなるから」

はっとしたように由紀が顔を上げる。俺は苦笑していた。

「由紀が噂を流したわけじゃあるまいし、謝るのは無し。ね」

俺がいうと、由紀はまたうつむいて、静かにうなずいた。

長いストレートの髪が、由紀の動きにあわせてゆらゆらと揺れている。痛んだ様子もないきれいな髪が、蛍光灯の明かりにわずかなキューティクルを反射させているのが、やけにきれいに見えた。

見覚えのある車、見覚えのある顔。
帰り道。

由紀と二人で学校を出て、校門から左に折れて50メートルほど進んだ先の交差点近く。

昨日見たばかりの車が路上に止まっていた。道の左側を歩いていて、対向車線の脇に止まっているから、運転席に座っているドライバーの顔も見える。もちろん、昨日見たばかりの顔があった。

なにやってんだ、こいつ。

高校1年生にとつての20代男性つてのはかなり大人で、こいつなんて感想は普通は浮かんでこないものだけど、この時、こいつという単語以外に浮かんでも来なかった。

いきなり口を閉ざして無表情になった俺に気付いて、俺の左側を寄り添うように歩いていた由紀が不安そうに見上げてくる。

「由紀、あれが昨日の騒ぎの原因」

とあごで指し示すと、由紀は不安そうな顔のままそちらを見た。視線の先では、男が運転席から降りてくるところだった。明らかに俺の顔を見て動いている。

当然、俺は警戒する。

ドアを閉めると、男はこちらに歩いてきた。警戒心ばかりで見つめている俺に、意外な姿が見えた。男が、俺に目礼していた。

向こうがお辞儀したら反射的にお辞儀してしまったのは、そういうところだけはきっちり躰けられた人間の悲しいさが。

よく見てみると、彼は地味なチャコールグレーのスーツ姿で、グレーのネクタイも地味。ワイシャツは白。生真面目な営業マン、という感じで、昨夜とは別人みたいだった。

「昨日はすまなかった、どうかしていたんだ」

近付いてくるなりいきなり謝られ、俺は面食らって言葉が出てこ

なかった。

国道のそばの喫茶店、由紀に告白された日に二人で入ったあの喫茶店に、今度は三人で入っていた。

「広瀬」

と、彼は名乗った。

どう見ても金のかかる車に乗っている「広瀬」というところで、この辺りでは知らぬ者の無い企業グループの名前が思い浮かんだ。地方財閥というには少し規模が小さいかもしれないけれど、この辺りで手広く商売している家に「広瀬」という名がある。

もらった名刺を見て、納得した。会社名が「ヒロセシステムコンサルタンツ」、親父からも名前が聞いたことがある会社で、もともと土建業から始まり、運送業、ガソリンスタンド、半導体工場などに手を広げ、早くからコンピュータシステム開発にも力を入れていた広瀬グループの子会社。肩書きは専務となっているから、広瀬の分家の跡取りというところか。

田舎だから、そういう情報は高校生ときでも耳にしている。

「綾華からもずいぶん叱られたよ。悪かった」

「いや、まあ、あれはどっちもどっちだったんで」

こつも素直に謝られてしまうと、落ち着かないことはなはだしい。こつちには、なにしろカケスさん乱入というある意味負い目もある。ありや反則技もいいところだもんな。

「実は昨日、あれから綾華に会いに行つてね。でも叱られるだけ叱られたらすぐに追い出されてさ、それから連絡も通じない」

今日は帰りの時間をみて綾華さんを待っていたらしい。でも、綾華さんはいつまで経っても現れず、そのうち俺が由紀と一緒に出てくるのを見つけたんだそうだ。

由紀のことも知っていた。

「綾華から聞いたよ。二人が付き合ってるって」

由紀がうつむいている。初対面の相手だからだろう、と人は思うかもしれないけれど、俺には思いつきり照れているだけに見える。由紀は俺と付き合っていること自体が照れの素になるらしい。

仕事はいいんですか、と聞きそうになったけれど、その口は引つ込めた。専務という肩書きは、仕事に支障さえなければ時間なんか自由に使えるご身分ってことだ。

「あんな小娘に乘せられて……馬鹿だと思うよ、自分でも」

自嘲、という言葉を全身で表現したら、今の広瀬さんのようになるんだろう。顔立ちは悪くないどころか素晴らしい出来なのに、自嘲の色が濃すぎて、疲れきっているように見える。

かなり濃いくまが浮かんでいて、よく見れば顔も脂っばい。たぶん、あまり寝ていないんだ、この人は。

「最近、綾華とうまくいってなくてね。特に文化祭実行委員になつてから、あいつが俺を露骨に避けるようになって、君が原因じゃないかっていつてきたあの小娘の口車に乗せられてしまった」

「もともと知り合いなんですか？」

「顔くらいはね。綾華のグループに近付きたがつてる子は多いけど、その中にいた奴だ」

彼女の底が割れてきた気がした。

「なんで広瀬さんに俺のことを告げ口したんでしょうね」

「君が気に入らなかつたといっていたけどね。ちよっとルックスが良くて、まぐれで喧嘩に勝つくらいで調子こいてるとか何とか」

「でも、普通、告げ口はともかく、一緒の車に二人では乗らないでしょう」

「俺に近付くのが綾華に近付く近道だと思ったんじゃないのか？あるいは、大人の男と二人になるつてのが刺激的に思えたかな」

おそらく違う。

彼女は、綾華さんが好きなわけでも、広瀬さんが気になったわけでもない。

学校のアイドル綾華さんに、地域の支配勢力・広瀬家。

そういう華々しいもの、権威や権力というものに惹かれているだけだ。そうすることで自分が高められた気がするから。いや、本人は高められたと信じているんだろう。

だから、その権威や権力に無造作に近付こうとしている奴に嫉妬する。陥れるための陰謀くらいは企むだろう。あまりの浅知恵に、企まれた方はめまいすらするけれど。

広瀬さんは間違いなくもてる。そのモテ男と二人きりになるってのは確かに刺激的だっただろうと思う。

でも、あんまり深くは考えてない。多少深く考えられる奴なら、綾華さんのことを気にして、絶対二人きりでは車には乗らず、ましてでかい態度で助手席から「あんまりやりすぎないでよー」などと馬鹿な狎れた発言はしないはずだ。

軽蔑にすら値しない馬鹿女。

というところで、俺の中の彼女への評価は確定。

「君が綾華に気があると聞いて、いてもたってもいらなくなつて、綾華のつてで知り合つた子から君の行動を聞き出して、学校を出たらしいことを聞いてすぐに学校に行った。それが昨夜の状況だ」

広瀬さんはわざわざ解説してくれた。彼なりの誠意らしい。

「彼女がいるとまでは知らなかったんだ」

「仕方ないですよ。できたばかりですし」

由紀は無言。たぶん、うつむいたまま再度照れている。そういう場合でもない気はするけれど、口を挟まれるのも何なのでとりあえずは放置しておく。

「知ってればあんなことはしなかった。まして掛巢さんの弟分だなんて想像もつかなかったから」

「ああ、カケスさんのことは気にしないで下さい。確かにあの人に散々世話にはなってますけれど、あの人の性格上、弟分だからどうしても守るとか、無いですから」

口ではいかも知れないけれど、あの人の本音は、娘以外のために死ぬとか何の冗談だよ、というところにあるはず。

「だと助かるな。俺も高校生のころは多少ぐれていたりもしたけれど、あの人の伝説はよく聞いたよ。あまり係わり合いにはなりたくない」

そりゃそうでしょうよ。

「今はただの子煩悩パパです。昨日はたまたま不機嫌になるようなことがあって、タイミングが悪かったんでしよう」

ざっと話を流しておく。

「俺も脅されて最初は頭にきましたけれど、もうそれも収まりました。あんま気にしないで下さい」

「気にするよ。高校生に圧倒されるような奴が企業経営とは笑わせる」

広瀬さんの自嘲が激しくなってきた。

「そりゃ、綾華も愛想尽かすよな、当然だ」

「広瀬さん、自虐的になつてもなんも問題は解決しませんよ」

「わかってている。わかっていてもね」

というなり、広瀬さんは割と激し目に頭をかき回した。それからふうつ吐息を吐き出し、続ける。

「不安なんだよ、綾華の気持ちが自分に向いていないんじゃないかって」

思わず昨日のボイスチャットで別れ話が出ていたことをいいそうになったけれど、ややこしくなりそうなので寸前で飲み込んだ。

「それで校門を張り番してまでの出待ちですか」

「そうでもないよ、電話もつながらないんじゃない、あいつを捕まえられない」

広瀬さんはそこでコーヒークップの中の濃い目のコーヒをあおるようにした。

「……高校生なんて、27の俺からしたら子供だよ」

27歳だったのか。綾華さんとは10歳差くらいか。

「なのに、俺はその子供にいいようにもてあそばれて……男ってのはそういう生き物なのかな」

「さあ、どうなんでしょうね」

俺は適当にごまかしたけれど、内心では「一緒にするな」と思っていた。どうもこの人の行動といい言葉といい、年相応の成熟からは遠い気がしてきた。

「あいつはきれいだ。話していても楽しいし、あんないい女はいない。手離したくないんだよ」

「そうでしょうね」

「たまたま家同士の付き合いもあったから、あいつのことは子供のころから知っている。あいつのことなら何でも知っていたんだ」

「そうなんですか」

ひたすら相槌。もうも相槌男に徹して、聞き出せることは全部聞き出してしまおう。

「あいつが高校に入ってから付き合い合うようになって、いろんな所に連れてつて、いろんな思い出を作った。わがままもいっぱい聞いてやったし、あいつの頼みならどんな無理でも聞いてきたつもりだ」

「ええ」

「なのに最近、あいつは俺から離れようとしている。理由を聞いても答えない。電話すら出なくなってきた、メールなんか返っても来ない。おかしいだろう?」

「そうですね」

なんか疲れてきた。

隣の気配をうかがうと、由紀は広瀬さんの話を聞きつつも、俺の反応が気になって仕方ないらしく、俺の呼吸の音まで聞き逃すまいと耳を澄ましているらしかった。

面白いやつ。

「なんか……」

喫茶店を出てしばらく歩き、由紀の家への帰り道をたどり始めた頃、両手でかばんを持ちながらとことこと歩いていた由紀がつぶやいた。

「恋愛って怖いですね」

「どうして？」

由紀がしみじみという、その口調がおかしくて、思わず聞き返した。

「だって、あんな大人の人があんな風に我を失っちゃうんですよ」

「まあ、ねえ」

あれは結構特殊な例じゃないだろうか、とも思っただけれど、なにしろ恋愛経験なんか無いに等しい人間だから、あまり物はいえない。「私もあんな風になるかもしれません」

「あんな風に？ 別れたくないって他人を巻き込むってこと？」

「それもありますし、相手の気持ちが変わらなくて大騒ぎしてみたりとか」

由紀の顔を見てみると、意外にまじめな顔をしている。

「自分がどうなっちゃうかわからないです。たぶん、自分から告白するとか一生無いだろうなって思ってたのに、しちゃってみたいとかしてますし」

「しちゃったねえ」

「今でも不思議です。何であのタイミングで告白できたのか。恋愛って、自分でも想像もつかないことをやらせてしまう力があると思います」

「なるほどねえ」

思い当たる節はこっちにもある。芝生でのキスの一件だって、勢いであそこまで行ってしまった。周りが人であふれてるとか、全然

考えが及ばなかった。

でも、と俺は返した。

「そうやってありえない自分と出会っていくのってさ、雑な言い方かもしれないけれど、成長だよな。お互い高めあっていけたら、じたばたしたり失敗したりする甲斐もあるよね」

由紀は俺の顔をちよつと見上げた後、大きくうなずき、それからうつむいた。

今度はなんだろう。

結局会わなかったな、と、帰って晩御飯を食べて、部屋に戻ってから思った。

綾華さんだ。

渦中の人物のはずで、彼女のおかげで色々貴重な経験をさせていただいたわけだけれど、肝心な本人とまったく接触が無い。

確かに昨夜話したけれど、尻切れトンボで、肝心な話は何もしていない気がしていた。

いきなり別れるという話を人に放り投げておいて、投げっぱなしだ。投げられた方は受け止められもせず、中途半端に浮いているしかない。

別れたいという気持ちは、でも何となくわかる気がした。

あの人には確かに大人の男性が似合う。社会人の彼がいると聞いていたけれど、それも納得できていた。少なくとも俺たちみたいな年代の子供が相手じゃ、あの人はつまらないんじゃないだろうか。無責任に大人と子供の中間を生きているような年代が相手じゃ、あの人の心は動かせないと思う。しっかりと自分の足で立ち、奔放なところもある綾華さんを支えきれぬ力がある人じゃないと、綾華さんの心は動かせない。

そして、広瀬さんは、年代や経済力は充分でも、ついでにルック

スでも充分でも、心の成熟度のようなものが足りていない気がする。俺から見ても、広瀬さんは自立しきれていない感じがした。甘えが強い気がした。綾華さんに寄りかかっていて、支える力強さは感じなかった。俺が女でもあの人にはついて行こうとは思えない。男としてならなおさら。

カケスさんを知っている俺には、あの不良時代からの柄の悪さは差し引いたとしても、広瀬さんの頼りなさは物足りなさしか感じさせない。無責任な人だ、とすら思う。

それにしたって、だ。

投げっぱなしは良くないだろう。

パソコンを立ち上げてみたけれど、綾華さんがサインインしてくる気配は無かった。

どうももやもやする。

明日は実行委員の方で打ち合わせがある。会ったら何か話ができるだろうか。いや、しないとな。

という俺の決意はあっさりと流れた。

綾華さんはいたし、仕事も一緒にしていたのだけれど、何しろ暇が無かった。

「何でこんなに早く一気に集まるんだよ！」

来週中の提出、という話でまとめたはずのクラスごとの出し物計画が、なぜかこの日、まだ木曜日なのに、やたらと集まってきた。

もうある程度話をまとめていたクラスが、生徒指導主任の鶴の一声で計画の作成を進め、この日に一斉に提出してきたせいだ。

「あきちゃん、貸し出しは今日やっちゃうわけにも行かないんですよ」

「貸し出したところで、教室に置くわけにもいきませんからね。部活の申請ならともかく、クラス単位の貸し出しは当日近くになって

からじゃないと」

「じゃあどうすんの？ 仕分けだけしておくってこと？」

「そうです。片っ端から付箋でも貼って行って、仕分けましょう。

リストはできてますから、そっちはそんなに時間かからないと思います。とりあえず昨日までに上がってきてる分をやっときましよう」

「じゃああたしはそっちやるわ」

「お願いします。由紀と俺は書類のチェックをやるう。多分こっちの方が時間がかかる」

「企画書と貸出申請書ですね」

「うん。由紀は企画書のチェックをお願い。企画に図面が必要なのに出てないところが結構あるから、それは弾いて。で、図面の数量と企画書と申請書の数量が合ってるかどうかのチェックをお願い」

「わかりました」

「俺は弾いた書類の大体のチェックをして、場合によっては図面作っちゃうから。いちいち頼みに行くよりそっちの方が早そうだし」

「仕事が早く進むのはありがたいし、今のうちにできるだけ多く処理できれば、土壇場になって仕事量がパンクする恐怖からも逃れられる。」

「それはいいんだけど、物には程度つてもんがあるだろうと思うわけだ。」

別に今日全部やらなくてもいい仕事のはずなんだけれど、そうもいかないのは、お金が関わってくるから。足りないものは早く注文しておかないと、後で足りなくなるときに対応できなくなるし、そもそも生徒会に申請するお金が足りなくなってしまう可能性がある。そうなったら当然買い物もできず、資材の準備に穴が開く。

そして今日は木曜、今日中に注文する物リストを作って会計に回さないと、発注が週をまたいでしまう。

今日できることは今日やって、足りないものはさっさと注文リストに入れてしまうに限る。

とはいっても、量が量だった。だべってたらだらやって、終わる

ような仕事量じゃなかった。

「仕分け終わったよー」

「あ、綾華さん、こっちの申請書も上がってますのでお願いします」

「おいおいおい、由紀、あんた、あたしを殺す気かい」

「ご、ごめんなさい、じゃあいいです」

「こら、良くないでしょ、あたしの脅しにコンマ2秒で負けちゃだめでしょ」

「ご、ごめんなさい」

「謝んなくていいから。ほら、書類よこして」

「で、でも、私もやります」

「あんたは書類整理が先でしょ。あきちゃん、指示は？」

「えーっと、由紀はあと30秒そこで待ってて。修正した図面が上がるから。プリンタ見てて、すぐ出す。出たらそのチェックね」

「ということだそうだ。由紀、よろしく」

この会話だけ切り取ると由紀が仕事ができない子のようにだけんど、やってる仕事量は大きい。俺が急かされるような展開になっているけれど、これは予想外だった。俺の仕事が先に終わり、由紀がためてしまった仕事を手分けして片付けようと思っていたのに、とんでもなかった。

成績がいいからといって、この手の事務仕事がうまいとはいいい切れないはずなんだけれど、由紀の場合はいい切れた。早くて正確。人のミスを探したり、多少の間違いなら直してしまわなければいけない仕事で、いくつかチェックしたけれどミスが無い。

綾華さんは図面作りやその手のチェックなんか絶対やんない、と高らかに宣言した上で資材整理をやっている。いまだに巻かれている俺の頭の包帯が気になり、俺に資材置き場に入る機会など与える気が無いらしい。そしてこちらでも仕事が速い。

背が高くてすっきりした体型の綾華さんは、どう見たってさして腕力があるほうには見えなかったけれど、この日は精密機械のような仕事振りを見せた。扱う資材に小物が多かったせいもあるだろう

か。パーテーションパネルのような大物は、今日は無い。

そんな風に3人で嵐のような仕事に立ち向かいつつ、過ごしていたら、あつという間に時間が経っていった。

結果として終わったからいいものの、時間は既に7時を回ろうとしていた。

由紀の門限が近付いている。

「由紀、門限は？」

俺が訊くと、由紀はしばらく何の反応も示さなかった。たぶん、集中が切れたとたんに疲れがどつと出て、頭が働いていないんだろ

う。

そのまま二人で8秒間見つめ合う。

何の情熱もない見つめあいの後、由紀は自分がどんな状態にあるか思い出したらしく、時計を見てからばつと立ち上がった。

そして倒れこみそうになる。あわてて俺が体を支え、綾華さんがあきれた。

「疲れてるのに急に立ち上がったら、立ちくらみするの当たり前だろ」

「由紀、立つのはゆっくりでいいから」

俺はくらんだままでいる由紀に言葉をかける。肩を支えているのだけれど、ずいぶん軽い。

「あきちゃん、由紀を家の前まで送り届けること。いますぐに。可能？」

「可能は可能ですけれど。でもここはここで戸締りとかごちゃごちゃ面倒ですから、俺が戻ってくるまで留守番してもらっててもいいですか？」

「留守番はいいけど、あたしも帰りたいし。戸締りはあたしがしていくから、あきちゃんもそのまま帰りなよ」

「いいんですか？ 割と面倒ですよ」

「大丈夫よ、面倒っただけで難しいわけじゃないんだから」

そんな会話があり、立ちくらみは治まってもまだふらふらしてい

る感じがする由紀を家の手前まで送る任務が与えられた。

というわけで。

俺は結局、綾華さんと、仕事以外の話はほぼすることもなく、むなしく帰ることになった。

今週は激動の一週間だった、と自分でも思う。
日曜日の綾華さんとのデート、由紀への告白から始まって、色々
と出来事が集中して起きてくれた。

おかげで気が休まることがなかった気がする。

前の土曜日は雨の中での重労働、翌日の日曜は早朝から深夜まで
動き回っていたし、月曜日は文化祭実行委員の仕事、火曜日には頭
に怪我をした拳句につまらない脅迫騒ぎに巻き込まれた。水曜日は
脅迫してきたはずの相手の愚痴を延々と聞かされるばかりの日
を過ごし、木曜日は文化祭実行委員の方で恐ろしい量の仕事をこな
した。

連日のことで、さすがに疲れていたらしい。

金曜日の朝、俺はひどい頭痛に襲われ、ベッドから起き出すのが
つらくて仕方がなかった。

「どうした、ひどい顔だな」

と親父がいうから、

「あんたの息子だしな」

と答えてやったけれど、反論を食らう前に体温計を押し付けられ
てしまった。しかたなく測ってみれば、38度0分。

「残念、今日は外出禁止」

おかんから無情の宣告。

どうしても学校に行きたい、とこねるほど学校大好きっ子じゃな
いので、大人しく寝ていることにした。

その前に、一応メールを打っておく。相手はまず由紀。それから
友人何人かに同送信で熱で学校を休むとメールした。

返信は由紀が一番早かった。

『発熱ですか！？ 頭の怪我のこともあるから心配です。早く病院
に行って、きちんと治して下さい』

相変わらず絵文字もないメールで、簡潔。

昨日は由紀も相当きつかったはずで、体は大丈夫かとメールを打ち返したら、またすぐに返ってきた。

『私は全然大丈夫です。晃彦くんは自分の体調のことだけを考えて下さい』

また簡潔なメールだった。

あいつらしいな、と思うと、女子高生のメールとは思えない文面も、妙に可愛く思える。恋愛で馬鹿になっているからなのか、熱に浮かされているのか、微妙なところだ。

その後、迷った末、綾華さんにもメールした。

実をいうと、出す気はなかった。

一言でいってしまえば、綾華さんと関わるのが面倒くさくなっていた。

綾華さんのことは嫌いじゃないし、一緒にいたら楽しい人だけれど、彼氏のことといい、いきなり別れると爆弾を投げつけておいて放置状態のことといい、今は関わるのが正直面倒くさいという感情の方が先に立つ。

それでも、今日も文化祭実行委員の仕事があるし、多分俺がいないとあの仕事は回らない。今日はいつそ仕事は完全に休みにしてしまおう方がいい気がする。

今日は熱で休むこと、仕事は今日は休みにすること、月曜日に行う予定の仕事を簡単にまとめてメールする。

もつとも、熱のおかげで頭がうまく動かず、大した内容でもないメールを打つのに時間がかかってしまい、送信する頃には始業時間になってしまっていた。

意外にもまったく遅刻というものをしない綾華さんは、とつくに教室にいて、授業を受け始めているだろう。

返信はあまり期待していなかったし、むしろ来ないほうがいいな、という気分がある。体調に引きずられてそんな気分になっていたこともあるけれど、やっぱり俺には綾華さんのことで振り回されるの

は負担が大きすぎた。

由紀とせつかく恋人同士になれた今、学園の憧れを一身に集めてしまうような格上の女性に、それを取り巻く人々まで相手に回して日々を過ごすのは、そういうことに情熱を感じてしまうようなタイプの人間でもない限り、きついものがある。

華麗な人間関係の中に身をおくのは、俺には無理。

そういうのが好きな人もいるし、綾華さんに振り回されるなら自分が代わるといいだしそんな奴もすぐに何人か顔が浮かぶ。でも俺はそういう人種じゃない。

そして、すぐに眠ってしまった俺が、昼前に一度目を覚ました時、携帯には友人からのメールが何件か入っていたものの、綾華さんからは何の連絡もなかった。

そんなもんかと、妙に安心したような、それはそれでさびしいような、変な気分になったりした。

昼休みの時間帯、由紀から電話がかかってきて、怒られた。

『病院行ってないんですか？』

「疲れが出ただけだろうし、今日は様子見でいいかなって」

『ダメですよ、なんでそんなにのんきなんですか』

由紀が大げさすぎるんだよ、と思ったけれど、いえばすごい反論が来るだろうと思うからいわないでいた。

『今からでも開いてる病院はありますから、必ず行ってくださいね』
由紀があんまりにも勢い良く怒るから、ついその気になった。

うちは共働きだから家には誰もいない。財布と保険証に携帯、鍵をシザーズバッグに入れて、家を出た。その時点で体温は朝より上がって38度5分。病院に付く頃にはもっと上がっているんだろうな、と思った。

自転車をたらたらとこいで10分ほどの所にある内科医院で診察を受けた。じいさんばあさんばかりかと思ったら、意外にそんなこ

ともなかった。じいさんばあさんは朝が早いから、昼までには診察を終えているもんだよ、とは、帰宅後にその話を聞いて答えた親父の弁。

診察結果は、親の見立てと変わらない。

「疲れて風邪を引いたんだろう。薬で無理に熱を下げずに、消化のいいものを良く食べて大人しく寝ていなさい。すぐ良くなる」

ウィルス性の風邪の可能性もあるからと検査は受けたけれど、結果的には陰性だったらしい。

家に帰り着いたのが4時くらいで、まだ誰も帰宅していなかった。鍵を開けて家に入り、食欲もわかないままにゼリー型の機能食を流し込み、スポーツドリンクをがぶ飲みしてから、着替えてベッドに入った。

寒気がひどかった。頭痛の方は薬のおかげで大したことはない。鼻づまりもひどかったけれど、不思議とのどはなんともなかった。

なんとなく人恋しくなり、携帯をいじったりもしたけれど、人恋しい割りに何もかもがうつとうしく感じるという、ひどく矛盾した気分になってもいた。

たとえば由紀に電話をしたとして、たぶん由紀は喜んで俺の電話に応じてくれるだろうとけれど、その声は聞いていたくても、意味のある会話をしたり返事を返したりするのが、どうも面倒に思える。

ひどいわがままだとは思うけれど、病気のときつてのは、ひどく淋しがるか、わがままになるかするものらしい。

この時の俺は人恋しさより面倒くささが勝った。

結局電話もしなければ、他の人から来たメールにも一切返信せず、寝てしまうことにした。

そう、風邪のときなんぞは、寝て治すに限るのだ。

次に起きたのは、夜の8時ごろだった。

「晩御飯食べられそう?」

妹が呼びに来た。

「……食欲はないな」

「だよ。でも薬飲めないから、何か食べないと」

特に仲が悪いわけじゃないから、病気の時くらいはお互いに優しくなる。普段はさほど仲がいいようには見えならしいけれど。

「これ買つといたから飲みなよ。水分も取らなきゃダメだよ」

そういつて妹が出したのは、病院帰りにも飲んだゼリー型の機能食。気が合うというより、今は定番なんだろう。

ただし、メーカー違い。俺が買ったのは某薬品メーカー系列のもの、妹が買ってきてくれたのはスーパーのプライベートブランド品。価格がだいぶ安い。

「ありがとう」

これは気持ちがどうかの問題じゃなく、妹の方が賢いんだろう。好意はありがたいので、素直に受け取ることにした。

「携帯鳴ってたけど、今日は電源切った方が良くない?」

妹の言葉に携帯を見ると、ちかちか光っている。バイヴにしているから、寝ている間は気付かなかったらしい。

「そうするわ」

「体拭いたら? シャワー浴びるだけでもきついでしょ」

「そうだな……」

妹は着替えまで用意してくれていた。おかんの指図だろうけれど、これも素直にありがたかった。だいぶ汗をかいていた。

正直に言えば、怪我をしている頭の方が、最近まともに洗っていないから気持ち悪くて仕方ないのだが、この熱では洗いきる自信がない。シャワーは明日以降まで我慢した方が良さそうだった。

「体拭くなら、準備くらいしてるよ」

「そうしてもらえると助かるよ」

「私は拭いてあげないけど」

「そこまで頼まんよ、夫婦じゃあるまいし」

「そうね、拭いてくれるっぽい人もいるんだし」

妹は立ち上がりながら爆弾発言をしてくれた。

俺はまだ彼女ができたなんてことは、こいつには一言もいってないんだが。

「拭いてくれるって、ここにいない奴にどうやって拭かせるんだって」

由紀がここにいるはずもない。なにせ、門限を過ぎているから。

ところが、妹はまったく別の文脈で喋っていたらしく、怪訝そうな顔をした。

「いるからいつてるんじゃない」

「へ？」

「誰の話してるの？ まさかおにい、他にもそんな女がいるの？」

「ちよつと待て、どういう意味だそれ」

「どういうって……あ、来たっぽい」

妹は立ち上がる。

部屋の外から、階段を上がってくる足音がする。それは聞き慣れた家族の足音ではなく、静かで、どこか慎重で、明らかに遠慮している足音だった。

「おにい起きてますよ。遠慮なく拭いちゃってください」

「え、あたしが拭くの？」

やけに聞き覚えのある声がして、俺は発熱以外の原因でくらくらしてきた。

「触れるのもいやならその辺に置いて戻ってきていただければ」

妹が部屋の外に出て行く。

「嫌ってことはないけど。あなた、面白い子ね」

「ありがとうございます。馬鹿な兄を持つと色々学ぶことが多いんです」

「ちよつと待て、色々ちよつと待て」

思わず俺が口を出すのと、妹以外の声の主が顔を出すのが同時だった。

「あら、元気そうね」

そこにいたのは、ありえないことに、この所の騒動の最大の原因、綾華さんだった。

底が深い洗面器を持ち、私服で俺の部屋に入ってくる綾華さんの姿に、俺は今日最大級のめまいを感じていた。

「……元氣そうに見えますか、そうですか」

「思ってたよりはってことよ。そう嫌な顔しないの」

「突然来ますか、それにしても」

「突然じゃないよー。電話したしメールも入れたよ？ あきちゃんが見てないだけじゃん」

携帯をチラツと見たけれど、手に取るのはやめた。たぶんウソはいつてない。確かに4時以降は携帯を見ていない。

「なんか色々と迷惑かけちゃったからね。せめて見舞いくらいはしようかなって。あたしって健気じゃない？」

「本物の健気は自分からいいませんって」

「ほら、文句いつてないで脱ぎなよ。拭いてあげるから」

綾華さんは黒いカットソーの上に紫の薄手のカーディガンを着て、下はスキニーのデニムパンツ。気取らない感じが近所のお姉さん然としていて、嫌味がない。

「自分で拭きますって」

思わずかつとなって、邪険な言い方をしたけれど、少なくとも顔の赤さはばれないだろう。なにしろ熱のおかげでもともと赤いはずだから。

「遠慮しなくてもいいんだからね？ 妹さん公認なわけだし」

「あれはたぶん勘違い街道爆走中なだけっす」

「あたし、彼女さんって思われちゃったかなー」

綾華さんがベッドの下にちょこんと座りながら、手を胸の前で組む。わざとらしくかわいらしいポーズをとったつもりらしいが……むかつくほどかわいい。

「俺を訪ねて女が来るなんてこと自体初めてですからね、たぶんおかんも含めて耳ダンボで様子伺ってるでしょうよ」

「あらあら、大変ね」

綾華さんはにつこりと笑いながらいった。

とてもじゃないが目なんか合わせられないから、俺は無言でゼリ―を手に取り、口をぶちぶちと回した。

やっぱりこの人はきれい過ぎる。鼻が全然利かないからわからないけれど、多分すごい香りなんかさせちゃってるに違いない。

と考え、自分がどれだけ臭いかについての想像が働いてしまった。ただでさえ大汗をかいていることに加えて、火曜日の負傷以来まともに頭も洗っていない。

ゼリ―を口に含む前に、それどころではなくなってしまうって、俺は綾華さんを見れないままに口を開いた。

「……早く帰ってくださいよ、こんな臭い部屋にいてもしょうがないでしょ」

綾華さんはふつと笑った。

「別に臭くないよ。大体あたしが何かを我慢してまで他人の部屋にいると思う？」

微妙な言い方だ。

以前の俺ならそのセリフを聞いたら納得していただろう。我慢するくらいなら、顔だけ出してとつと帰るタイプの人だろうって。

でも、綾華さんはそういう風に見られがちなので、実のところは真面目で思いやりがある人だと知ってしまったているから、始末に終えない。俺を安心させるためにそういつているってわかるから、そうですね、とはもういえない。

「……何しに来たんですか」

「何って、お見舞いに」

「それだけでわざわざ俺の家の住所まで調べてきたんですか」

住所まで教えた記憶はない。来たということは、調べたんだろう。「そんなとげとげしい声出さないの。病人なんだから、余計なこと考えないで寝てなさい」

「誰が考えさせてるんですか」

俺の声は自分でもわかるくらいにいらいらしていた。

「いきなり別れ話を人の前で切り出しておいて、その後は何の話もなしで、こつちがどれだけ振り回されてると思ってるんですか」

「それは……悪かったと思ってる」

「そりゃ広瀬さんが俺のところに来たのは綾華さんのせいじゃないかもしれないけれど、綾華さんと知り合わなければこんな騒ぎに巻き込まれることはなかった」

俺は知らず知らずにいいすぎていた。そして、そのことにすら気付いていなかった。

反応が返ってこないから、ちらつと綾華さんの顔を見た。

ひどく傷ついた顔をして、俺の手元をじっと見ていた。

待て。俺は今、何をいった？

「……知り合ったのが間違いだっただか。そこまでいわれちゃうんだ、あたし」

あ、と思ったが、とつさにフォローするセリフが思い浮かばない。いつもならコンマ5秒で出てくるはずの次の言葉が出てこない。

「嫌われたね。まあ、しょうがないか。自業自得だしね」

「いや、そうじゃなくて」

「いっぱい迷惑かけちゃったね。ほんと、ごめん。もう一切関わらないようにするから、ここまでのことは謝しておく」

「そうじゃないんです」

「文化祭実行委員も、あきちゃんがいれば動くんだし、あたしが関わらなくても大丈夫でしょ。代わりの人手は手配しておくから」

「綾華さん」

「そういうことでしょ？ 知り合ったのが間違いなんでしょ？ あたしってあきちゃんにとって間違いなんでしょ？」

綾華さんが、どろどろの感情むき出しの目で俺を睨みつけてきた。言葉で畳み掛けられ、目線で縛られ、俺は口ひとつ動かさなくなってしまった。

しばらく、俺と綾華さんは睨み合いになった。というか、俺は蛇の前の蛙で、一方的に睨まれてすくんでいたという方が正しい気が

する。

「……どうしたのよ」

綾華さんの絞り出すような声が静寂を破る。

「いつもの華麗な言い訳はどうしたのよ。ごまかしてみなさいよ。かわしてみせなさいよ。それができないほど迷惑だった？ 本音の本音で迷惑だった？」

目が赤い。泣く寸前という状態で、綾華さんは踏みとどまっていた。それはプライドか、配慮か。ここでこれをいってしまうのは、すがっているのか、最後のチャンスを与えたつもりなのか。

俺はそこで綾華さんがさらに畳み掛けてくれたおかげで、呪縛が解けた。

「迷惑なわけないでしょう。間違いでもありませんよ。愚痴っただけでしょうが。病人の愚痴なんか聞き流してくださいよ」

すかさず病気のせいにする。

「振り回されたことは怒ってます。でもそんなのは友達付き合ひしければ当たり前のお互い様ですし、気にしてませんよ。ただ、こっちは熱はあるわ頭は痛いわけで余裕がないんです。多少口調はきつくなっちゃったかもしれないです。それは悪いと思ってます」

今度はこちらが畳み掛ける番だ。

冷静な俺ならここまでにしておいたはずだけれど、今日の俺は普通じゃない。熱に浮かされたまま、歯止めも利かず、いいたいことをいってしまえ、と半ばやけになっていた。

「でもね、いきなり別れ話を聞かされる身にもなってくださいよ。しかも俺に思いつきり関係あるきっかけで。そんなん、俺に責任があるみたいに感じたって無理はないでしょう。どれだけ負担になったと思ってるんですか」

俺がこんなにもきになつて物をいうのは、少なくとも綾華さんに対しては初めてなはず。綾華さんから視線を切っていたから表情はわからないけれど、目の端に捉えた綾華さんは、床の上の小さな座布団にぺたんと座ったまま、背をピンと伸ばしてじっと動かずにい

る。

「確かに、広瀬さんじゃあ綾華さんの彼氏にはきついなあって思いましたよ。その辺の女子高生つかまえとくには充分でも、綾華さんの相手が務まるほどの男じゃない」

俺の声はだんだんトーンが落ちた。でかい声を出さなくても、綾華さんが聞いてくれていることがわかったから。声の調子を強くするのは、今日の俺にはやたら負担になる。

「なんであんなのと付き合ってんですか、綾華さんともあろう女が」
広瀬さんには絶対聞かせられない会話だ。

てか、高校生１年生の分際でどれだけ生意気なことを。

綾華さんはゆっくりと息をひとつついてから答えた。

「彼だけが大人への扉を開いてくれたからよ」

声が湿り気を帯びているのは、さっき涙をこらえていた残滓だろうか。

「セックスの話じゃないわよ？ 抱かれたから大人とか、処女なら子供とか、そういう意味じゃなくて」

ドキッとした。そういうことを平気で口に出してくるのは、綾華さんの癖なんだろうか。それとも、女つてのは、相手に男を感じたりしてなければその程度は平気でいえてしまう生物なんだろうか。

「あたしの家って旧家でさ。噂くらいは聞いているでしょ？」

知っている。それこそ、地元では有名な家だ。広瀬家も有名だが、綾華さんの家、永野家に比べれば、ぽつと出の成り上がり。

「室町時代から続く旧家ですよ」

室町時代の中期、この辺りを治めていた地頭一族が、幕府への謀反を理由に攻め滅ばされる事件があった。後の歴史から見ればごくごく小さな事件で、教科書にも載っていないような事件。

実態は、室町幕府に謀反を理由に地方の地頭をいちいち攻め滅ぼすほどの力は無かったから、有力守護大名同士の勢力争いに巻き込まれただけというのが正解らしい。

その後、しばらく騒乱の元になっていたこの土地に、様々な政争

の結果として、新たに地頭に立ったのが永野家だった。

その来歴はよくわかっていないけれど、どうもこの辺りの出ではなく、京都近辺から流れてきた流浪の公家侍だったらしい。

それから応仁の乱を経て時代は戦国に。有力戦国大名の旗の下に屈しつつ、永野家は巧妙に時代をすごしていった。でしゃばらず、しかし勇気を持って。

やがて戦国時代が終焉し、安土桃山時代のひと時の平穏が訪れると、永野家は小田原北条氏の一配下としてその名簿に名を連ねるようになっていた。城持ちではないけれど、それに準ずる階級として、お目見えの資格は得ていたようだ。小田原北条氏支配下の領域で、ひとまずは貴族の地位を得ていたといっている。

その後の豊臣秀吉による小田原攻めでは最後まで小田原城にこもっていたらしい。

本来落魄し歴史から消えそうなものだけれど、そこは地生えの地頭出身ということで、みずから武士たることを辞め、庄屋や名主といわれる階級に身を落とし、家を守り抜くことを決意したようだ。

徳川家康の江戸入府の際には、この辺り一帯の惣庄屋として名が残っているから、室町以来の地頭としてかなり地元に貢献していたんだろう。でなければ、いきなり「地頭は辞めた、庄屋になるから従え」といい出した所で、地元の百姓や地侍たちが従うはずがない。以降、江戸幕府の瓦解まで、永野家はこの辺りで一番大きな庄屋として、家を保ってきた。

維新以降の荒波にもまれ、家はその財産のほとんどを失った。特に第二次世界大戦後の農地解放で、永野家はほぼすべての土地を失った。

それでも、衆院議員を出したり、県会議員を出し続けたり、土地の名士としての永野家の盛名はまだ衰えたわけじゃない。

土地を失ったとはいえ、それは農地の話。街場に持っていた多くの土地建物は永野家のものとしてあり続け、今も永野家最大の事業は不動産管理業だったりする。

「べつに家の伝統に従えとか、躰が厳しくてぐれるとか、そういうべたな話があるわけじゃないの。実際、父なんか、今は偉そうな顔して県議員なんかやってるけど、昔は役者になるとかいつてぶらぶらしてるだけのどら息子だったって、祖母が笑っているわ」

綾華さんはぺたんと座ったまま、視線を落として喋っている。表情はわからない。

「でもね、やつぱり人の目が厳しいってのはあるんだよ。どうしてもさ」

まあ、家が家だから注目はあるだろう。

「親戚はやたら多いし、私なんて永野家の本家の長女に生まれちゃってるからさ、色々あるのよ、ややこしい話が。それこそね、ワイドショーネタになるくらいの話が」

「……あるでしょうね」

「笑っちゃうような話、いっぱいあるわよ。この子は父の子です、認知してくださいなんて女が駆け込んできたり」

「それ、笑い事なんですか」

「笑い事よ、結果的にはね。だってDNA検査で明らかに違う結果が出たし」

「はあ」

「つまり、そういうあほな騒ぎが、ドラマの中じゃなくて現実に起きちゃうような家なわけ」

そういう話とは縁が無い下々に生まれた身としては、ちょっと現実感がない話ではある。

「男女同権とかいう時代になったからさ、昔ならあたしなんか政略結婚の武器になる程度のこと、せいぜい嫁入り修行に身を入れてれば何したって許されるご身分だったんだろうけど、そうもいかなくて」

「跡取り、ですか」

「そう。うち、下に妹はいるけど、男の子がいないのよ。父も一人息子だから、父の跡を誰が継ぐかでもめる気配がね、既にあるわけ」

綾華さんは顔を上げた。長く話しているうちに、涙は引っ込んだらしい。ちよつと皮肉っぽい笑顔を見せていた。

「祖父が死んだら、どうせ相続税でこつそり持ってたかて、父の次の代なんて財産なんかほとんど残ってないはずなんだけど、それでも気になるのね」

「欲しがる人が多いってことですか」

「んー、ちよつと違うかな。欲しいってより、誰かが余計に財産を相続するのが許せないというか。自分の権利が少ないのは我慢できても、誰かが自分より大きく遺産相続しちゃうのが許せないのね」
「ははあ」

いやな話だ。なんつーみみっちい話だ。自分が努力したわけでもない、人の死によつて与えられる財産の分配で、自分の実入りどころか、他人の懐について嫉妬してくるとは。

「そういう人からしたらね、あたしなんて、どう育つかによつて自分たちの将来が決まる、危険極まりない物体よ」

「物体ですか」

「人間扱いしてない節がちよくちよく見えたわね。特に小学生の頃なんかは」

早く婿を取って男の子さえ産ませれば、あの子の役目は終わる。

そういう空気を感ずるようになったのが小学校低学年の頃だというから、酷な話だ。

「生殖器としての役割しか、期待されてないんだってのが、初潮前にわかつちゃうってのもなかなか乙なものよ」

面白そうにいつているけれど、当時の綾華少女にとっては大事件だったに違いない。性そのものが汚らしいもの、恐ろしいもの、しか思えないような年代に、自分自身がそれしか期待されていない存在だったとしたら。

「男女平等なんて口ではいつておきながら、女の方がね、婿とって男産めばお前なんか用無しだ、みたいなこと平気でいつてたよ」

本当たしたら、それをいつた女の性根の醜悪さは、聞いているだけで胸が悪くなってくるレベルだ。

「そういう中で育てられるとね、外に出られなくなるのよ。実際の話じゃなく、精神的にね」

綾華さんの口調は淡々としていて、昔のことはもう自分の中で割り切れているらしいことは伝わってくる。

「両親にも祖父母にも、色々なところに連れて行ってもらったけれどね、家に帰ればわからん親戚連中やらなんやらがうようよしてるわけよ。そういう連中はあたしに変な虫が付かないようにって、近所中の男の子の家に行つては脅すわけ。お前の家の子が綾華に手なんか出してみろ、この土地じゃ生きられんようにしてやるぞって」

「小学生相手に？」

「浮くでしょうね、盛大に」

なるほど、綾華さんが常に孤高の雰囲気を保っているのは、本人の努力というより、周囲が孤高に仕立て上げてしまっていたんだ。

今時そんな理屈が世間で通るはずも無いけれど、そんな連中が周りにいる子に、我が子を近付かせる親なんかいるわけがない。

「そこに現れたのが広瀬なわけね」

その単語が出てきて、俺は自分たちが何の話をしていたか思い出した。別に永野家の旧家談を聞いていたわけではなく、綾華さんが広瀬さんと付き合っていた理由について聞いていた。

「10歳違うと、そもそも外の世界との付き合い方が、小学生なんかとは比べ物にならないのね。それがまず新鮮だった。それから、あれは広瀬の甲板背負ってきていたから、いつてみれば婿候補の人として見られててさ。他の男たちほど牽制されてなかったの」

「自由に会えた？」

「自由ってほどじゃないけど、家庭教師役も引き受けていたから、一番接点が多かったわね」

「それが恋に、というわけですか」

「というわけですよ」

綾華さんは苦笑している。

「ありがちでもね、大切だったのよ。彼の目を通して、あたしは初めて世間を見た気がしたの。彼にすがって、初めてあたしは自由に外の空気を吸えた気がしたのね」

それが、綾華さんの「彼だけが大人への扉を開いてくれた」という言葉につながるのだろう。

「それで、外の世界イコール彼になって。外の世界の魅力は彼の魅力に感じられたのよ」

なるほど。そりゃ、魅力たっぷりだと思えただろう。

「でも、あれも結局坊ちゃん育ちなのよ。苦労知らずで、世間の常識って物を知らない。中学生になったばかりの女の子をよ、普通日付が変わるまで連れまわして遊ぶ？　しかも行き先が都内のクラブだったりするのよ？」

「それは……まあ、しないでしょうね」

「それを悪気なくしちゃうのよ、あの坊ちゃん。うちの家族も怒

ればいいのに、現代的な家族像とやらに逆らいたくなくとかわけわかない理由で放置よ」

「なんですか、それ」

「うちの馬鹿親父が、友達みたいな関係が理想だとか馬鹿なこといつて放任したの。育児放棄ネグレクトだろつての」

綾華さんの話は完全に家族を突き放していて、言葉も平気で難しい言葉が出てくる。綾華さんなりに、自分というものを作り上げるために、読書したり考えたり、いろいろ努力してきたのかもしれない。

「母親は一族の嫁へのプレッシャーに負けて精神病一歩手前の有様だし、自分のせいでそうなってるってことに気付かない馬鹿な親父には、それを忠告してやれる人間もいないと来てるし」

綾華さんがぎゅっと手を握っている。口元の表情も恐ろしく固い。しばらく、そこで言葉が途切れた。

ふ、と綾華さんは息を吐いた。

「高校に入ってしばらくしたら、なんかもう、馬鹿馬鹿しくなっちゃって。あんな男がフィアンセみたいな顔であたしのこと抱いたり、あたしがどんなに叫んでも気付くこともしない親がいたり、いい加減馬鹿馬鹿しくてさ」

「ぐれましたか」

「ぐれましたよ。盛大にね」

どれだけ盛大にぐれたかは、去年のこの学校のことを知らないはずの俺たちでも、噂で聞いている。成績はいいのに、そして今では遅刻はしないわ生徒会活動に真面目に取り組むわで、文句の付け所がない優等生の癖に、綾華さんは今でも素行不良の生徒の代表格のように扱われている。

「ぐれても誰も助けしてくれないことなんかわかってたし、それまでの自分が馬鹿にした底辺の不良たちと同レベルになるなんて、あたし自身が耐えられなかったから、ほどほどにしたけど」

「ほどほどにしてあのレベルですか」

「ほどほどにしなければ、今頃は高校生じゃなくなつて、子供のひとりも生んでるんじゃない？」

大したことじゃないように、さらつと綾華さんは答えた。風邪で伏せっている身……伏せっているはずの身としては刺激が強い。

「友達にも恵まれたしね。あきちゃんも知ってるあの子達、面白いでしょ」

「ああ、ええ、まあ」

言葉は濁したけれど、まあ、下級生をからかっていただけで、特に悪気は感じなかったし、引き際も良かった。

「あたしのうちのアホさとかわかつてくれた上で、あたしの捻じ曲がった性格も受け入れてくれたし」

綾華さんの目が少し柔らかくなった。この人が、あの人たちにどれだけ心を許しているか、多少わかる気がした。

「そこに現れたのが」

と、綾華さんは両肘を上げ、俺のベッドの上に乗せてきた。枕に背を預けて聞いていた俺のひざの辺りに、綾華さんの顔が来る。

俺が不意の動きに緊張していると、綾華さんは両手で頬杖をついて、横目でちらりと俺を見た。

「あきちゃんだったのよ」

「は、はあ」

「最近の話だけどね、結構あたしには大きな事件だったのよ」

「えー、何かしでかしましたでしょうか」

「しでかしてないよ、そういうんじゃない」

綾華さんは笑って、頬杖を一度外し、右手だけの頬杖になって前を見た。俺から見ると、ひざの右辺りで頬杖を突いている綾華さんが、俺の左側の壁をじつと見つめている。

「あたしに色恋抜きで接してくる男がいるってことが新鮮だったのがひとつ。そりゃそうよね、仕事でいきなり割り振られただけなんだし。でもね、偶然会っただけであたしに色目向けてきたり、いきなりキスしようとしたりする奴ばっかだったから、そうじゃないあ

きちゃんが新鮮だったのね」

「は、はあ」

話の次元が違いすぎる気がした。いきなりキスとかありえないでしょ。てか、この人相手に恋愛しようとか、無理でしょ、普通。

「それとね、本当に育ちがいいっていうのは、こういうことをいうのになって思ってたんだ」

「育ちはさほど良くは無いんじゃない……」

「経済力とかじゃないよ？　ちゃんと教育を受けて、いいことはいい、悪いことは悪いってちゃんと教わってきてるんだろうなって」

「はあ……」

その辺りはどうなんだろうか。まあ、人様に迷惑はかけない程度の躰は受けたんだろうけれど。

「この前のデートだってそうだよ」

「はあ」

もう、気の抜けた返事しかできない。自分のことが話題になると、俺はどうも弱い。

「あれだけ一緒にいて、あたしがあれだけ油断したら、今までの男ならホテル誘われてるね。てか、連れ込まれるわ」

「そんな大それたこと、できるわけないでしょう」

「それを大それたことと考えない馬鹿ばっかだったのよ、あたしのまわりって。しかも」

綾華さんはぺたんと腕を倒し、俺のひざに、布団越しに頭を乗せた。急に綾華さんの体温が伝わってきた気がして、俺は緊張する。

「あきちゃん、自分の家の門限の話したじゃない」

「しましたっけ」

「したの。それがすごい新鮮で」

いわれてみればしたような。確か、午前様じゃなければ大丈夫でしようというようなことをいわれて、その考え方おかしいから、とかなんとかいったような記憶がある。

「ああ、世間の家庭ってのはこうなんだ、親にちゃんと愛されてる

子ってこういう反応なんだって思ったら、うれしくなっちゃってさ」
「うれしいって、なんでまた」

「そっいうの、初めてだったから。どいつもこいつも、親に反抗してりゃ一人前みたいなことしかいわなかったのに」

「偏ってますね、それも……」

「こういう子と一緒にいたら、きっと幸せなんだろうな、とか思っちゃったのね」

綾華さんが、俺のひざの上でわずかに笑った。

いきなり、話題が核心に触れた気がした。

「それまではさ、そっいう真面目な子とか普通の子とか、全然興味なかったし、親に愛されてきたような奴とは一緒にいられないとまで思ってたのにね」

熱を出して寝ていたはずの俺だけれど、それどころじゃなくなってきた。全身が熱いのは、風邪のせいだけじゃない。

「それがあの時、すごいショック受けたの。あれ、あきちゃんってあたしが今まで勝手に毛嫌いしてきた人種なのに、めちゃくちゃ居心地良くない？　ってさ」

何もいえずに身を固くして聞いていると、綾華さんが「リラックスして聞きなさいよ」とでもいうかのように、俺の脚を布団の上から軽く叩いた。ひざ上20センチの部位は、叩かれるとなかなかきわどい。

「それに気付いちゃったから大変よ。だって、由紀があきちゃん狙いなのは見ててすぐわかったし、ああいう打算なしで突っ走っちゃうタイプ、あたしも嫌いじゃないから、応援したくなっちゃったし」
叩いた手をそのまま滑らせ、綾華さんは布団の上に置いていた俺の手をとった。汗ばんでいる手を取られるのにはかなり抵抗があったけれど、逆らえない。

「でもこんなにそばにいて居心地がいい男なんか初めてだったから……」

指を絡ませ、手を起こし、俺の右手と綾華さんの左手が、手のひ

らを合わせて指を絡ませる「恋人つなぎ」になっていた。熱っぽい俺の手には、綾華さんの手の冷たさが気持ちいい。

「由紀のものになっちゃったのは仕方ないから諦める。それは安心していいよ」

このセリフのときだけ、綾華さんは俺の目を見た。そしてすぐに視線はつないだ手に向かう。

「でも、こんなに一緒にいて気分がいい男がいるって知っちゃったら、そうじゃない男となんか、もう付き合えないの」

綾華さんの指に力が入る。ぎゅっと握った手から伝わる体温は、俺にも握り返せといっているようだった。

「だから広瀬と別れる気になったの。本当は好きになったことなんかなかった人だけど、今まで離れる決心がつかなかった」

俺が握り返すと、綾華さんは一瞬目を閉じた。ほのかに、綾華さんの頬に朱がさしたように見えたのは、たぶん熱に浮かされた俺の幻覚だったに違いない。そういうことにしておく。

「……それももう終わり。今さらあの人とは一緒に歩けない。昨日、その話はしてきた」

ふっと笑う。

「別れるってこと。今までありがとってこと。その話をするときはなんとか納得したようなことはいってたけど、今日になったらメールは来るわ電話はかけてくるわで、あんまりにもうるさかったから携帯の電源切ってやったの」

握った手をかすかに振るようにして、その感触を確かめているようだった。

「だからあきちゃんのお休みメールにも気付かなかった。返すの遅くなっちゃったからすれ違っちゃったね。ごめん」

「それは別に……気にしてませんし」

「まだしばらくごたごたするんだろうなって思うけど。でも、もう馬鹿なこととはできないかな。『普通』でいることの心地よさを知っちゃったし、あきちゃんや由紀ともっと一緒にいたいし」

そこまでいうと、綾華さんは頭を起こした。手は握ったまま。

「ずいぶん長く喋っちゃったね」

といわれ、時計を見ると、もう10時半になっている。

「あきちゃんち的にこの時間帯は大丈夫な時間帯？」

「どちらかといえば、まあ、完全アウトの時間帯ですね」

「あら、失礼。それは一大事だわ」

といいつつ、手は離さない人。

「でも、別に誰も来なかったわね」

「初めての事態に戸惑ってるんでしょう。俺のところに女が尋ねてくることも初めてなら、その相手がこんな超絶美人なんだから、そりゃ戸惑うでしょう」

「でも、何か間違いが起きてないかとか、気になるものじゃないの」

「これだけ話し込んでたら、逆に気を使って割り込んできませんよ、うちの家族は。壁薄いから、何かひたすら話してるなってことくらいは伝わりますし」

といっている間に、綾華さんは身を乗り出してきた。つないでいた手ほども、その手を両手で包み込んで、自分の頬に当てた。

「いいご家族ね。ほんとうに、君に会えてよかった。こんな家族もいるんだってこと、見せてもらえただけでも幸せ」

綾華さんは俺の手を頬に当てたまま、しばらく目を閉じていた。

そのうち、ずっと手が離れた。

「病人にとんでもない長話させちゃったね。ごめん」

そういつて、座り直した。

「今日は帰る。来週からまたよろしくね」

恐ろしく整った顔に浮かべた笑顔は非の打ち所がなかった。

かえって痛々しい気がしたけれど、それは俺が絶対にいつちゃいけないセリフのような気がした。

見事に熱は上がった。そりゃそうだ、病中の人間があんなに長話をして、しかもその内容が今まで経験したことがないほど緊張を強いるものだっただから。

土曜日はほとんど寝て過ごした。熱は最高で39度を超え、さすがに座薬で熱を抑えることになった。

「ばーか」

と妹は同情のかけらもなく、両親も微妙な表情を崩さない。

たぶん、かなりの勢いで聞きたかったに違いない。「昨日の美人はなんだったのか」と。

教えてやらないことは全然なかったんだけど、熱を出して寝込んでいる最中に、自分からその話を触れる気にはならない。そして両親も寝込んでいる息子に聞く気にはなれなかったようで、汗だくになってふうふういつている長男に、触らぬ神にたたりなしの方針で接しているらしかった。

だから、日曜日になって、熱はピークを超えたものの体調は全然戻っていない息子のもとを、別の女が尋ねてきたことで、両親の困惑はさらに大きくなったのだった。

「ごめんなさい、迷惑だとは思ったんですけど、来ちゃいました」
由紀だ。

あらかじめ俺には連絡があっただけで、親にまで詳しく伝える元気がなかったから、家族にとっては由紀の来訪は寝耳に水もいいところだった。友達が見舞いに来る、としか知らない。

「ちょっとおにい、どうなってんの？ 地球の未来は大丈夫なの？」
天変地異でも起きないか、と心配しているらしい。余計なお世話だ。

何が家族を驚かせたかといって、綾華さんという超絶美形の次にタイプはまるで違うにしても、明らかに俺の知り合いには不相応な

美人が来てしまったことだろう。

失礼な話だけれど、俺の家族は、そういう面での俺の力量をまったく評価していない。いや、自分でも評価したことがないんだから仕方ない話ではあるんだけども。

妹の案内で部屋に上がった由紀は、のっけから「どうなってるの？」だったから、かなりびびっている。

「私、来ても良かったんでしょ？」

「ほっとけ。日曜だからな、まだ寝てんだろ」

寝言だから気にするな、という意味でいったんだけど、通じたかどうか。

「たいそうなものを頂戴しまして」

とおかんが部屋に上がってきたのはその直後で、由紀のために紅茶とケーキが出されている。ケーキなんてものを常備している家庭なはずがないから、これは今日の夫婦のおやつにと買っておいたものだろう。うちは両親とも甘い物好きだ。

「お氣遣いなく」

としきりに恐縮している由紀は、手土産に結構値が張るお菓子と果物を持ってきたらしい。

「病気の友達を見舞いに行くといったらいっぱい持たされて」

おかんが下がってから、言い訳のように由紀がいう。

「病気の友達って女友達のもりで聞いているんだよね？」

俺が聞くと、申し訳なさそうに由紀がうなずいた。

「彼がいますなんてなかなかいい出せなくて……」

そりやそうだろう。由紀と付き合う覚悟は決めたけれど、あの過保護見え見えの親御さんにどう向き合うか、風邪じゃなくても頭が痛い。

「体のほうはどうですか？」

「メールの通りだよ。熱は微熱まで下がってるけれど、かなりだるい。関節痛もまだ残ってるな。でも病院からウィルス感染は陰性だって連絡が来たから、まあ、明日は学校に出れるんじゃないかな」

「とてもそうは見えません……」

由紀が伏目がちにいう。よほど憔悴して見えたらしい。

「無理はしちゃだめです」

「無理はしないよ。無理してまで学校行きたいってほど学校大好きっ子じゃないし」

俺が答えると、由紀は何かいいたげにもぞもぞと組んだ手をひざの上で動かしている。

「なに？」

水を向けてみると、由紀は耳まで赤くなりながらいった。

「私は晃彦くんに会えないのは淋しいです」

何をいつてやがる。俺はせつかく下がった熱がまた上がりそうになった。いや、絶対上がったね。

俺ががつくりしたように見えたのか、由紀はあわてた。

「ウソです、晃彦くんが無理する方がずっとつらいです」

「いやいやいやいや」

俺は首を振る。

「どうしてこのタイミングでそれも可愛いことをいえてしまうのかと……」

その言葉で由紀がさらに赤くなる。

「なんかもう、由紀は殺し文句の宝庫だね。びっくりするよ」

「そ、そんなことないです……」

「今会ってるんだから淋しくないだろ、とかとっさにいえない俺もどうかと思うけど」

「いってくてます、それ……」

「さらにいうと、今の発言で熱上がったから。どうしてくれるの」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「うっそー」

やばい。めちゃくちゃ楽しい。

「でも、うれしいよ。由紀がお見舞いに来てくれるのは予想外だったから」

「やっぱり来ちゃいけませんでしたよね」

「マイナス思考禁止」

「う……はい」

「勝手な思い込みだけれどね、なんか休日は家族一緒じゃないといけない家族ルールがあったり、ご両親が知ってる子じゃないと遊びになんか出られない空気があったりとか」

「何で知ってるんですか？ お話しましたっけ？」

由紀が本気で驚いている。

俺も驚いた。冗談で大げさにいったつもりだったんだけど。

「晃彦くんって本当にエスパーみたいになんでもわかつちゃうんですね」

由紀が目をきらきらさせて俺を見ている。

「いやあ、まあ、ねえ」

褒められていい場面なのかどうか。お付き合いの先が思いやられる話ではある。

その後少しの間話していたけれど、そのうち、由紀が決然と背を伸ばして宣告した。

「さあ、寝てくださいね」

「へ？」

「へ、じゃないです。寝るんです」

勢いよく、俺の枕元に座り直した由紀は、枕をぼんぼんと叩いた。

「風邪は寝て治すものです。私と話し込んでちゃダメです」

珍しくきりつとした顔をしている。どうやら、これがやりたくてわざわざ俺の家まで来たらしい。

病気の彼を寝かしつける彼女役。

横でそんなに張り切られたら寝付けないと思うんだが、と思いつつ、まあ、そんな仕草も可愛いと思ってしまった俺はただの馬鹿だ。馬鹿はされるがままになっちゃえ。

「はい、かしこまりました」

しょぼんとした振りをして、俺はもぞもぞと布団に入り直した。由紀はその「しょぼん」が非常に気になったらしいけれど、それが俺のネタ振りなのかどうか判断に迷った拳句、当初の見込み通り進めていくことにしたらしい。

「苦しくなったらいつて下さいね。まだしばらく、そばにいますから」

といいながら、昨日の夜、あまりの気持ち悪さに無理を押して洗い、一応乾かしたけれど大爆発している俺の髪を優しくなでた。

そうか、こいつ、これがしたかったんだな。薄目を開けて様子を見ると、由紀はこっちまで嬉しくなるくらい、油断しまくった顔で喜んでいた。

それだけ調子が良くないということなのか、そのまますぐ寝入ってしまったらしい。

綾華さんのあの長話の記憶が生々しいうちに由紀が来てくれて、いい気分転換になっていたのかもしれない。リラックスして眠れた気がした。

目覚めも悪くなかった。熱が出て以来、ろくな寝起きじゃなかったのに、2時間ほどして起きたとき、ずいぶん気分が良かった。

すぐに意識がはつきりして、体を起こすと、由紀が俺の机に向かっていた。

俺が体を起こす気配に、由紀が振り返った。

「起きました？」

窓からの日差しで一瞬メガネが光り、その奥の目が俺をまっすぐ見た。俺がいうとおりにしてすぐ眠ったからか、ずいぶんご機嫌らしい。

「うん、起きた」

「飲み物注ぎましょうね」

すぐにいすから立ち上がり、スポーツドリンクをコップに注ぐ。

「汗拭きましようか？ 顔だけでも拭いておくと気分が晴れますよ」
「うん、拭く」

いつの間にか洗面器に水を張って、新聞紙を敷いた床の上に置いていた。準備良くその横にはポットがあつて、由紀はそこからお湯を注いでタオルを浸した。

ゆるいお湯で絞ったタオルは気持ち良かった。由紀は自分が拭いてあげようと目論んでいたらしいけれど、そこまでしていいものかどうか一瞬悩んでいる隙にタオルを取り上げて、自分で拭いてしまった。

恨めしそうな目で由紀が見ていたけれど、無視。そこまでされたら、さすがにきつい。

「なにしてたの」

拭き終わったタオルを渡しながら訊くと、由紀は少しご立腹のようで、微妙に冷たい声で答えた。

「ノートをまとめていました。晃彦さんのクラスのノートを借りてきてるんです」

「そんなの自分でやるよ」

「文化祭の仕事もあるし、来週はやること多いですから。私でできることは肩代わりします。体調が戻るまで」

「いいよ、そこまでやってもらわなくても」

といつてから、俺は「やばいかな」と思った。「余計なことをしちゃいました、ごめんなさい」と来るか、と警戒してしまった。

由紀の反応は違った。

「晃彦さんのまねをしてみたんです。先を読んで、勉強や仕事の段取りを付けたら、きっと少しでも楽になるんじゃないかなって」

それで卑屈な感じで俺の様子を伺っていたら、俺も「余計なことを」という気になったかもしれない。でも、由紀の表情は穏やかだった。自信にあふれている、とはいわないけれど、静かだった。卑屈さはなかった。

「緊急避難です。普段ならしません。ノートは自分でまとめないと

頭に入りませんから。でも、こんな時くらいは、少し手抜きをして
もばちは当たらないと思います」

意外だった。

それが顔に出たのかどうか、由紀はうつむいてはにかんだ。

「晃彦くんは文化祭を背負ってますから、私で協力できることがあれば、晃彦くんに関わってる人たちみんなの力にもなれそうですし、それ、すごくうれしいんです」

「背負ってはいないけれど。でも、その考え方はすごいな」

素直に感心した。

「それがうれしいって考えてくれてるのが嬉しいよ」

由紀はますますうつむいている。褒められ慣れていないからか、耳まで赤くしているのがかわいい。

「私って目立たないですし、真面目くらいしか取り柄がないって思われてるから、仕事を押し付けられることはあっても、自分から仕事をして行くって、したことなかったんです。だから、晃彦さんと仕事できるのって、すごくうれしくて」

居場所を見つけたんだな。

不意に、そう思った。

期間限定だけれど、由紀は俺と一緒に仕事をする立場になって、そこに居場所を見つけたんだ。

俺の彼女ってのは措いておいても、自分の努力が誰かの支えになる、それは病中の俺であつてもいい、資材関係の手配を待っている各クラスでもいい、とにかく誰かの支えになつていることに幸せを感じているんだろう。

地味で目立たない立場にいるしかない小市民的学生にしか理解されないだろうけれど、誰からも何も期待されてこなかった人間って、そんなことで幸せになれる。自分もそうだった（はずだ）からわかる。

「……由紀」

俺はちよいちよいと由紀を手招きした。由紀はちよつと反応は遅

れたものの、いすから離れて俺の枕元に来た。そこにぺたんと座り、ベッド上の俺を見上げた。

「ありがとう。こんなんじゃご褒美にならないけれど」

といって、俺は由紀の頭をなで始めた。

今日はなでられている由紀の顔がじっくり見える角度だった。

由紀は、くすぐったそうな顔をした後、かすかに唇を開けて目を閉じた。なでられている頭に意識を集中しているらしいその顔が、凶暴に可愛らしい。こんなんで喜んでくれるんだから、なんていい彼女だろうか。

やばい、俺、すげー幸せかもしない。

「お前、案外かわいそうな奴だよな」

俺は開口一番そういった。完全に上から目線で。

月曜日、朝、学校の昇降口で。

偶然会ったのは、綾華さんのことで俺を脅し、広瀬さんの車の助手席から俺を完全に馬鹿にした視線で見て、その後力ケスさんに脅されていた女。名前を覚える気にもならない、その下卑た顔を見た瞬間、俺の理性はあっさりと消滅していた。

いわれた方は俺の顔を見て絶句している。

「憧れの綾華さんの彼氏に取り入ったまでは良かったけれど、そこから先は崖っぷちもいい所じゃないか」

「なんなんだよてめーは」

「口の利き方に気をつける。俺はお前がやったことを許す気は無いんだからな」

身長は俺の方が30センチ高い。その俺がわざと見下ろすようにしたら、相手にとってはかなりの威圧感だろう。

周囲が好奇の目で見始めたけれど、知ったことじゃない。

「綾華さんはお前を潰す気にいる。綾華さんにそんなことさせても仕方ないから、先に警告しといてやる。潰される前に逃げておけ」
女はまた絶句している。

「いいか。俺は警告してやったぞ。疑って破滅しようが、殺されようが、俺はもう知らん。好きにしろ」

いうだけって、俺は背中を向けた。
大した底意は無い。

確かに腹の立つ顔だし、見なくて済むなら一生見なくていい顔だったけれど、同じ学校にいて、しかも同じ学年にいるということは、今後2年半近くは顔を見る機会が残されているということだ。

中途半端に区切っておくと後に引きずりそうで嫌だった。

だから、いつそ修復のしようがないくらい断絶しておきたかった。
これでまだ何かいつてくるようなら大した根性だし、その時は俺
の全身全霊をかけて潰すまで。これで何もいつてこなくなれば万歳
三唱。

俺はお前を虫けら程度にしか思っていない。そう目で伝えたつもりだ。

朝の光景はギャラリーが多かったから、すぐにぱつと噂が広まった。

何しろ噂の本人だから、どんな噂が流れているかはむしろわかりにくかったけれど、気にはならなかった。体調がまだ戻っていないから精神力なんて無いに等しかったけれど、それを凌駕するくらい、腹が立っていた。

「お前、やっぱ怒らすと怖いな」

と、小学生時代からの友人がいう。

「顔色悪いからなおさらだろ」

俺が笑ってみせると、どこまで本気でいつてるのかわかんねえよ、
といって友人は苦笑した。

この話は上級生の素行の悪いお兄様方の耳にも入ったらしく、もと
とあの女とそのグループは、綾華さんの威を借る狐のように思
われて嫌う人間が多かったこともあって、なぜかおおむね好評だっ
た。

「ああいう女どもを脅すとか、結構できないもんだぞ」

「意外にいい度胸してるよな」

褒めてるのかけなしてるのかよくわからない言葉が、昼休みなど
に怖いお兄様方からかけられた。

「女を脅した時点で最低人間だっていわれるかと思ってましたけれどね」

「相手によるだろ。あの馬鹿どもには誰かがいってやらなきゃいけなかったしな」

「先輩方は？」

「やめろよ、女脅すと後が面倒だ」

「俺が面倒抱え込んでけと」

「当事者だろ？ 永野の絡みで色々あったらしいじゃないか」

「ええ、まあ」

「なら、適役だろ。せいぜい怖がらせておけ。将来役に立つ」

「何の将来に役立つんでしょうか」

「お前がこの学校シメるときにだよ」

「シメるとかありえないですから。つーかシメるとかありえませんか」

「うぜえ、2回いうな」

男子どころか、女子にも好評だった。

「あきちゃん、大活躍だったんだって？」

綾華さんのお友達の皆様までご登場。

昼休み、由紀と一緒に弁当後の時間を中庭で過ごしていたのだけれど、次から次へ校内の実力者とされる方々のご来訪を受け、由紀なんか明らかに硬直している。

「なんでしよう」

「しれっとしちゃってー。あの小娘にがつんとかましたって、すごい噂になってたよー」

「なんか絡まれっぱなしじゃ面倒かなって思っで、いいたい事いっただけですけれどね」

「それができんからみんな困ってたわけよ。いやあ、よくやってくれた。さすが私たちのあきちゃん」

「どさくさに紛れてなにいつてんすか」

「君ならやってくれると思っでたよ。ご褒美にお姉さまたちの熱い抱擁とキスなんてどう？」

「正気ですか？ まだ寝言には早いんじゃないですかね」

「いうねえ、さすが未来の番長」

「な、なんですか、そのあだ名は」

「だってー、綾華の『もと』彼氏を脅して帰しちゃったんでしょー？ あの人結構力ある人じゃんかー」

「相手が大人だろうがびびらず返り討ちにするとか、意外にやること大胆だなんて評判ですぜ、だんな」

「ちよつと、やめてくれませんか、本気で頭痛くなってきた」

「大丈夫？ お姉さまが優しく介抱してあげるわよ」

「ほんと勘弁してください、せつかく彼女できたばっかなのに、いきなり失恋さす気ですか」

由紀は硬直を通り越し、顔色は漂白されている。

「大丈夫よう、振られたらあたしたちが喜んで拾ってあげるってば」
「……だ……」

由紀が凍った声を出した。

つられて、思わず場が凍りつく。

由紀はがんばった。もう、由紀にしちゃありえないほどがんばった。

「……だめです……晃彦くんを奪わないで下さい……」

ぎゅつと両手を握り締め、メガネの奥の目をぎゅつと瞑って、細い肩にこれ以上力が入らないくらい力を込めて、ひとこと。

その途端、周囲は大活況。

「いやあああああつっ、可愛いつつ」

「なにこの子、やばい」

「ねえねえ、抱きしめていい？ 持ち帰っていい？」

「由紀ちゃんだっけ？ あなた、お姉さん欲しくない？ 欲しいよね？ 欲しいのね！」

おもちゃが俺から由紀に代わったらしい。

「ちよつと、マジでおびえてますぜお姉さま方」

「それがいいつつ」

「やばいやばい、これめっちゃ貴重品じゃね？」

「すごいもの発見しちゃったよ、これはもう、可愛がってあげるのがお姉さんとしての義務だよね」

「てかもう持ち帰る。誰がなんといおうが持ち帰る」

誰が止められるんだ、こんなもん。

あまりの馬鹿騒ぎに周囲の目が注がれるけれど、もちろん、誰一人目を合わせようとしない。

由紀は凍り付いて動けない。その由紀を囲み、お姉さまのボルテ―ジは上がりっぱなしだった。

こりや実力で引っこ抜いて逃げるしかないかな、と病み上がりには無謀な体力勝負を覚悟しかけた時、救世主が現れた。

こんな事態を収められる人間なんて、一人しかいるわけない。

「こら、あんたたち、いい加減にしな。その子の心臓止める気か？」
苦笑しながら、綾華さん登場。

相変わらぬの美形ぶりはもう描写する必要もないくらいで、ごく自然に俺の反対側の由紀の隣に割り込んで座った。

「ごめんね由紀、こいつら加減つてものを知らないから」

といいながら、由紀の頭を抱くようにしてなで始めた。

「なによー、由紀ちゃん独占する気かー？」

「あたしが最初に見つけた子だよ。この子もあたしが好きなんだから、余計な手出ししないで。ね、由紀」

最後に由紀に問いかけると、由紀はさすがに綾華さんの大ファンを宣言しただけあって、かろうじてうなずけた。

「ずるーい、綾華が相手でもそれは許せない」

「世界の宝だよ、この子は。独占とかありえないし」

「お前らどれだけ由紀にべた惚れなんだよ」

綾華さんが嘖き出した。

「あきちゃんには悪いけど、由紀ちゃんの方が大事」

「そーそー、あきちゃんとかもーどーでもいいしー」

「ひでーなおい」

思わず俺も嘖き出す。

「なんなんすかそれ。ついさっき褒めたくせに」

「それはそれー。これはこれー」

「あきちゃん、覚えとくといいわ、女心ってのは移ろいやすいんだなあ」

「あんたの心が移ろいやすいんでしょ、一緒にすな」

すかさず綾華さんが突っ込む。そして、

「とりあえず、由紀は本当にこういうの苦手なんだから、ほどほどにしてあげな」

と由紀の頭を丁寧になでながらいうと、お姉さま方は渋々あきらめた。

「ちえー、こんな素材、今世紀最高の発見だったのになー」

「すっげーつらい、すっげーつらい」

「かわいいって言ってただけじゃん」

「綾華ずるいよな、おいしいところ全部一人で持つてく気だよ」

あきらめた、といっても、文句ぶーぶー。これもこの人たちなりの物の楽しみ方らしい、ということは、前回の来襲で学習しているから、いちいち気にしないことにする。

「体は大丈夫？ 結構げっすりした顔してるけど」

「熱は引きました。食欲がまだ戻りませんけれど」

「あんま無理しないでよ。今週は後半の方がきついんだから」

由紀の頭をなでながらいう綾華さんに、金曜の夜、痛々しいほどの笑顔を見せて帰ったあの面影は無い。

流れから考えて、土日に広瀬さんやその周囲と何も無かったとは考えにくいんだけど、それも感じさせない。

「今週倒れたらさすがに恨むぞ」

「いやあ、有能な先輩がいるから安心して休んでいられそうで……」

「ふざけんな、まじでいつてんの」

すかさず由紀をなでていた手が伸び、俺の頭を軽く小突いた。小突く、というより、関西風の突っ込み。

「おお、未来の番長様になんてことを」

お姉さま方が無責任に喜んでいる。

「なんだそれ」

初めてその表現を聞いたらしい綾華さんが笑った。綾華さんのイメージどおりの、あでやかで曇りのない笑顔だった。

熱で奪われた体力つてのは、短期間でも相当なものだったらしい。放課後まで体力が保たなかった。

お昼休み、由紀と二人で弁当は食べたけれど、それが即回復にはつながらず、あの騒ぎの中で結構疲れていたらしく、午後の授業が始まるとだるくて眠くて仕方がなかった。

最後の授業はほとんどつぶしていた。保健室に行って寝ていればよかったのだけれど、風邪は校内でも流行っているらしく、午後になった段階で一杯になっていた。

かといって、帰ろうにも足が無い。共働きの両親を、この程度のことと呼び出すのも気が引けるし、タクシーを使つて帰るという頭は最初から無い。だいたい、帰っても一人で寝ているだけでは気が滅入る。

「ちよつと、大丈夫？」

隣の席の女子が心配してくれたけれど、大丈夫と聞かれて「無理」とも答えられないだろう、この場合。

「死にはしないと思う、今日のうちは」

「明日死ぬのかよ」

「短い付き合いだったな、今までありがとう」

「気分出しすぎだろ、早く帰って寝なよ」

「そーするわ」

減らず口は風邪でも減らないもんだね、とその子は笑っていた。まっただ。

すぐ立ち上がる気にもならずにうだうだしていると、由紀が教室に入ってきた。

入って来た時の顔は見えていないけれど、声をかけて来た様子を見ると、俺が机に伏しているのを見て驚いたらしい。

「晃彦くん、大丈夫ですか!？」

ずいぶん慌てた声を出していた。

「大丈夫だよー」

あからさまに力が入っていない声を出す。伏したままだから、何をいつているか由紀には聞き取れなかったらしい。

「どう見ても大丈夫じゃありません、早く帰りましょう」

「帰りたいのはやまやまなんだけどね」

俺は体を無理やり起こしながらいう。

「足が無い」

「迎えに来られる人はいませんか？」

「いないな、今の時間帯じゃ。無理すれば呼べるけれど、無理したくないし」

そういうと、由紀は少し考えたようだった。

そのうち、携帯を出した。

「……あ、綾華さん、由紀です」

俺を帰らせる件を話し出す。

綾華さんはまだ教室にいたらしく、休みについては了解といっているらしい。

「私もわかる範囲で進められますし、仕事が完全に止まることはないと思います」

俺が采配しなくても済む仕事はいくらでもある。今日はそれを終わらせていくことにしたようだ。

「すまないねえ、俺がこんな体ばかりに苦労かけちゃって」

俺はボケてみたが、タイミングがあまりにも悪かった。由紀は電話中だし、相手は綾華さんだ。話を中断してまで突っ込んでくれるはずがない。

うーん、この間の読めなさも体調のせいだと思いたい。

「生徒会に集まっている書類はどうしたらいいですか？」

由紀は俺がいったことはとりあえず無視することにしたようで、尋ねてきた。

「今日できるものだけもらってきて。それ以外は明日俺が処理する

よ」

俺も無かったことにして答える。

「で、もし何かわからないことがあったら、今日は棚上げにしよう。今日中にどうしても必要ってことはないはずだから」

「わかりました」

こつくりうなずいて、電話の話に戻る。

しばらく話していたけれど、その話はよく聞こえなかった。耳には入っていたけれど、言葉の意味が頭に入ってこない。我ながら重症だ。もしかしたらまた熱が上がっているのかもしれない。

綾華さんとの電話を終えた由紀は、俺に背を向け、小声で次の電話をかけ始める。

ただでさえ頭がぼーっとしているのに、由紀の小声なんか耳に捉えられるはずがない。何の電話か、誰が相手か、まるでわからない。そのうち、電話は終わったようで、あまり焦点も合わない俺の目の前で、由紀がくるっと振り返った。

「さあ、帰り支度しましょうね」

優しい声。もともと由紀は優しい声だけれど、わざとらしさが微塵もない、聞いていて思わず涙ぐみたくなるような声だった。

「荷物はまとまっていますか？」

「そもそも出してないから大丈夫」

「お弁当は入っています？」

「なんかしまったような気がする」

「立てますか？ 無理しなくていいですよ」

「無理はしないけど」

俺はゆっくり立ち上がった。勢いよく立とうとしてできなくはないけれど、立ちくらみを起こしてもみつともない。

「歩けますか？」

由紀が俺の腕をとって支えようとしたから、俺は笑った。

「そんなんなくても歩けるよ。歩けないくらいひどかったら、さすがに俺もとつくに帰ってる」

後で考えてみれば、由紀は付き添いを言い訳にして俺と腕を組んで歩いてみたかったのかもしれない。俺はそこまで考え付く余裕がなかったから、振りほどきはしなかったものの、仕方なく離れようとした由紀の手を止めることまではしなかった。

「じゃあ、行きましょう」

由紀はそれでも気丈に背を伸ばし、俺の背にそつと手を当てた。行くといつてもどこへ行くのか。足も無いのに。保健室か？ それともタクシー呼んじやつた？

考えがまとまらないまま、由紀と一緒に校内を歩いていく。体調が悪いとはいえ、そんなにひどくふらふらしているわけじゃないから、廊下を歩くのに不都合はない。足元が確かじゃないほどひどければ、そもそも学校に来ていなかっただろう。

昇降口で靴を履き替え、外に出ると、由紀は俺を校門そばのバス停のベンチまで連れて行った。

このバスに乗ると明後日の方向に行ってしまうから、今まで一切無縁の乗り物だった。

「ちよつとここで待ちましょう」

座りながら由紀がいう。何を待つんだろう。

由紀も自分からはあまり物をいわないし、俺も口を開くのが億劫だったから、通り過ぎていく人の波を見つめているだけの、ひどく静かな感じがする時間が流れた。

といつても、そんなに長い時間が経ったわけじゃない。

しばらく待っていると、そのうち由紀がすつと立ち上がった。

「お待たせしました」

由紀と腕を密着させながら座っているのが心地よくて、半分意識が飛びかけていた俺は、ぼんやりと何を待っていたんだっけ、と思った。

目の前に車が止まっていた。

見覚えがある。どこで、という思考より先に、映像が浮かんできた。由紀や綾華さんの日々が始まったばかりの夕方、ラーメン屋

でござらされた日の光景。

あの時、見た車だ。由紀を迎えにすつ飛んできた車。綾華さんの華麗なご挨拶に恐縮していたのは誰だっただろう。

運転席から降りてきた人の顔を見て、俺はやっと思いた。

由紀の父親に間違いない。

以前、会話の中で聞いてはいた。由紀の家は代々の農家で、夕方は割合時間があるから迎えに来てくれることが多いと。

こんな時に彼氏デビューかよおい、と思ったりもしたけれど、なにしろ頭に濃い霧がかかってしまっている状態だから、あまり考えも覚悟もまとまらない内に立ち上がった。

渋谷家のお父様は、俺を見るなり厳しい顔をするんじゃないかという予想を覆し、人の良さそうな顔に心配そうな表情を浮かべていた。

「大丈夫か」

今日何回目かのセリフを聞いたけれど、その声も人が良さそうな声。

「熱があるんじゃないのか」

「多分そうだと思う。触っても熱いし」

「すぐ送ろう。病院じゃなくていいのか」

俺の目をまっすぐに見てくるから、俺は思わず頭を深く下げた。

「帰れば薬もありますし、病院じゃなくて大丈夫です」

「娘から話は聞いている。乗りなさい」

そういうと、由紀のお父様は運転席に回った。その間に娘は後部座席のドアを開けている。

「晃彦くん、乗って下さい」

「いいのか？」

「もう呼んじやってるんだから遠慮しないで下さい」

確かに今遠慮しても仕方がない。

「じゃあご好意に甘えてしまおうか……」

失礼します、と断りながら、国産高級セダンの後部座席に乗り込

む。

「だいぶお世話になっっているそうだけど、うちの娘は失礼なことはしとらんかね」

乗るなりいわれたから身構えそうになったけれど、残念ながらこの日一番体調が悪い時だったから、身構える気力がそもそも無い。

「とんでもないです、今日もこうしてお世話になってしまって、由紀さんにはいつも感謝しています」

如才ない挨拶をするのが精一杯だった。

となりに由紀が乗り込み、車は動き出した。道は由紀が知っているから、指示を出している。

「前から君の話は聞いていたんだよ」

といわれたから、俺は思わず由紀の顔を見た。由紀は「なにいつてるのよ」とでもいいたげに口をパクパクさせていたけれど、空気を読まず、由紀のお父様は続ける。

「特に近頃はべた褒めだね。永野家のお嬢さんもそうだが、君たちの話をしている由紀が楽しそうだね、我が家じゃ君たちはすっかり有名人さ」

「……恐れ入ります」

まったく恐れ入る。由紀はついに言葉を発した。

「ちよつと父さん、そんなこと今いわなくていいでしょう」

父さんと呼んでるんだ。初めて聞いた。

「褒め言葉なんだからいいだろう。佐藤君の何がすごいといって、どんな相手とでも普通に話せて、仕事もバリバリできて、それでいて気取ったところが少しもない所だそうだ」

「ちよつと!」

あ、本気で怒り始めた。しかしお父様、まったく空気を読まない。「今まで会ったどの高校生より大人っぽいそうだが、確かに君にはそんな雰囲気がある。自分が大人だと思い込んでいきがっているガキじゃない、だからといって子供の立場に甘えていない、そんな雰囲気だな」

このぼーっとした状態のガキを相手に、この人は何をいつているんだろう。

などと思っていると、由紀があきらめたようにため息をついた。こっという人だ、とでもいうかのように首を振る。

「何しろ言葉遣いが礼儀正しいじゃないか。近頃の高校生とは思えんよ。大したものだ」

お父様の口調に、俺は何かを感じた。でも、その何かがなかなかつかめない。頭がうまく回らない。

「そこ右」

きわめて短く、由紀が指示を出す。視線を動かすのも面倒になっていたから見ていないけれど、まあ、由紀の表情は想像が付く。うんざり、というものだ。

「うちの娘はこんな子だろう？ 引っ込み思案でなかなか自分の気持ちの前に出さんから、君みたいな子にいい影響をもらえればそれに越したことはないと思ってるんだよ」

「悪かったわね」

ボソツと由紀がいう。親が相手ならこの程度の口は叩くらしい。というか、この子は結構自分の気持ちを前面に出しますぜ。どころか、時々びつくりするほど突っ走りますぜ。

忠告してあげたい気にもなったけれど、これは口にすべきじゃないだろう。だいたい、運転席に届くほどの声を上げるのが億劫だった。

「今度、うちにも遊びに来なさい。妻が君の顔を見たがっている」

この言葉で、俺は突然理解した。さっき感じたものは何か。

ああ、この人は自分を納得させようとしているんだ。

たぶん、俺が由紀の彼氏になった人間だと、この人は勘付いている。由紀がそれをいいたいけれどいえないことも勘付いている。そして、俺に対していいイメージを持つことで自分を納得させて、俺を迎え入れて、取り込もうとしている。

頭から拒否するより、頭から受け入れることを選んだんだ。

その方がダメージが少なくて済むから。

相手を受け入れた方が、娘にとってもダメージが少ないと踏んだんだろう。

たとえば俺がつまらない奴だったら、一度受け入れた上で、そのつまらなさを娘にしつかり伝わるように暴いていけばいい。別れるにしても自分の決断の方がいいに決まっている。逆につまらない奴でなければ、さらに自分の思う方向に育てていけばいい。

その自信があるんだろう。

この人は大人だ。愛する娘に関わることですら客観的に見て、より良い方向に導こうとしている。

ほんの短い時間しかまだ会ってはいないけれど、この人は由紀の父親という以前に、懐の大きさというところで、充分尊敬に値する人に思えた。

「……ぜひ、お伺いします。由紀さんを育てたご両親なら、失礼な言い方ですけど、お会いしていても楽しくなりそうですから」
熱のせいではなく、武者震いがする。意外なところに、意外なほどの人物がいた、という思い。カケスさんとはまったくタイプが違うけれど、この人も多分、俺がついていきたいと思わせてくれる人だ。

「嬉しいことをいつてくれるじゃないか。由紀、文化祭が終わったらかまわんから、セッティングしなさい」

風邪のおかげで、俺は思いもしない出会いを得られた。病気も、時によってはなかなか悪くない。

なんて思ったりもしたけれど、やっぱり気が張っていたせいか、家についてから一気に疲れが出て、帰ってきた妹に「ちよっと、言い残すことがあるなら聞いておくよ」といわれてしまうような有様に成り果てていた。

病気はいかん。

不思議なもので、あれだけひどい体調だった月曜日、薬を飲んでるくにもものも食べずに寝込んだはずなのに、火曜の朝、俺の体調はずいぶん良くなってしまった。

「本調子には程遠いけれど、なんかそんなに気持ち悪くはないよ」
起き出してきた俺を見て無言で体温計を突き出した母にいう。体温も平熱だった。

「頑丈に産んだ自信はあるけれどね、こんな鉄人に育てた覚えもないわよ」

俺の減らず口は絶対この人の遺伝だ。でなきゃ教育の結果だ。

「遺書書かせようかと思ったくらい昨日はひどかったのにね」

横からいつてくる妹も濃厚なDNAを感じさせる。

「俺ならあと一週間は寝込んでるな。本当に俺の子なんだろうな」

と能天気にな放言した親父は、最大の責任者だと思われる。

「あんたの子じゃなきゃこの平凡な顔は作成不可能でしょう」

とは母。父は当然切り返す。

「お前、自分の顔鏡で見てからいえよ？ まるっきり複製じゃないか」

「目が腐ってるんじゃないや、あなたこそ鏡見てきなさい。どれだけ濃い遺伝子よ」

別に喧嘩ではない。これが我が家の普通。

かくして俺の減らず口が誕生したわけだ。

安心してくれ。どっちも確実に俺の親だよ。

学校に行くと変な顔をされた。

「お前……ゾンビか」

「なんだそれ」

人の顔を見るなり、小学校からの連れがいう。

「昨日の顔色見たら今日は絶対休むと思ってたのに、何で明らかに昨日より元気なんだよ」

「知らないよ、起きたらこうだったんだから」

「包帯も取れて完全復活じゃないか、中間すっ飛ばして」

「すっ飛ばしてない、普通に回復しただけだろ。まだガーゼ張ってあるし」

「やっぱお前は怒らせないことにする。人間相手ならともかく、そうじゃない奴に逆らっても仕方ないもんな」

「ボクは小市民だよ？ 人知れずひっそり生きていくんだから変ないいがかりはよしてくれないかなあ」

「うそ臭いにもほどがあるだろ」

実際、俺の評価というものが、文化祭実行委員になって以来、だいぶ変わっている。

ちよつと前に喧嘩に巻き込まれて、危うく素行不良グループの一員に数えられそうになったけれど、それは回避して、結局小市民の目立たない生徒の地位を回復していたはずだった。地味で、それほど目立つ個性があるわけでもなく、生徒が3人もいたら存在感が埋もれてしまうような存在。

それは悲しい存在かもしれないけれど、俺にとっては居心地が良くてそれなりに楽しい世界だった。

それが、綾華さんとともに渡り合っている下級生がいるという噂でくつがえった。その後のもろもろの事件で「こんなやつがこの学校にいたのか」的扱いを受けるようになった。とくに大人の評判が悪い人々から。

一方で、生徒会会計の先輩や、生徒会活動に多少でも関わっている教師たちに、「面白い1年生がいる」という評価も受けている。こちららは素直に喜んでおきたい。

それから、由紀と付き合うようになって、急に女子と口を利く回

数が増えた気がする。

「体の調子、もういいんだ」

「なんとかね」

という話を、登校してから授業が始まるまでの間に3回、それぞれ別の女子と交わしている。

原因は何だろう、と不思議に思っていると、解答は綾華さんがくれた。

昨日、俺が帰ってから、由紀は学校に戻って文化祭の仕事をしていた。綾華さんは由紀不在の間からずっと仕事に取り掛かっていた、昨日も結構遅くまでがんばってくれていたらしい。

3時間目と4時間目の間の休み時間、教室移動のついでがあったようで、綾華さんは生徒会関連の書類を持ってきてくれた。

「放課後すぐに出して欲しいんだってさ。あたしたちじゃよくわかんなかったから」

2年生が1年生の教室に入ってくることはあまりなく、まして来たのが綾華さんじゃ目立つことこの上ない。ただでさえ注目されやすい人が、この教室では完全にスター扱い。誰もが異常なくらいに綾華さんに注目している。

「そんなん」

と、解答をくれた綾華さんは非常に明快だった。

「あんな静かな子と付き合うんだってわかったからでしょ」

体がでかい上に目立たず生きていこうとしていたからとっつきにくく、しかも交友関係が素行不良勢に傾いていたから（本人にその意識はないけれど）、女としては話しかけにくい人間だったらしい。「なるほど」

「じゃ、その書類よろしくね」

綾華さんは次の授業のこともあったからさつさといなくなった。

その後姿を見送っていた周囲が、綾華さんが扉を出て行った途端、俺を取り囲んだ。

「いいなあ、綾華さんとあんなに普通に喋れるんだ」

「どうなの、綾華さんってなんか庶民とは話してくれないイメージがあるけど、そんなでもないの？」

「今一番綾華さんと仲がいいのって晃彦らしいじゃん」

みんな、綾華さんは雲の上の人だと思っている。俺もつい最近までは別の世界の人だと思っていた口だから、人のことはいえない。

「別に普通だよ。俺の場合はたまたまきっかけがあったからだけど、むしろ話しやすい人だよ。変に人を区別したり差別したりはしない人だし」

「あたしたちとかでも？」

「きっかけさえあればね。用もないのに愛想売ったりはしないけど、用がなくなつてファンですっていえば話くらいしてくれると思うけれどね」

「紹介してよ」

「それはダメ。自分から行くくらいの行動力は欲しがる人だと思うし」

今まで、同じクラスなのにほとんど喋ったことがない女子まで話しかけてくる。綾華さん効果はすさまじい。

昼休みはほとんど書類の処理に費やされた。由紀も手伝ってくれたけれど、たかが二日仕事から離れただけで、だいぶたまっている。自分が手がけて配布していたものが戻ってきている書類がほとんどだったから、機械的に一気に処理していく。リストを見て照合したり、こちらで直せるミスなら直していったり、不明点には深く考え込まずにどんどん付箋を貼っていったり、生徒会や職員室に提出する書類には検印代わりのサインを書いていったり、別に難しい処理はしていない。

ただ、隣で見ている由紀には驚きの速度だったらしく、手伝いながら感心していた。

「やっぱりすごいですね」

「面倒なことは棚上げして後回しにしてるからね。別にすごくもな
んともないよ」

「このスピードをすごくないとかいったら、落ち込みます」

「なんで？」

「私にはどうがんばっても無理です」

「得手不得手があるでしょ。俺は由紀みたいに綿密なチェックはで
きないもん。ざっとやっていくのは俺の得意、綿密さは由紀の得意、
人それぞれだよ」

「そういう風にいえるのもすごいと思います」

「由紀は俺がやることは何でもすごく感じちゃってるんじゃない？
もしかして」

「そうかもしれません」

由紀はあつさりと認めた。俺が書類から少し目を離して由紀を見
ると、白い顔をわずかに上気させた由紀は、聞こえるぎりぎりの小
さな声でいう。

「惚れた弱みなので仕方ありません」

思わず書類を放り投げそうになった。

いきなり何をいい出すか、こいつは。

引っ込み思案で大人しくて、なかなか自分の思いを口に出さない、
というのが一般的な由紀のイメージだと思うけれど、とんでもない。
この前から、この子は結構いいたいことをはつきりという。声は小
さいけれど。

これは内弁慶というんじゃないだろうか。俺は由紀の思いに答え
た瞬間から由紀にとっては他人ではなくなったから、意外なくらい
するっと思っていることを口に出せるんじゃないだろうか。

「……ほんと、由紀は俺を何度殺してくれるのか」

「えっ、変なこといいましたか？」

「変じゃないけど、想像をはるかに超えてるのは確か」

「想像を超えてるのは晃彦くんも一緒です、私の想像なんて全然届

かないくらいすごいです」

「もういいよ、褒め合いは……仕事にならない」

呆れて、というより、これ以上由紀に褒められたら、勘違いしそ
うだった。俺ってすげー人間なんじゃね？ と。

昼休みはそんなことで終わっていき、午後の授業を経て放課後にな
る。

放課後になると、いよいよ今日の本番という感じた。

俺がいない二日間にとまり、今日また大量に発生したお金関連の
仕事、俺を出迎えた。資材購入には、歴代の生徒会が付き合っ
てきた業者と話を進めなければいけないけれど、生徒会の会計氏以外
に話を通すとややこしくなりそうだったから、俺が最初から最後ま
で面倒を見てしまうことにしていた。

なにしろお金が発生することだから、本来は学校の事務が肩代わ
りしていく仕事なのだけれど、そうすると今度はがしがし予算が削
られたり、ひつひとつの購入資材に理由のコメントが必要になっ
たり、ややこしくはないけれどひどく面倒にはなる。

だから、会計氏や生徒会指導主任の担任を味方につけて、金額の
枠内であれば自分で決済できるようにしていた。

自分で決済、ということは、責任が付いて回ること。交渉
から受け入れの段取り、使用後の保管場所の決定から所有者票の作
成・貼付まで、やることはたくさんある。

業者に電話するのは完全に俺の仕事。

「私、しゃべれません……」

といってその役から降りたのは由紀で、綾華さんには「あたしに
数字の仕事させる気？」と逆に脅された。やりたくないといってい
るのではなく、やったら責任は取れないよ、という押し付けっばい
理屈で押し通す気なのだろう。

俺だってそういう電話に慣れているわけじゃないし、やりたくて
やっているわけじゃないけれど、バイトで使い走りとしてあちこち
走り回ったりお使いしたりしてきた経験は、無駄にはなっていない。

「しゃべらなくてもいい仕事がいっぱいあるから覚悟しといて」

と由紀にいう俺の一番の仕事は、実はお金のことではなく、文化祭全体の資材が絡むことの段取りをつけて締切りを設け、それを守らせること。締切りがないと人間は動かない動物のようだから、守れそうな程度の締切りを設定し、それを軸に、直前になつたら警鐘を鳴らし、時間を迎えたら確認し、過ぎていたら催促し、協力が必要なら協力し、それでもできないようならこっちでやってしまう、そういう割り振りをしていくこと。

なんでも自分でやるのではなく、逆に自分以外の人間をどれだけ動かすかが大事になる。

特に自分の体調にどうも自信がもてないから、徹底的に人を使っていくことを考えないと、また寝込んだりしたらまわりにかける迷惑がすさまじいものになる。

カケスさんがよくいう事だけれど、仕事は段取りが8割。段取りさえできていれば、何も考えずに手足を動かしている内に、大方の仕事は片付く。

この頃になると、企画を早く上げないと資材を貸せないよ、という俺たちの最初からの掛け声が浸透したようで、取り組みが遅いところでも出し物などの見通しが立ってきて、学校全体に文化祭を迎える雰囲気が出来上がってきていた。

文化祭の、ざわざわした、期待と焦りに満ちたような空気が出来上がってきていた。

こういう空気は嫌いじゃない。

「今年はずいぶん盛り上がりがあるな」

といったのは担任。

「取り掛かりが早かったからかな、去年までとちよつと雰囲気が違うな。ぎりぎりにならないと、文化部以外の生徒はなかなか盛り上がりがないもんだが、今回はクラス単位の盛り上がりがすごそうだ」

「そんなもんですか」

去年の空気なんか俺が知っているはずがないから、話は一方通行。

「あたしもこういう雰囲気って好きだなあ。みんなで寄ってたかって祭りを作っていく感じ、わくわくするよね」

意外に素直な感想を口にしたのは綾華さん。

「不健全だったり非合法だったりする騒ぎのテンションも嫌いじゃないけど、こういう健全なテンションの高さってのもいいよね」

と、余計なことを付け加えてくれたけれど。

「お前たちの仕事が速いから助かるよ。校内の文化祭モードのスイッチを押してくれたようなもんだな」

生徒会指導主任でもある担任の評価は、俺たちにひどく高い。

人に評価されたくて始めた仕事じゃないけれど、やったことを評価されるのはやっぱり嬉しい。

「まだこれからが山場ですし、最悪のタイミングで倒れたりしないように気をつけます」

俺がそういうと、両隣にいる綾華さんと由紀が同時に深くうなずいた。俺が倒れて、まず直撃を食うのはこの二人なのだから当然だ。

まるで夢の中の出来事のようにだったから、意識してそうしていたわけではないけれど、俺はやっぱり現実感がないままに無視していたことになる。

あれから何日か経った今でも、あの時間そのものが俺の中で消化しきれないままになっていて、棚上げになっていた。

綾華さんが俺の見舞いに來た件だ。もつといえ、その中で語られた様々な会話。

そして、握られた手の感触。

あの記憶のどこまでが現実で、どこまでが熱が見せた幻覚なのか、どこまでが信じられるもので、どこからが信じてはいけないものなのか、熱に浮かされていたのは間違いのない事実だから、自分の中で整理ができなかった。

その後に出った綾華さんは、あのときの面影をまったく引きずらず、あんな話は無かったかのようだった。お互いに忙しすぎて仕事に没頭していたせいもあるのだろうけれど、あまりにも今までと変化がなさ過ぎた。綾華さんの態度も、会話の内容も。

仕事をしているときまでそのことに頭が占領されることはなかった。俺はそこまでの恋愛脳じゃないらしい。

ただ、門限がある由紀が帰り、仕事が一と段落して、もう帰ろうかというタイミングになった夜の7時半過ぎごろ、棚上げにしていた記憶や感情が不意に浮かび上がってくる。

綾華さんと二人きりになってしまふタイミングがあるのが悪い。

各クラスの代表や生徒会役員と顔を合わせているうちは気にもならないけれど、扉のガラスがまだ割れたまま厚紙が張られている生徒会室で、俺が書類処理のためにパチパチとキーボードを打っている音と、パソコンのファンが回る音、もう真つ暗になった外から聞こえてくる部活の声、それしか聞こえない生徒会室の中で、綾華さ

んが携帯をいじっているかすかなクリック音がやけに大きく聞こえる。

いつ、誰が入ってくるかわからない空間だからか、綾華さんは仕事以外のことでは一切口を開かなかった。誰かがいれば冗談もいうし、俺と掛け合ったりもする。でも、二人になると、必要以外の口は叩かなかった。

前ならそれで良かった。

俺も学校のスター相手に無駄口叩くくらいなら自分の作業に没頭していたかったし、綾華さんが俺相手に無駄口叩かないのはむしろ当然に思えた。なぜ、綾華さんともあろうものが、俺なんぞと喋らなければならぬのか。

ところが、その大スターが、あまりにも近くなりすぎた。どこまでが現実だったかあいまい、という厄介な状況ではあるにしても、綾華さんは病身の俺の手を握り、かなりきわどいことをいつている。こんなにそばにいて居心地がいい男なんか初めてだったから。

その言葉が耳について離れない。

その後、綾華さんは「『普通』でいることの心地よさを知っちゃったし、あきちゃんや由紀ともっと一緒にいたいし」ともいつていた。

文脈から考えれば、綾華さんにとっては俺がどうというより、普通というものに対する憧れを自分なりに認めることができた、と解釈もできる。でも、解釈の仕方によっては、俺を好きだといったようにも思えなくはない。

いやいや、それはないわ、と俺の理性は告げる。ありえないだろう。

ただ、記憶にもやががかかっていて、自分の解釈に自信がもてないのが問題だった。

それを考えたくないから仕事に没頭しようとするのだけれど、二人きりになってしまえばなかなかそうも行かず、ついつい綾華さんにとらわれてしまう。

それでも仕事に没頭しようとした成果は上がっていて、見込みより早く処理ができています。休みもあつたし、そろそろ仕事を溜め込むかな、と予測していたのだけれど、意外にも溜めるどころか、いくつかの仕事を先行して始末してしまっている。

たとえば、各クラスの処理の合間にでもやるうと思っていた、後夜祭に使う資材の手配や、使い回しの計画など。全体の計画ができてからでもいいやと思っていたけれど、この段階でも作って作れないことはなかったもの。去年までのものと不完全もいいところだったから、新たに作り直した。結構そういう書類や計画が多い。

今までは現場の判断でどうにかしていたんだろう。それじゃダメだ、ちゃんと計画しなきゃ、なんて大声でいつて回るようないい子ちゃんでも、自分が正義と思えば周りの弱さや怠けを許さない善人でもないから、それで別にかまわないと俺も思う。

それでも計画を作ったのは、単純に、そうでもないときがあったからだ。今日はなぜか綾華さんと一緒に部屋にすることが多く、その間、「仕事してまっせ」という顔で間を持たせたいという、ただそれだけの理由でしばしとキーボードを打っているうちに出来上がってしまった。

昼休みに仕事をしていた時、由紀がしきりに感心してくれていたけれど、放課後の仕事については褒められる理由は無い気がする。

プリンタのモーターが静かな部屋の空気を震わせる。

書類が2枚、吐き出されてくる。伸びをしてそれを取り、眺める。これで間違いが無ければ、今日できることは一通り終わる。そしてざっと見たところ、間違いは見当たらなかった。

さあ、仕事は終わってしまった。

綾華さんはまだ帰らない。

なぜ、携帯を打っているだけの綾華さんが生徒会室に残っているのか。

理由は知らない。知りたいし、できれば速やかにお帰りいただきたい気がするのだけれど、残念ながら訊ねる勇気がこの時の俺には

なかった。

人を脅したり喧嘩を売ったりする機会に最近恵まれてしまい、おかげさまで「あいつは怒らせると怖い」だとか「大人しい顔して実は陰の実力者かもしれない」とか訳のわからない評価を得ている俺も、実態はこんなもの。小心、ここに極まれり。

綾華さんも綾華さんで、他の生徒がいなくなった瞬間から一言もしゃべらず、さっき携帯を出すまでは、文化祭実行委員の本部から回ってきたプログラム案と詳細な計画書のチェックをしていた。赤ペンでしきりに書き込みを入れていたから、見るのは真面目に見ていたのだろう。

それも一巡したようで、今はどうもメールをひたすら繰り返しているようだ。

俺は覚悟を決めた。このままうだうだしていても仕方がないし、いい加減腹も減っている。病み上がりで胃も元気ではないけれど、減るものは減る。

「綾華さん」

呼びかけた声はかすれていて、思わず咳き込んだ。全然しゃべっていないかったからだろう。

「……なに」

綾華さんの声は氷点下の気配。こちらを見もせず、携帯を操る超高速の指使いがそこはかとなく俺の恐怖を演出してくれる。

「い、一応仕事は終わりました」

「ああ、そう」

身じろぎもせず、うなずきもせず、綾華さんはごく短く答えた。メールにほぼ集中しているのか、それとも別の理由で俺に返事するのが鬱陶しいのか。ちらりとしか見ていないけれど、顔も強張っている気がした。

気にしていたら１ミリも身動きが取れなくなりそうだったから、俺は帰り支度をすることにした。まずはパソコンの電源を落とす。それからいい書類を整理し、ファイルに綴じるものは綴じ、クリア

ファイルに入れる物は入れ、未処理棚に戻すものは戻す。

俺がガチャガチャ動いて、棚の鍵も閉めて帰る準備が出来上がった頃、急に綾華さんがいすの上で大きく背伸びをした。

「うあああ、もう疲れたよー」

今までとは全然気配が違う、肩の力が抜けた声だった。

「あきちゃんもお疲れ」

「あ、え、はい、お疲れ様です」

「……どしたの？ あたし、どうかした？」

俺がかなり怪訝な顔をしていたようで、綾華さんまで怪訝そうな顔になる。

「いや、今日はずっと難しい顔をしていたなあ、と」

「ああ……色々、ね」

立ち上がりながら綾華さんという。

「広瀬と別れるって話、ちよつともめててさ」

そういいながら苦笑している。

「広瀬が動き回ってるのかどうか知らないけど、あいつの知り合いからやたらメールとか電話とか来てて。返すの大変なんだ」

それか。

俺は複雑だった。どう反応していいか、見当が付かない。

「いかにいかに、眉間にしわが寄ってたかな」

ぐりぐと自分の眉間を揉んでいるけれど、もともと眉間にしわが寄っている顔つきでもないから、もちろんデモンストレーション。

「……まあ、荒っぽいことがないようにして下さいね。こじれるとあの人は大変そうな気がしますし」

「広瀬、こじれたらすごい勢いで復縁迫りそうね。あれは精神的には子供だからさ、自分がこうあるべきだと思うとあたしやみんなもそう考えて当然だとか当たり前に思っちゃうばかだから」

本当に容赦がない。

この人は成績以上に頭がいいから、表現力がある。説得力があるだけ救いがないこともある。

「でも多分、あきちゃんには火は飛ばないと思うよ。なにしろバツクにすごいのがいるってみんな知ってるから」

「カケスさんですか」

「掛巢さんがあきちゃんの後見人だったこと、すごい勢いで広がってるから。どうもあきちゃんはそのうちの鈍そうだけど、今でもあの人的一声かけたら、百人単位で兵隊集まるわよ」

「知ってますよ、この辺りの土木業界でも有名人ですから」

「本当にそうなのだ。」

「なんなら」

と提案してみる。

「カケスさんに頼って見たらどうです？ 俺が紹介しなくたって、この前の一件もあるし、勝手に動き出さないとも限りませんが」

「いいわよ」

綾華さんは一笑に付す。

「別れ話くらい自分で始末つけるわ。いざとなれば、永野家ブランドの威力もあるし」

思い出した。この人は地元最強の家の出だ。

何しろ田舎のこと。相手が社会人ならなおさら、永野家のネームバリューは効果的だ。何も知らない子供ならともかく、永野家を正面きって敵に回すようなことになれば、何かと不都合が出てくることは、広瀬さんにも、そしてその周辺の人たちにもすぐにわかることだ。

「別れた原因に納得いかない、みたいな話が多くてね。もともと好きじゃなかったっていつてるのに」

携帯を器用に手の中にくるくる回しながら綾華さんいう。

「あきちゃんのせいだって話は意外に出てこないのよ」

「はあ」

何が出てくるかわからないから、最小限の返事。

「由紀のおかげね。あの子に感謝しなさい。あの子とラブラブな場面が目撃されてるから、原因があんただとは気付かれないんだから」

「……やっぱ原因って俺なんすか？」

思わず、踏み込んでしまった。

俺はいつも自分から地雷原に飛び込んでしまう。そのまま「はあ」とだけ返しておけばいいものを。

綾華さんは、今さら何を、という顔で俺を見た。

「そういつてるでしょ？ 信じてないの？」

「信じてないんじゃないかって、信じられないんですよ。なんで俺なんかと接しててそういう話になっちゃったのか」

綾華さんは俺のセリフを聞くと、黙って立ち上がった。立っていた俺のすぐ近くまで歩み寄ってくる。俺は身動きもできないまま突っ立っていた。

俺の目の前まで来ると、綾華さんは右手の人差し指をくるくると見せ付けるように振ってから、俺の胸に突き立てる仕草をした。

「何度でもいう。あんたはいい男なの。自分で気付いていないだけぐりぐりと胸骨が押される。痛いほどではないけれど、くすぐったいというレベルではなかった。

「その自覚の無さはもう犯罪的ね。見てて腹立ってくるわ」

「そりゃ……どうも」

気の利いた返事なんか浮かんでこない。綾華さんは指を降ろした。「腹立ったついでに、はつきりいうわ。どうも回りくどいいかたすると逃げようとするみたいだから」

綾華さんのきれいな顔に、攻撃的な笑みが浮かんだ。

凄絶な、といってもいいのかもしれない。寒気がするほど美しい、と思ってしまった。

そして、爆弾を落とす。

「あたしは、あきちゃんが好き」

「あたしは、あきちゃんが好き」

炸裂した爆弾の巨大さは、夢かとも思えた熱の最中の話し合いのときの比じゃなかった。手を握られたときだって、ここまで衝撃は無かったはずだ。

俺は口の中がからからに乾いていた。緊張で足が震えそうになる。とてつもないことが起きている。

「本当は、由紀なんかに渡しておくつもりも無いのよ。でもそれはそれであたしのプライドやポリシーが許さないから、由紀から奪うつもりはないわ。でも」

綾華さんの瞳がじつと俺の目を貫いている。目なんかそらせない。「好き。生まれて初めて、男を好きになった」

女性としては背が高い綾華さんとは、由紀ほど視線の角度はない。まっすぐに射込まれる視線が、直接俺の脳に侵入してきそうだ。頬に差した血の色が、唇の赤さが、なにより俺の姿を映して動かない瞳の色が、俺を縛り付ける。

「話してて楽しい。一緒に歩いていると胸が痛くなる。ちょっと会えないだけで胸がざわざわする。遠くに見かけただけでときどきする。会える予定があるだけでわくわくする」

そこまでいうと、視線を外して下を向いた。

俺は自分が呼吸を忘れていたことにすら気付いていなかった。息苦しさ思わず大きく息をついて、その音に自分でびっくりする。

そのびっくりに更なるびっくりが重なる。

綾華さんは、俺の両手を自分の両手で捕まえていた。由紀のそれより長い指が、俺の両手の中で動き、指と指が互い違いに結ばれた。「こうして手をつないだら、わかるでしょ？」

瞳が再び俺の目を射抜く。

わかりたくなかったけれど、わかってしまった。

綾華さんの手から、震えが伝わってきた。細かく、不規則に、綾華さんは震えていた。

「こんなこと、初めてだわ。自分でも自分がどうなってるかわかんないの」

つないだ手はしつとりとっていた。汗がにじんでいた。緊張しているのか、冷たい。

そして、鼓動が伝わってくる。激しく、早く、大きな鼓動。

「広瀬に抱かれてるときだって、どんなに興奮していたって、こんなにどきどきしたりしなかったわ。人を好きになるってこういうことなのかって、初めてわかったの」

綾華さんの声が、俺の心を砕いていく。何も考えられなくなっていく。綾華さんの鼓動が、俺の体を溶かしていく。

「あきちゃんのせいだよ。こんなもの、気付かなければ良かったのに。気付かなければ、ごまかしていられたのに」

胸が震える、という感覚。初めて命がけの喧嘩をする羽目になったとき以来じゃないだろうか。

「もうごまかせない。あきちゃんを好きってことはごまかせても、人を好きになる恐怖と快樂は、知ってしまったえばもうごまかせないわ」
そこまでいうと、綾華さんはそつと体を前にずらした。そこには俺の体がある。

綾華さんの髪が鼻先に来る。綾華さんは自分の額を俺の首筋に埋めるようにした。綾華さんの香りが濃密に俺の鼻腔を刺激する。

「触れるだけで意識が飛びそうになるのよ。あきちゃんの指で触れられたらって思うだけで何も考えられなくなる」

俺の指を確かめるように、握っていた手を離し、指先で俺の指を叩くように触れ、そして腕を上げる。

そのまま、綾華さんは俺の腕の隙間に手を差し込んで、俺の胸を抱いた。

綾華さんの細い体がしなやかに俺の体に密着する。

「こんな風に抱き合ってみたって、あたしがどれだけ願ってたか、

わかる？」

柔らかすぎる胸が、ぐっと押し付けられている。片手が俺の後頭部の辺りをまさぐるようにしている。もう片方の手は俺の背中をつかんでいる。

「あきちゃんの鈍感さは酷だよ」

そういうと、綾華さんはすつと頭を上げ、背を伸ばして、俺の首筋に噛み付くようにキスをした。

全身に走る衝撃。

髪の前まで電気が走ったような。

「……あたしがこんなに好きなのに、気付きもしないで由紀に走っちゃうしさ」

切ない声で、綾華さんは愚痴った。耳元でささやくから、その息が俺の感覚を麻痺させていく。

「自覚も無いくせにどんどんいい男になっていくって、どんな詐欺だよ。ほんと、最低な男」

俺を抱く腕に力が入る。結構強い力で抱きしめられて、俺は息が詰まった。

「悔しいから、せめて自覚は持つてよね。あんた、今、あたしも由紀もめろめろになるくらいいい男なの。優しさがいい男の条件だと勘違いしてるその辺の童貞少年とはレベルが違うの」

わずかに毒を吐きつつ、綾華さんは俺の首筋にもう一度キスをする。

「……今のあたしが、一番したいことってなんだか、わかる？」

言葉と共に出てくる息のかけらが俺を熱くする。答える余裕なんかない。わずかに首を振る。綾華さんは俺の様子を伺いながら、ふふ、と笑った。

「あきちゃんを押し倒しちゃうこと。今すぐ。このまま脱がしちゃう。あたしも裸になって、二人で抱き合うの」

綾華さんの腕から力が抜ける。

その体が俺から離れた。

体と体の距離は30センチくらい。

「しないけどね」

そういつて、くるりと背を向けた。

「そんなことしたら、あたし、自分が一生許せなくなる。自殺したって足りなくなる。後悔することがわかってて突っ走るほど、あたし、馬鹿にはなれないんだよね」

綾華さんはそういうと、すっと離れていった。

体温が、遠くなった。

触れ合っていた心も、離れた気がした。

とてつもない寂しさの発作に襲われて、追いかけてそうになって、俺はとどまった。

綾華さんの背中が、俺に何かを求めている。

それがわかってしまった。

綾華さんは、半分は俺に抱きしめられたがっている。半分は、俺に拒絶されたがっている。

気持ちを伝えた後、どろどろに溶け合いたい気持ちと、それを拒絶する気持ちとが、綾華さんの中でせめぎあっている。

それを、綾華さんは俺にジャッジさせようとしていた。

細い肩だ、と思った。背中から腰にかけての曲線の頼りなさはどうだろうか。守ってあげなきゃいけないと本能が叫ぶ。守らせて欲しいと欲求が頭をもたげる。

蛍光灯の明かりの中にたたずんでいる綾華さんのシルエットがたまらなくいいとおしい。

「……帰ろう」

俺の声が生徒会室に響いた。

他人がいつているようだった。

「途中まで送るよ。酷かもしれないけれど」

びくつと身を縮ませた綾華さんに、俺は声をかけていた。

「気持ち、もらった。俺がどれだけその気持ちに震えたか、伝わったよね」

わずかにうなずいたように見えた。

「綾華さんほどいい女、俺は知らない。あんな気持ちもらっちゃったら、こっちこそ押し倒したいよ。抱き合いたいよ」

俺は机の上の荷物を手に取った。

「でも、綾華さんがあんなに自分を裸にしたんだから、俺も自分を裸にする」

綾華さんの荷物も持つ。

「欲求だけでいったらとくに綾華さんを押し倒してるけど、でも今の俺、由紀のものなんだ。理屈でも強がりでもないよ」

そのまま綾華さんの横を抜け、前に回る。

「由紀を裏切ったら、俺も自分を一生許さない。自殺したって足りなくなる。後悔するのがわかってても突っ走る馬鹿だけれど、今の俺が突っ走る方向は、綾華さんの方向じゃない」

綾華さんが顔を伏せている。目は見えないけれど、涙の雫が落ちていくのは見えた。

「綾華さんの強さも弱さも好き。多分、順番が違つてれば、俺の幸せは綾華さんの中にあつたんだろと思う。でも、そうじゃない順番で巡り合っちゃったんだ」

俺は両手に荷物を持つたまま、綾華さんに語りかけた。

「俺は由紀しか見ない。ごめん。二人一緒は無理だ」

「……当たり前だろ」

綾華さんが声絞り出し、そして。

俺の脚を思い切りよく蹴飛ばした。

「あいでっ」

蹴飛ばすというより、蹴った足を振り抜く、見事なトウキックだった。サッカーボールなら回転もせずにキーパー手前で沈み込むスパーキックだろう。

「由紀を不幸にするとか、んな選択したらその場で刺し殺してやる」「いいいいいいっつ」

これが本気で痛かった。蹴られた左足が飛び、俺は両手の荷物を落とさなかったのが奇跡と思えるほどにバランスを崩した。そしてそのまま右足だけで一歩飛びのき、崩れ落ちる。

「あんたのこと大好きだけど、それと由紀の話とは別問題だわ。由紀泣かせたら本気で殺しに行くからね」

「充分殺されかかるとるわ！」

あまりの痛みに涙ぐみながら、俺は叫んだ。女子のキックでも、あれだけ豪快に振りぬかれたら、タイミング次第では骨まで逝ってしまうだろう。

俺があまりにじたばたと身悶えているので、ようやく綾華さんは自分の攻撃がどれだけクリティカルヒットだったか理解し始めたらしい。

目尻の涙を指ではじきながら、ちよつと心配そうな顔をした。

「大丈夫？」

「っ……！」

返事もできない。息が詰まるほど痛かった。

それがなぜか綾華さんの琴線に触れたようで。

さっきまでの異常な雰囲気を自分の笑い声で吹き飛ばそうとするかのように、綾華さんは盛大に噴き出した。

「あっははは」

笑い事じゃない、とはいわなかった。

あの泣き笑いの顔を見ていたら、いえるはずがないじゃないか。

脂汗を流しながら、俺は立ち上がった。宣言どおり、俺は途中までは綾華さんを送っていかなければならない。

水曜日になるとだいぶ体力も戻ってきた。

精神的にも、気にかかりすぎるほどかかっていたことが一区切り付いたから、本来やらなければいけないことに集中できるようになっていた。

由紀のおかげで休んでいた日のノートは出来上がっていたし、提出物も何とか追いついた。

文化祭の仕事の方は、むしろ進みすぎているくらい。なにしろ昨日は現実逃避のために異常な勢いで処理を進めて行ったから、翌水曜日になって改めて自分の仕事量を眺めて驚いたくらいだ。

仕事量はこれで減っていくかな、と思っていたけれど、考えが完全に甘かった。

放課後になつて、あらかじめ呼ばれていた職員室に行くと、担任が腕を組んで待っていた。

「お前もうすうす気付いていたとは思っただけだな」

担任が渋い顔をしている。

「今年の生徒会執行部はどうもやる気が欠けている。プログラムと計画書、見たか？」

「ちらつとですけど。まだよくは見てないです」

そういえば昨日、綾華さんが告白劇の前に見ていたなあ、と思いつ返す。

「あれな、去年のをほとんどそのまま流用してるんだ」

「そうなんですか」

何か問題があるんだろうか、と俺は首をかしげた。担任は計画書をいい加減にめくりながら続ける。

「文化部も各クラスも、やることはそれぞれ去年とは違う。使う資材だって、去年とはだいぶ違っていたはずだな」

「ええ、まあ」

違っではいたけれど、そもそも書類が全然なっちゃいなくて、よくまあこれで回ったもんだと感心していたくらいだから、どこが違うかまでは考えていなかった。そこまで考えていたら面倒さが倍増する。去年までのものは無視して一から作ってしまった方が早かった。

「今年はお前たちが早く動いてくれたおかげで企画が早く上がったからな、計画書もそれなりに練れるはずなのに、この有様だ」

渡された資料を流し読みする。

担任のいいたいことがだんだんわかってきた。

「ひどいですね……確かに」

誤字脱字の嵐、という所はまあいいとして、今年の各企画がほとんど頭に入っている俺からすると、計画書はずさんというレベルじゃないかった。本当にこれを作った奴は、各企画の書類を見ていたんだろつか。各企画のタイトルくらいしか直っていない。

「予算くらい直してくれないと、数字が全然合いませんよね」

「金のかかる部分ですらその状態だ。後は推して知るべしでな」

担任が深いため息をついた。

「突き返せばいいじゃないですか」

「本来ならそうすべきだろうな。でもな」

担任は頭が痛そうな顔をした。

「人がいない。突き返したところで、この手の仕事ができるのは會計くらいしかない。だがこれを進学組のあいつ一人に任せるのはどう考えても酷だ」

「他の人はどうなんですか？ セクションごとに振り分ければ、個別には大した作業量じゃないでしょう」

「それを振り分けて作業を統括する人間がいない。いったらう、今年の生徒会とはにかくやる気がないんだ」

やる気がないのは知っていた。そもそも俺が綾華さんや由紀と一緒にに仕事することに決まった日、綾華さんも由紀も、あまりにもやる気がない生徒会の会議進行にため息をついていた。俺も退屈で

仕方がなく、由紀などはありえないほどうまい食パンマンを描いて俺の目を驚かせている。

「で、ここからが本題なんだが」

と、担任がいすの上で身じろぎをした段階で、次に出てくるセリフの予想はついた。俺は右手を担任の前に出して制する。

「ちよつと待つて下さい」

「どうした」

「俺にその取りまとめをやってくれとか、そういうのは無しですよ」「つれないなあ。そこまで読めるなら引き受けてくれないか」

案の定、そうだった。

「待つて下さいよ、俺は執行部役員どころか、クラス委員ですらないんですよ？ 一番下っ端の実行委員です。何でそんな奴が責任者やらなきゃいけないんですか」

「決まっている。人がいないからだ」

担任は断言した。

「このままじゃ一步も前に進まん。いずれ時間が足りなくなつて、ぐだぐだの文化祭がいつちよ上がりだ。出納くらいは上手く行くさ。会計がきちんと手綱を握っているし、学校側の事務が介入して随時監査したつていいんだからな。お小遣い制、ともいうが」

「事務の言いなりの買い物しかできない、計画も言いなりで作成、というわけですか」

「生徒の自治なんてものは完全に失われる。困ったことに、一度その前例が作られると、次回以降もその流れになる。来年から生徒会は権限のほとんどを学校側に取り込まれて、骨抜きになるわけだ」

「いいんじゃないですか？ それが時代の流れだと思えば」

「そうは行くか。少なくとも俺が生徒会担当の間にそんな流れにはさせんぞ」

担任はいらいらと指を動かしている。

いいたいことはわかる。

担任が危惧していることはそのまま現実になるだろう。生徒の自治

なんて美しい言葉は、学校側にしてみれば手間と金ばかりかかって大した見返りもないこと。生徒自身が放棄してくれるのなら喜んで回収し、その分の資金と時間とエネルギーを進学率向上に投じた方が、学校の評価は上がるだろう。

受験料収入と生徒数の確保という、学校の至上命題にとっては素晴らしい知らせに違いない。

でも、そうすれば自由な文化祭なんてものは無くなる。下手をしたら、文化部の発表会のみを行う、形式だけの文化祭に思い切り縮小されたり、最悪は文化祭そのものの中断ということもありえる。

生徒がやりたがらないから。

経費も安上がりになるから。

進学率向上のため有効に使える時間が捻出できるから。

後押しする理屈なんかいくらでも出てくる。文化教育なんていう生産性に関わらない教育に金を出すなんて、今の時代には合わない。そう考えれば、俺にだってあと二つ三つの理屈はすぐに思いつく。

「各クラスの計画をまとめて上げて資材提供の流れをこれだけ早いうちに作ってみせたお前の実務能力は、職員の間でも評判になっている。素人集団の中に、なぜか一人だけ熟練のプロがいたような、とかな」

「乗せようつたってダメですよ。乗りませんよ」

「しかも生徒指導主任相手に予算の上積みを成功させるとか、前代未聞だぞ。それだけじゃない、執行部から予算執行権限の一部を委譲させたり、資材係の範疇をとくに超えて、文化祭の実行権限の過半を手中にしているって、職員室じゃ豪腕官僚ばりの手腕だと評価されている」

「だから乗りませんって。いくら上げても無駄ですよ」

俺はその線で押し切った。

これ以上のことは勘弁してもらいたいのが本音。

仕事を抱えるのは疲れるということもあるけれど、それより、時間が取られてしまうのが痛い。

一応、これでも彼女持ちな俺。

いくら由紀との出会いのきっかけが文化祭の仕事だったとはいえ、だからといってそれにばかり関わっていてはせっかく手に入れた恋人との時間を味わう余裕もない。

由紀と普通の高校生らしく歩いてみたいし、手をつないで歩いてみたいもしたいし、仕事以外のことで中身の無い話をしてみたい。今でさえその時間がないというのに。

これ以上、仕事を抱え込むのは願ひ下げ。
と、思っていた。

担任の前から退出して、今日出さなければいけない資材を運び出すために資材室に入り、段ボール箱を廊下に運び出して一息ついたところで、それを取りに来るはずの二年生を待っている間に、由紀と話をしていた。

由紀はちょうど別件で三年生の教室に交渉に行ってきた帰りで、初めて最上級生のクラス委員と話し合いをしてきたばかりだったから、少し興奮していたらしい。

「あんなことを毎日していたなんて、晃彦くんすごいです」

あんなこと、というのは、文化祭で何かしらの企画を出してきたクラスの担当と話し合いをすること。

今日由紀がしてきた話し合いは、企画は出したもののまだ内容がはつきりしない三年のあるクラスに、早く企画を出し直さないと資材が足りなくなってきたですよ、という催促。

「あれだけの仕事なのに、私、緊張しちゃって上手く話せなくて」というわりにちゃんと企画書を回収してきてるんだから立派なものだと思っけれど、由紀は俺が今までやってきた交渉を見ているから、そのイメージと自分の交渉との差に驚いたらしい。

「交渉って思っていたりずっと大変です」

「そんなことないよ、由紀だってちゃんとできてるじゃん」

「晃彦くんが前からいってあったからです。私は結局取りに行っただけですから」

「いやいや、あのクラスは俺は何もしてないよ。働きかけてたのは綾華さん」

そう、交渉ごとでは綾華さんが最強無敵だった。

はつきりいって、各クラスとの交渉では、綾華さんが最強。何しる顔が広いし、あの人が意外な（失礼）くらい論理的態度で迫って、陥落しない相手はいなかった。

俺が豪腕官僚呼ばわりされるなら、あの人は豪腕政治家だ。

俺が行っても話にならないようなクラスでも、あの人が行くと不思議とまとまる。

俺に人徳が無いからだとか思ったりもしたけれど、違う。いや、俺に人徳が無いのは事実だけれど、それ以上に、綾華さんがすごい。……そうだよな」

不意に俺は考え込んだ。いきなり目の前で腕を組んで考え始めた俺に、由紀は頭上に？マークを飛ばしていた。

取りまとめる人がいないと担任はいう。

単に仕事をするだけなら俺でもできなくはないけれど、人をまとめていくというのは実務能力とは関係がない。実務能力が褒められるのは嬉しいけれど、残念ながらそれだけで人はまとまらないだろう。

生徒会執行部を差し置いて、文化祭をまとめ上げて行こうと思ったら、実務能力がある人間をあごで使えて、実務能力がない人間を力づくで従わせていく豪腕が必要になる。

いるじゃないか、適任者が。

でもちよつと待て。

あの人を推薦して、たとえばそれが通ったとしてだ。

俺、今までとは比べ物にならないくらいこき使われる羽目になるんじゃないのか？

今でさえ仕事の量にひーひーいつてるのに、文化祭全体の取りまとめを実務的に管理していくなんて、考えただけでも恐ろしい。そして、あの人を推薦したら、多分俺はありえないほどいいようにこ

き使われる。

絶対そうなる。あの人が今さら俺に遠慮なんかするはずがない。自分がどの仕事をすればいいかさえわかれば、あの人は自分なりに動いてくれるだろうけれど、そこにいたるまでの計画や企画は誰かがやらなければいけないし、あの人が仕事をした後の実行や後始末も誰かがやらなければいけない。

そして間違いなくそれが全部俺に一度回ってくる。それを振り分けて、誰かにやらせて、管理をして、まとめて、後始末をするという作業が全部俺にかかってくる。

俺がぶつぶつと考え込んでいるのを見ていた由紀は、相手をしてくれない俺に不機嫌になるかと思いきや、そうでもなかった。

「……なんかすごいこと考えてます？」

「へ？」

俺が顔を上げると、由紀は顔を紅潮させて、ファイルを胸にぎゅっと抱いた姿勢でわくわくした顔で俺を見上げていた。

「晃彦くんがそういう顔して考えてるときって、次にすごいことしようとしてる気がします」

「いや、別に……」

何をいい出しますかお嬢さん。

「仕事してるときの晃彦くんの顔って好きです、かつこいいです」興奮して思わず出てしまった言葉らしく、いい切ってから恥ずかしくなったようだ。はっとしたように周囲を見回し、真っ赤になって顔を伏せた。耳どころか、首まで赤くなっていた。

赤くなっていたのは多分俺も同じ。

これを計算でやっているとしたらこの女、ある意味綾華さんより恐ろしい。天然だとしたら、俺は一生勝てる気がしない。

「……すごいことっていうか、自爆ネタを考えてただけ」

「どんなことですか？」

うつむいていた由紀が顔を上げる。真っ赤な顔だけれど、相変わらず目がきらつきらしている。

「ちょっとこの学校に乗っ取る計画をね」

「それ、あたしも興味あるな」

いきなり後ろから声がしたから思わず「うわあ」と叫んでしまった。

「なによ、あんたマジで人の呼びかけに驚くよね」

「心臓に悪い登場するからでしょう、いつもいつも」

綾華さんがいた。

「で、何よ、学校乗っ取るって」

昨日の告白でこの人の態度が微塵も変わるはずもなく、あのことの気配など1ミリグラムも感じさせないのは、いつそ立派だった。

この人にも一生勝てる気がしない。

「俺が乗っ取るわけじゃないですけどね」

俺は学校屈指の美女二人に囲まれるという奇跡の前に、自分の考えを話し始めた。

この二人に好きになってもらえるとか。

俺、既に人生の運はすべて使い果たしたんじゃないだろうか。

運命の神から明日死ねといわれても、思わず納得してしまいそうな気がする。

告白劇の前、綾華さんが文化祭の計画書にしきりに書き込みを入れていたのを見た記憶がある。

綾華さんが広瀬さんやその知り合いにメールを返し始める前のことだ。

赤ペンでしきりに書き込んでいたのは、自分たちがまとめていた資料関係の書類や企画書から引つ張った情報だったという。

どう考えてもあの計画書のままに進められていたら、自分たちがやってきた仕事ぐちゃぐちゃにさせられる。綾華さんはそう思っただけ。

ここは直す。ここはあきちゃんに振る。ここは由紀にがんばってもらう。ここは教師に甘える。

そんな書き込みだから、大雑把でもいいところだけけど、書いてあることはいちいちまともだった。細かな実務をやる気がさらさらないこともよくわかるけれど。

それを見て、一つの考えが浮かんだ。

「だからといってだ」

生徒会室で高々と脚を組み上げ、さらに堂々たる腕組みで威を加えた綾華さんが、生徒会執行部、生徒会担当をしているうちの担任、文化祭実行委員の面々を前に見得を切った。

「あたしが文化祭を仕切るとか、あんた、頭おかしいんじゃないの？」

綾華さんがいう「あんた」とは、俺のことだ。

綾華さんの正面に座っているのが俺。その隣に座っているのが担任。そしてずっと離れたところに生徒会長がいて、その隣に会計氏がいる。

「実行委員長は会長が兼任してるんだから、会長がやればいいだけでしょうが」

「正論ですけど、現実的ではありません」

対する俺はというと、綾華さんには負けるものの、大概態度の
かい一年である。

なにしろ、綾華さんと向かい合わせのパイプいすにとっかりと座
りながら、長机に両肘を突いて手を組み、親指をあごに当てている。
その体勢で相手を見据えているのだから、少なくとも永野綾華の正
体を知っている一年生が取る態度じゃない。

そして、この時、俺はあの文化祭の計画書のひどさ、ずさんさ
について、このでかい態度のまま指摘し倒した後だった。

一年の分際で、でかい態度でいいにくいことをずけずけと並べ立
てた上、このままでは文化祭は壊滅的なぐださに陥るとい
ことを、数字で説明してみせた。

数字は俺が作った書類をちよちよいといじって作り直したもので、
要するに予算。お金の話。これをいつの間にか握ってしまったお
かげで忙しかった訳だけれど、その結果として、生徒会の首根っこを
つかんでしまっていた。俺しか、お金の正確な動きを把握していな
いという、生徒会執行部にとっては致命的な事態に陥っていたのだ。
そしてさらに致命的なことに、執行部は会計氏を除いて、その事
に気付いていなかった。

「先輩もご覧になったはずですよ、計画書を。あのずさんさ、ど
うご覧になりました？」

実は綾華さんもついさっきまで、生徒会提出の計画書を批判する
急先鋒だった。俺よりよっぽどきつかった。

この会議はそもそも正規のものじゃない。予定されていなかった
会議で、この日の朝、急にメンバー全員に緊急ミーティングの開催
が告知されて、開かれたものだ。もっとも、配布された計画書案が
あまりにもひどかったから、大体のメンバーにはそれが原因だろう
と見当はついていた。

ただ、こんなに大荒れの様相になるとは誰も予想していなかった
に違いない。

「直せばいい話でしょ。あたしが仕切ると計画書と、何の関係があるのよ」

「大ありますよ、先輩。どう直していくにしろ、先輩の力がなければ話が前に進みません」

俺の態度に周囲がはらはらしているのが伝わってくる。

お互いに公衆の面前で毒舌を交わしている姿が目撃されていて、最新新密度を増していると噂されている二人だけれど、さすがに俺の態度は綾華さんの忍耐の限界点を超えているだろう。

綾華さんの目は明らかに殺気立っていて、それが静かで威圧的な表情とあいまって、いかにも恐ろしい。多分気の弱い人間は既にこの部屋から逃げ出したくなっているはずだ。それをじっと見返している俺のでかい態度には、周囲の方がはらはらしていた。

「今必要とされているのは、役職でも経験でもありません。強烈なリーダーシップと高度な折衝能力です」

「あんたがやりやいいでしょ」

「俺には無理です。どちらも備わっていませんから」

「それだけしゃべりや充分でしょうが。お馬鹿なあたしと違ってずいぶん頭も良さそうだし？」

「頭の出来はこの際関係ありませんし、俺もその点はあなたに期待していない」

「はあ？」

綾華さんが半分キレる。そりゃまあそうだろうな。

遠い席で会長が痛そうな顔をしていて、担任も渋い顔をしていた。「たとえば俺が指示を出した場合と、あなたが指示を出した場合と、この方々はどっちのいうことを聞いてくれると思いますか？」

俺はわざとらしく身を起こして両手を広げ、部屋中の人々を指すようにした。綾華さんは不機嫌に口を閉じ、俺をじっと睨んでいる。「こんな生意気な一年のいう事を聞くくらいなら、かつては素行不良で鳴らした人でも、今のあなたについていこうとする人の方が多いはず。俺が期待しているのはそこです」

「……」

「さらにいえば、あなたはご自身でおっしゃるほど馬鹿じゃない。論理的思考能力と説明能力は水準を遠く越えています」

我ながら偉そうなことをいつている。客観的には聞いたものじゃないけれど、ここはぐつと我慢して続ける。したり顔で。

「この部屋にいる生徒の中でも随一でしょう。危機にある今期の文化祭を救い上げていくには、あなたくらいの個性と能力がトップに立たなければ、実現すらおぼつかないというのが俺の意見です」

「……ずいぶん偉そうにほざくじゃないか、小僧」

綾華さんの、毒にまみれたような口調。なまじ美しい人だけに、禍々しい口調になると恐ろしくどぎつい。

「二年のあたしに三年の会長たちを差し置いて役職に付けという。実権を握れという。それを世間じゃクーデターっていうんじゃないのか。え？」

薔薇を背負ったような雰囲気でのセリフを口にしてくれるから、歴史ドラマでも見せられているような気になる。

「そう思っていたいて構いませんよ」

と返す俺も俺だけれど、なにしろ綾華さんとは役者が違いすぎる。せいぜい中学生日記というところだ、と自覚するのも情けないけれど、周りからはどう見えているのか。部屋の隅で控えている由紀に、後で聞いてみようか。いや、客観的な意見を由紀に求めるのは間違ってるか。

「もつとも、当事者全員が会議室にいるんじゃない、クーデターという呼び方は語弊がありますね。合法的に権力委譲を成し遂げようとしているわけです」

「難しい言葉を使えば賢しげに聞こえるとも思ってるのか、小僧」
「とんでもありません。ただ、どんな手段を用いても、誰かに権限を集中させて、独裁的に事を運ばない限り、文化祭の成功は望めません。それはあなたにもお分かりのはずです」

「緊急避難としての独裁？ どこかで聞いたような詭弁ね」

「事態が沈静化するまで独裁的権限を当局が掌握する、今だって世界で行われていることですよ。アメリカですら、ハリケーンや地震災害が起きれば、非常事態宣言下で民主的統治が一時停止されます」

「今がその非常事態ってこと？」

「そうです」

「大げさね、たかが文化祭の危機でしょ？ 生徒の命が危機に陥ってるわけじゃないでしょ？ ほっとけばいいじゃない。あたしの恥じゃないわ」

「ええ、現生徒会執行部の恥です。あなたの恥じゃない」

俺が素直に認めてやると、生徒会執行部の面々は、会長ばりに痛そうな顔をするか、むっとしたを顔した。俺は構わず続ける。

「でも、それを救う立場に立てると衆目一致した人間がそれに立ち向かわなければ、その人間の恥に代わってしまいます。あなたの恥にね」

「また詭弁。聞き飽きるわ」

綾華さんは露骨に嘲笑する。それも俺は構わず続ける。

「これでもかなり譲歩しているつもりなんですがね。こうして交渉しているだけでも」

「偉そうに……どこが譲歩だ、聞いて呆れる」

「話し合いで解決しようとはしているじゃないですか。別にこんな面倒な手段、採らなくても良かったんですよ」

「……」

なんとなく俺のいいたいことは察したようで、綾華さんは秀麗な眉目に氷の気配を浮かべながら、俺を睨みつけた。

「生徒指導主任やその上の校長にまで話を通し、かつ生徒会執行部の承認さえ得てしまえば、一時的に生徒会の独裁的権限をあなたに一方的に押し付けることなんか簡単だったんですよ」

そういつて、俺は担任をチラッと見た。担任は深刻そうな顔をして黙っている。

実のところ、既に生徒指導主任には話が通っている。そして担任はそれを知っていた。

「でもそれじゃあまりに一方的ですから、衆議を決してのことだとあなたに理解していただける場を設けようと思ったんですよ」

「……それで緊急招集だったわけ」

「そうです」

すべての黒幕は俺だ、と宣言したことになる。

綾華さんはじつと黙って俺を見ていたけれど、やがて組んでいた足先で、触れそうなほど近くにあったいすを軽く蹴飛ばした。いすに座っていたのは執行部の役員をしている三年生の男子だったけれど、綾華さんの迫力におびえきってしまったていて、その衝撃にも黙って耐えていた。

「……どういふつもりだ、お前は。たかが実行委員の一年の分際で、生徒会を乗っ取る気か」

綾華さんの怒気をこめた声。俺はあえて笑って見せた。

「とんでもない。文化祭実行委員として、文化祭のことだけを考えれば、これ以外に手はないと思っただけです」

「この後の生徒会がどうなってもか」

「どうせ改選です。文化祭が終われば現執行部は自動的に解散、選挙後の新体制に今後のことは任せればいいでしょう。今は文化祭にとだけ考えればいいと思います」

「ここまで権道を用いて、悪例を残すだけだとは思わないのか」

「現執行部がしっかりさえしていれば、こんな非常手段が通る訳がありません。むしろここまで事態を悪化させた責任を追及したいくらいだ」

俺はそこまでいうと、執行部、特に会長に視線を飛ばした。喧嘩を売るとき同様の目で。

誰も、俺と目を合わせなかった。

いや、一人だけ、真正面から俺の視線を受け止めた人がいた。会計氏だった。

三年生で一番接触が多かった人、生徒会会計氏。

俺のことを早くから認めてくれていた人だけれど、この人はさすがだった。会長の隣に座りながら事態の推移を見守り、ここに来て俺の本来の企図に気付いたようだ。余裕たつぷりの笑みを浮かべ、ひとつうなずいた。

やっぱりこの人には勝てない。そう思ったけれど、もちろん俺は顔には出さない。

「そろそろ」

と、会計氏が笑顔を消して発言した。

注目が一気に会計氏に移る。

「諦めたらどうだ、永野」

やる気がない執行部を一人で支えてきた人の発言だ。重みがある。綾華さんもこの人の発言には聞く価値があると思ったようで、高々と組んでいた脚を外した。

「僕も君が本気で取り組んでくれるなら最大限の協力をしよう。佐藤のいうとおり、ここまでの事態になってしまったのは僕らの責任だ。お詫びの言葉もない」

悲痛なほどに、会計氏は率直だった。

「受験生という立場はいい訳にもならないだろう。過去の先輩たちはそれでもやってきたんだ」

会議の空気が沈痛になる。会計氏が旧帝大系の難関を目指していることは有名な話だ。それがいい訳にもならないと自ら断罪した。「遅まきながら、文化祭成功のために動いていきたい。そのためには、まず体制から大きく変えていくのが一番だろう。非常時だ、多少の権道も許されるさ。目的のためにはあらゆる手段は正当化される、政治学の基本だ」

会計氏が俺の計画に乗ると宣言したことで、空気は完全に入れ替わった。

この殺伐とした会議が終わってくれるなら、どんな結論が出てもいい、と思った人間も多かっただろう。

「佐藤、黒幕としてこのクーデターを教唆した罪は償ってもらおう。当然だが」

会計氏は俺に厳しい視線を送ってきた。
怖い目だった。

俺は姿勢を正してうなずいた。何をいいだす気かは知らないけれど、ここまでの事態を作り出した責任は取るつもりだ。どんな形でも。停学だろうがなんだろうがどんとこい、という、変なクソ度胸だけはあった。

会計氏はその俺の気配に苦笑したかったらしいけれど、そんなことはおくびにも出さず、続けた。

「永野がリーダーとしての責任を負ってくれるなら、君には実務面すべての統括役になってもらおう。会計分野から企画の取りまとめ、イベントの采配まで。今までとは桁違いの仕事量になる。覚悟は出ているか」

將軍役の綾華さんに対し、それを補佐し実務を統括する参謀長役を俺にやれというわけだ。

「……いいんですか、それで」

俺が注意深く反問すると、会計氏は秀才という言葉を形にしたような顔に強気な笑みを浮かべた。

「君以外の誰が永野の抑え役をやれるというんだ？ 実務面の統括というのは、実はそれが一番の役目になると思うんだけどね。僕は少なくともそんな役回りはごめんだ。みんなもそうだろう？」

会計氏が周囲を見渡すと、人々はあわててうなずいた。

「ということだ。これは引き受けてもらう。君に拒否権はない」

にやりと笑う会計氏に、俺は黙って頭を下げた。

会計氏に屈したように見えるだろう。実際屈する気持ちだったんだから、そう取られて構わなかった。

それにしても会計氏は凄かった。ここからは、彼の独壇場になる。

「さて」

と会計氏は綾華さんを見た。綾華さんは会計氏を見つめたまま、無表情だった。どこまでも冷たいその顔は、そのまま美術館に展示できそうなほど美しく、気高い。学園のアイドルといわれたり、不良の女神といわれたりした人だけれど、この時の美しさは尋常じゃなかった。

「外堀は埋まった。後は君のやる気だけが問題だ、永野」

その美しさに気圧されもせずについてのけた会計氏も、すごい人だった。周囲の高校生とは格が違う。

「僕は以前の君になら、こんなことはいわない。無責任にもほどがあるからね、素行不良の君にすべての権限を譲ろうなんて」

まっすぐに綾華さんの目を見て揺るぎもしない。線の細い感じのする人だけれど、芯は強いにもほどがある。

「でも、僕は知っている。実行委員になってからの君を。物事に対して君がどれだけ真摯で、人を惹きつける魅力があるか。君以外に適任はいない。佐藤にいわれるまでもない」

綾華さんはついに目を閉じた。一度ほどいた腕をもう一度組み直し、きゅっと口元を結んだ。

会計氏も口を閉じた。

俺は当然何もいわない。

他の誰も何もいえず、室内はしんと静まり返った。身動き一つ出れないのは、動けばいすが音を立ててしまうからだ。

異常な緊張感の中で、多くの人が視線をさまよわせた。

綾華さんを見て、会計氏を見て、俺を見る。主要人物はこの三人に絞られ、他の人物には視線すら向けられない。ここで一番のVIPは生徒会長のはずだけれど、この部屋では既に過去の人になっている。

やがて、綾華さんが目を開けた。長いまつげが物憂げに揺れる。組んでいた腕を再びほどいた。

会計氏がじっと見つめる。

綾華さんは一度俺の顔を見た。表情に変化がある。目に、力と決意がある。極限まで冷たかった表情に、血の色が差していた。

俺は思わず立ち上がりかけたけれど自制し、じっと座ったまま、こくりとひとつうなずいた。

綾華さんは俺からついと視線を外し、立ち上がる。

「……条件は一つだけ」

玲瓏な声が部屋の空気を震わせる。

「聞こうか」

会計氏が綾華さんの声に応える。余裕たっぷり、大人の声だった。

「この場にいる人たちの全面的協力。命令つていい方は嫌いですが、指示は出しますから。どんな指示だろうが、従ってもらいますけど、それが受け入れられますか」

「受け入れられない奴がいたら今すぐここを出て行け」

会計氏のセリフは早くて激越だった。意外なほど大きなその声に、首をすくませた人はいたけれど、出て行こうとする者はいなかった。逆らえるような、会計氏の雰囲気じゃなかった。今まで感じたことが無い、威があった。

「……ということだ、『新』実行委員長。よろしく頼む」

そついうと、会計氏は立ち上がった。

「佐藤」

呼ばれた俺は立ち上がった。

「君は実行委員会の副委員長であり、執行役だ。この祭りをまとめ上げて見せる。出来ないとはいわせない。やれ。命をかける」

「はい」

短く、でも大きく返事をした。この人は本当にすごい。場を完全に支配していた。

「というわけだ、みんな。僕はこの二人を力の限り支える。みんなも覚悟を決めてくれ」

立ち上がっている三人が周囲を見回す。

その場にいる誰もが、少なくともこの三人に従う以外に道はないことを悟ったらしい。

やがて、誰からともなく拍手が起きた。それはすぐに全員の拍手となり、生徒会室を満たした。

「助かりました」

開口一番、俺は会計氏に頭を下げた。

緊急ミーティングはあの後、一転して新実行委員会の業務振り分けの場になった。

あらかじめ作ってあったロードマップを配付して、俺が説明する。会計氏がそれに適宜突っ込みを入れ、綾華さんが振り分け先を指示する。

一気に事は回り始めた。

今までの沈滞していた空気がウソのように、生徒会室は活況を呈した。

「部門分けはこれからもどんどん変えていくわ。全体の状況はあきちゃんがまとめて、次の日にはみんながわかるように掲示しておいて。みんなそれを必ず確認して、どんな指示が出ても対応できるようにしておくこと。いいわね」

綾華さんのさばき方は見事で、三年も含めた全員が従った。

それが終わったのは6時前で、そこで一旦解散になった。

「明日は放課後になり次第ここに集合。当日まであと10日も無いんだから、勢いで乗り切るわよ。いいね」

綾華さんの掛け声に、全員がそれぞれの表現で返事をした。

解散後、まだしばらく興奮冷めやらない人々の熱気の中で、各担

当がどんな質問をぶつけてきた。何しろ全体像がわかっているのはこの時点では俺だけだったから、目が回るような忙しさだった。それも大体收拾が付いて、本格的に解散になったのは7時ごろ。それから校外へ出て、俺、綾華さん、そして由紀が別の場所に移った。

例の、国道沿いの喫茶店。

そしてその喫茶店には由紀のお父様もいた。あらかじめ遅くなりそうなことを連絡していた由紀が、その場に呼んでいた。由紀としては駐車場でちょっと待っていてもらうつもりだったらしいけれど、そうも行かないだろうという俺と綾華さんの言葉で、急遽同席してもらったことになった。

そして、俺たちが頼んだコーヒーや紅茶が席に回ったところで、会計氏が合流した。

会計氏が座ったところで、俺が頭を下げた、という流れ。

会計氏は苦笑いしていた。

「何が始まるかと思ったけど、まさかクーデターとはね。恐れ入ったよ」

「すみません、事前に相談できれば良かったんですけど」

俺が謝り、綾華さんも頭を下げた。

「猿芝居にまで付き合ってもらっちゃって、ありがとうございます」

「永野まで謝らなくていいさ。どうせ、考えたのは佐藤なんだろう？」

「ええ、まあ」

頭をかいた。申し訳ない上に、この人は芝居を芝居とわかった上で、これ以上にならない乗り方をしてくれた。

「金森先生は知っていたのか？」

と、うちの担任の名前を出した。俺は首を振る。

「知りません。生徒指導主任は知ってますけれど、こういう策謀は知ってる人間が少なければ少ないほど成功するって言って、内緒に」

「あの狸ならいいそうだな。孫が出来てもそういう茶目っ気は失せないんだな」

そういつて笑ったのは、意外にも由紀パパ。実は生徒指導主任の教え子だという。

「新任当時から既に狸だったよ、あれは」

由紀パパは事情は良く知っている。なにしろ、当事者たちが昨日話していた計画を、この人は由紀からすべて聞いている。

「なるほどね。でも、いいアイデアだ。組織を変えるには、上を変えるしかない。下がどんなに頑張っても限度があるからな」

「それをどうやって変えるか考えたんですけれど、あんなのしか浮かびませんでした。会長には申し訳なかったんですけれど」

「いいさ、あれだって立候補してまでなった地位を放置していたんだ、当然の報いだろう」

会計氏は容赦が無い。

「むしろ、主任から強権発動してもらった方が早く進んだらうに、わざわざあんな芝居まで打ってくれてありがたかった。あれで生徒の自主性の牙城は護れたんだからな」

「そこが問題だったしね」

といったのは綾華さん。

「あたしも教師からいわれてやるなんて、形だけでも嫌だし」

「という綾華さんの強い希望があったんで、あの芝居を打ったんです」

「打てただけすごいよ。普通の高校生はああいう芝居は思いつかないし、思いついてもやらない。成功する訳ないからな」

下克上で構わない。要するに、言い出しっぺが生徒で、引き受けるのも生徒で、あくまで生徒主体で起きたクーデターだったという事実が欲しかった。

「僕が反対に回ったらどうする気だったんだ？」

「その時は仕方ないですから、先輩にリーダーになってもらう計画でした」

「おいおい、待ってくれ」

会計氏が本気であわてた。俺の隣に座って大人しくしている由紀が、それを見て嬉しそうに笑っている。

「その時はあたしが涙ながらの大演説を打つ予定だったんですけどね。残念、見逃したね」

綾華さんもそういいながら愉快そうにけらけら笑っている。

「永野に泣かれちゃ断れないな……主任を落として予防線を張っておいて、俺まで視野に入れた三段構えの策か。やるな佐藤」

会計氏はため息をつきながらいった。俺は黙って頭を下げる。何をいつても失礼になりそうだ。

「でもそれをすぐに理解できるのって凄いね」

綾華さんが手放して褒めた。非常に珍しい。

会計氏は別に嬉しそうでもなく、追加で運ばれてきたコーヒーカープを手を取った。

「自分では考えつかなかった策だ。見抜いたからといって偉いものでもないさ。とっさに芝居に乗れた自分の演技力には、我ながらちょつと感心したけどさ」

「かつこよかったです、とっても」

昨日から目をきらきらさせっぱなしの由紀が褒めると、さすがに会計氏は嬉しそうだ。打算が感じられないだけ、由紀の賞賛は素直に受け入れられるんだろう。でも、俺は知っている。

「とかいって純粹そうに褒めてる由紀ですけどね、先輩が反対したらリーダーになってもらう策、出したのこいつですからね」

「ば、ばらしちゃうんですか」

由紀が一転してあわてる。綾華さんも暴露に乗ってきた。

「あたしがする予定だった涙の演説、この子が原案だからね。かわいいからってだまされちゃダメよ」

「ひ、ひどいです、綾華さんまで」

「事実だしー？」

「晃彦くんもひどいです、何となくいっただけなのに『採用!』と

か叫んで勝手に私の発案にしちゃって」

「事実だしー？」

綾華さんのまねをする。由紀が本気で悔しがり、怒り出したから、あわててなだめる。

「あの話し合いに参加したら誰でも思いつくことだよ。由紀が考え付かなくても、結局はそうなったって」

「なっただろうな」

とつまらなさそうにうなずいたのは、当の会計氏。

「僕がそこにおいても同じことを考えただろうし」

「それにしても」

と綾華さんが強引に話の方向を変えたのも、これ以上由紀の機嫌を悪化させないためだろう。

俺の余計な行動でお手間を取らせます。

「ずいぶん迫力あったね。あたし、先輩があんなに凄い人だとは思わなかったよ」

それは全面的に同感。こくこくとうなずくと、先輩は苦笑した。

「僕だっと思わなかったさ。舞台が人を作るとかいうけど、まさか当事者になるとはね」

「もう高校生のノリじゃなかったもんね。あきちゃんを睨み据えたあの視線ってばもう、大人の男って感じで」

「やりやがったなこの野郎って思ってたからね。厳しい目に見えたとしたら、それはかなり本気が入ってる」

「うわあ、本気で睨まれてたんだ、俺」

「怖かった？」

綾華さんが嬉しそうに聞いてくる。人が怖がるのがそんなに嬉しいですか。そうですか。

「怖かったです、かなり」

正直に答える。

「未来の番長をびびらせたんだから、たいしたもんだわ」

「ちよつと待て、その呼び方をするなとあれほど」

「しらなーい」

本当に楽しそうだ、綾華さん。

「すごいな、君らは」

と、由紀パパが不意にいった。

全員が視線を由紀パパに送る。

由紀から見て俺の逆隣に座っている由紀パパは、温厚な顔に温厚な表情を浮かべていた。

「自分が高校生の頃のことを考えると、君らが途方もなく大人に見える」

いいながら、由紀の頭をなで始めた。

「この子もこういう大人しい子だから、大した経験もしないまま卒業してしまうんじゃないかと思っていた。どうも杞憂だったらしい」
そういうと、笑う。

「君らがそばにいるなら、この子もいろんな経験ができそうだ。安心したよ」

「……それ、どうなんでしょう」

と疑問を呈したのは綾華さん。

「普通、こういう事態に娘さんが出くわしたら、逆に切り離そうとするのが親心ではないかと」

「安全に場所に置いておきたいって？ それは中学生までの話だろう」

由紀パパ、笑顔を崩さない。

「世間の裏なんて人間の感情が渦巻いている世界だ。その一端にも触れずに学校を出てしまったら、いざ世間に放り出されて何が出来る？ 少なくとも君らの策は後ろ向きじゃない。ポジティブで建設的だ。その場面に立ち会うことが出来たんだ、幸せというべきだし」

由紀の頭をなでていた手を下ろす。

「そういう人間と親しくなれたということは、これから色々な経験が出来るということだ。立ち直れないほどつらい目にも遭うかもしれないが、それもいい経験になる。高校ってのは、そういう経験

をするためにいくものだろう」

全員、大人の意見に一言も無かった。この人がいうんだから、そうなんだろう。そう思わせる説得力があった。

「まあ、私の興味はむしろ、この子が佐藤君とどこまで進んでいるのかにあるんだがね」

爆弾発言に、俺も由紀もとっさに反応できなかった。いち早く反応したのは綾華さん。

「あらおじ様、ご存じなくて？」

「それは僕も興味があるな」

「何乗ってるんですか、先輩まで！」

俺がどうにか突っ込むけれど、そんなもので止まるはずもない。

「わたくしはむしろおじ様が彼との関係を認めているかのようにおっしゃる、その事に興味がございますけれど」

綾華さんがいきなり超お嬢様モードに切り替わる。

こうなったらもうダメだ。止まるはずがない。

由紀が青ざめていくのがわかる。でも対処のしようがない。

あきらめる由紀。

「認めるさ、こんないい男、次にいつ由紀が捕まえられるかわからないしね」

「あら、理解のあるお父様でいらっしやいますわね。ではわたくしも誠意を持ってお答えいたしますわ」

「何の誠意だ何の」

「この男、実はこう見えて意外や意外、バカップルを地で行く困り者でございます」

「困り者ってなんだよ」

「ほう、詳しく聞こうか」

会計氏もここぞとばかりに身を乗り出している。この人、実はこうやってどんな話にも乗っていくのが趣味なんじゃないのか。

44（前書き）

仕事の都合で1週間ほど休載します。申し訳ございませんが、再開をお待ちいただければ幸いです。

もともと、生徒会のやる気が無くても、校内の文化祭熱は高かった。

何か出し物を準備しているクラスは当然盛り上がるし、文化部はここが活躍の場とばかりに気合が入っている。クラブ以外のバンドやアカペラグループも舞台が準備されていたから当然の盛り上がりだったし、早くから看板などが作られ始めていたから、ビジュアル的にも文化祭の雰囲気が出来始めていた。

盛り上がる雰囲気の中で、催行者であるはずの生徒会だけがむしろ孤立していたといっている。

それが変わった。

生徒会長が失脚、代わって永野綾華というこの学校の顔ともいべき女が新たに文化祭のトップに就いたという話題は、翌朝には校内を駆け巡っていた。

いくらなんでも知名度で俺が綾華さんに及ぶはずもなく、クーデター劇の配役は綾華さん、会長、会計氏ということになっていたけれど、綾華さんまで陥れてこの事態を作った黒幕が俺だ、という話はまことしやかに流れていて、もともと綾華さんもクーデター劇の計画段階から中心人物だったという話は当然極秘だったから、俺には黒い噂が立つことになった。

腹黒い生意気な下級生に仕組まれたものの、最後には自ら文化祭を背負って立つことを決めた学園のアイドル。

そのアイドルを陥れ、会長を失脚に追い込んだ学園の悪のフィクサー。

「フィクサーねえ、お前がねえ」

友達が感心している。

「どうせあれだろ、あまりに上にやる気が無いもんだから、ぶち切れて文句いつてる内に、引っ込みかなくなっただろ」

俺を実際に知っている人間はそういう評価になるらしい。

「生徒指導主任や校長に話を通すとか、大ばらだろ？」

「まあ、なあ」

俺は笑ってとぼけたけれど、主任には話を通っていたし、こんな大事になるんだから、当然主任は校長にまで話を通していたはずだ。大ばらどころか、まったくの事実だ。でもいいわい。いえるわけがない。

「永野先輩を立てるのはいいけどさ、後が怖いんじゃないの？」

と聞いてくる友達もいた。

「僕にはめて引き受けさせちゃったんでしょ？ 報復とかさ」

「あの人は」

と、一応弁護する。

「自分で引き受けたものの責任を他人にかぶせるようなまねはしないよ。どんな形でも、あの人自身が受けるといったんだ。そのことで俺が報復されたりとか、そんなちっちゃい人じゃない」

それどころか、クーデター計画の立案者の一人なわけだが。

聞いている方は感心していた。さすが永野先輩、などつつばやいていた。

実はクーデター計画を最初に言い出した、あの由紀との廊下での会話に続いての話し合い。

場所は例の喫茶店だった。なぜかあそこは密談がしやすい。

その話し合いの場で、俺は多分これが企画倒れになるだろうと踏んでいた。というのも、「文化祭でトップを張るのは綾華さんしかない」という発想から生まれたことなので、綾華さんが上に立つことに「うん」といわない限り、成立のしようがない。そして綾華さんがこれに乗ってくるなど、俺は想像もしていなかった。

「よくまあそういう……」

最初はさほど具体的な計画があつたわけじゃないけれど、生徒会執行部から根こそぎ権限を奪い去ってしまうクーデターという発想は、綾華さんを呆れさせた。

「せっかく校内は盛り上がってるのに、その勢いを生徒会がそぐとありえないじゃないですか」

「あたしはその発想がありえないと思うわけよ」

という話の流れから、綾華さんが引き受けると断言するまで、わずか5分。

あまりの話の早さに、俺も由紀もぽかんとした。

「……なによ」

「いやあ……まさかこんな簡単に引き受けるとは思ってもみなかったんで」

「なにいつてんのよ、考えた張本人が」

綾華さんは飄々とした態度で甘いコーヒーに口をつけた。

「こんなことを思いついちゃいました、えへへ、で終わるんじゃないかと」

「終わらせてどうすんの。この盛り上がりを大事にしたいんじゃない？」

「したいですよ。俺だってこういう祭りでみんな一緒に熱くなるっていうの、好きですし」

「あたしだって好きだよ。上からの命令でやらされるのは嫌いだけど、みんなと一緒にって、結構好き」

「でもちよつと意外です」

と、由紀がいう。

「私も、綾華さんはトップに立つとか絶対に引き受けないと思いましたが」

「うーん、まあ、そりゃそうか」

「なんで由紀がいうと納得するんすか」

「そりゃ自分の胸に聞いてみなよ」

綾華さんがにやにやしなうがらいった。

思い当たる節ならいくらでもあるから、反論せずに黙っていることにした。

「あたしはね」

と、綾華さんはテーブルに肘を付いて俺と由紀を見比べるようにして話し始めた。

「目立つことが好きなわけじゃないし、トップに立つとか柄じゃないからしたくないの。でもね、やりたくないってのと、やるべきこととしてのを、一緒に考えたに考えられるほど馬鹿でもないつもりだわ」

きれいな顔に、さっきまでのにやにやは無い。

「まわりを見る限り、まともに文化祭回せそうな奴なんて、あたしとあんたと由紀の三人組か、会計やってる先輩くらいしか見当たらないじゃんか。会計の先輩もあきちゃんも、誰がトップに立ったって仕事はばりばり出来るだろうけど、あたしは無理。あたしがトップ譲ってもいい、こいつの下なら働けるって思ったのは、あきちゃん、あんただけよ」

じっと目を見つめられながらそんなことをいわれたから、昨日の告白のどきどきがよみがえってきそうになった。慌ててその心の沸き立ちを抑え込む。

「そしたらさ、客観的に見て、あたしがやるべきことって、上に立つちゃうことだよな。あきちゃんはあたしの下がいってこんな計画持ち込んでくるわけだし、先輩は流れ次第でどうとでも協力してくれるだろうし」

「……その通りだと思います」

「そう思ったから、あきちゃんも計画立てたんでしょ？」

「ええ」

「じゃあ、まだ仕事が出来ないって思ってる私としては、やることはひとつなわけよ」

テーブルから肘を上げて、綾華さんは背もたれに体を預ける。

「クーデターにでも何でも乗ってやるわ。上に立てっていうなら立つ。自分の役割からは逃げない。そういう生き方をしたいって、決

めたから」

綾華さんの口調は力強かった。

「それが大人つてもんでしょ？」

綾華さんが微笑んで、俺はすべてを理解した。

綾華さんは、大人になりきれない広瀬さんを捨てた。それは、自分の子供っぽさとの別れでもあったんだろう。

大人の定義なんか俺は知らないけれど、少なくとも、自分が責任を負うべきと感じたら、そこから逃げ出さずに全力を尽くす覚悟を持てる事は、大人というもののひとつの形だろう。

綾華さんは俺から見れば充分大人だけれど、ここでさらにその上を行こうとしている。

「すごいです。あなたと知り合えて、本当に良かった」

俺は思わずそう口にしていた。

綾華さんは途端に胡散臭そうな顔をした。

「……なにそれ、気色悪い」

「いうに事欠いてなんてことを」

いきなり否定されたので反論したけれど、照れ隠しのだろう。でも気色悪いはないと思う。

「正直にいっただけです。綾華さんの下で働けるなら、死力を尽くしますよ。本気で」

「あたしも」

と、由紀が興奮した声で乗ってくる。ただし、相変わらず声そのものは小さい。

「出来ることなら何でもしたいです。綾華さんと働くの、凄く楽しいんです。自分が高められる気がするんです」

「おおげさだなあ」

由紀がいうと素直に照れる。なんなんだ。

「でも、そう思わせる力がある人だから、俺は上に立てたいんですよ。人をまとめ上げるカリスマって、こういうことだと思います。カリスマがある人じゃなきゃ、今の文化祭は救い上げられない」

「受けた今になって褒めたって仕方ないでしょ」

綾華さんは顔やスタイルを褒められることには慣れていても、人格や才能を褒められるのには慣れていない。話を切るうとした。

「まずはどうやって権力を奪うか。それから、権力を奪った後に何をするか。それを話し合いましょ」

照れ隠しなのか、本気でうざくなってきたのかはわからないけれど、綾華さんがせっかくその気になってくれたので、俺たちはそのまま悪謀に知恵を巡らすことにした。

生徒会クーデター計画はこうしてわずか40分ほどの話し合いで出来上がった。

クーデター成功後の文化祭準備の進め方、ロードマップは、解散した後、家に帰ってから作った。どう作ればいいかなんてわからないから、カケスさんによく清書を頼まれてはパソコンに打ち込んでいた、土木工事の工程管理図を参考にした。

何をすればいいかは、資材関係の書類を散々作っていた俺には多少わかる。それと去年の文化祭計画書を照らし合わせて、項目を挙げ、図面に書き起こしていく。線で結んだそれらに、それぞれの作業にかかる時間を書き込み、全体の行動予定を一枚の図面にしていく。

やってみると楽しい作業だったけれど、残念なことに時間がない。病み上がりの自分の体力にまだまだ自信が持てない時期だから、睡眠時間は最低限欲しいところで、それも考えて図面はごく簡単なものにした。

もともと、土木工事の工程表と比べれば文化祭の工程管理なんて大した量にはならない。それに時間的な予定表を線引きしてしまえば、ある程度全体は見通せる。

こんなにバイトの経験が役立つとは思っていなかったから、なんでもやってみるもんだなあ、と我ながら感心してしまった。

それを引っさげ、さらに予算関係の書類に、自動生成のグラフな
んぞをちょちよいと添えて見栄えを良くしたものをくつつけた物を
準備し、翌日のクーデターに臨んだわけだ。

予算関係の書類をいじったものは、生徒会執行部がどれだけ文化
祭のことを知らずにいたかという証拠として、えげつなく使わせて
もらった。

これも、工事の完工検査の時に役所に提出する書類を5分で改造
したもの。

本当に、バイトなんてやっておくものだ。

こうして準備を整えた俺たちは、翌日のクーデターに見事成功す
ることになる。

文化祭初日までの日々は、まさしく怒涛の展開だった。

「最近、ほとんど記憶ないのよね」

綾華さんがぐったりしながらいったのはいつのことだったか。
とにかく忙しかった。

休み時間はひたすら携帯や書類との格闘。放課後になれば校内中を駆けずり回った。

綾華さんもこの状況で上に立ってしまえば体力勝負だ。計画分野は俺と会計氏で引き受け、綾華さんは現場の人と化した。

たとえば体育館を使つてのイベントについては、設営の打ち合わせからリハーサルの手配、資材管理に安全管理、人の動きのチェック、許可書関係のチェックなど、ちよつと思いついただけでもどんなやる事が出てくる。

そんな中で、由紀が大活躍だった。

交渉ごとは苦手な由紀だったけれど、緻密なメモ取りやきれいなノート作りで俺を驚かせた由紀の才能は、綾華さんとペアを組ませて花開いた。

綾華さんは自分の予定を組んだり、渡された書類をチェックしたりということがどうも苦手らしかつたけれど、由紀が完璧にフォローして見せた。綾華さんが神出鬼没の動きで人々を驚かせ、完璧な手配振りで職員にも脅威の高評価を植え付けた、その最大の功労者は、綾華さんの側近として常に張り付いていた秘書の由紀だろう。

「そうか、渋谷は秘書役がベストポジションだったんだ」

最初は俺のアシスタントして由紀を活かそうとしていた会計氏は、綾華さんのそばで生き生きと働いている由紀を見てひざを打った。

「危つくあの才能を活かしきれなくなるところだった」

そういつて、由紀を自分の秘書にと引っ張っていった綾華さんの人を見る目をしきりに褒めていた会計氏。

ではこの人のベストポジションは何かというと。

「君はこれ。明日の6時までに提出ね。出来るはずだよ。ぎりぎりに合う量しか渡してない」

人事だった。

色々な仕事があつて、色々な作業がある。そして、それに参加する人々も色々。

そういう状況で大切なのは、誰かが一元的に作業を割り振り、配していくこと。

先輩はこの仕事や作業の割り振りが恐ろしく上手かった。

俺がどんどん細かい計画を作ると、会計氏は関係者を一通り見回しながら素早く仕事を割り振っていく。この割り振った仕事の戻り具合が、先輩の予測とぴたり一致するのだ。

「？」

それが凄いと俺がいうと、会計氏は首をかしげる。

「普通に考えればわかるだろう？」

わからないから、普通は苦労する。誰がどの仕事をやればどのくらいで終わるか、そんなものが正確に予測できれば、立派に企業で管理職が勤まる。

俺はこの先輩のおかげで、企画の実行計画や資材回しの計画に集中できた。

現場の指揮は綾華さんが。その秘書は由紀が。人員配置や資材配置というロジステイクス面は会計氏が。そして計画や企画とその実施といった実務面は俺がそれぞれ担当し、この4人を中心とした組織がごくわずかなうちに整った。

職員の一人がこの様子を見て作った言葉が、「永野幕府」。

それじゃいくらなんでもセンスがないだろうということで、「永野綾華と愉快的仲間たち」と名付けたのは会計氏だったけれど、残念ながら他の3人からは不評で、定着しなかった。安直にもほどがある、どうせひねるならきちんとひねりなさい、とわかるようなわからないような文句をいったのは綾華さん。

文化の日とその前日の二日間で行われる文化祭は、さらにその前日の前夜祭を実質的なスタートとしている。

前夜祭といっても夜やるわけじゃない。その日の放課後、明日から文化祭という雰囲気盛り上げるため、生徒会主催で、文化部や各クラスの出し物の予告ステージが行われる。ここでの出来が後の2日間の客足を決めかねないから、どこの担当者も異常に気合が入っていることが多い。

それぞれの担当から企画は既にながっていて、資材関係の手配も早くから出来上がっているところが多かった分、内容を詰めていく時間が多く取れたようで、職員室から「いつも以上の気合だな」と声上がるほど、前夜祭の企画が盛りだくさんになっていた。

そこで奪い合いになるのは時間。ステージ上にいられる時間もそうだけれど、もちろん、準備にも時間は必要になる。さらに順番も重要。先に各クラスの発表、それから文化部の発表に移るのが恒例だけれど、その中でも発表順によって差が出ることは容易に予想できる。後ろに行けば行くほど時間が押せ押せになり、飽きて帰ってしまう生徒も多いに違いない。

「厳正なる抽選で決めます」

順番決めで、たとえば去年は最後だったから今年はぜひ前半に、とか、所属部員数や実績から考えてうちが前半に来て当然、とかねじ込んでくる各文化部の担当者相手に、綾華さんは頑として譲らなかった。

綾華さんが難しいとなると、特に見境のない三年生が由紀を狙った。秘書役でいつも張り付いている由紀から口添えがあれば、まして陰の実力者である佐藤晃彦の彼女ともなれば、どうにかになっても思っただらう。

由紀は脅迫とも取れるくらいのねじ込みにあうと、即座に俺を呼んだ。初めから自分で対処しようとするな、と俺からも綾華さんからも散々いわれていたからだ。

俺がすっ飛んでいくと、諦めの悪い三年生が由紀を囲むようにし

ていた。

「何か御用でしょうか」

俺が後ろから問いかけると、三年生は振り向いた。俺の顔を見るなり、びくつとする。

俺は自分では無表情でいたつもりだったけれど、由紀の目撃証言によると「明らかに殺意を感じた」そうだから、まあ、そういう目をしていただろう。

生徒会で上級生相手に大批判を行い、さらにクーデターを起こして実権を掌握したという俺の噂が、俺の見られ方を多少変えていたかもしれない。それまでは、喧嘩はある程度強いが無害で大人しい一年生だったのが、今はその気になれば誰にでも牙をむく恐ろしい一年生に変わってしまった。

「待て佐藤、まだ何もしてないぞ」

その三年生は明らかに余計なことをいった。もちろん、聞き逃して相手に逃げるチャンスを与えるなんてことはしない。

「まだ、ということは、何かする気だったんですね」

広瀬さんに脅されたときは喧嘩する気満々だったから大声を出したけれど、今日はその気はない。だから低い声を出した。脅す時は低い声で。カケスの法則。

「何をする気だったか伺ってもよろしいですか」

にこりともせずによく放つ俺に、三年生は逃げの一手だった。

「いや、ほんとに、なんでもないんだ。時間取らせたな、わるかった」

いいつつ後ずさり、そのまま逃げ去ってしまった。

「何がしたかったんだ、あの人は」

俺が首をかしげると、そばに寄ってきた由紀が、俺の片手を取りながら苦笑した。

「こんなに怖い人が凄んできたら、普通逃げると思います」

「怖いかな？」

きゅつと俺の指を握っている由紀にさらに首をかしげて見せると、

由紀はふふつと笑った。

「私は怖くないです。でも、他の人が見たら怖いと思います」

「こんな奴のことが怖いかねえ」

俺がいうと、由紀は俺の指先を握っている手に力を込めた。

「自覚してください。晃彦くんは、もうこの学校のキーマンです。

実力で学校の支配階級にのし上がった人です。そんな人ににらまれたら、いくら上級生でも怖いに決まっています」

「支配階級って……文化祭の執行役がそんなに偉いかな」

「たった一日で生徒会を壊滅させた張本人が、そんな甘い物の見方をしないで下さい。いつもそうですけど、晃彦くんは自分を過小評価してます」

「そんなことないと思うけどな」

そう応じつつ、なんか最近こんなことばっといわれてるな、と思った。

自分自身の評価はともかく、やってしまったことについては多少大きく考えておいた方がいいのかもしれない。

綾華さんもこの一件は聞いていて、「何か対策を考えておこうか」とつぶやいていた。

これは、由紀を護ろうとか、文化部の暴走を止めようとか、そんなちやちな意図じゃなかった。そこまで文化部にさせてしまうとしたら、それは運営が悪いんだらうという考え方。

「制限時間を作ろう」

「ありますよ。持ち時間5分、舞台入れ替えは2分」

「徹底できてないから押すんでしょ？ 徹底できてない制限なんてのは制限といわないの、ただの目安じゃんか」

「そりゃそうです」

「時間がきたら舞台の照明切っちゃいな。PAもカット。入れ替え時間がきたら準備が出来てようが出来てなかつた照明オン。PAもオン」

PAとは音響のこと。前夜祭の会場になる講堂には、そのまま演

劇の舞台が作れる立派な照明・音響設備がある。

「緞帳はどうします？」

「時間かかるから上げっぱなし。決まってるでしょ」

綾華さんは判断が早い。

「それはそれで文化部から抗議が来ないか？ 完成度が下がるとかなんとか」

会計氏が聞くと、綾華さんは断言した。

「いわせない。見てるほうはハプニングも込みで楽しめるじゃないだいたい、この程度の制限も守れない発表って、部活動としてどうなの？ まともじゃないよね？」

「ごもつとも。」

「あたしから通達出すわ。制限時間を観客にもわかるように表示したいけど、出来る？」

「えーつと……時間を表示する……アナウンスじゃダメですか」

「舞台の声を邪魔しちゃいけないでしょ。ああ、でも、時間切れ寸前になったらそれっぽいBGM流すのはいいね。ビジュアルは無理？」

「んー……なんか考えます」

「よろしく」

リーダーの綾華さんから次から次へとアイデアが出る。俺の仕事はそれを現実化していくこと。

「綾華さん、吹奏楽部からリハーサル見に来ないのかと連絡が」

「ああ、行く行く」

由紀の仕事は綾華さんの動きと時間を管理して、効率的に回していくこと。

「先輩、OHPでたとえばPCの画面って投射出来ますか？」

「ああ、USB対応のが1台余ってたはずだな。電源はどうとでもなる。何に映す？」

「白布があれば、ホワイトボードでも出してそれにかぶせちゃえば、舞台の端にも置けますよね」

「白布とホワイトボードな。それも準備できる。手配しておこう」
会計氏の仕事は資材や道具関係を手配し、使い回しまで考えて準備していくこと。

役割がはっきりしているから、仕事をしていてわくわくするくらい、どんどん回っていく。

何の利益もない、ただ疲れるだけの仕事と思っていたけれど、仕事をしていること自体が楽しくなるなんて思いもしなかった。

偶然集まったただけの文化祭実行委員が、ここまで一体になれるなんて思いもしなかった。

俺は多分、綾華さんや由紀という女性に出会えたことだけじゃなく、ものすごく幸せな経験をしている。

文化祭本番までの日々は恐ろしいまでの忙しさの中であつという間に過ぎて行っただけで、密度が最高に濃くて、疲れることすら楽しいと思える、短い人生の中で一番面白い時間を過ごしていた。

「申し訳ありませんでした」

ずらりとそろった文化祭実行委員会新執行部が、といつても4人だけれど、生徒会長を前に一斉に頭を下げた。

日付は少しさかのぼって、クーデターの翌日のこと。

場所は人気のない会議室。会長だけがいすに座り、4人がその前に並んでいる。

仕事を始める前に、俺たちはまずやらなければならないことがあった。

思いつきり屈辱と恥を与えてしまった相手、生徒会長に、まずは謝ることだった。

許してもらうのが目的じゃない。そんなに虫のいい考えは、いくらなんでも持てない。会長を失脚させておいて、一度謝ったくらいで許されるなら、世界はずいぶん生きやすくて平和な世の中になっているに違いない。

これは儀式だった。新たに自分たちの体制が走り出すためにはどうしても必要な儀式だった。これを済ませておかないと後悔する。

綾華さんをトップに、頭を下げた4人を前にして、会長はしばらく無言だった。

生徒会長は、「目立ちたいから会長になった」という噂がほとんど事実として伝わっているタイプの人物。去年の会長選では派手なパフォーマンスで話題をさらったというけれど、確かに目立つタイプのルックス。

最初のうちはそれでも頑張っていたらしい。会計氏も側近として彼を支えてていた。

それが、年度が替わって新入生を受け入れる頃には、あまり生徒会に興味を示さなくなってしまったという。

報われない仕事が多かったからだろう、と、会計氏はあまり理由

については話してくれなかったけれど、生徒会内部で人間関係が荒れたことがあって、それで嫌気が差したらしい。

会長はしばらく黙っていた後、会計氏に向き合った。

「……お前が裏切るとは思わなかったよ」

静かな声だった。怒っている声でも、戸惑っている声でもなかった。

会計氏は俺たちに付き合って頭を下げてくれたけれど、こちらにも戸惑いの様子はなかった。

「裏切ったつもりはない。前にもいつていただろう。好きにやらせもらうって」

淡々と答える。

「僕は生徒会を第一に考える。君をどう支えるかはその後に来ることとで、生徒会と君の言動が対立するなら迷わず生徒会を取る。その条件で生徒会に残ったはずだ」

「……そうだったな」

会長は軽くうなずいた。

「長い間生徒会を預けっぱなしにしていたのは俺だ。お前に裏切られたとか、思う方が間違いだったな」

意外に、あっさりと自分の非を認めた。自覚はあったらしい。

「それでも僕は君が戻ってきてくれることを願っていた。去年の選挙の時、僕が会計に立候補したのは、この地位が一番君を効果的に支えられると思ったからだ」

綾華さんも由紀も、そして俺も、二人の間に何があったかは知らない。詳しくは教えてくれなかったから。ただ、一言では表現しきれない何かがあったのはわかるし、そこに深く食い下がっていく気にもならなかった。

会長は座ったまま脚を組み、会計氏を見上げた。

「俺はまがい物だ。会長なんて呼ばれて最初は喜んでたけど、仕事はお前の方が出来るし、俺がいなくても生徒会は回っていく。そのまがい物を今まで支えてくれたお前に、俺から何かいえると思うか

？」

「立場を奪ったのは確かだからね。生徒会会計としては裏切ったつもりはないけど、一人の人間としてはお前に同情もするし、悪かったとも思っているよ」

会計氏はそういうと、綾華さんに視線を送った。

「永野が出てこなければ、それでも僕は君を最大限に使おうとしていたと思う。でも、今の生徒会に一番足りなかった物が、目の前に現れたんだ。お前にこだわる理由は無くなったんだ」

「足りなかったもの？」

「今あるものをぶち壊してでも何かを完成させようとする、やる気だよ」

会計氏のその言葉に、会長は答えなかった。答えられなかったようにも見える。

しばらくして、会長が口を開いた。

「いつからだ？ 計画が始まったのは」

「昨日、あの場だよ」

会計氏は相変わらず静かに答えた。

「この3人にしたって、一昨日考え付いたらしいしね。僕は彼らに乗っただけさ」

「佐藤」

会長が俺を見る。反射的に背を伸ばした。

「お前が黒幕ってことになっていたな。事実か」

「事実です」

簡潔に答える。

「生徒指導主任辺りに乗せられてのことじゃないんだな」

「主任は知ってはいましたけれど、関わっていません。俺たちの暴走です」

こういつときにべらべらと言いつつ訳をし始められるほど度胸は良くない。会長はその俺の態度にひとつうなずいてみせた。

「永野」

今度は会長の目が綾華さんに向けられる。綾華さんはすうつと背を伸ばしたまま、肩の力が抜けた声で「はい」と答える。

「引き受けたからには最後までやり通してくれるんだろっな」

「もちろん」

綾華さんの答えも短い。ただ、声の表情が穏やかだった。喧嘩を売ろうなんて気配は少しもないし、おびえもない。さすが、としかいいようがない。

「……なら、いい」

会長はふっとため息をついた。

「あの場で俺は圧倒された。その時点で俺は終わりだよ。会長の資格はない。すべてお前たちに任せる」

その会長が、今、壇上にいる。

文化祭の開会宣言。

全校生徒が一度校庭に集まり、開会式が開かれる。短い開会式中、会長の開会宣言ですべてが開始される。

開会宣言を誰がやるかで、実行委員の中でも意見が分かれた場面があった。

俺が急遽作り直した計画書の中で、開会宣言は生徒会長の役目になっていた。それに、一部の実行委員が噛み付いた。

というのも、俺たちがクーデターを起こしたせいか、生徒会執行部から実権を奪った以上、執行部の人間には文化祭に関わって欲しくない、と考える人間もいた。

クーデターを実行した俺や綾華さんより、なぜかそれについてこようとする生徒の方が過激なことをいう。

ちよつと前に読んだ本にも同じようなことがあった。幕末維新の時期を描いた小説だったけれど、長州藩過激派のリーダーだった高杉晋作や桂小五郎より、その下にいて追随していた若者の方が、言動は過激で、ついには幕府や薩摩藩と対立し壊滅する悲劇に遭った。俺や綾華さんがクーデター劇のときに繰り広げた舌戦やら何やらが、一部の実行委員にはずいぶん格好良く見えたらしい。自分もそうなりたい、と考えるのはまあいいとして、よほど過激な行動に見えたようで、その過激さに憧れてくれて、過激こそ正義と突っ走ろうとする者がいた。

やたら難しい表現を使いたがるのもその現われだろうな。

「永野がやるべきだろう。開会宣言は旧権力の象徴者が行うべきじゃない。実効権力の象徴として永野がやるべきだ」

2年の男子の実行委員が言い出した時、俺はげんなりした。この人の物言いが苦手で、恥ずかしくなることがある。

「まして文化祭執行の遅延を招いた体制の旧弊を代表する人物の宣言など、聞くに堪えん」

聞くに堪えんのはあんたの演説だよ、と思つても口に出せるはずもなく、俺は黙っていた。別に俺に直接いつていたんじゃない、計画書を見て生徒会室でわめいていただけだったから。

その俺の無反応さが気に入らなかつたようで、その2年生はさらに大声になった。

「彼らが自らの責任を放棄したが故に生じたこの事態に対し、彼らがどう責任を取った？ 我々が権限を強制的に委譲させるまで何もせずにいた彼らが、開会宣言を行うなど僭越もはなはだしい」

彼が「我々」と表現した辺りでちよつと腹が立つたけれど、それでも俺は付き合わなかつた。

それがさらに彼の口に火をつけた。俺が反応しないのが面白くないのか、逆に俺が反応しないのは論破されるのを嫌って逃げたと判断して得意になっていたのか。

確かにクーデターの黒幕といわれる俺に論戦で勝つたら、さぞ気

持ちいいだろう。

「我々が実効権限を持っているという事実は文化祭の歴史に銘記されるべきだ。無気力体質の執行部を生んだ責任を断罪するためにも、我々の勝利は喧伝され称揚されて然るべきだろう」

「誰の勝利だつて？」

そのタイミングで、綾華さんが入ってきた。

2年生は興奮した状態のまま続けた。

「生徒会執行部に対する我々新勢力の勝利だよ、永野」

綾華さんはそのセリフが終わった瞬間、持っていた空のファイルを彼に思い切り投げつけている。

ファイルが見事に腹部に当たった2年生が、驚きのあまり「おおっ」と叫んだ、その語尾に重ねて綾華さんが怒鳴っていた。

「あんなもんを勝利とかほざいてる勘違い野郎は今すぐ出て行け！

二度と面見せんな！」

大激怒。

みんな啞然としている。

「しかも我々の勝利だ？ てめえが何をした？ 他人の尻馬に乗ってでかい面するとか、どんだけ増長してんだタコ！ あたしとあきちゃんと由紀が考えて実行したんだ、勝手に自分の手柄にしてんじやねえよ、キモイにも程があんだろ」

綾華さんの怒りは簡単には収まらず、しりもちをついて真っ青になつていゝ2年生男子にさらに罵詈雑言が飛んだ。

「こいつ、他に何をほざいていやがった？ 知ってる奴、報告しな」鋭い綾華さんの声が飛び、たいていこういうときに相手になつてきた俺が不機嫌に黙っているから、仕方なく誰かが答えた。

「開会宣言は綾華さんがやるべきだと……」

「……てめえ、なに座つてんだ！ とつとと失せろ！ この世から消えちまえ！」

綾華さんがさらに噴火した。机の上にあつた紙パックのりんごジュースが飛び、頭に当たりそうになつたそれをぎりぎりですぐ2年生が

避けた。綾華さんがステップを踏むようにしてそいつに蹴りを飛ばす。さすがにそれは避けようがなくて、肩を思い切り蹴飛ばされた彼は悲鳴を上げた。

さすがにこれ以上やったらまずい。

俺は立ち上がり、軽く綾華さんの肩を叩いた。

「彼と心中する気ですか？ もういいでしょう」

彼に対する暴行のかどで綾華さんが文化祭実行委員長から外されても困る。

ひと暴れしてすっきりしたのか、綾華さんは素直に手を引いた。

ただ、暴れっぱなしで自己解決されても困る。

「どうしたんです、今日は」

暴れたら暴れたで、周囲にフォローしておいてもらわないと、わがままな暴君という印象になってしまう。それでは困る。

綾華さんは俺の眉間にしわを寄せている顔を見て、ちょっとひるんだらしい。

「ど、どーもしないわよ」

微妙に動揺していた。

「ただ」

と綾華さんが続け、その場にいる誰もがその声に集中した。

「あたしたちは勝ち負けで文化祭背負ってるわけじゃないでしょ。

文化祭の成功のためだけにあんな事件起こしたのよ。偉そうなセリフは成功してからでしょ」

綾華さんのセリフは、率直でわかりやすい。もともと、口調がちよつと言いつけがましいのが減点。それでも、綾華さんは続けた。

「それに、開会宣言は生徒会長にしてもらわないといけないわ。けじめでしょ。生徒会の代表は選挙で選ばれた会長だわ。あたしたちは会長から仕事を任されただけじゃない」

「その通りです」

俺が応じた。

「その程度もわからない人に怒るのは当然ですけど、でも程度も

考えて下さいね」

「わ、わかったわよ」

周囲にも伝わっただろう。俺たちは馬鹿なことをして権限を奪ったけれど、だからこそ筋は通さないといけない。妙な増長なんかしている暇はないんだ。

綾華さんのいうとおりだ。成功してなんぼである。

そんな事件もあったから、会長の開会宣言は、感無量だった。

「我々生徒会は、ぎりぎりまで体制を整えられずに皆さんにご迷惑をおかけしました。だからこそ、今日と明日の文化祭は、皆さんに心から楽しんでもらえればと願っています。それでは、ここに、第46回文化祭の開会を宣言します」

俺たちの文化祭が、今、始まった。

始まってしまえば、あまり俺の役割はない。

計画書どおりにことが運ぶなんてありえないし、様々なトラブルは発生する。それを素早く解決していくのは俺たちの仕事だけれど、現場レベルで何かが起きてもたいていは会計氏が即座に解決してしまうし、喧嘩などのトラブルは綾華さんの独壇場だった。綾華さんに付いて回る由紀は忙しさの極地だったけれど、俺は本部に統括役として詰めていなければならなかったから、イベントや出し物にも参加できず、生徒会室でぼんやりと座っているだけだった。

仕事といえば、トラブルが起きた報告が届いたら、その近くにいる誰かに仕事を振っていくだけ。

そのために、校舎の図面の上にカラーマグネットを置いている。マグネットは人間。名前が書いてあって、誰がどこにいるか、報告があるたびに動かしていく。一目で把握できるように、昨日の夜に作った。

「屋台用のガスが意外に早く無くなりそうです」

という連絡が入れば、資材集積所と化している体育館裏にいる会計氏に連絡。発注が必要ななら俺が業者に電話をするけれど、その辺りの準備はさすがに会計氏のこと、万全だったから、発注という話まで進む例がなかった。

『予定より余りそうなクラスがあるから動かそう。僕から連絡を入れる』

といわれてしまえば、そのことを資材リストに書き込んで俺の仕事は終わり。

非常につまらん。

一緒に詰めているのは実行委員会の仲間たちか担任、他の教員といたところだけれど、俺以外は詰めっぱなしというわけじゃない。完全留守番役というのは俺だけだから入れ替えがある。

扉の外に出て行く人々がうらやましくて仕方ない。非常時に対応できるように、幹部クラスの誰か一人は犠牲にならなければいけないといえ、自分がそれになってみると、外が非常に楽しそうな騒ぎなだけにつらい。なるほど、天照大神も岩戸から出てくるはずだ。「あきちゃんが忙しくなるような文化祭じゃダメなんですよ？」
といったのは、ごく短時間だけ部屋に来て、俺の愚痴を聞いた綾華さんの言葉。

まったくその通りで、計画屋、企画屋の俺としては、昨日までの準備の段階ですべての仕事が完成していなければならなかった。俺が今頃じたばたしていたら、文化祭実行委員会の執行役としては失敗ということ。

暇をもてあまして淋しい思いをしているくらいがちょうどいい。などと思っているそばから、楽しそうにイベントに参加している連中からどんどん写真つきのメールが送られてくる。嫌がらせに違いない、とひがんでも仕方がない。各イベントの様子がわかるように画像や動画を送るように指示を出したのは俺自身。大墓穴。

俺や他の留守番役のもとに一齐に連絡が入り、携帯メールががん入ってきたのは、昼が過ぎた頃だろうか。

内容はまったく同じもので、毎年恒例のものだった。

『暴走族が来た！』

何しろ田舎のこと。まだ暴走族が生き残っているし、それと内容がどう違うのか素人にはわかりにくい集団もいる。

昔ほどではなくなったというけれど、うちの高校にもその集団に属している奴がいない訳じゃないし、よほど硬派を気取っていない限り、高校の文化祭なんてイベントは、彼らにとっては適度な娯楽のひとつだった。

来るのがわかっていれば対応できそうなものだけれど、全面開放

じゃないにしろある程度は一般の人も入れている文化祭で、周辺道路を全面封鎖するわけにも行かないし、警察だってわざわざ人数をさいてはくれない。

学校側も、体育教師などを中心に対策チームを組んでいるけれど、人数的にも限界がある。

「無駄に刺激しないで下さい。しばらくはスルーしといて下さい」
すぐに俺は指示を飛ばした。

「今どの辺で何をしているか、観察報告だけ送って下さい」
さらに由紀に電話をつなぐ。

「由紀、わかつてるね。絶対に綾華さんを抑えて、暴走族に綾華さんを近づけるんじゃない」

「わかつてます、全力で止めます」

その手の人々と付き合いがないわけじゃない綾華さんは、今回必ずターゲットになっている。なにしろ、近在では知られた名家の御曹司と別れたばかりの超絶美少女だ。噂は当然仕入れていると見るべきで、綾華さんの姿を見かけたら、当然のように声をかけるだろう。

誰が綾華さんに声をかけようが自由だけれど、綾華さんがまた暴れだすと面倒になる。そして、文化祭の雰囲気確実に壊すだろう暴走族やそれに類する面々なんてものは、綾華さんにとって許せる存在じゃない。

真正面から行かれたら、ただではすまないだろう。

俺は念のため会計氏にも連絡を入れた。

会計氏は校庭ど真ん中のイベントに資材搬入のために出ている、暴走族騒ぎには気付いていなかったけれど、俺の話にすぐ反応してくれた。

『まずいな。僕も監視に付こうか』

「お願いします」

それからおもむろにひとつのメモリを呼び出す。通話ボタンを押すと、相手はすぐに出てくれた。

暴走族やそれに類する集団は、総勢で40名ほどに達していたらしいけれど、見事に消えた。

電話一本で。

学校側はひどく不思議がっていたけれど、ちゃんと理由はある。備えあれば憂いなし。

俺だって何の対策も考えなかったわけじゃないし、むしろそれを考えるのが俺の仕事だったわけ。

「わざわざありがとうございます」

俺は久々に生徒会室の外に出て、今は校内で一番の料理人がいると評判の、料理研究同好会のレストランに設けられた特別席にいた。なにしろ一番人気の模擬店だから、そんな席が取れるはずがないんだけど、これは特例。このためにあらかじめ同好会に話は通してあったし、店の場所選びや資材提供では裏から手を回し、便宜を図っていたから、俺が呼んだゲストは大して待つこともなくその席に通された。

「なに、評判どおりの飯が食えて大満足さ。なあ、佳苗」

小さな娘を連れて幸せなパパが目の前にいる。

カケスさんだ。

俺は究極の秘密兵器、核弾頭を仕込んでいたわけだ。

「今日は平日だからまあいいとして、明日はどうする気だ？ 明日の方があいう連中の集まりもいいだろうに」

どう見ても休日のいいパパだ。平日なのに休みなのは、休日しか工事が出来ないところで仕事をした代休を利用して協力してくれていたから。

「それはそれで考えてあります。協力者もいましたしね」

「そうか。まあ、お前がそういうなら大丈夫なんだろうな」

カケスさんはそういうと、二度とその話題は出さなかった。愛す

る佳苗ちゃんの前で殺伐とした話題には触れなくなかったのかもしれない。

この人の威力は実に絶大だった。

学校の周囲をゆつくり車やバイクで流し、女子生徒や若い女性教師に声をかけたり、男子生徒を脅しつけたり、グループ同士のいがみ合いを持ち込んでいきがったりガンをくれあつたりしていた暴走族やヤンキーの類は、カケスさんが娘を連れて駅から歩いてくると、ぎよつとして互いに顔を見合わせていた。

カケスさんは彼らと直接触れ合う気はなかったようで、平然と無視して学校に入ったけれど、一度だけ、彼の存在に気付かず、しつこく女子生徒をナンパしようとしていたヤンキーの目の前を通過するとき、

「命が惜しけりやほどほどにしておけよ、兄ちゃん」

ぼそつとつぶやいただけだという。反射的に「ああ？」とガンを飛ばして振り向いたヤンキーはその場に凍り付いていたというから、むしろ同情してやりたくなる。

「今日は料理研究同好会だけじゃなく、3年女子有志によるスイーツ専門店からもとっておきを手配してます。佳苗ちゃんがタルト好きってのは前に聞いてましたからね」

そういつて俺が出したのは、あらかじめ3年生のお菓子好きが集まって出店計画していたグループからの献上品。こちらも俺が密かに調達面で優遇していて、カケスさん親子用のお菓子を出して欲しいというお願いも、二つ返事で引き受けてくれた。

その話をする、カケスさんは笑い出した。

「お前、ほんとに業界向きだよ」

「そうですね？」

怪訝な顔で問い返すと、カケスさんはおいしそうにタルトを食べている娘さんの顔を幸せそうに眺めながらいった。

「接待の下準備をあらかじめ済ませてきながらヤンキー対策とか、そこまで段取りできる高校生がそうそういてたまるかよ。うちの業

界に限らず、そういう奴が一人現場にいただけで仕事が上手く回るんだ。いいぞ、その調子で行け」

「はあ、がんばります」

情熱が欠けた返事になったのは、褒められるようなことをしたとは思えなかったからだ。少なくとも、裏で手を回して段取りを進めるとか、高校生らしからぬ悪辣な行為といわれても仕方がない気がする。

「そうじゃないさ」

とカケスさんはいっ。

「結果がすべてだよ。なにも法に反してるわけじゃない。取りまとめつつのは力技が必要なきがある。間違わずに使う力つつのは、結果さえ良けりゃ、悪事にはならないんだよ。使わずに結果が悪けりゃ、力を使わなかったことを責められるんだしな」

なにか似たようなことを会計氏がいつていた気もする。

「永野家のお嬢ちゃんを頭に担ぎ上げたんだって？」

「ええ、まあ。てか、綾華さんを知ってるんですか？」

「知らんわきゃないだろう。本人は知らんが、永野家を知らんてこの土地で仕事が出来ると思うのか？」

「……最近までは知りませんでしたけれど、出来なさそうですね」

「できねえよ。それに評判くらいは聞いている。親父よりほど政治家として出来が良さそうだったな」

「綾華さんの親父さんがどうかは知りませんが、出来がいいのは確かですよ。誰も逆らえないし、それでいてちゃんと話は聞くし、人をぐいぐい引っ張っていく力があります。女子高生にしとくのがもったいないくらいです」

「お前がそこまでいうんだから大したもんだな」

カケスさんは感心している。

「日頃いろんな現場でいろんな大人を見てるお前だ。どうも同じ高校生がガキに見えて仕方ないんじゃないかと思ってたが」

凶星ですカケスさん。俺の悪いところっすよ、それ。見え見えで

すかそうですか。

「そういうお前がそこまでいうんだから、永野のお嬢も大したもんだな」

その大したお嬢を振ってしまおうという、史上まれに見る暴挙を仕出かした奴が目の前にいるわけですがね。いや、色々事情があつてのことで、俺がそれで調子に乗ってるとかいうことは多分ないんじゃないかと思えますけれども。

などといえるわけもなく、黙ってうなずいておいた。佳苗ちゃんがタルトを食べ終え、話が終わってしまったせいもある。

「さあ、佳苗、今度は何を見ようか。晃彦兄ちゃんにお勧めを聞いてみようか」

カケスさんが溺愛する佳苗ちゃんは確かにかわいい。奥さんが相당한美人だからか、来年から小学生という年齢で、恐ろしく整った顔立ちが見て取れる。成長したら凄いことになるかもしれない。

その佳苗ちゃんが、カケスさんの言葉にこくりとうなづく。

「そうだな、今からなら職員代表の落語が見ものだけれど、佳苗ちゃんには難しいかな。そうだ、被服部の展示が面白いよ。佳苗ちゃんが将来着てみたくなるような服もあるかもしれない」

「よし、佳苗、行ってみるか。晃彦、どっちだ」

「出て左の渡り廊下を行った先です。表示もありますからすぐわかります」

ちなみに次の日、文化祭最終日にして世間的には文化の日にヤンキー対策として準備していたのは。

「父さん、その格好……」

真っ青な顔をした由紀が引きまくる中、父さんと呼ばれたスーツ姿の人物は苦笑いしていた。

「久々に着たからどうもサイズが、なあ」

由紀パパ。確かにサイズが合っていない。無理に止めたジャケットのボタンがはちきれそうになっている。

「……ジャケット脱いで。脇に抱えておけばどうにかなるでしょ」
小声で父に詰め寄る由紀に、気弱で地味なメガネ少女の印象はない。凄みのある目で無表情に見上げるその顔、ちと怖い。

「おいおい、いくらなんでもこの時期に上を脱いだら寒いだろう」
由紀パパは華麗に視線を受け流している。内弁慶気味の由紀だから、意外に家の中ではあんな顔をしょっちゅうしているのかもしれない。慣れているか、よほどの鈍感じゃなきゃ、あの攻撃は流しきれない。

でも、この人じゃどう考えたってヤンキー対策にはならない。普通の農家だし。

でも、ここは田舎。力のある農家でもある由紀パパのネットワーク、なめちやいかんのだよ。

日本の農家はたいてい政治的にも経済的にも非力で悲劇的な存在として捉えられがちだけれど、それはマスコミや農協が作ったイメージ。その方が自分たちにとって都合がいいから。農家もその方が色々と得だからそのイメージに乗っかっている。

実際そういう立場が弱い農家もたくさんあるけれど、由紀パパはそっこの側じゃない。

どつという側かというと。

「渋谷さん、久々に来てみましたけれども、いいもんですな、若人の息吹というものが感じられて」

「近頃の若者には情熱が感じられんと思ってましたが、なかなかどうして」

おじ様おば様方ご一行。

その中に、綾華さんがいる。

永野家の嫡流として、地元の名士に顔が知られている綾華さんが接待役に最適ということで俺が当て込んだんだけど、スーパーお嬢様モードに入っている綾華さんの大人あしらいは天才的だ。

「近頃の若者なんてくくりは無意味ですわ。今この瞬間に輝いている彼らを見てあげて下さい。そのために皆様をご招待させていただきました」

大人受けする純真そうな笑顔を振りまく綾華さんは、たぶん心の中で俺を呪っているに違いない。時々飛んでくる視線がぐさぐさ突き刺さる。後で引き受けますから今はどうかおじ様おば様方をどうぞよろしく。

この方々、どういう面子かといえば、地元選出県会議員をはじめとする地元名士の方々。近隣農家の若手（高校生の娘がいるような農家は若手もいいところらしい）の顔役である由紀パパが動けば、こういう面子を呼び出すことも出来なくはない。さらに、文化祭のまとめ役が永野家のお嬢だと触れ回っておけば、そのお嬢と顔をつないでおこうと動く政治家だっている。

実は、この提案は由紀パパからのもの。俺からしたらとてもありがたいご提案で、綾華さんはあまりいい顔はしなかったけれど、「これをしてあげばヤンキー被害が無くて済みます。ついでに学校側の評価まで上がれば、校長辺りも文句はないでしょう。協力して下さい」

と俺がいうと、渋々納得してくれた。

ヤンキーたちもこの土地で生きている以上、色々しがらみがある。そのしがらみが嫌で暴れたりしているわけだけれど、政治家や地元

の有力者たちにまともに刃向かって生きていけると本気で思っている奴はそう多くないし、県会議員クラスが何人も集まるとなれば、警察も動く。

制服、私服の警官が学校周辺をそれとなく警戒している気配には、一般の生徒よりヤンキーたちの方が敏感。しかも、交通警察じゃなく、警備警察が動いているとなると、ヤンキーで歯が立つ相手じゃない。街の不良ごとき、どんな罪名でも簡単にしょっ引いて排除できる連中だ。

ヤンキー避けにこれほど便利な存在もない。わざわざ警察に協力要請しなくても向こうから来てくれるのだから実にありがたい。

綾華さんもそれがわかるから、渋々とはいえずぐに納得してくれた。

もつとも、会計氏にこつそりいわれている。

「……佐藤、外部の政治家を引き込んで後ろ盾にして、ごちゃごちゃ裏で動いていた事実を正当化しようとしているだろう」

図星ですぜだんな。こいつも見え見えですかそうですか。

「……妙な揚げ足取られて当日に身動き取れなくなるのも困りますからね。保険です」

「なにか動きがあるのか」

「生徒指導主任の存在が煙たくて、かわいがられてるらしい俺たちが不正を働けば、それをネタに主任の権威に泥を引っ掛けられるって考えてそんな教師だっていますしね」

「政治家がいれば少なくとも当日にそれはできないか」

「後でどうなるうがかまいません。当日、成功のまま終わりさえすればいいんです。ついでに、綾華さんや由紀、あなたに泥をかぶせません。すべては俺の責任でやっていることだ」

「かつこつけるんじゃない」

会計氏は俺の頭を軽くはたいた。

「泥くらい僕だってかぶってやる。泥はここまでで押しとどめる。それにしても」

と、会計氏はため息をついていた。

「これを思いついて、あまつさえ実行に移すお前の頭と力が僕は恐ろしいよ。大した奴だ」

「そうですか？ まわりが勝手にお膳立てしてくれるところに乗っかってるだけですけれど」

「ばらばらに起こっている事実をつなぎ合わせて、すべてを文化祭の成功に結び付けていってるじゃないか。永野の実行力も凄いが、君の調整力も大したものだ」

「そんなもんですかね」

褒められるのに慣れていないから、俺はごによごと濁した。

「あまり自分を過小評価するな。でかい面をされても腹立たしいが、過小評価されると色々裏があるんじゃないかと疑いたくなるのが人情ってものだ」

「はあ、気をつけます」

間の抜けた返事をする会計氏は笑っていたけれど、そういうところも確かにあるんだろうなあ、と思ったし、最近同じようなセリフをやけに身近な人々から何度も聞いていたから、ちょっとは自分が成長できたりしてるのかもな、と考えることにした。

でも、所詮俺は高校生になってまだ1年もたっていない小僧なわけです。

仕事の方は、色々な人を巻き込んだおかげで上手く回っていた。

事前の段取りを入念に行っていたおかげで、本番当日にはほとんど生徒会室から出る必要がないくらい暇で、俺が暇ということは、段取りが上手くいっていたという証拠になる。

その仕事に追われていたせいで、俺は多分一番大事なことを見落としていた。

仕事上のペアとしても、先輩後輩としても、綾華さんと由紀はパーフェクトなペアだった。それぞれが足りないところを補い合うと

どこの完璧超人だという仕事振りを発揮したし、どちらも相手のことが大好きだから関係も上手くいっていた。

俺がいなければ、の話だ。

でも、俺はいるわけで、お互いにとってその存在は絶対に無視できなかった。

そして俺は自分を過小評価する癖があったから、そのことも過小評価して、取るに足りない問題だと思っていた。

恋愛なんて経験もなければ想像すら出来ずにいた。その俺がいきなり二人の女性から好かれるという奇跡に恵まれて、舞い上がってもいたし、浮かれてもいたし、仕事に追われるクソ忙しさにかまけてしまっていた部分も大きかった。

だから、綾華さんの告白が終わって、足を思い切り蹴られたところで、すべての問題は解決したと思っていた。

二人の間にどんな会話があったか、その場にいなかった俺にはわからない。

二日目の午後、文化部の発表もメインイベントを迎え、文化祭の盛り上がりは最高潮に達していた。

一番忙しくなるはずのこの時間、いきなり、二人と連絡が取れなくなつた。

『おい、何が起きているんだ』

会計氏から連絡が来たとき、俺はパニックに陥っていた。

綾華さんがやるべき仕事はたくさんある。実行委員長としていくつものイベントの審査員に任命されていたり、生徒会主催イベントの仕切りをしたり、まだ何人か残っている地元名士たちの相手をしたり、綾華さんでなければ勤まらない仕事がある。

由紀も、綾華さんの秘書としてやるべきことは山ほどある。俺より全然忙しいはずだ。なにしろ綾華さんの行動予定を完全に把握し

ているのは由紀だけで、どの仕事がどれだけ進んでいるかを把握しているのも由紀だけだった。

二人が同時に消えたら、文化祭は最後の最後で崩壊する。

何度も何度も、二人の携帯を呼び出そうとした。でも、どちらも応答なし。

実行委員会のネットワークで搜索も開始したけれど、あらゆる場所で「見た」という証言は取れても、「見える」という表現は一つも無かった。

あの二人がいなくなる。

なにしろ、あの二人だ。強烈極まる存在感の綾華さんと、その陰になりながら不思議と存在を無視できない由紀。どちらも美少女。話題の人物。

悪い想像しか出来ないとしても、誰も俺を責めないはずだ。

「なんだよ、出てくれよ！」

俺は十何度目かの携帯連絡が空振りに終わると、思わず携帯を投げつけそうになった。

それを止めたのは、ちょうどそのタイミングで生徒会室に戻ってきた会計氏だった。

「やめろ佐藤、お前が取り乱して何になる」

低い声で俺の腕を押さえた会計氏の目は、少しも甘くなかった。

「何かが起きているのはわかるが、お前が取り乱したところで問題は何も解決しないぞ。落ち着け」

いつていることはもつともだったから、俺は反発はしない。頭が沸騰したまま、それでも何とか息を吸い、吐き、携帯を握り締めたまま腕を下ろした。

「もともと永野も渋谷も、お前が立てた計画に従って動いていたんだ。とりあえずその穴を埋められるのはお前の指示と判断だけだ。

二人のことは一通り処置をしてからにしてくれ」

「あんた……」

俺はパニックから立ち直っていない。沸騰した頭のまま、会計氏

が何をいつているのか理解できず、つかかった。

「二人が消えたつてのに、んな悠長なこと、よくいつてられるな」
「頭を冷やせ」

「うるせえよ、あんたがやりやいいだろう、もとはあんたたちの代の文化祭だろうが、俺は二人を探しに……」

最後まで言い切ることは出来なかった。

俺は、左頬を殴られていた。

殴ったのは、目の前で俺を厳しい目で見ていた会計氏。暴力沙汰からは、由紀と同じくらい縁遠く思えていたひと。

「落ち着けとっている」

凄まじい眼力だった。俺は思わず立ちすくんだ。左頬の衝撃は脳の反対側まで達し、重い振動で頭がぐらぐらしていたけれど、頬の痛みも頭の鈍痛も、会計氏の目の力に消し飛ばされた。

「今の貴様が動いたところで見つかるものも見つかるものか。まずはやることをやれ。二人のことは貴様以外の全員で探す。いいな」
貴様、などという表現をともに使う人間を初めて見てしまった。いや、俺が使わせたんだ。

頬の痛みと過激な表現で、多少は俺も目が覚めた。

「……ミス・ダンディコンテスト審査員は生徒会執行部から一人代役に出てもらいます。演劇部のゲストは辞退、至急部長に連絡を入れてください。最悪、生徒会長に代役をお願いできるように手配を。地元名士の相手役は先輩がお願いします、サポート役に実行委員の女子を一人連れて行ってください」

矢継ぎ早に指示を出す。会計氏は「わかった」と短く答えると、どすん、と俺の背中を平手打ちした。

「落ち着いてさえいればお前は大丈夫だ。まずはお前が冷静でいること、それがすべての状況を解決する一番の近道だ。いいな」

会計氏のメガネの奥の目が強く光る。

何が起きているかわからないけれど、少なくとも、信頼できる仲間がいてくれる。

確かに、取り乱したところで何が解決するわけでもない。

落ち着け。

会計氏は俺の顔を少し見た後、視線を切って声を張り上げた。

「さあ、馬鹿な大人どもをだましに行くぞ。僕と一緒に行こうという奇妙な女子はいないか」

俺が取り乱して凍りつきかけた空気が、会計氏の声で解凍された。実行委員長と秘書が消えるという非常事態に、にわかには生徒会室は騒がしくなった。それぞれが自分の仕事以外に何が出来るかを探し始めていた。

「業務の振り分けは佐藤の指示に従え。それから、永野と渋谷だが、思いつく限りの人数に動員をかけて、一気に探し出せ。時間との勝負だ、手段は問わない」

会計氏が部屋を出ながらいい置いた言葉。

緊急事態発生、とばかりに、生徒会室の緊張が高まる。そのすべての視線が、俺に集中していた。

俺は次々に指示を出しながら、まずはこれに集中することにした。少なくともここにいる人々は、綾華さんや由紀がいない穴を少しでも埋めようとしている。ここにいない人々の何人かは、必死で二人を探してくれている。

俺一人ではたばたするよりずっといい。

俺は俺の責任を、搜索隊には搜索隊の責任を。それでいい。

さっさと仕分けを終えて自分で探しに行けるまでは、まず文化祭実行委員会副委員長の職務を優先させる。その間に二人が見つければよし、見つからなければそれはその時のこと。

それで行くことにした。

49（前書き）

最終回まで一気に書き上げてしまいましたので、連続投稿です。

二人はすぐに見つかった。

連絡が来たのは、あらかた指示も出し終えて、二人がいなくても文化祭終了まで突っ走れる状態になった頃だった。

『永野先輩と渋谷さんは一緒です』

一年の実行委員から俺の携帯に連絡が入った。俺は仕事に専念する時間が少しでも取れたからか、冷静になれていた、と思う。

『生徒会室に向かうそうです』

「わかった。ありがとう」

なんで俺に敬語なんだろう、という疑問を持ちつつ、通話を切る。同時にメールを打つ。二人が見つかったこと、捜索隊は直ちに解散し自分の持ち場に戻ることに、そのメッセージをメールリストで一気に飛ばす。

『見つかったか』

すぐに会計氏から電話が入った。

「生徒会室に二人で来るそうです」

『無事なんだな』

「無事です。ヤンキーなんかとは関係ないようです」

『なら良かった。こっちは大人の相手を続行する。後は頼んだ』

「よろしく願います」

手短に通話を切ると、その後も続々と連絡が入ってくる。急に態勢が変わったから、指示がないと動けない人が多く出ていた。電話の相手だけじゃなく、別の留守番要員にかかってきた電話にも答え、留守番要員自身の質問にも答え、俺はやたら忙しかった。

この時の俺の判断力は、後から考えても異常だった。

とにかく色々な判断が求められていたけれど、片っ端から答えていた。

パニックになったのはほんの数分前のこと。それがとても信じら

れないような俺の指示ぶりに、この時一緒にいた実行委員たちは、後に、綾華さんと由紀と会計氏の三人が乗り移っていたようだったと表現した。

俺としては、もうやれることを徹底的にやる以外にないわけで、ここまで文化祭を引っ張ってきて、悪辣なこともやって、とてもじゃないけどもう一度やれといわれても絶対に出来ないような仕事をしてきた。

ここでひっくり返されるわけにはいかない。三人分だろうが四人分だろうが、出来る限りのことはやる決意だった。

「もう資材がどうこういう段階じゃないだろうから、体育館裏の要員は後夜祭準備に回して下さい。指示は後夜祭担当に出してもらって」

「校内アナウンスで後夜祭の誘導と火気の取り扱いについて注意を促して下さい。案内メッセージは予定通りで」

「巡回班はそろそろ準備を。人がそろっていなくても構いません、現地集合で回して下さい。チェックリストを忘れないように」

「演劇部の最終公演が始まる頃です。開演したら誘導スタッフはそのまま各クラスの火気機材の回収作業に回して下さい」

「職員室に伝達、迷子の搜索状況を詳細に伝えて、指示を仰いで下さい」

「巡回班に追加指示を。各クラス単位で持っている領収書の類も回収して下さい。ここで渡さなければ自腹ですよと。どこまで経費で扱えるかはリストを見てください。わからなければ連絡下さい」

「どんどん指示を出していく。そばに二人スタッフを置いて、電話の対応をさせたり、俺の指示をメモさせたりしていたのだけれど、事後、彼らは「自分が何をやっているかわからなくなるくらい忙しかった」「あんなに早く指示が出てくると二人がかりでも追いつかなかった」と語ったそうだ。

確かにあの時の俺はちよつと凄かった。

たぶん、それこそあんなまねは二度と出来ないと思う。

そんな大騒ぎの最中に、綾華さんと由紀が生徒会室に戻ってきた。俺はしばらく相手をしなかった。

完全に無視していた。

わざとそうしたわけじゃない。仕事を優先したら、正直二人のことに構っている余裕なんか1グラムも存在しない。

「喧嘩？ 数で押し切ってください。まわりのスタッフをそこに集めますから、喧嘩してる連中をまとめて袋叩きにして構いません。佐藤晃彦が責任を持ちます」

「クレーマーですか。うちの生徒ですか？ 外部ですか？ 外部なら、職員に振って下さい。構いません、生徒がケツ持てる話じゃないでしょう」

「特別教室棟の配置が薄くなっています。誘導係が足りません。遊んでいるスタッフはすぐに仕事に戻ってください」

二人の姿すら視界に入らず、俺は指示を出しまくっていた。手元にどんどんメモが飛んでくる。それをすぐに処理し、次のメモに取り掛かる。

そんな状態が10分も続いた。

ようやく生徒会室が落ち着きを取り戻したのは、綾華さん、由紀、会計氏の上席三人が一気に抜けて出来た穴をふさぎきった、その証拠だった。

あまりに集中していたせいか、俺はめまいを起こした。

立ったまま指示を出し続けていた俺は、なんとか机に両手をついたりして体を支えていたけれど、ある程度めどが付いて気が抜けた瞬間、目の前が真っ暗になった。

あ、やばい。

かろうじて目の端に入りたいすに手をかけ、感覚だけで座ろうとする。

何とかそれには成功したようだったけれど、自分がどんな状態になっているか、わからなかった。

多分、座ったんだろうと思う。机に腕を乗せて上体を支えたつも

りだけれど、よくわからない。

ぐるぐると世界が回る感覚の中で、俺は、そういえば二人が帰ってきてたんだっとな、なんで二人がここにいるんだっけ、などと考えにもなっていないことを考えていた。

ようやくまともに頭が動くようになったのはどれくらい経ってからの事だろうか。

気が付くと、俺の体を支えるようにして由紀が抱きついていて、その体が不規則に揺れていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

時々つぶやいているのが耳元に聞こえてくる。顔を見なくても、泣いているのがわかった。

「……どしたの」

由紀の頭をなでようと腕を上げ、それが由紀の頭に届くより先に、やつと見えるようになった視界の中心に、綾華さんが凝然と立ち尽くしている姿が入ってきた。

綾華さんは無表情だったけれど、その目が、今まで見たことがないほど暗かった。

「ここまできたら」

と、誰かが声をかけてきた。見ると、例のクーデター以降、俺たち新実行委員会指導部のメンバーとして一緒に働いてきた2年生スタッフだった。

「あとは計画通りに運んでいくだけだ。配置換えが上手くいっているから、もう多少のことじゃ君の判断も必要なくなっている。俺たちに任せてもらっていいよ」

「……そういうわけにも行かないでしょう」

「そういうわけにいてももらいたいんだけどね。なにしろ空気が重過ぎる」

スタッフはそういつて苦笑した。

綾華さんはそっぽを向いた。由紀は抱きついていていた姿勢をぱっと戻し、俺から離れた。泣き顔を隠すように俺に背を向ける。

「……なるほど、重いですかね」

「重い、重い」

どう見ても、二人が突然消えたり、生徒会室にどろどろした空気をもち込んだ原因は、俺にあると見て間違いなさそうな雰囲気だった。

綾華さんが俺に告白した経緯を知らない人々でも、この三人になにか問題が起きていることだけは感じ取れた。

俺は。

由紀が泣いているのも、綾華さんが暗い目をしているのも、気に入らなかった。

俺の知らないところでなにやってんだよ二人とも。

あからさまではないにしても、生徒会室のいる誰もが、事情は知りたいけれど係わり合いにはなりたくないという態度になっている。ここは、三人で出て行くのが正解なんだろう。

めまいは治まっていた。

俺は立ち上がった。

「……おいで、由紀」

背を向けていた由紀の背に手を当てる。そつと押すと、由紀は抵抗しなかった。俺が歩き出した方向に、一緒に歩き出す。

「綾華さん、行きましょう」

少し離れたところであさつての方向を見ていた綾華さんにも声をかける。綾華さんは顔をうつむけて一瞬考えるような仕草をしたけれど、すぐにそのまま歩き出した。後ろから付いてくるつもりらしい。

文化祭の期間中、俺たちは校内各所の鍵を預かっていた。本当は会計氏が預かっていたのだけれど、大人対策を頼んだあの時に、鍵束をそのまま渡されている。実行委員の取りまとめ役が鍵くらい持

つていないと、イベントも何もできなくなってしまう。

その鍵束を使って、普段は閉鎖されている校舎の屋上に出た。

文化祭初日の昨日は、ここで科学部が気球を上げる実演をしたり、夕方には天体観測の実演をしたりで大騒ぎだったけれど、今日は予定は入っていない。鍵を開けて扉の外に出ると、秋晴れの空が出迎えてくれた。

屋上の給水塔の脇にコンクリートブロックがある。もう少し前の季節なら、日陰にならないそのブロックに座ろうなんて思わないけれど、11月の日差しはもう沈みかけている。

「もう寒くなつてきそうだけれど」

といって俺が座ると、由紀は素直に俺の右隣に腰を下ろした。

後からついてきた綾華さんは、給水塔の柱に寄りかかるようにして立った。陰の中に入り、俺から見て左側に立っている。日向側からだと、もう薄暗くなり始めているから顔色がやや見えにくい。

「それで……」

俺は正面に顔を向けていった。

「何が起きてるのか、説明してもらえます？ どっちでもいいからまず由紀を見る。」

由紀は俺の隣で背を伸ばして顔だけを伏せていたけれど、俺の言葉に顔を上げ、綾華さんのほうをちらりと気にした。

その視線に誘われるようにして綾華さんを見る。

綾華さんは、腕組みして立ったまま、じつと俺たちの足元の辺りを見つめている。

「なんでもないよ」

低い声で、綾華さんがいった。暗い顔は少しも変化がない。

「それで納得するんですか？」

俺はあまり気分のいい体調ではなかったけれど、おかげで肩の力や気負いは抜けていた。綾華さんの態度に腹も立たなかったし、別に問い詰める気も無かった。少し食い下がって、まだ説明する気が無いようだったら、おとなしく引き下がるつもりでいた。

なぜといわれても困る。事情はともかく、少なくとも俺にすまな
いという気持ちがあることだけは、二人の顔を見ればわかる。なん
かもう、それで十分な気がしていた。

多分、話し始めるとしたら由紀だと思っていた。二人きりになっ
てからかな、なんて思っていた。

だから、綾華さんの方から声がしたのには、少し驚いた。

「……あたしが悪いんだよね」

50（前書き）

連続投稿2話目です。

「由紀に嫉妬したんだ。馬鹿だと思っけどさ、嫉妬しちゃったんだよ」

綾華さんは暗い目のままつぶやくようにしていった。風が弱かったからかうじて聞こえた。

「あんたのこと、すごく信頼してるのが伝わってくるんだよ。言葉の端々からさ。耐えられなくなった」

由紀が身じろぎする。触れるか触れないかの距離にあつた由紀の左手が、そつと俺の右ひざに置かれる。

「だから、全部いった。あんたが好きだってこと、彼氏と別れたこと、あんたに思いを伝えたこと、それできつちり振られたってこと」

俺は正直、呆然としていたと思う。

綾華さんは俺の顔をちら見したあと、組んでいた腕をほどいて、片手で髪をかきあげた。

「いうだけいっちゃえば、あたしはすつきりするし、気持ちの整理もつくし。つまらない嫉妬で由紀と一緒にいる間中いらいらすることもなくなるだろうって思っただけどさ」

由紀が、俺の右ひざの上に置いていた手にきゅつと力を入れた。

「こいつ、それ聞いてなにいい出したと思う？ あんたなら想像つくんじゃない？」

皮肉っぽい笑み。

残念なことに、大体想像はついてしまった。熱くなっていた右ひざの感覚が、俺にそれをいうなと伝えてくる気もしたけれど、綾華さんの顔は、中途半端な答えを出したら容赦しない、といっているように思えた。

あんた、あきちゃんの隣に座るんだったら、それなりのものを見せてみなさいよ。

綾華さんの目が、由紀にそう訴えている。これから始まる断罪、

それをどう受けるかで、綾華さんは自分のこれからを決めようとしている。

「……俺を譲るとでもいいましたか。自分が消えればいいとでも」

「晃彦くん……」

由紀の涙混じりの声。

「あはっ」

綾華さんがはじけるように笑った。

「お見事！ 消えればいいってところまで当てるのがさすがね」

自分を過小評価する癖がある人間は、自分からみて何かが起きれば、すぐに自分が消えればいいと考えてしまうもんだ。そんなの、俺だってそうなんだから、俺以上にその癖がひどい由紀がそう考えないはずがない。

綾華さんにはわからないだろう。

「そこまで理解されてるのよ。愛されてるのよ。何が不満なのよ。消える？ 冗談でしょ、それじゃ完全にあたしが悪者じゃない」

低い声で、綾華さんは由紀を連打する。

「あんたのは自分を守ろうとしているだけだわ。自分が悲劇のヒロインになればそれで場が納まる、もう自分を攻撃してくる者もいなくなる、消えてしまえばつらいことも無くなる、そういうことですよ」

由紀はじつと耐えていた。俺の右ひざをつかみながら、うつむいて、じつと耐えていた。耳をふさごうとはしなかった。逃げ出さなかった。

「あたしは振られたのよ。あきちゃんに選ばれたのはあんたなのよ。そのあんたがあきちゃんに諦めます、私は消えてなくなります、ふざけんじゃないわよ。自分を選んだ男を放り出してあたしに拾わせようっていうの？ ずいぶん傲慢な言い草よね、それ。ただけ上から目線なんだよ」

俺は綾華さんを止めなかった。

打たれているのは由紀だけれど、一番傷付いているのは綾華さん

だ。

そしてこの傷は、途中で打ちやめてしまえば、残る。いつそ激しく切り裂いてしまった方が治りが早い傷もある。

「あたしがどれだけ苦労してあきちゃんを諦めたか、あんたにわかるの？ あんたがそばにいるなら諦められるって、自分を納得させられるまでのあたしの苦しみがあんたにわかんのか？ そのあんたに、あきちゃんを譲られるとか、どれだけ屈辱だと思ってるの？ あんた、傲慢にもほどがあるだろ」

綾華さんの声は低いままだったけれど、涙混じりになってきたのがわかる。

「あたしが今、ここで、あきちゃんに抱きついて、あたしを選んでっていったらどうなるかわかるか？」

綾華さんはそれまで寄りかかっていた鉄柱から離れた。腕を組み直してゆっくり歩き、俺たちの前に仁王立ちした。

俺の顔を見て、暗い目のまま口元だけを笑みの形にゆがめた。

「こいつ、由紀をかばうよ。あたしを絶対に選ばない。拒絶するに決まってる。そういう奴だよ。だから好きになったんだ」

由紀は、いつの間にか顔を上げていた。涙をこぼしながら、いつになく強い顔で綾華さんを見上げていた。

「憎たらしいほど頭いいくせに鈍感で、鈍感なくせに人の心ずばずば読んで、どっちなんだよってこっちが混乱してるうちに心の中に入ってくるんだ」

そういうと、綾華さんは俺の足先を軽く蹴った。

「策略家のくせにまつすぐで、正直で……手に負えねえよ、こんな奴」

聞いているだけだとどんな完璧超人なんだ俺は、という感じだけど、黙って聞く。

「で、あんたは、今もそうやってあきちゃんの隣に座ってる。それってさ、あたしに譲る気なんかこれっぽっちも無いってことじゃないか」

由紀はまだ顔を上げ続けていた。そして、ようやくここで声を出した。

「……譲りません……譲れません……」

詰まった声は聞き取りにくかった。そして、いい終わると大きくしゃくりあげた。

それがきつかけのように、由紀はいつになく大きなはつきりした声でいった。

「私が弱いから、綾華さんにいわれてとっさに気弱なことばかりいっちゃいましたけど、私は晃彦くんを誰にも譲りません。もっと強くなつて、晃彦くんが誰よりも好きな自分に負けないようになりま
す」

「意味わかんないよ、頭悪いあたしにもわかるようにいつてくんない？」

腕組みして仁王立ちしている綾華さんは、女王の風格で由紀に迫る。

ついに由紀は立ち上がった。

小さな肩は、いつの間にか、細いなりの強さを漂わせていた。

「私は晃彦くんが好きな自分に負けてばかりいました。好きな気持ちだけが大きくて、どうしたらいいかわからなくて、そんな気持ち、無かったことにしちゃった方が楽だとすら思っていました」

二人の対決に、俺の立ち入る隙はなかった。

「でも、綾華さんに馬鹿なことといって気付きました。どうして自分の気持ちに正直になれないんだろうつて。晃彦くんが好きな自分に負け続けて、それで晃彦くんを失って、それで誰が一番つらいのか
つて」

「あんたでしょ。まさかあきちゃんだともいう気？」

「自分です。そんなこといいません。自分が一番つらいです。それに耐えてちゃいけないって気付きました」

「気付いてどうするの。自分のわがまま通せば幸せになれるとも思っただけ」

「わがままなんかじゃありません。だって、晃彦くん、私のことを選んでくれました」

ここで二人が俺を見た。どきつとしたけれど、へらへら笑える場面でもないから、黙ったままうなずいた。そのまま続けて、と伝えたりも。

「綾華さんと何があっても、関係ないです。私と晃彦くんがお互いをどう思ってるかが大事なんです。そんなことも気付かないでおろしておろしていた自分が馬鹿みたいです」

「……」

綾華さんが黙った。黙ったまま、腕を組んでじつと由紀を見つめている。

「何も知らないで晃彦くんと一緒にいられる幸せに浸ってた自分ももつと馬鹿だと思います。でも、何があつたか知ってしまったときに、自分から引き下がろうとした自分が最強の馬鹿です。死んじやえばいいです、そんな奴」

由紀のセリフとも思えない、強い表現がどんどん出てくる。

「だからそんな奴はここで殺しちゃいます」

そこで言葉をひとつ区切り、由紀は大きく息を吸った。声にも、もろ涙の成分はない。

「私は、晃彦くんが好きです。晃彦くんが私のことを好きとってくれた、その何十倍も何百倍も好きです。綾華さんが晃彦くんを好きな気持ちになんか絶対に負けません。そのこと、私自身が認めなかつたら、何もかもウソになっちゃう」

綾華さんは腕組みしたままの姿勢で由紀を見つめていたけれど、もうその目は暗くなかった。むしろそれは。

「私、消えません。譲りません。綾華さんがどこまでも晃彦くんのことと争うというなら、どこまでも戦います。綾華さんのこと大好きだけど、これだけは絶対です」

「よくいうじゃないの」

大化けしたライバルの成長を喜ぶ敵方の大物のよう………といっ

たら失礼かもしれないけれど、いつそ爽快なほど、綾華さんの立ち姿は凛々しかった。

「さっきまでひざを抱えて泣いてた小娘がよく吼えたわ。大したもんだわ」

赤い日差しの中で、綾華さんは腕組みをほどこした。誰もが校内一と認める美貌は、笑顔の時以上に、強気な眉目に鋭気をたたえた表情の時に光り輝く。

「そこまでいえるなら安心だね。いえないようなら、どうせそのうち誰かに奪われちゃうんだろうから、先にあたしが奪うところだけだ」

そういいながら、綾華さんは手を差し伸べた。

由紀はじつと綾華さんを見つめたまま、その手を取った。

握手するのか、と、由紀は思ったのだろうし、俺もそう思った。

でも、相手は綾華さんだ。まともに行くはずがなかった。

取ったばかりの手をぐっと引き、綾華さんは戸惑う由紀を力いっぱい抱きしめた。

「あんた、あたしが好きになるくらいいい女よ？　大丈夫、自信持ちなさい。その内、あきちゃんが持て余すくらいのすごい女になれるから」

そして、抱いてた腕のうち右腕だけを伸ばし、俺を手招きした。何を始める気かはわからないけれど、ここで戸惑っていても仕方がないので立ち上がった。

綾華さんの白くて長い指を取ると、綾華さんは俺の指を引いて、抱き合う二人の横に導いた。

「もとはといえば、ぜえええんぶあんたのせいね。わかってるわよね」

「え、あ、え、いや」

俺はどもった。今さら綾華さんに気後れしたからでも、怯えたからでもない。確かに俺が原因かもしれないけれど、全部俺のせいといわれると非常に反論したくなる。

「あんたのせいなの！　こんないい女二人も振り回しといて、自分がいい男だつて自覚がない馬鹿のおかげで、どんだけこつちが苦労したと思つてんのよ！」

綾華さんが怒鳴る。由紀がこらえきれずにくすくす笑っているのが肩から読み取れて、俺は抵抗する氣を失った。

「へえへえ、そいつぁ悪うござんしたね」

「わかつたらあたしたちに謝りなさい」

「どうもすいませ……」

「言葉じゃなくて！　ふつう、ここまで導かれたらわかんذار！」
空いている右手がすかさず俺の胸にクリーンヒットする。

ごふつと息が詰まる。相変わらず加減を知らない人だ。

俺が身を折つて苦しんでいるのを見て、どうやらまた自分がやりすぎたらしいことに気付いた綾華さんは、心配するより先に、自分が左腕に抱いている由紀と顔を見合わせた。

そして、二人で笑い出した。

ついさつきから笑いをこらえていた由紀は、今までで一番明るい笑い声を上げた。綾華さんは豪快に笑い飛ばしている。

「……　どんだけサドだよあんたらは……」

「あんたがちんたらしてるからでしょ」

「でしょ」

由紀までが可愛らしく綾華さんの尻馬に乗ってくる。

綾華さんが二人になったようだ。

俺は未来が少々……　だいぶ恐ろしくなってきたけれど、今はまあ、喜んでおくべきなんだろうな、とぼんやり思った。

思いつつ立ち上がり、二人の前につと、そのまま抱き合っている二人を丸ごと抱きしめた。

「……げふん」

「……決まんない男ねえ、そこでセキ？」

「誰のせいですか……げふっ」

「大丈夫ですか？ 痛みますか？」

「なんかもう胸も心も痛みっぱなしですわ」

「痛みも感じないようにしてやろうか」

「抱きしめられてる最中にそういうこといいます？」

「しおらしいあたしに何の魅力があるの？」

「そんなことをそんな真顔で言われてもねえ」

「でも……たしかに……」

「由紀、あんた、納得しすぎだから」

「納得してやれ由紀、お前にいわれるのがなんだかんだいってこの
ひと一番堪えるんだ」

「あきちゃん、あんたどこまで生意気になるつもり？ 潰すよ？」

「本気で潰すよ？」

「だから抱きしらられてる最中に……」

どこまでも色気がない三人だった。

51（前書き）

連続投稿3話目です。
次が最終回です。

文化祭の最中にいきなり消えた俺たちを、誰も探さなかったのは、あまりにも直前の様子が尋常じゃなかったからだろう。

ついでにいえば、何かが起きている気配を察した会計氏が、大人たちの接待を生徒会長に任せて本部に戻ってきたからでもある。

「あいつらのことだ、ちよっと時間をやれば平気な顔して戻ってくる。中途半端に戻ってこられるより解決してからの方がいい、今は時間を与えてやってくれ。その間の面倒は僕が見るさ」

そういったはいいけれど、と会計氏は笑った。

「実際まとめ始めたら、やることないんだよな。佐藤が全部指示出した後だから、やることっていつても終わりまで監視してるだけ。つまらないにもほどがある、勢い込んで戻ってきたのに」

「すいませんでした」

俺が謝ると、俺の後ろで綾華さんと由紀が小さくなって一緒に頭を下げていた。

「謝らなくていいさ、やることやった上でのことだ」

「あたしは……やることやってなかったから……」

「そうだな、永野はいけないな。渋谷もだ」

「ごめんなさい……」

「まあいいさ。ぎりぎり間に合ったんだからな」

そういうと、会計氏は立ち上がった。

「最後に責任は取ってもらう。来い」

会計氏がずんずん歩いていった先は、後夜祭の会場だった。

文化祭を締めくくる後夜祭は、すべての出し物が終わったあと、生徒会長による閉会宣言と共に始まる。

よくファイアーストームを囲んでフォークダンス、なんて場面がドラマやアニメで流れたりするけれど、残念ながら我が校ではそれは無理。条例で禁止されている。役所の馬鹿。

校庭に設置されたメインステージは、直前までバンドライブが行われていた。それが終わって、今は人気投票の集計が行われている。集計が済んだら閉会式が始まり、その中でいくつかの人気投票の順位が発表され、発表後に閉会宣言。その後、人気投票トップのバンドがアンコールライブを行い、吹奏楽部が校歌とその年の文化祭テーマ曲を演奏して解散となる。

ちなみに今年の文化祭テーマ曲はQueenの「Who Want to Live Forever」。いったい誰がこんな選曲をしたのか謎。いや、いい曲だけださ。

俺たちが会場入りしたのは、ちょうど閉会式が始まる直前だった。実行委員の元締めとしては、本来は本部である生徒会室に最後まで残って、吹奏楽部の演奏が終わって解散となるまでは全体の監視を行っているべきだったけれど、今さらそんなことをいえる立場でもない。

実は、吹奏楽部の演奏にまで規制がかかる。街の騒音条例で、休日の野外演奏は6時までとされている。それを計算に入れて運営しなければならぬわけだ。

俺はこのタイミングを計るために色々と調整してきていた。俺の計画によれば閉会式は5時きっかりに開始。閉会式そのものは5時20分に終わり、続いてバンドのアンコールライブ。それが入れ替えも含めて5時40分に終わり、最後の入れ替え5分で吹奏楽部がステージ入り。ラスト15分で校歌からテーマ曲になだれ込み盛り上げて終了、会長の「本当に終了」宣言で幕を引く、という流れになっていた。

これは代々続く流れでもあるけれど、毎年ぐだぐだになりやすい部分でもある。

特にバンドが時間を守らず、いつまでもステージに張り付いて台

無しにするパターンが多いらしい。

それをあらかじめ聞いていた俺は、タイムキーパー役に最強の布陣をもつてする計画を立てていた。

右袖に綾華さん。

左袖に会計氏。

いったい誰が逆らえるだろう。

バンド演奏が始まる頃まではこの二人に出番はないから、まだ準備には早いくらいだけれど、確かにこの二人が会場入りする必要がある。俺と由紀が余計なだけだ。

俺がそんなことを考えたくらいだから、後ろをテクテクついてきた綾華さんも、由紀も、会計氏が計画通りことを進めるためにここに来たと思っただに違いない。

ところが、会計氏の思惑はまるで違った。

というより、俺たちは最後の最後で、これまで陥れる一方だった周囲の策略に陥れられた。

閉会式が始まる。

ステージにスポットが入り、壇上中央に会長が立った。

「みんな、お疲れ様でした！　今年はいつも以上に盛り上がったと思います。楽しかった！？」

会長のあおりに、集まっていた生徒や関係者が一斉に反応した。

珍しいくらいに、校庭中が揺れるような盛り上がりだった。

「すごいな、今年は……そんなに楽しかったか！」

会長がさらにあおると、マイクを向けられた観衆たちは腕を上げて反応した。結構行事にはしらけたところがある学校だけれど、今日のノリは異常だった。

こんなに盛り上がるとは思っていなかった俺は、ステージ脇で思わず震えた。

ぞくぞくした。

これだけ盛り上がる舞台の運営に関われたんだ、という事実が、俺を震わせた。

思わず涙ぐむくらいに衝撃を受けた。

俺は由紀の手を握っていた。

色々あったけれど、本当に色々あったけれど、最後の最後まで色々あったけれど、裏方として自分の限界に挑戦するような仕事をし、ここまでたどり着いた。途中、由紀に告白されたり、綾華さんに告白されたり、ありえないことが降りかかりすぎておかしくなりそうだったけれど、俺はこの盛り上がり、少しでも裏から支えることが出来たはずだった。

その俺の隣で、由紀も、「うわあ」と声を上げながら、俺の手を強く握り返してきた。舞台裏だから実際に盛り上がっている姿は見えないけれど、それでも、音圧で体が浮き上がりそうな、足踏みや拍手混じりの大音響。誰もがステージに向けて声を上げているから、その袖にいれば、まるで自分たちに声がぶつかってくるような錯覚に陥る。

近くに綾華さんがいれば、三人でまた抱き合っていたかもしれない。

そういえばどこにいるんだろう、綾華さんは。そう思って目を凝らすと、なぜか逆側の袖にいて、会計氏と一緒になにやら興奮しながら手を叩いている。

いやいや、あんた、立ち位置こっちだろ。こっちでタイムキーパーやるんとかやうんかい。

と思ったけれど、まあ、ここまできたらそんな小さいことはどうでもいい気がした。二人で並んでバンド連中に時間を守らせればいい。

微妙な違和感を感じてもいたけれど、俺はすぐに忘れた。

会長のパフォーマンスはすぐに終わっていて、次は各出し物の人氣投票結果の発表。

「さあ、売店系人気投票第一位は……2年D組！ おめでとう！」
観衆の二画で歓声が爆発している。

そのたびに、聞いているこっちの背が震えた。自分が受けている
歓声でも拍手でもないのに、なんだろう、この感動は。

自分たちが作り上げたんだ、という感動だろうか。ここまでの苦
労がこれで報われたという感動。

それだけじゃないだろう。

好きな人が隣にいて、一緒に感動してくれて、しかも一緒に作り
上げてきた実行委員の人たちもまわりにたくさんいて、同じように
感動して声を上げたりしていた。

自分が、誰かと一緒に何かが出来たということ。

目立たない生徒として中学生時代も高校入学当初も過ごし、人の
輪に加わって何かをするということとは縁遠い生活だった。部活に
入っていなかったからなおさらだった。

形になる何かを、誰かと一緒に作り上げるなんてこと、したこと
がなかった。

今、この瞬間を作り上げることが出来た。俺は、この瞬間のため
に働いてきたんだ。みんななど。

そう思ったら、戦慄も止まらないし、手を握り返してくる由紀の
存在がいとおしくてたまらなくなるし、大変なことになってきた。

俺は、全身で感動していたんだ。

でも、それで終わるほど、会計氏の策は甘くなかった。

「ちよつと駆け足だけど、これですべての発表が終わりました。さ
あ、ここで、最後を飾るにふさわしい人にステージに上がってもら
います」

会長のこの言葉は、台本にはないセリフ。

「みんなも知ってると思うけど、この文化祭、途中から実行委員長
と指導部が変わりました。不甲斐ない俺たちを見ていた下級生たち
が、俺たちに代わって文化祭を盛り上げてくれました。この文化祭
を作った奴らです」

俺は感動が一気に覚めていくのを感じた。

やりやがった！

俺は思わず逆袖にいる会計氏を睨みつけた。

会計氏はこつちのことなどまるで無視していた。とにかく、実行委員の顔である綾華さんを舞台に出すのが先決というわけで、こつちなんか気にしてる余裕があるはずもない。

なるほど、だから綾華さんを自分の近くに置いていたのか。舞台に素早く上げるには自分が押し出す以外にないと考えて。

感じていた違和感は策略の証だった。でも、あれでこれを見抜けというのはいくらなんでも無理がある。

俺が近くにいると綾華さんは俺を隠れ蓑にして逃げる。それを防ぐために離れた上で、会計氏はこれまで築いてきた信頼関係を総動員して綾華さんを壇上に上げるつもりだ。

「やるなあ、先輩」

俺は思わず口にして、それから、笑った。

由紀も笑っている。頬を赤くして、興奮している。

俺たちは実行委員やステージスタッフに押された。抵抗する気にもならなかった。したところで強引に持つていかれるだろうし、スツッフたちがみんな笑顔だったから、もう、抵抗なんか出来るはずがなかった。

たぶん、同時にステージに足をかけた綾華さんも、同じ気持ちだっただろう。ばちつとステージ両端で視線がぶつかったとき、俺たちは同時に苦笑していた。

やられたね。

ええ、やられちゃいましたよ。

私までやられちゃいました。

三人、それに会計氏がステージ中央に引っ張り出された。

学校で準備できる程度だからたかが知れているはずのスポットが、ものすごくまぶしく感じた。そして、どこから沸いて出たのかと不思議なほどに集まった人の波。

「さあ、みんな拍手を！ クーデターで俺たち生徒会を根っこからひっくり返した拳句、しらけ切るはずの文化祭をここまで盛り上げた真犯人、新実行委員長の永野に秘書の渋谷、そして影のフィクサー佐藤だ！」

ここで会計氏の名前が挙がらない時点で、誰が仕組んだことが丸わかり。

しかも会計氏、自分でワイヤレスマイクまで持ったの登場だ。

「他にもたくさんスタッフに支えられて、僕たちの文化祭はこんなに盛り上がりました。スタッフみんなに拍手をっ」

会計氏が叫ぶようにいい、マイクを観衆に向けると、嵐のような拍手と歓声に会場の空気が震えた。

「……これで俺たちは心置きなく生徒会を次の代に引き継ぎます……とかいったら、きれいな終わり方なんだろうけど、そうもいかなーいよな」

会長が意味ありげに会計氏に笑いかける。

会計氏も、突き出していたマイクを戻して会長の隣に並び、こくりくりとうなずいている。

「いけないな。なんせ、どんな奴が僕たちの跡を継いでくれるのか、心配で仕方ないよ」

「また俺みたいのが会長になったら最悪だぜ？」

「お前、それを自分でいうか？ その通りだけどさ」

「おい、ちよつとはフォローしろよ、親友だろ？」

「は？ 親友？ 誰が？」

会計氏の突っ込みで絶句した会長は、本気でしょぼんとしていた。この辺りの漫才は台本無しの素の会話らしい。その様子がわかってる三年生たちは大うけだった。

「とにかくだ、僕たちの跡を継いでくれる奴が誰なのか、ここではつきりさせておけば、安心して受験勉強にも取り組めるってもんでしょ。だよな、三年のみんな」

会計氏が観衆に振ると、三年生が一斉にわあわあと反応した。

すごく嫌な予感がしたようで、明らかに綾華さんの腰が引けている。

まあ、この流れで自分が会長に推されないとか思っているとしたら、綾華さんの頭の構造を疑うところだ。

確かに文化祭の途中で由紀と口論になったり、その末に行方不明になってくれたりした訳だけれど、そこまでの文化祭を作り上げたのは綾華さんだ。俺が計画を作ったり、会計氏が実行者として奮闘したりしていたとしても、それはすべてまとめ役として上に立った綾華さんの功績になる。組織つてのはそうあるべきで、この組織の上に立てたのは綾華さんだけだった。

スポットを浴びて輝く綾華さんのふわふわした髪。

俺は、由紀と改めて手をつないだ。

由紀はステージ上でまで手をつながれるとは思っていなかったらしく驚いていたけれど、それでも、次の瞬間には強く握り返してきた。

そのまま、二人ですっと綾華さんの背後に回った。綾華さんはスポットの強い光と、司会の急展開に慌てていて、こっちの動きには気付いていない。

「ちよつと例はないだろうけど、どうせしばらくしたら生徒会選挙もあることだし、俺たち旧執行部の遺言を発表しときたいと思います」

「会長、そして僕、会計が皆様にお勧めする物件は、もちろん……」
「永野綾華ですっ！」

二人が同時に綾華さんを前に出そうと手をかけようとした。

一瞬前に、綾華さんはすっと上体を下げ、その手を逃れようとした。

そのまま身を翻していれば、多分逃げ切れたんだろう。

でも、俺たちがいた。

くるっと身を返そうとした、そのタイミングで俺たちが綾華さんを抱きとめた。

「あ、あんたら！」

「綾華さん、降りちゃダメです」
由紀が叫んだ。

というか、叫ばないと近距離でも声が通らないくらいに歓声がすごかった。

だから俺も叫んだ。

「あんた以外の誰が俺を止められると思ってるんだ！」

どうせ話の流れ上、俺も生徒会役員入りだ。なら、従う相手は俺が選ぶ。そして、そんな相手、ひとりしかいないだろ。

綾華さんはこの時、俺のセリフを聞いて諦めが付いたらしい。

「そりゃお互い様だろ！」

そう叫んで、綾華さんは前に出た。

学園のアイドルが、一身にスポットを浴び、一気に場の空気を支配した。

会計氏のマイクをひったくり、綾華さんは吼えた。

「みんな聞け！ この学校の未来、私が請け負った！ 選挙では投票よろしく！」

52 (前書き)

最終回です。

春。

入学式。

桜が遅れていた今年は、入学式にまだ花びらがたくさん残っていた。

会場を埋める新入生の群れの中に、生徒会執行部の役員たちが勢ぞろいしていた。

新入生を迎える在校生代表として、腕章をかけた新三年生、新二年生たちが、ずらりと並ぶ。

去年はこの光景を、ただ見ているだけの人間だったんだけどなあ。まさか自分がここに並ぶとはね。

俺の腕には、副会長の文字がぶら下がっている。

正確には、俺の役職は副会長兼会計。執行部の心臓部を握る役職。既に「新執行部の軍師」という敬称で祭り上げられている。なんだからねえ。

俺の隣で上気した顔を正面に向けて立っているのが、書記の由紀。執行部の議事録を担当する役職だけれど、みんなは「会長秘書」と呼んでいる。

今、会場では在校生からの歓迎の挨拶が行われている。

もちろん、代表は生徒会長。

「皆さんを迎え、我が校の在校生は、期待に胸を昂ぶらせています」俺と担任が書き上げた文章を読んでいるのは、学園のアイドルから「女帝」に格上げされ、名実共に学園の顔となった綾華さん。

その美貌は輝かんばかりで、この人は大舞台になればなるほど輝く、見事な素材だった。たかがいち学校の会長職にしておくのがもったいないほど、綾華さんの存在感は強大だった。一体、このひと以外が会長になる未来なんてありえただろうか、とすら思える。それを見ている新入生たちの顔。明らかに陶醉しているじゃない

か。この人が一声かけたら、こいつら全員反政府クーデターにだつて身を投じるんじゃないだろうか。

カリスマ、というものがどういうものか、今ここに来て綾華さんを見てみりゃ、一発で納得できるはずだ。

「綾華さんの人気、すごいですよ」

入学式からしばらくたった日、教室で一緒にいると、由紀がいった。

「だろうなあ」

今年は同じクラスになれたから、いつも一緒にいられるのがありがたい。

「どの一年生に聞いても会長、会長つて」

「由紀も美人秘書とかいわれてすっかり有名人だぞ」

「そんな、そんなのはウソです」

自分が有名人になるのは絶対にありえないことと固く信じている由紀は激しく否定するけれど、聞いている連中は内心思っているに違いない。

自覚無さ過ぎだろ。

俺もそう思う。

「晃彦くんだって有名人ですよ、女帝を支える軍師とか、騎士とか」

「ちよつと待て、なんだその騎士つて」

「晃彦くんがかっこいいから、そう思ったんじゃないですか？」

由紀がからかうように口にした。

実のところ、意外に由紀が嫉妬深いことが判明していた。だからこそ同じクラスになったのが嬉しかった。四六時中見ていられる環境なら、多少は嫉妬から逃れられると思ったからだ。

あ、こいつ、下級生に嫉妬してやがる。

「かっこいいかどうかは知らんけど、騎士つてのは勘弁してくれだ

な。こつ恥ずかしい」

「じゃあ私のこともいわないで下さい」

「お互い、いいつこなしってことで」

「はい」

短く返事をして、由紀は微笑んだ。

文化祭から、由紀は変わった。

それまでは目立たないということだけを考えて生きているような生徒だったけれど、文化祭明けの由紀は、別人とはいわないまでも、自分という存在を隠すことはなくなった。

自分が自分が、と前に出ることはない。それは性格上無理。でも、自分のいいたいことはそれなりにいえるようになったし、声も少しだけ大きくなった。友達も増えた。

それでも、俺のことだけを見てくれているのが嬉しかった。少しくらい嫉妬深くなったって、むしろ楽しい。

とかいうことを平然と考えてしまう辺りが「バカップル脳」なんだそうだ。

俺も変わったといわれる。

自分ではもちろんよくわからないけれど、迫力が身に付いたんだそう。

元々背は大きい方だし、高校に入ってからもうセンチ伸びたから、そのせいなんじゃないの？ と当人は思うんだけど、誰もうなずいてくれない。

確かに、学校で喧嘩を売ってくる人間はいなくなった。俺も売らないから平和。売られたって買う気なんかないんだけど、売ったら最後、人生破滅するまで徹底的に追い込まれる、というイメージが付いているらしい。

待て。

ちよつと待て。

そついう俺と、小柄というほど小さくもない由紀が並んで歩いていると、非常に目立つらしい。学園のベストカップル、などという

僭越にもほどがある称号をいただいてしまい、戸惑って……。

「学園のベストカップルさん、哀れなおばちゃんになにか食い物を恵んでくれんかね」

「うわあっ」

突然後ろから声がかかって、二人ともびつくりした。

「どうしてあなたはそういう、人が驚く間合いで入ってくるのが極上にうまいんですかつ」

「知らんわ、あんたらが勝手に驚いてるだけじゃん」

綾華さんが背後にいた。

「お弁当ないのよ。ついでに飲み物買うつくらいしかお金もないのよ。哀れだと思わん？」

とても力リスマ会長とは思えない、どんよりした空気をまとって、綾華さんは俺の背中をぐいぐいと押した。どけ、ということらしい。抵抗するだけ無駄だと、散々今まで思い知らされてきているから、俺は不承不承立ち上がる。行儀悪くいすをまたいで、綾華さんはどっかりと座った。

由紀が目配せしてくる。何かを察している気配だ。

ああ、愚痴りたいのか、この人は。

綾華さんが愚痴るといったら、話題はひとつしかない。ついでに、愚痴る相手は由紀に限る。俺が相手していると、綾華さんはだんだん腹を立ててくることがあるからだ。

愚痴の原因になっている人と、なぜかかぶるらしい。

「どうしたんですか綾華さん、また何かやらかしたんですか、あの人」

由紀がひざを触れさせるようにして尋ねると、綾華さんはどんよりもやもやした空気をあたりに発散しながらうなずいた。

「あたしに黙ってサークル入って、新歓コンパで酔いつぶれたって」

「まあ、大学生ですし、ねえ」

「それで介抱して自宅まで送ったのが先輩女子2名だったのよ？」

信じられる？ しかも気が付いたら雑魚寝してたとか、信じらんない

いわよ！」

ぐあぁつと吼える綾華さんの声を背に、俺は教室をそつと出た。そつ、綾華さんには大学生の彼氏がいる。

俺との失恋以来「もう恋なんて出来ないわあ」と嫌味つたらしく俺の耳元でささやく日々を、ちよつとの間だけ続けたあと、この人は次の恋を見つけた。

携帯でその相手の番号を呼び出し、かけてみる。

『……佐藤か』

「先輩、大丈夫ですか？」

『……二日酔いでな……あまり大丈夫じゃない』

「こっちはもつと大丈夫じゃない状況になってますが」

『……綾華か』

「吼えてるの聞こえます？」

『聞きたくはないけど、まあ、想像はつく』

会計氏。

この二人がくつつくとは予想外だったけれど、くつついてみるとこれが絶妙にはまった。静かだけれど包容力もある、なによりこの年にしては考え方が大人な会計氏と、お子ちゃま相手に恋愛なんて死んでも嫌と考えている綾華さんの波長は、不思議なほど一致した。ただ、綾華さんは好きになった相手と彼氏彼女になるのが初めての経験だったから、それまでの恋愛経験がかえって邪魔をして、どう振舞えばいいかわからない場面が多い。

「素直になりやいいのにねえ、あの人も」

『お前からいつてやってくれ、渋谷からでもいい』

「無理っすよ。あの状態になったらもう遅いですって。後で迎えに来てください、甘い物のひとつも準備しといて下さいね」

今回は会計氏が悪い。確かに、女二人と雑魚寝はいかんでしょ。

自覚はあるようで、会計氏もその件については何もいわなかった。あとで盛大に謝ろうと算段しているに違いない。

そして会計氏は俺と綾華さんの間に何があつたかも知っている。

綾華さんが話し、俺も話した。由紀も話している。それぞれの立場の話を聞いて、それでもなお、俺たち全員と付き合いを続けてくれているこの先輩は、やっぱり大人だった。

『とりあえずこの時間帯は任せる。今日は生徒会の集まりはあるのか』

「偶然ですが、あります」

『5時過ぎには迎えにいける。それまで頼むよ』

「了解。貸しにしますませ、だんな」

『お前に貸しとか怖すぎるんだがな』

諦めたような会計氏の声は、俺の笑いを誘った。

何かが起こるたびに、俺たちは小さい祈りを繰り返していたと思う。

その積み重ねが今を形作っている。

偶然が重なって出会った俺たちは、それぞれの小さな祈りを繰り返して、こんな未来を作っていた。

たとえば由紀との関係も、日々の小さな祈りが導いてくれたことだと思う。

出会ったばかりの頃、由紀は俺と目も合わせてくれなかった。それはもちろん、由紀の方にも理由があったけれど、俺としては祈るしかなかった。今度会うときはまともにしゃべれますように。

綾華さんとの関係だってそうだ。

俺と由紀と綾華さん、三者が文化祭最終日に劇的な仲直りをしたあと、俺は祈った。この人が不幸になってるなんておかしい。神様とやらは何をしいやがる。少しでも神のプライドがあるなら、とつと綾華さんを幸せにしてみせろ。いや、幸せにしてあげて下さい。

由紀だって祈り、願っただろう。多分、信心がまったくない俺よ

りはるかに熱心に。

その感情が綾華さんにも伝わったからこそ、綾華さんはあれから俺たちを気にかけてくれたし、愚痴り相手にもしてくれているんだろう。

愚痴はまあほどほどにしてくれた方がいけれども。

そうやって祈りが重なって出来た今に、俺は生きている。

まだまだこれから先は長い。副会長としても、高校生としても、綾華さんの後輩としても、由紀の彼氏としても。

でも、多分、俺は人より恵まれている。素直にそう思う。

なら、恵まれているなりに、それに溺れるんじゃない、もつといい世界を自分の周りに広げていけるようにしていくのって、きっと大切なことじゃないかと思う。

由紀がいて、隣で笑っていてくれる今。

……いや、たった今は綾華さんに取られてるけれども。

その今、幸せだなんて思う、その思いを、ちよつとでもまわりに還元していけたら。

祈りを、自分のものだけじゃなく、外の世界にも出せていけたら生徒会執行部の心臓部を握ってる今、俺に出来ることって結構あるはずだった。それを存分に使い切って、俺は誰かの小さな祈りを、願いを、わずかでもかなえられるように生きて行きたい。

そんな風に思えるのが、実は一番幸せなんだろうな、と、ふと思ったりもした。

「由紀、あきちゃん、うちのぼんくらが来たから一緒に帰ろう。徹底的におごらすから」

「綾華、頼むから多少は手加減を……」

「先輩、それは無理ってもんですわ。諦めましょうや」

「晃彦くん、いきなり降参ですか」

「由紀なら諦めずに交渉できるか？」

「無理です。それは無理です」

「渋谷に無理なら僕にはなお無理だな」

「ぐだぐだいつてないで行くよ。車で来てるんでしょ。早く早く」

「佐藤、僕の骨は拾ってくれよな」

「由紀と二人でせつせと拾いますよ。ほら、早く行かないとまた怒られますよ」

もうずいぶん長くなってきた日の光が、俺たちを照らしている。

由紀と手をつないだ。

由紀は黒い髪を風にそよそよとなびかせながら、にっこりと微笑み返してくれた。

「行こう、晃彦くん」

少し甘えの入った声が、たまらなく心地良い。

「好きだよ、由紀」

思わずつぶやいた。

「え？」

由紀がもう一度俺を見たけれど、別に聞かせるためにいったわけじゃない。思わず出ただけの一言だから、俺はつないだ手を引いた。

「なんでもない、行こう」

視線の先に、先輩と会えて実は嬉しくてたまらないのが見え見えな綾華さんの姿がある。

その幸せな姿を好きな人と一緒に見ていられる幸せを感じながら、二人一緒に歩き始めた。

52（後書き）

ご愛読ありがとうございました。ぜひご感想などお聞かせ下さい。
読まれた方の声が一番の励みです。ちよつと付け足しの話など書いた後、新作に入って行きたいと考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5946c/>

小さな祈り

2011年7月23日03時21分発行